

性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する
国民の理解浸透度の把握及び理解増進に係る研究に当たり
留意すべき事項等の調査・研究
報告書

令和7年3月



三菱UFJリサーチ&コンサルティング

目次

| | |
|--|----|
| I. 事業概要 | 1 |
| 1. 事業の目的 | 1 |
| 2. 事業の実施内容 | 1 |
| 3. 事業の実施期間 | 1 |
| 4. 企画委員会開催概要 | 1 |
| 5. 留意事項 | 2 |
| II. 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解浸透度調査実施に係る検討 | 3 |
| 1. 目的 | 3 |
| 2. 実施内容 | 3 |
| 3. 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解浸透度調査の調査設計に関する論点及び検討 | 3 |
| (1) 調査の運営 | 3 |
| (2) 調査項目 | 10 |
| (3) 国民の理解浸透度調査に関する論点整理結果のまとめ | 16 |
| (4) 参考文献 | 16 |
| III. 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する理解増進に係る研究に当たり留意すべき事項の検討 | 18 |
| 1. 実施概要 | 18 |
| 2. ヒアリング調査結果の概要 | 20 |
| (1) 主な意見の分類 | 20 |
| (2) 主な結果の概要 | 21 |
| 3. 配慮事項や調査の運営等に関する意見 | 23 |
| (1) アンケート調査等において、回答に困る設問や性的マイノリティ当事者に関する誤った認識に基づく設問の経験について | 23 |
| (2) 心理的な負担を感じる質問内容 | 24 |
| (3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関連した意見 | 27 |
| (4) 調査の運営に関する意見 | 29 |
| 4. 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関する意見 | 32 |
| (1) 性的指向の把握方法について | 32 |
| (2) ジェンダーアイデンティティの把握方法について | 37 |
| (3) 性的指向の把握方法とジェンダーアイデンティティの把握方法全般に関する意見 | 42 |
| 5. 今後の調査において考えられる調査項目に関する意見 | 44 |
| (1) 考えられる調査テーマや調査内容 | 44 |
| (2) 考えられる調査の視点 | 47 |
| 6. 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の留意事項 | 50 |
| (1) 本節の目的及び掲載情報の取扱いについて | 50 |
| (2) 性的マイノリティ当事者を対象とする調査の実施に当たって | 50 |

| | |
|--|-----|
| (3) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査方法..... | 50 |
| (4) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法..... | 52 |
| (5) (参考) ヒアリング調査において確認された、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形に関する意見について..... | 55 |
| (6) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査における配慮事項..... | 58 |
| (7) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査項目..... | 59 |
| (8) 参考文献..... | 60 |
| IV. 参考資料 | 61 |
| 1. 文献調査により収集した既往調査等 | 62 |
| (1) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法..... | 62 |
| (2) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査方法..... | 75 |
| (3) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査における配慮事項..... | 88 |
| (4) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査項目..... | 94 |
| 2. 性的マイノリティ当事者を対象としたヒアリング調査用資料 (性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関する意見収集用資料) | 103 |
| 3. 性的マイノリティ当事者を対象としたヒアリング調査の記録..... | 107 |

I. 事業概要

1. 事業の目的

性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解浸透度調査実施に係る検討を行うとともに、理解増進に係る研究に当たって留意すべき事項について整理することにより、令和7年度以降に係府省庁や地方公共団体等において実施する性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する学術研究等の遂行に資すること、ひいては理解の増進に関する施策の策定に資することを目的とする。

2. 事業の実施内容

以下の内容により、本事業を実施した。

- (1) 企画委員会の設置及び運営
- (2) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解浸透度調査実施に係る検討
- (3) 理解増進に係る研究に当たり留意すべき事項の検討
- (4) 報告書（概要版を含む）の作成・納品

3. 事業の実施期間

令和6年6月3日～令和7年3月31日

4. 企画委員会開催概要

本事業を実施するに当たり、企画委員会を設置し、本事業の実施方針、ヒアリング事項の設計、ヒアリング結果の分析等に関して検討を行った。

(1) 委員構成

(五十音順、敬称略)

| 氏名 | 現職 |
|--------|--|
| 葛西 真記子 | 鳴門教育大学 人間教育専攻 教授 |
| 釜野 さおり | 早稲田大学 社会科学総合学院 教授 |
| ◎鈴木 秀洋 | 日本大学 危機管理学部 教授 |
| 日高 庸晴 | 宝塚大学 看護学部 教授 |
| 吉村 治正 | 奈良大学 社会学部 総合社会学科 教授 (兼任)奈良大学 大学院社会学研究科 社会学専攻 教授 |

◎座長

(2) 企画委員会開催状況

| 会議 | 開催日 | 議題 |
|-----|-----------|---|
| 第1回 | 令和6年9月2日 | ○事業実施概要について ○理解増進に係る研究に当たり留意すべき事項について ○性的マイノリティ当事者（団体）を対象としたヒアリング調査について |
| 第2回 | 令和6年11月1日 | ○性的マイノリティ当事者（団体）を対象としたヒアリング調査について ○今後の理解浸透度調査の実施に向けた論点について |
| 第3回 | 令和6年12月6日 | ○性的マイノリティ当事者を対象とした調査の留意事項について |
| 第4回 | 令和7年2月5日 | ○報告書案について ○性的マイノリティ当事者（団体）を対象としたヒアリング調査の結果について |
| 第5回 | 令和7年3月7日 | ○報告書案について |

5. 留意事項

- 本事業は内閣府の委託事業であり、上述の「1. 事業の目的」及び「2. 事業の実施内容」などに定められた業務を実施するものとして、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社が受託・実施したものである。本報告書の内容は、内閣府の見解を示したものではない。
- 本報告書では、性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律（令和5年法律第68号。以下「理解増進法」という。）に基づき、「性的指向」とは、恋愛感情又は性的感情の対象となる性別についての指向を指すもの、「ジェンダーアイデンティティ」とは、自己の属する性別についての認識に関するその同一性の有無又は程度に係る意識」と捉えている。
- 本報告書では、出生性とジェンダーアイデンティティが同一ではない又は性別違和を感じている者並びに性的指向が異性ではない又は異性に限らない者を「性的マイノリティ当事者」と表現し、「性的マイノリティ当事者」ではない者を「性的マイノリティ非当事者」と表現している。なお、本表現は本報告書の取りまとめに当たっての整理及び表現であり、理解増進法に基づくものではない。
- ただし、各種調査事例や文献において上記とは異なる表現や定義が用いられている場合には、出所元の表現を優先する。
- 本報告書に記載した各種ウェブサイト等の URL への最終アクセス日は令和7年2月28日である。

II. 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民 の理解浸透度調査実施に係る検討

1. 目的

内閣府が令和7年度以降に実施を検討している「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解浸透度調査」の調査設計のため、調査の運営、調査項目等について検討を行う。

2. 実施内容

社会調査における定量調査に関する一般的な知見の整理、既往調査の分析を行い、企画委員会での議論を通じて、調査の運営や調査項目についての論点を整理した。

なお、既往調査としては、性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する調査のほか、内閣府が実施した各種施策に関する世論調査（以下「内閣府世論調査」という。）について分析を行った。

3. 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解浸透度調査の調査設計に関する論点及び検討

(1) 調査の運営

性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解浸透度調査（以下「国民の理解浸透度調査」という。）の運営に関わる論点として、「1）調査手法」「2）調査の規模」「3）調査名や調査目的の提示方法」「4）回答方法」「5）回収率向上のための工夫」の5つの論点について検討を行った。

1) 調査手法

内閣府世論調査及び令和5年度「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律第9条に規定する学術研究等の遂行に資する既存研究等の調査分析 報告書」（以下「令和5年度報告書」という。）等から、内閣府が取り得る主な調査手法として、①住民基本台帳を用いた無作為抽出調査（郵送配布、郵送回答・ウェブ回答併用）、②クロード型（モニター）調査（ウェブ）及び③オープン型調査（ウェブ）の3つの手法を検討した。これらについて図表1「調査手法の比較」（p.7）のとおり整理し、企画委員会において比較検討を行った。

① 住民基本台帳を用いた無作為抽出調査（郵送配布、郵送回答・ウェブ回答併用）

住民基本台帳を用いた無作為抽出調査については、母集団から確率的に標本を選ぶことから、一定数の標本があれば、精度の高い推計結果を得ることが可能である。一方で、調査の実施期間

が長く、他の調査と比べて費用がかかるとされる。なお、住民基本台帳を用いた無作為抽出調査の回収に当たっては郵送回答だけでなく、郵送回答とウェブ回答を併用することも考えられる（詳細は p.5 「4）回答方法」に記載）。

② クローズド型（モニター）調査（ウェブ）

調査会社等に登録するモニターを対象に実施するクローズド型（モニター）調査（ウェブ）については、調査設計から短い期間で実施可能であり、比較的安価で必要な回答数を確保することができる。他方、モニターに登録している人による回答をそのまま国民全体を代表するものとして用いることには懸念がある。企画委員会では、必要に応じ、大規模な調査の結果を踏まえた補正をするという技術的な対応があることも紹介された。

③ オープン型調査（ウェブ）

個人や団体経由等で調査依頼を配布し、協力意向がある者を対象にインターネット上で調査を行うことから、企画委員会では、回答結果が国民全体を代表しているとは言い難く、回答者が複数の団体に所属している場合など1人の者が複数回回答するリスクがあることなどが指摘された。

以上を踏まえ、企画委員会においては、国民の性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する理解度を把握することを目的とする場合、②クローズド型（モニター）調査（ウェブ）及び③オープン型調査（ウェブ）との比較において、調査対象を無作為に抽出する①住民基本台帳を用いた無作為抽出調査（郵送配布、郵送回答・ウェブ回答併用）が望ましいとされた。ただし、②クローズド型（モニター）調査（ウェブ）を併せて実施することで、無作為抽出調査の結果をもって、クローズド型（モニター）調査（ウェブ）の結果を補正する設計もあるという意見もあった。

以下、住民基本台帳を用いた無作為抽出調査（郵送配布、郵送回答・ウェブ回答併用）の採用を前提に、調査の運営（規模、目的等の提示、回答方法、回収率向上のための工夫）について検討した。

2） 調査の規模

調査の規模については、住民基本台帳を用いた無作為抽出調査（郵送配布、郵送回答・ウェブ回答併用）で実施されている政府の代表的な調査の例として、内閣府世論調査について分析を行った。対象期間として、内閣府世論調査において郵送調査が用いられるようになった令和3（2021）年度から5（2023）年度までの過去3年分とし、それらの調査の概要を図表2「内閣府世論調査（令和3（2021）～5（2023）年）の概要」（p.8）のとおり整理した。これによると、発送数は3,000件または5,000件であり、有効回答数は50%～60%に集中している。

企画委員会では、有効回答件数等を勘案し、最低でも内閣府世論調査と同等程度（5,000件程度）の発送件数とすることが望ましいとの意見で一致した。ただし、5,000件程度であれば、全国の実態を示す上では十分なサンプルサイズではあるものの、性別・年齢・居住地などによる詳細な集計を行う上では標本誤差が大きくなる可能性があり、実際に調査の規模を決定する際には、どのような分析軸による集計を行うかを踏まえて検討することが必要との意見もあった。さらに、

5,000 件程度で全国調査を実施すれば、発送に係る作業、郵送料等も大きくなることから、予算規模も勘案して発送件数を決めるべきという意見もあった。

なお、サンプルサイズに関して、内閣府では、図表 3「無作為抽出を仮定した場合の誤差」(p.9) のとおり、「世論調査の結果を読むに当たって」として標本誤差を公開している。

3) 調査名や調査目的の提示方法

内閣府世論調査では「社会意識に関する世論調査」など、調査名に調査の主題を示した上で調査が実施されている。そこで、国民の理解浸透度調査において、調査内容に係る文言を調査名や調査目的に示すことが、回収率向上にどのように影響し得るのか、また、調査内容に係る文言を示す場合にはどのような表現が望ましいかなどの論点について検討した。

企画委員会では、「性的指向」「ジェンダーアイデンティティ」「性的マイノリティ」などといった表現が調査名に含まれることで、調査対象者（性的マイノリティ非当事者が多数を占めると想定される）が自らに関係のある調査だと思わず、調査に回答しない可能性があるとの指摘があった。これに対して、多くの人に自身と関連があると思ってもらいやすい「多様性」「共生社会」などの表現を用いてはどうかとの意見があった。

調査目的の記載内容については、「理解増進法に関わる調査である」と明示することで、調査を機に理解増進法の認知を高めていくこともできるのではないかと意見もあった。

そのほか、調査名や調査目的に加えて、政府が実施する調査であることを明示することで回収率の向上が期待できるという意見もあった。

4) 回答方法

回答方法について、令和3年度以降の内閣府世論調査では、郵送のみとする方法と、郵送とウェブを併用する方法のいずれかが用いられている。国民の理解浸透度調査における回答方法について、企画委員会では、ウェブ回答の方がプライバシーが守られると感じることから回答しやすいという意見もあることや、ウェブ回答の場合は紙回答からのデータ入力ミスに関する懸念がなくなることなどの利点が紹介された。

ただし、ウェブ回答を併用することによる回答回収に及ぼす影響について、二つの懸念が示された。一点目は、ウェブ回答を併用することで回収率が下がる可能性があるというものである。ただし、過去には郵送とウェブを併用することで回収率が下がる傾向がみられたものの、昨今はその傾向は小さくなってきているとの指摘があった。また、二点目として、回答回収に要する費用面の懸念が指摘された。具体的には、ウェブ回答が少ない場合は、ウェブ画面構築に要する費用と回収件数が見合わず、郵送回答のみとした方が費用対効果は高い可能性があるとの指摘があった。

以上のとおり、企画委員会においては、回答方法については郵送とウェブを併用する方法が考えられるが、内閣府世論調査の回収状況等も参考にしつつ、5)に記載する回収率向上に寄与すると考えられる方法を組み合わせることが必要であるとされた。

5) 回収率向上のための工夫

① 督促

回収率の向上を目的とした調査対象者への督促の在り方について検討した。企画委員会では、

督促の回数や方法については調査によって様々な在り方が考えられるものの、特段の制約等がない限りは、最低でも1度は督促することが望ましいとの意見が多かった。

具体的な方法として、はがきの送付のほか、督促の際に調査等を含む資料一式を再送する方法も提示された。いずれにしても費用が発生するものであり、特に資料一式を再送する場合は、印刷・発送のためにはがきの送付よりも多くの費用を要することから、実際の調査実施に当たっては、予算・スケジュール等も考慮して、実現可能な督促方法を採用することになる。

② 謝金・謝礼品の提供

回収率の向上に向けた、調査協力者に対する謝金、謝礼品の提供の有効性、その手法について検討した。

企画委員会では、特段の制約等がない限りは、何らかの謝金・謝礼品を提供するのがよいとの意見が多かった。その際、提供するのはいずれも謝金である必要はなく、謝礼品としてボールペン等を同封し、調査案内を開封してすぐに回答できるようにする方法も提案された。一方、国や地方公共団体など行政が実施する調査においては、調査対象者として選ばれた一部の市民のみが謝礼を受け取ることができる点について、公平性の観点で検討が必要な場合もあるという指摘もあった。

図表 1 調査手法の比較

| 項目 | 住民基本台帳を用いた無作為抽出調査（郵送配布、郵送回答・ウェブ回答併用）（※1） | クローズド型（モニター）調査（ウェブ） | オープン型調査（ウェブ） |
|--------------------|---|--|---|
| 概要 | 住民基本台帳等に基づき無作為に抽出した対象に調査を行う手法。従来の社会調査であり、世論調査等で採用されている。 | モニター調査会社の登録モニターを対象に調査を行う手法。内閣府の各種委託事業等（※2）でも採用されている。 | 個人や団体経由等で調査依頼を配布し、協力意向がある者を対象に調査を行う手法。 |
| 調査対象 | 抽出台帳に基づき抽出された者。個人の場合、住民基本台帳や選挙人名簿などを抽出台帳とする例が多い。 | 登録モニター | 調査依頼を受け取った者等 |
| 配布方法 | 調査対象者に対して、依頼状・調査票等を郵送。 | 登録モニターに対して、調査案内を配信（ウェブ配信）。 | 調査案内・ウェブ画面のリンクを個人、団体経由等で周知。 |
| 主な回答形式 | 紙面回答（ウェブ回答と併用する場合もある） | ウェブ回答 | ウェブ回答（紙面回答／併用の場合もある。） |
| 期間 ※3 | 長期（留置期間のほか、郵送物の印刷・発送やデータ入力等に期間を要するため） | 短期（出現率（※4）が低い層を対象にする場合、モニター調査としては長期化する可能性がある。） | 回収目標・回収状況等による（郵送物の印刷・発送等に時間を要しないが、回収目標・状況次第では一定の期間を要する可能性がある。） |
| 費用 ※3 | 高価（郵送物の印刷・発送やデータ入力等に費用を要するため。） | 安価（設問数や対象者数等により増減。また、出現率が低い層を対象にする場合、モニター調査としては高額になる可能性がある。） | 安価（周知において郵送物を用いる場合や、広告・謝礼等を支払う場合は高額になる可能性がある。） |
| 広く国民を調査対象とし得る程度 | 高い（広く住民一般が対象になるため。） | 低い（登録モニターが対象になるためカバレッジ誤差が大きい。） | 低い（調査依頼を受け取った者が対象になるため。） |
| 国民全体を代表する調査結果と言えるか | 他の調査方法に比べれば、比較的偏りは小さいと想定される。（ただし、近年の世論調査等の回収率が低下していることに留意が必要。） | 基本的に先着順での回答となるため、日頃からアンケートの回答に積極的な層に回答が集中する可能性がある。 | 調査が実施されていることを知り、かつ調査テーマへの関心がある人からの回答が中心になる可能性がある。 |
| 回収率 | 世論調査では、近年おおむね6割程度。ただし、中長期でみると低下傾向。（※1） | （あらかじめ調査対象者数を設定するわけではないため、回収率という概念が成り立たない。） | （あらかじめ調査対象者数を設定するわけではないため、回収率という概念が成り立たない。） |
| 対象者の設定 | 基本的に不可 | 可能（特定の条件に合致する者について、指定件数を回収することが可能。出現率が低い層からの回収も得やすい。） | ある程度可能（調査依頼の配布方法・配布先により、特定の条件に合致する者からの回答を得やすい。） |
| 回答の正確性 | 基本的には任意調査で、回答によるインセンティブも存在しないため、不正確な回答が生じる可能性は低いと想定される。（ただし、謝礼を提供するケースもある。） | 登録モニターはアンケート回答により、ポイント（報酬）を得られるため、一部の回答者において Satisfice（努力の最小化）行動による不正確な回答が懸念される。なお、こうした回答を除外する方法が導入されている場合がある。 | 基本的には任意調査で、回答によるインセンティブも存在しないため、不正確な回答が生じる可能性は低いと想定される。（ただし、謝礼を提供するケースもある。） |

※1 無作為抽出調査については、令和3年度以降の内閣府世論調査において郵送が用いられていることから（それ以前は調査員による個別面接聴取法を活用）、郵送を前提として整理している。

※2 例えば、「満足度・生活の質に関する調査」「令和5年度 男女の健康意識に関する調査」など。

※3 クローズド型（モニター）調査（ウェブ）、オープン型調査（ウェブ）については無作為抽出調査比。

※4 母集団の中に、ある条件に合致する人の割合。モニター調査の場合、登録モニターのうち、条件に合致する人の割合。

図表 2 内閣府世論調査（令和 3（2021）～5（2023）年）の概要

| 年度 | 調査名 | 調査方法 | 発送数 | 有効回収数 (有効回収率) |
|------|--------------------------------------|--------------------------------|---------|--|
| 2023 | 社会意識に関する世論調査（令和 5 年 11 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,714 人（57.1%） |
| 2023 | 国民生活に関する世論調査（令和 5 年 11 月調査） | 郵送 | 5,000 人 | 3,076 人（61.5%） |
| 2023 | 生活設計と年金に関する世論調査（令和 5 年 11 月調査） | 郵送 | 5,000 人 | 2,833 人（56.7%） |
| 2023 | 森林と生活に関する世論調査（令和 5 年 10 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,624 人（54.1%） |
| 2023 | 北方領土問題に関する世論調査（令和 5 年 10 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,624 人（54.1%） |
| 2023 | 食料・農業・農村の役割に関する世論調査（令和 5 年 9 月調査） | 郵送 (配布:郵送、回収:郵送 又はウェブ回答) | 5,000 人 | 2,875 人（57.5%） うち郵送 2,009 人 うちウェブ 866 人 |
| 2023 | 外交に関する世論調査（令和 5 年 9 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,649 人（55.0%） |
| 2023 | 尖閣諸島に関する世論調査（令和 5 年 9 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,649 人（55.0%） |
| 2023 | 気候変動に関する世論調査（令和 5 年 7 月調査） | 郵送 (配布:郵送、回収:郵送 又はウェブ回答) | 3,000 人 | 1,526 人（50.9%） うち郵送 1,057 人 うちウェブ 469 人 |
| 2023 | アルコール依存症に対する意識に関する世論調査（令和 5 年 7 月調査） | 郵送 (配布:郵送、回収:郵送 又はウェブ回答) | 3,000 人 | 1,526 人（50.9%） うち郵送 1,057 人 うちウェブ 469 人 |
| 2023 | がん対策に関する世論調査（令和 5 年 7 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,626 人（54.2%） |
| 2023 | 情報通信機器の利活用に関する世論調査（令和 5 年 7 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,626 人（54.2%） |
| 2022 | 社会意識に関する世論調査（令和 4 年 12 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,761 人（58.7%） |
| 2022 | 男女共同参画社会に関する世論調査（令和 4 年 11 月調査） | 郵送 | 5,000 人 | 2,847 人（56.9%） |
| 2022 | 自衛隊・防衛問題に関する世論調査（令和 4 年 11 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,602 人（53.4%） |
| 2022 | アイヌに対する理解度に関する世論調査（令和 4 年 11 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,602 人（53.4%） |
| 2022 | 障害者に関する世論調査（令和 4 年 11 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,765 人（58.8%） |
| 2022 | 竹島に関する世論調査（令和 4 年 11 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,765 人（58.8%） |
| 2022 | 国民生活に関する世論調査（令和 4 年 10 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,888 人（62.9%） |
| 2022 | 外交に関する世論調査（令和 4 年 10 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,732 人（57.7%） |
| 2022 | 防災に関する世論調査（令和 4 年 9 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,791 人（59.7%） |
| 2022 | プラスチックごみ問題に関する世論調査（令和 4 年 9 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,791 人（59.7%） |
| 2022 | 人権擁護に関する世論調査（令和 4 年 8 月調査） | 郵送(配布:郵送、回収:郵送 又はウェブ回答) | 3,000 人 | 1,556 人（51.9%） うち郵送 1,058 人 うちウェブ 498 人 |
| 2022 | たばこ対策に関する世論調査（令和 4 年 8 月調査） | 郵送(配布:郵送、回収:郵送 又はウェブ回答) | 3,000 人 | 1,556 人（51.9%） うち郵送 1,058 人 うちウェブ 498 人 |
| 2021 | 社会意識に関する世論調査（令和 3 年 12 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,790 人（59.7%） |
| 2021 | 治安に関する世論調査（令和 3 年 12 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,790 人（59.7%） |
| 2021 | 家族の法制に関する世論調査（令和 3 年 12 月調査） | 郵送 | 5,000 人 | 2,884 人（57.7%） |
| 2021 | 離婚と子育てに関する世論調査（令和 3 年 10 月調査） | 郵送 | 5,000 人 | 2,768 人（55.4%） |
| 2021 | 外交に関する世論調査（令和 3 年 9 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,701 人（56.7%） |
| 2021 | 地下水に関する世論調査（令和 3 年 9 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,701 人（56.7%） |
| 2021 | 国民生活に関する世論調査（令和 3 年 9 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,895 人（63.2%） |
| 2021 | 移植医療に関する世論調査（令和 3 年 9 月調査） | 郵送 | 3,000 人 | 1,705 人（56.8%） |
| 2021 | 道路に関する世論調査（令和 3 年 9 月調査） | 郵送(郵送配布、郵送回収 又はウェブ回答) | 3,000 人 | 1,646 人（54.9%） (うち郵送 1,215 人、 ウェブ 431 人) |
| 2021 | 農業遺産に関する世論調査（令和 3 年 9 月調査） | 郵送(郵送配布、郵送回収 又はウェブ回答) | 3,000 人 | 1,646 人（54.9%） (うち郵送 1,215 人、ウェブ 431 人) |
| 2021 | 農山漁村に関する世論調査（令和 3 年 6 月調査） | 郵送(郵送配布、郵送回収 又はウェブ回答) | 3,000 人 | 1,655 人（55.2%） (うち郵送 1,160 人、 ウェブ 495 人) |
| 2021 | 行政相談に関する世論調査（令和 3 年 6 月調査） | 郵送(郵送配布、郵送回収 又はウェブ回答) | 3,000 人 | 1,655 人（55.2%） (うち郵送 1,160 人、ウェブ 495 人) |

注) いずれも、調査対象は全国 18 歳以上の日本国籍を有する者。また、層化二段無作為抽出法により対象者の抽出を行っている。

図表 3 無作為抽出を仮定した場合の誤差

| 単純任意抽出法（無作為抽出）を仮定した場合の誤差 | | | | | |
|--------------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|-----------|
| 回答者数（n） | 各回答の比率 10%（又は90%） | 各回答の比率 20%（又は80%） | 各回答の比率 30%（又は70%） | 各回答の比率 40%（又は60%） | 各回答の比率50% |
| 7,000 | ±0.7 | ±0.9 | ±1.1 | ±1.1 | ±1.2 |
| 5,000 | ±0.8 | ±1.1 | ±1.3 | ±1.4 | ±1.4 |
| 3,500 | ±1.0 | ±1.3 | ±1.5 | ±1.6 | ±1.7 |
| 3,000 | ±1.1 | ±1.4 | ±1.6 | ±1.8 | ±1.8 |
| 2,500 | ±1.2 | ±1.6 | ±1.8 | ±1.9 | ±2.0 |
| 2,000 | ±1.3 | ±1.8 | ±2.0 | ±2.1 | ±2.2 |
| 1,500 | ±1.5 | ±2.0 | ±2.3 | ±2.5 | ±2.5 |
| 1,000 | ±1.9 | ±2.5 | ±2.8 | ±3.0 | ±3.1 |
| 500 | ±2.6 | ±3.5 | ±4.0 | ±4.3 | ±4.4 |
| 100 | ±5.9 | ±7.8 | ±9.0 | ±9.6 | ±9.8 |
| 50 | ±8.3 | ±11.1 | ±12.7 | ±13.6 | ±13.9 |

（出所）内閣府ウェブサイト（<https://survey.gov-online.go.jp/about/caution/>）

(2) 調査項目

国民の理解浸透度調査の調査項目について、既往調査等を分析し、企画委員会で議論を行った。

1) 調査項目案（たたき台）の作成方針

次の方針に基づき、企画委員会における議論のたたき台となる調査項目案を検討した。

- (ア) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する理解の側面について、令和5年度報告書において整理された内容を大項目として据えること
- (イ) 具体的な調査項目について、既往調査を参照すること
- (ウ) 調査の項目数やフェイス項目の聴取方法等について、内閣府世論調査に準拠すること

(ア) について、令和5年度報告書では、性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性をテーマとする全国調査や地方公共団体による調査を整理した結果、「性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する理解」の側面として、認知・知識、態度・規範意識（価値観）、身近な性的マイノリティ当事者の有無の側面があるとしている。また、「性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無が、理解の増進につながることも考えられる」（同 p.13）としている。

こうした取りまとめ結果を踏まえ、まず、調査項目の大項目（大枠）を検討した。具体的には、図表4「国民の理解浸透度調査における調査項目の大項目案」のとおり、性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する理解について「①認知・知識」「②態度・規範意識（価値観）」「③性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無」「④身近な性的マイノリティ当事者の有無」の4つの側面を調査項目の大項目とすることを検討した。なお、4つの側面のうち①及び②は、回答者の認知度や考えを直接把握するものとして「直接的指標」とし、③及び④は、カミングアウトができるような理解ある環境の醸成度合や理解増進に資する施策の進捗状況を捉える「間接的指標」として整理した。

図表 4 国民の理解浸透度調査における調査項目の大項目案

| 位置づけ | 大項目 | 概要 |
|---|---------------------------------|--|
| 直接的指標 (回答者の認知や考えを直接把握するもの) | ①認知・知識 | ■ 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する知識や認識を持っているか。 |
| | ②態度・規範意識 (価値観) | ■ 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性について、どのような考えや価値観を持っているか。 |
| 間接的指標 (理解ある環境の醸成度合、また、理解増進に資する施策の進捗状況を捉えるもの) | ③性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無 | ■ 性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無を尋ねることで、周知啓発の機会が提供されているかを確認することが可能。理解増進の取組進度をはかる指標になり得る。 ■ 学習経験があることが、知識や態度に影響することが想定されることから、性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性の理解を分析する際の1つの視点になると考えられる。 |
| | ④身近な性的マイノリティ当事者の有無 | ■ 性的マイノリティ当事者がカミングアウトしやすい環境が醸成されているか。 ■ 身近な性的マイノリティ当事者の有無が、知識や態度に影響することが想定されることから、性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性の理解を分析する際の1つの視点になると考えられる。 |

上述の4つの側面を大項目と仮置きした上で、(イ)のとおり、令和5年度報告書で紹介されている調査及び委員より情報提供を受けた研究・調査等を参考に調査項目案(たたき台)を作成した。

具体的には、①認知・知識、③性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無、④身近な性的マイノリティ当事者の有無については、令和5年度報告書で紹介されている調査における設問を参照している。

②態度・規範意識(価値観)については、令和5年度報告書で紹介されている調査のほか、心理学の研究における性的指向及びジェンダーアイデンティティに関連した態度尺度において用いられている項目を参照した¹。これらの尺度は複数の調査項目により構成されており、心理学の研究においては一連の調査項目をセットで用いることが一般的であるが、国民の理解浸透度調査においては個人の心理現象の構成概念を把握することを目的とするものではなく、また、後述する設問数の制約もあることから、尺度を構成する項目のうち本調査の目的に資すると思われる一部項目を参考にした。本来の尺度としての目的は、必ずしも国民の理解浸透度を測るという調査目的に完全に一致するわけではないことに留意が必要である。なお、各種尺度から調査項目案を検討する際の考え方については、「2)②態度・規範意識(価値観)に関する調査項目案」(p.13)にて後述する。

さらに、実際の調査設計に当たっては設問数や回答のしやすさなどを考慮する必要があることから、調査項目案(たたき台)の作成方針(ウ)のとおり、設問数、設問順、フェイス項目などについては内閣府世論調査に準拠させることとした。具体的には、設問数については内閣府世論調査でフェイス項目を含めて30問程度としている場合が多いことから、同様に30問程度を目安とした。また、内閣府世論調査では、フェイス項目は調査票の後半に置かれ、調査の主題となる内容から調査票が始まっている点を参考にした。最後に、内閣府世論調査に倣い、調査の分かりやすさや分量に関する評価を回答する設問群を設けた。

¹ 具体的にはLGB-KASH (Lesbian, Gay, and Bisexual Knowledge and Attitudes Scale) の日本語版及びGTS-R (Genderism and Transphobia Scale-Revised) の日本語版を参照した。

LGB-KASHについては、Worthington, L. R., Dillon, R. F. & Becker-Schutte, M. A. (2005). Development, Reliability, and Validity of the Lesbian, Gay, and Bisexual Knowledge and Attitudes Scale for Heterosexuals (LGB-KASH), *Journal of Counseling Psychology*, 52(1), 104-118. <https://psycnet.apa.org/record/2005-00118-011>を参照されたい。

GTS-Rについては、Tebbe, E. A., Moradi, B., & Ege, E. (2014). Revised and abbreviated forms of the Genderism and Transphobia Scale: Tools for assessing anti-trans* prejudice. *Journal of Counseling Psychology*, 61 (4), 581-592. <https://psycnet.apa.org/record/2014-36322-001>を参照されたい。

2) 調査項目案（たたき台）及び同案に対する企画委員会での議論

上述の方針に則って作成した調査項目案（たたき台）は図表 5「国民の理解浸透度調査の調査項目案（たたき台）（全体）」のとおりである。

図表 5 国民の理解浸透度調査の調査項目案（たたき台）（全体）

| |
|--|
| ①認知・知識に関する調査項目案 |
| 1. 「性的指向」の認知 2. 「ジェンダーアイデンティティ」の認知 3. 「カミングアウト」の認知 4. 「アウトティング」の認知 5. 性的指向とジェンダーアイデンティティの違いが説明できるか |
| ②態度・規範意識（価値観）に関する調査項目案 |
| 6. 性的指向の多様性に関連した態度・規範意識 ・同性愛・同性愛者、両性愛・両性愛者等についてどう思うか等 7. ジェンダーアイデンティティの多様性に関連した態度・規範意識 ・性別に関するステレオタイプについてどう考えているか等 8. 性的マイノリティ当事者と関わる場面における反応 ・性的マイノリティ当事者に対する認識について他者からの評価を気にするか、どのようにふるまうか等 9. 性の多様性に関する考え方について ・性の多様性を受け入れているか等 |
| ③性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無に関する調査項目案 |
| 10. 学校や職場等において性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性について学んだ経験の有無 11. （ある場合）性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性について学んだ経験の回数 |
| ④身近な性的マイノリティ当事者の有無に関する調査項目案 |
| 12. 身近に同性愛者がいるかどうか 13. 身近に性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がいるかどうか |
| ⑤フェイス項目に関する調査項目案 |
| ※原則として、内閣府世論調査で用いられている項目を設定。ただし、16～19 は内閣府世論調査における例はないものの、回答者の性的指向及びジェンダーアイデンティティを把握するために設定。 14. 年齢 15. 居住地 16. 出生時性 17. 出生時性が現在の性別の認識と異なるかどうか 18. 現在認識している性別 19. 性的指向 20. 仕事の有無・就労形態 21. 家計を同じくする家族の人数 22. 世帯構成 23. 結婚の有無（パートナー有無） 24. 子の有無 25. 子の年齢（学齢） 26. 現在居住する市区町村での居住年数 27. 社会の動きを知ろうとするときに、どこから情報を得ることが多いか |
| ⑥今後の調査実施の参考のために把握する項目案 |
| ※内閣府世論調査を参考に準拠。 28. 調査の答えやすさ 29. 調査の分量 30. 調査への回答に要した時間 31. 回答者が宛名本人かどうか |

注) 本節末尾 (p. 16) に参考文献を示している。

以降では、図表 5「国民の理解浸透度調査の調査項目案（たたき台）（全体）」に示した調査項目案（たたき台）について、①～⑥の大項目ごとに調査項目案の内容と案に対する企画委員会での議論を報告する。

① 認知・知識に関する調査項目案（たたき台）

回答者の認知・知識を調べる調査項目として、「性的指向」「ジェンダーアイデンティティ」という言葉の認知や、「カミングアウト」「アウトティング」「性的指向とジェンダーアイデンティティの違いを説明できるか」に関する内容など、計5項目を挙げた。

企画委員会では、言葉の認知を把握することについて、「性的指向」「ジェンダーアイデンティティ」だけでなく、例えば「レズビアン」「ゲイ」「トランスジェンダー」という言葉の認知度も把握してはどうかとの意見があった。こうした「レズビアン」「ゲイ」「トランスジェンダー」という言葉の認知度が高い可能性もあることから、これらの言葉の認知度を通じて、国民の性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する理解を把握する場合には、どのような言葉について把握するかによって結果が左右される可能性もあるとの意見があった。

図表 5 - 1 国民の理解浸透度調査の調査項目案（たたき台）

（①認知・知識に関する調査項目案（たたき台）の再掲）

| ①認知・知識に関する調査項目案 |
|---------------------------------|
| 1. 「性的指向」の認知 |
| 2. 「ジェンダーアイデンティティ」の認知 |
| 3. 「カミングアウト」の認知 |
| 4. 「アウトティング」の認知 |
| 5. 性的指向とジェンダーアイデンティティの違いが説明できるか |

注) 本節末尾 (p. 16) に参考文献を示している。

② 態度・規範意識（価値観）に関する調査項目案（たたき台）

態度・規範意識（価値観）に関する調査項目案（たたき台）については、上述の調査項目案（たたき台）の作成方針のとおり、既往調査や心理学の研究で用いられている態度尺度を参考にした。尺度を構成する項目から調査項目案へ抽出する際には、性的指向に関連する内容とジェンダーアイデンティティに関連する内容をバランスよく抽出した上で、性的指向及びジェンダーアイデンティティそれぞれについて多様な在り方に関する項目が含まれることを優先した。また、回答者に自分ごととして捉えてもらえるような項目を含めた。

図表 5 - 2 国民の理解浸透度調査の調査項目案（たたき台）

（②態度・規範意識（価値観）に関する調査項目案（たたき台）の再掲）

| ②態度・規範意識（価値観）に関する調査項目案 |
|--|
| 6. 性的指向の多様性に関連した態度・規範意識 ・同性愛、同性愛者、両性愛、両性愛者等についてどう思うか等 |
| 7. ジェンダーアイデンティティの多様性に関連した態度・規範意識 ・性別に関するステレオタイプについてどう考えているか等 |
| 8. 性的マイノリティ当事者と関わる場面の反応 ・性的マイノリティ当事者に対する認識について他者からの評価を気にするか、どのようにふるまうか等 |
| 9. 性の多様性に関する考え方について ・性の多様性を受け入れているか等 |

注) 本節末尾 (p. 16) に参考文献を示している。

企画委員会では、回答者が周囲の人を想起した際に、どのように考えるかを把握することが重要という意見が挙げられた。そのための設問として、ケースビネット法（具体的な場面を想定して

回答を求める方法)を用いて、回答者にケースを読んでもらった上で、それについてどのように思うかを尋ねる方法も提案された。また、委員が行ったこれまでの調査では、自分のこどもが同性愛者やトランスジェンダーだった場合に抵抗があるかを尋ねると、「同性愛者やトランスジェンダーであることが分かった時点では少なからず戸惑いはあるものの、いずれ受け入れていける・受け入れたい」と時間の経過とともに意識が変わり得る人もいることから、そうした将来的な受け止めの可能性を把握してはどうかとの意見も挙げられた。

また、例えば「嫌な気がする」といったネガティブな表現ではなく、「構わない」「抵抗はない」などの表現への同意の程度(「そう思う」かどうか)を尋ねた方がよいとの指摘があった。一方で、用いる表現によって、把握している内容が変わり得る点に注意が必要であることも提起された。具体的には、「構わない」という言葉について「そう思う」(構わないと思う)と回答した中には、性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関して関心がなく理解もないと思われる者が混在する可能性が例示された。こうした点も考慮すると、「抵抗はない」という表現が有用ではないかとの議論があった。

なお、これまで委員が実施した調査において、「ネガティブな表現は望ましくないのではないか」「調査票上でこうした文言が用いられると、傷つく」という声が寄せられることもあったことが紹介された。このように態度・規範意識の把握の際には項目の内容やその表現について留意が必要であることを踏まえ、そもそもの調査目的や各具体的な設問の趣旨について説明を尽くすことが必要である。

また、性的指向及びジェンダーアイデンティティに関連した態度尺度を参考にするとしても、心理学等における研究において用いることを目的としたものではなく、理解の浸透度を把握するためのアンケート調査における調査項目でしかないことに留意が必要だろうとの議論もあった。

さらに態度・規範意識を尋ねる設問を設ける際には、4件法や5件法²を用いて回答をしてもらうことが考えられる。そうした場合、複数の設問に対して同じ選択肢を設けることから、多くの場合、マトリクス設問(表形式の設問)が設けられることが想定される。実際に調査票を作成する際には、同じ選択肢を用いた設問であっても、マトリクス設問の表をいくつかに分けるなどレイアウト上の工夫をすることも考えられるとの意見があった。

国民の理解浸透度調査の実施に際しては、調査目的を踏まえて細かな文言の調整が必要である。また、回答者に対し、どのように趣旨説明を行うのかについても十分な検討が必要である。

③ 性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無に関する調査項目案(たたき台)及び

④ 身近な性的マイノリティ当事者の有無に関する調査項目案(たたき台)

性的指向及びジェンダーアイデンティティに関し理解ある環境の醸成度合、また、性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する理解増進に資する施策の進捗状況を捉える間接的指標として、③性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無及び④身近な性的マイノリティ当事者の有無について、既往調査を参考に調査項目案(たたき台)を作成した。③性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無については、複数回の学習経験が性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する理解を深める上で有用である可能

² 4件法とは回答の選択肢を4つ、5件法は5つの選択肢にする方法。

性も想定されることから、学習経験の回数を把握する項目を設けた。

企画委員会では、学習経験のほか、特に SNS を通じて差別的な情報を見聞きした経験を把握してはどうかとの意見があった。これに関連して、案ではフェイス項目に設けている「社会の動きを知ろうとするときに、どこから情報を得ることが多いか」（項目 36）の項目と合わせて、SNS の具体名などを把握することも案ではないかとの意見があった。

図表 5 - 3 国民の理解浸透度調査の調査項目案（たたき台）

③性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無及び

④身近な性的マイノリティ当事者の有無に関する調査項目案（たたき台）の再掲

| |
|---|
| ③性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験の有無に関する調査項目案 |
| 10. 学校や職場等において性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性について学んだ経験の有無 |
| 11. (ある場合) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性について学んだ経験の回数 |
| ④身近な性的マイノリティ当事者の有無に関する調査項目案 |
| 12. 身近に同性愛者がいるかどうか |
| 13. 身近に性別を変えた、あるいはそうしようと考えている人がいるかどうか |

注) 本節末尾 (p. 16) に参考文献を示している。

⑤ フェイス項目案（たたき台）

内閣府世論調査で用いられている項目をフェイス項目案（たたき台）として設定した。ただし、項目 16～19 は内閣府世論調査において把握している例はないものの、回答者の性的指向及びジェンダーアイデンティティを把握するために必要であるとして項目を設定した。

企画委員会では、国民の理解浸透度調査の調査対象者にも性的マイノリティ当事者が含まれると想定されること、必要に応じて分析を行えるようにすることを考慮し、回答者の性的指向及びジェンダーアイデンティティを把握したほうがよいとの意見が複数あった。なお、回答者の性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握については、「III. 6. (4) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法」(p. 52) で詳細な検討を行っている。

また、住民基本台帳を用いた無作為抽出調査は、調査対象に日本国籍ではない人が含まれ得る抽出方法であることが紹介された。

⑥ 今後の調査実施の参考のために把握する項目案（たたき台）

内閣府世論調査に倣い、調査の分かりやすさや分量に関する評価を回答する設問群を設けることを案としたところ、企画委員会ではこれらの設問を設けることに異論は挙がらなかった。

⑦ その他（設問順、趣旨説明、レイアウトなど）

企画委員会では、調査項目の順番（設問順）について様々な意見があった。主な意見としてはまず、フェイス項目などの区分にこだわらず、「社会の動きを知ろうとするときに、どこから情報を得ることが多いか」（項目 27）など、回答者にとって差し障りのない話題からアンケートを始めるのがよいという意見、性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する学習経験から始めるのがよいという意見、KAP 調査（知識 (Knowledge)、態度 (Attitude)、行動 (Practice)）に沿った順番で把握するのがよいという意見があった。

また、調査項目について不快に感じる人がいる可能性もあるため、あらかじめ調査票の冒頭で、

国民の性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する理解を把握することが調査目的である旨を明示することや、不快に感じる人がいる可能性が高い設問において、聴取する目的などの留意事項を記載しておくことよとの意見があった。また、機微な内容の設問においては、「わからない」という選択肢を設けたり、無回答を可にしたりしてはどうかとの意見があった。

さらに、設問や留意事項に十分な配慮をしたとしても、調査に協力することにより、過去の体験がフラッシュバックするなど不調を感じるような人もいると考えられることから、調査の運営や回答方法などの調査に関する問い合わせ先のほかに、性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する相談機関を記載することが望ましいとの意見もあった。

そのほか、いわゆる4件法や5件法が多用される場合、同じ選択肢を用いた設問であっても、マトリクス設問の表をいくつかに分けるなどレイアウト上の工夫や印刷の工夫を行うとよとの意見もあった。

(3) 国民の理解浸透度調査に関する論点整理結果のまとめ

前掲「(1) 調査の運営」のとおり、今後、内閣府が国民の理解浸透度調査を実施する場合、調査手法としては住民基本台帳を用いた無作為抽出調査（郵送配布、郵送回答・ウェブ回答併用）、可能であれば発送件数は5,000件以上とし、必要に応じ、督促や謝金・謝礼品の提供を行うことで、回収率向上に努めることが望ましい。

調査の具体的な内容については、前掲「(2) 調査項目」のとおり、図表5「国民の理解浸透度調査の調査項目案（たたき台）（全体）」(p.12)に示す調査項目案（たたき台）に対し、企画委員会では、特に②態度・規範意識（価値観）に関する調査項目案（たたき台）について様々な意見が出された。性的指向及びジェンダーアイデンティティに関連した態度尺度を参考にするとしても、心理学等における研究において用いることを目的としたものではないことが強調された。

国民の理解浸透度を測る上で重要でありながらも、不快に思う調査対象者がいる可能性を踏まえ、慎重な検討を重ねた上で調査項目に反映する重要性が示唆された。また、①認知・知識については、性的指向及びジェンダーアイデンティティに係る用語について認知を問うかどうかについて、検討の余地が残された。

設問順についても、企画委員会において異なる観点から様々な意見があった。回答のしやすさ、既往調査の踏襲など、調査項目全体から考え適切な順番を考えることが必要である。

(4) 参考文献

調査の運営に関する検討に当たり、参考にした文献等は以下のとおり。

稲垣佑典・加藤直子・前田忠彦・立川雅司. (2021). 「Web 調査における不適切回答行動の実態把握と対応策の検討：潜在ランク分析による回答傾向の分類階級を用いて」. 理論と方法, 36(2), 132-148.

井上哲浩・日本マーケティング・サイエンス学会(編). (2007). 「Web マーケティングの科学 ―リサーチとネットワーク―」. 千倉書房.

釜野さおり. (2024). 「性的指向・ジェンダーアイデンティティの多様性に係る学術研究・統計データ ―日本における調査研究の現況と調査結果から見えること―」. (「性的指向・ジェンダーアイデンティティ理解増進連絡会議（第4回）資料1」)

松本渉. (2021). 「社会調査の方法論」. 丸善出版.

日本学術会議 社会学委員会 Web 調査の課題に関する検討分科会. (2020). 「提言 Web 調査の有効な学術的活用を目指して」.

轟亮・杉野勇・平和和司(編). (2021). 「入門・社会調査法〔第4版〕 2ステップで基礎から学ぶ」. 法律文化社.

吉村治正. (2020). 「ウェブ調査の結果はなぜ偏るのか—2つの実験的なウェブ調査から—」. 社会学評論, 71(1), 65-83.

調査項目案に関する検討に当たり、参照した文献等は以下のとおり。

Kasai, M. & Okahashi, Y. (2008). Japanese Version of LGB Knowledge and Attitudes Scale for Counselors, The 116th Annual Meeting of American Psychological Association (Boston, U.S.A.)

石田仁・風間孝・釜野さおり・河口和也・平森大規・吉仲崇. (2019). 「性的マイノリティについての意識：2019年（第2回）全国調査」（2019年）.

葛西真記子・田中美月. (2020). 「中学生・高校生・大学生の同性愛者(LG)への態度と被異質視不安傾向・異質拒否傾向との関連」. 鳴門教育大学研究紀要, 35. (小渡・葛西(2015)によるLGBT-KASHが掲載されている。)

森裕子・柳川耀・石丸怪一郎. (2020). 「改訂トランスジェンダー嫌悪尺度日本語版の作成とトランスジェンダー教育における当事者による授業の効果について：女子大学に通う学生を対象として」. お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 22.

III. 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する理解

増進に係る研究に当たり留意すべき事項の検討

1. 実施概要

(1) 目的

関係府省庁や地方公共団体等が、令和7年度以降、性的マイノリティ当事者を対象とした調査を実施する場合に、その参考となるよう調査実施に係る留意事項等を検討する。

なお、「性的マイノリティ当事者を対象とする調査」とは、「性的マイノリティ当事者のみを対象とする調査」と「性的マイノリティ当事者及び性的マイノリティ非当事者の比較を念頭に双方を対象とする調査」の両者を指す。

(2) 実施内容

上述の目的に資するよう、性的マイノリティ当事者を対象とした調査の留意事項等として、既往調査等の文献調査及び性的マイノリティ当事者へのヒアリング調査を実施し、これらの調査結果を企画委員会で議論し、「6. 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の留意事項」(p. 50)を取りまとめた。1) 文献調査及び2) 性的マイノリティ当事者へのヒアリング調査の実施概要は以下のとおりである。

1) 文献調査

令和5年度報告書等を参考に、本報告書末尾の参考資料「IV. 1. 文献調査により収集した既往調査等」(p. 62)のとおり、平成27年(2015年)以降に実施された性的マイノリティ当事者を対象とした既往調査を分析し、「性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法」「調査の方法」「配慮事項」「調査項目」の4つの観点から、情報を整理した。

2) 性的マイノリティ当事者団体へのヒアリング調査

① 概要

関係府省庁や地方公共団体等が、令和7年度以降、性的マイノリティ当事者の状況の把握等を行おうとする場合に、その参考となるよう、性的マイノリティ当事者団体・支援団体から、留意すべき事項等について聴取した。

② 選定方法

インターネット検索等により、全国から250程度の性的マイノリティ当事者団体・支援団体の名簿を作成し、当該名簿より以下の基準を総合的に勘案し対象団体を選定した。

A) 所在地、活動地域

B) 団体の規模、活動及び取組課題等(以下aからi)

a. 相談事業を実施している団体

b. HIV/AIDSの課題に取り組む団体

- c. 性暴力に関する課題に取り組む団体
 - d. 性的マイノリティ当事者である子どもや若者に関する団体
 - e. 性的マイノリティ当事者が行う子育てを支援する団体
 - f. 性的マイノリティ当事者の子どもを持つ親を支援する団体
 - g. 性的マイノリティ当事者の社会的養護に関する団体
 - h. 高齢の性的マイノリティ当事者を支援する団体
 - i. 障害を抱える性的マイノリティ当事者を支援する団体
- c) 上記に加え、公開情報から把握した活動実績等を考慮したほか、調査対象団体全体において、各団体が代表する性的指向及びジェンダーアイデンティティの在り方に偏りがないように考慮した。

③ 調査対象一覧

上記②の選定方法により下表の16団体を選定し、ヒアリングを実施した。

(実施順)

| No | 団体名 |
|----|------------------------------|
| 1 | 特定非営利活動法人メリメロ |
| 2 | (任意団体) 性と生を考える会 |
| 3 | 一般社団法人 Broken Rainbow-japan |
| 4 | (任意団体) にじいろかぞく |
| 5 | 北海道レインボー・リソースセンターL-Port |
| 6 | (任意団体) プラウド香川 |
| 7 | 特定非営利活動法人 akta |
| 8 | 特定非営利活動法人 SHIP |
| 9 | (任意団体) ダイバーシティラウンジ富山 |
| 10 | (任意団体) きんきトランス・ミーティング |
| 11 | 一般社団法人レインボーフォスターケア |
| 12 | 一般社団法人こどもまっぷ |
| 13 | 一般社団法人ピンクドット沖縄 |
| 14 | 特定非営利活動法人レインボーコミュニティ colLabo |
| 15 | 一般社団法人ここいろhiroshima |
| 16 | (任意団体) Tokyo Deaf LGBTQ bond |

※団体名は法人格がある場合は国税庁法人番号公表サイトで該当する団体名を掲載。法人格がない団体は(任意団体)と記載。ただし、英数字は半角表記とした。

④ 調査期間

令和6年11月～令和7年1月

⑤ ヒアリング方法

オンライン会議で実施

⑥ 主な調査項目

- 団体の概要について
 - ・ 団体の活動内容・活動目的
 - ・ 活動規模(所属人数、活動地域など)
 - ・ 活動参加者の主な属性
- アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考えについて

- ・ アンケートの設問や選択肢への違和感について
- ・ 回答の心理的負担に関する経験について
- ・ 調査の趣旨説明や情報の取扱いなど留意すべきことについて
- 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について
- 団体において過去に実施した性的マイノリティ当事者を対象とした調査の実践内容
- 今後の研究等において考えられる調査項目について

⑦ 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関する意見の聴取方法

上述の「⑥主な調査項目」に挙げた「性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について」に関する意見の収集に当たっては、既往調査より性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法として選定した3つの手法³を例とし、ヒアリング対象者に示して、意見を聴取した。ヒアリング調査において用いた性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の例は本報告書末尾の参考資料「2. 性的マイノリティ当事者を対象としたヒアリング調査用資料（性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関する意見収集用資料）」(p. 103)に掲載している。

2. ヒアリング調査結果の概要

(1) 主な意見の分類

ヒアリング調査において得られた意見の主な分類を図表6「ヒアリング調査における意見の主な分類」に示した。

図表 6 ヒアリング調査における意見の主な分類

(各番号は本報告書内の見出し番号を指す。)

| 3. 配慮事項や調査の運営等に関する意見 | | |
|--|---|-------|
| (1) アンケート調査等において、回答に困る設問や性的マイノリティ当事者に関する誤った認識に基づく設問の経験について | ①性別に関する設問において選択肢が男女しかないこと | p. 23 |
| | ②性別に関する設問において性別の定義が明確ではないこと | p. 23 |
| | ③性別等の設問において、性的マイノリティ当事者への配慮が見られるものの、把握方法が適切ではないこと | p. 23 |
| | ④(ウェブ調査において)性別や性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する設問に答えないと、次の設問に進むことができないこと | p. 24 |
| | ⑤差別的に感じる表現 | p. 24 |
| (2) 心理的な負担を感じる質問内容 | ①過去の困難経験等に関する設問等についての心理的な負担 | p. 24 |
| | ②結婚・子育て・家族に関する設問に回答する抵抗感 | p. 25 |
| | ③居住地を回答することへの抵抗感 | p. 26 |
| | ④収入や学歴等、社会的な立場、経済的状況を把握する設問への抵抗感 | p. 27 |
| (3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関連した意見 | ①性の多様性に関する理解の必要性 | p. 27 |
| | ②性的マイノリティ当事者に関する誤解や用語に関する誤用等 | p. 28 |
| | ③言葉の理解や解釈が一樣ではないことの難しさ | p. 28 |
| | ④複合的困難を抱えた性的マイノリティ当事者への配慮 | p. 29 |
| (4) 調査の運営に関する意見 | 1) 調査対象に関する意見 | p. 29 |
| | 2) 調査手法に関する経験や意見 | p. 29 |
| | 3) 調査や設問の趣旨説明に関する経験や意見 | p. 30 |
| | 4) 情報の取り扱いや体制に関 | |
| | ①回答データの取り扱いの留意事項 | p. 31 |
| | ②調査結果の公表に関する説明や実際の結果公表 | p. 31 |

³ 性的指向については図表7(p. 33)、図表8(p. 34)及び図表9(p. 35)、ジェンダーアイデンティティについては図表10(P. 38)、図表11(p. 40)及び図表12(p. 41)。

| | | | |
|--|---------------------------------|--|-------|
| | する経験や意見 | ③心理的な負担を感じた場合に備えた相談窓口等の設置・照会 | p. 31 |
| | | ④調査に関する意見を表明できる仕組み | p. 32 |
| | | ⑤その他、調査に関わる説明事項 | p. 32 |
| 4. 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関する意見 | | | |
| (1) 性的指向の把握方法について | 1) 性的指向の把握方法例の評価 | ①直接的に性的指向のアイデンティティを尋ねる方法に関する意見 | p. 32 |
| | | ②二段階の設問を設ける方法に関する意見 | p. 34 |
| | | ③恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法に関する意見 | p. 34 |
| | 2) 性的指向の把握方法に関する全般的な意見 | ①性的指向として恋愛対象を把握するか、性行動を把握するか | p. 35 |
| | | ②パンセクシュアルやアロマンティックの選択肢 | p. 36 |
| | | ③トランスジェンダー、Xジェンダー等の性的指向 | p. 37 |
| | | ④性的指向の認識経緯を考慮した把握方法に関する意見 | p. 37 |
| (2) ジェンダーアイデンティティの把握方法について | 1) ジェンダーアイデンティティの把握方法例の評価 | ①3ステップ方式に関する意見 | p. 38 |
| | | ②2ステップ方式に関する意見 | p. 39 |
| | | ③当事者がどうか尋ね、認識を尋ねる方法に関する意見 | p. 40 |
| | 2) ジェンダーアイデンティティの把握方法に関する全般的な意見 | ①出生時の性別の把握に当たって留意が必要ではないかという意見 | p. 41 |
| | | ②戸籍上の性別の把握に当たって留意が必要ではないかという意見 | p. 42 |
| | | ③ジェンダーアイデンティティの把握内容について | p. 42 |
| | | ④社会的な性別の把握について | p. 42 |
| (3) 性的指向の把握方法とジェンダーアイデンティティの把握方法全般に関する意見 | | ①性的指向とジェンダーアイデンティティの設問順について | p. 42 |
| | | ②言葉の定義の記載について | p. 43 |
| | | ③自由回答について | p. 43 |
| | | ④インジケーターによる把握について | p. 43 |
| | | ⑤性的指向及びジェンダーアイデンティティの認識と回答時点について | p. 43 |
| | | ⑥集計分析方法の説明について | p. 44 |
| 5. 今後の調査において考えられる調査項目に関する意見 | | | |
| (1) 考えられる調査テーマや調査内容 | | ①性的マイノリティ当事者の規模などを把握する調査 | p. 44 |
| | | ②広く性的マイノリティ当事者の困難経験を把握する調査 | p. 44 |
| | | ③個別の調査テーマ | p. 45 |
| | | ④支援機関等を対象とした調査テーマ | p. 46 |
| (2) 考えられる調査の視点 | | ①性的マイノリティ非当事者との比較ができる調査 | p. 47 |
| | | ②性的マイノリティ当事者の多様な性の在り方を意識した調査 | p. 47 |
| | | ③特にトランスジェンダーの困難経験を把握する調査 | p. 47 |
| | | ④特に性的マイノリティ女性の困難経験を把握する調査 | p. 48 |
| | | ⑤都市と地方の差を意識した調査 | p. 48 |
| | | ⑥性的指向及びジェンダーアイデンティティを隠して生活している人の実態も捉えられる調査 | p. 48 |
| | | ⑦アイデンティティを確立していない人の実態も捉えられる調査 | p. 49 |
| | | ⑧ライフイベントを視点とした調査 | p. 49 |

(2) 主な結果の概要

1) 性的指向の把握方法について

性的指向を把握する方法について、図表 7 (p. 33) から図表 9 (p. 35) の設問例を示し、意見を聴取したところ、それぞれ改善点があるとした意見が多かった。

「異性愛者、すなわちゲイ・レズビアンではない」(図表 7 (p. 33)) のように、異性愛を基準に選択肢の文言が作成されているように読める場合があることについては不適切、不快とする団体もあった。また、性的指向がパンセクシュアル、アロマンティックなどの者は、どの調査手法においても回答が難しく、また、性的指向の多様性から選択肢を選ぶことが難しいとして「その

他」「わからない」や自由記述欄を設けることが望ましいとの意見も多かった。さらに、恋愛感情と性行動は必ずしも一致しないことから、どちらを聞いているのかが明示されないという回答が難しいとの意見も多かった。「性愛感情」の意味が分からないなど設問中の言葉の定義が不明確であり回答の際に戸惑うのではないかという意見も多かった。

2) ジェンダーアイデンティティの把握方法について

ジェンダーアイデンティティを把握する方法については、図表 10 (p. 38) から図表 12 (p. 41) の設問例について、どれが最も望ましいかについて意見の一致はなかったものの、図表 12 (p. 41) については比較的肯定的な意見が多かった。

性別を聞かれた後に現在のジェンダーアイデンティティを聞かれると、「現在」と記載されていても、時間軸の中でいつの時点のジェンダーアイデンティティなのか分かりにくいとの指摘もあった。また、性分化疾患、インターセックスの者に対し、より細やかな配慮が必要であるとの意見も多かった。さらに、性的指向及びジェンダーアイデンティティを問う際は、ジェンダーアイデンティティから聞くのが望ましいといった意見も多かった。

3) 回答に関する心理的な負担について

調査が性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性を念頭に置かずに設計されている場合や性の多様性を十分理解していないと思われる調査については回答も難しく、心理的負担も大きいという意見が多かった。

また、性的マイノリティ当事者に関する調査については、施策上の課題を把握するため、困難経験等を問う調査が多いが、過去の辛い経験を問うような設問についてはフラッシュバックを誘発する可能性があるなど心理的負担が大きいとの意見がほぼ全ての団体から示唆された。他方、調査結果が性的マイノリティの置かれた環境改善に役立つものであれば、その意図をしっかりと説明した上で協力を求めることが重要であるという意見もあった。

調査対象が限定的である場合、個人が特定されないか等アウティングに関する危惧について、ほぼ全ての団体から課題として指摘があった。集計値を公表するとしても、マイノリティであることから個人が特定されないか、集計作業に当たる者に自分と知られてしまわないかなど、大きな懸念が示された。これについては、調査票上で簡潔に調査や設問の趣旨、調査の運営方法等を明記するとともに、疑問に対する問い合わせ先や性的マイノリティ当事者を対象とした相談窓口を提示することが非常に重要であることが複数団体から示唆された。さらに、ネガティブな設問だけではなく、「よかったこと」などポジティブな設問も取り入れてはどうかという意見もあった。

4) 今後必要と考えられる調査のテーマについて

今後必要と考えられる性的マイノリティ当事者を対象とした調査のテーマとして、「孤独・孤立」「高齢化に伴う問題」「職場におけるストレス」「医療へのアクセス状況」等が挙げられた。また、性的マイノリティ当事者が直面する困難経験は既に様々な調査研究が行なわれていることから、性的マイノリティを取り巻く相談機関等の社会資源の実態について把握し、その対応状況と課題を明らかにすべきとの意見もあった。さらに、性的マイノリティ当事者を取り巻く状況については、地域差が大きいことが想定され、都市と地方の状況を比較する調査も必要であるという

意見もあった。

3. 配慮事項や調査の運営等に関する意見

(1) アンケート調査等において、回答に困る設問や性的マイノリティ当事者に関する誤った認識に基づく設問の経験について

調査対象を性的マイノリティ当事者に限らない一般的なアンケート調査も含め、回答に困る設問、性的マイノリティ当事者に関する誤った認識が疑われる設問等について意見を聴取した。性別、性的指向及びジェンダーアイデンティティを問う設問、アンケートで使われる言葉の定義等を中心に様々な意見があった。

① 性別に関する設問において選択肢が男女しかないこと

性別に関する設問について、「選択肢が男性・女性しかないことに困る」または「配慮がない」と感じたことがあるといった経験、特にジェンダーアイデンティティと出生性が一致しない場合に回答に困難が生じる設問が多いとの意見が多かった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 地方公共団体の意識調査などの一般的な調査では、男性・女性しか性別に関する選択肢が無いことが多い。【同旨2団体】
- ・ 性別適合手術を受ける前までは、性別を把握する設問を回答する際、男性と回答したいが、戸籍上の性別や生物学的な性別が女性であるため、葛藤することが度々あった。【同旨2団体】
- ・ 性別を把握する設問において、選択肢に男女しかなく回答に困ったことがある。戸籍上の性別は女性であるため、女性を選択することもあるが、Xジェンダーである自身にとって、女性を選択することは違和感がある。女性ではなく男性を選択するともならないため、男女しか選択肢がないと困る。

② 性別に関する設問において性別の定義が明確ではないこと

性別に関する設問について、その定義が明確ではないことから回答に困るという意見があった。戸籍上の性別を聞く設問については、「回答に困る」「変更後の戸籍性を回答する方が多いのではないか」といった意見が多かった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 性別情報が何に使われるか分からない限り、性自認で回答してよいのか、生物学的な性別で回答すべきなのか、判断できない。自身の気持ちとしては性自認で回答したいと思うが、それで問題ないか不安に思うことがある。【同旨2団体】
- ・ 戸籍上の性別や生物学的な性別を聞かれた場合には迷うことなく女性を選択できるが、何も説明がない場合には、何を回答すればよいか困る。【同旨2団体】

③ 性別等の設問において、性的マイノリティ当事者への配慮が見られるものの、把握方法が適切ではないこと

性別等の設問において、性的マイノリティ当事者への配慮が見られる場合でも、回答に困るものや不適切なものがあるといった意見が多くあった。具体的には以下のように、「男性・女性・「その他」」「男性・女性・「LGBT」」などに関する意見があった。なお、性的指向及びジェンダーアイ

デンティティの把握方法に関する具体的な意見は「性的指向の把握方法について」(p. 32) 及び「ジェンダーアイデンティティの把握方法について」(p. 37) で詳述する。

- ・ 性別の選択肢を、「男性・女性・その他」とするアンケートがある。雑なカテゴリーだと感じるため、「答えたくない」という選択肢のほうがよい。過去には男性・女性・LGBT という選択肢も見たことがある。【同旨2団体】
- ・ 性別欄を「男性・女性・その他」としているものは、「性別には男性・女性以外のものがあるらしい」と聞いて乱暴に「その他」を設けたという印象を受け、当事者に関して誤った認識がされていると感じる。せめて「回答しない」があると良いという人もいる。
- ・ 「答えたくない」という選択肢についても、回答したくないわけではない場合、その選択肢に当てはまらない。男女以外の選択肢を設けても、それらのラベリングに抵抗を感じ、選択できない場合もある。

④ (ウェブ調査において) 性別や性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する設問に答えないと、次の設問に進むことができないこと

上述のような性別、性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する設問において、回答に困難が生じた際もこれらの設問への回答は必須となっていることが多く、特にウェブ調査においては、何らかの回答をしない限りは次の設問に進めないような仕組みが設けられているため、非常に困るといった意見があった。また、こうした仕組みが、回答における心理的な負担を増やしているとの指摘もあった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 男女いずれかを回答しなければ先の設問に進めないアンケートもあるが、そうした回答制御は心理的負担が増す。【同旨2団体】

⑤ 差別的に感じる表現

回答者が差別的に感じる表現は避けるべきとの意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ ホモやレズといった表現は使用してはならない。特に、レズは依然として使用されることが多い。話し言葉でも注意してほしい。
- ・ 恋愛に関することや、相手がいることを前提とした質問についても、当事者が回答に困ると考えられる。恋愛感情をそもそも持っていない人や、恋愛を諦めている人も多い。多くの人が無意識のうちに異性愛を前提として話してしまうことがよくあると考えられるが、当事者は傷つく。例えば、女性に対して「彼氏」がいるかと聞くのではなく、なるべく「パートナー」の方がいるかといった表現を意識して使ってほしい。

(2) 心理的な負担を感じる質問内容

アンケート調査等において、回答に当たって心理的な負担を感じた経験や、心理的な負担を感じる調査事項とはどのようなものか聴取した。

① 過去の困難経験等に関する設問等についての心理的な負担

過去の困難経験など性的マイノリティ当事者は誰もが悩みを抱えているという前提で設問が繰り返されると、心理的な負担が大きいとの意見が多かった。他方、実態把握や施策策定のためには、性的マイノリティ当事者が経験する困難事例を把握することは重要であるため、調査の趣旨をしっかりと説明し、心理的な負担を感じた場合の連絡先、相談先等を明記することが重要であるという意見もあった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 当事者を対象としたアンケート調査やヒアリング調査は、当事者自身の経験を把握することが多いが、辛い経験を詳細に思い出させる内容は心理的負担が大きい。過去に受けた傷をもう一度自分で見つめなければならないことになる。【同旨2団体】
- ・ 性的マイノリティは困っており、社会的弱者であるという側面ばかりの内容であると心理的負担が大きくなる可能性がある。調査を通じて、当事者が虐げられていることばかり強調されてしまうと負担が大きい。【同旨2団体】
- ・ 調査で差別を受けた経験や辛かった経験について聞かれると、答える側も辛くなる事がある。そのため、そのような時は途中で調査をやめる権利があることや、調査に回答した後で辛くなった場合に相談できる連絡先の情報は明示すべきである。

一方で、心理的負担には留意が必要であるものの、こうした困難経験等を把握することが調査の目的であり、回答が今後の施策に役立つのであれば心理的な負担があっても回答したいという意見や、心理的な負担を和らげるために嬉しかった経験を把握するとよいのではないかとの意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ アンケート結果が政策等に活かされ、自身に恩恵をもたらすものであると思えるのであれば、辛い経験を回答することにも協力できる。辛い経験をしたり、様々な問題を抱え、しんどさを感じている当事者から情報を収集することは必要なことだと理解している。【同旨2団体】
- ・ 回答者の心理的負担を考慮し、ネガティブな項目が長く続かないように、複数回に分けて調査を実施することも考えられる。仮に一度しか調査が実施できず、ネガティブな項目も含め、多くのことを把握する調査をするのであれば、調査の目的をはっきりと示し、当事者が辛い人であると認識するだけで終わらせず、調査結果を基に社会を改善していくためのアンケートであると調査対象者に伝えてもらいたい。
- ・ 当団体が調査を行う際は、コミュニティへの参加や、参加して良かったこと、カミングアウト時に嬉しかった反応など、ポジティブな内容も尋ねるようにしている。

② 結婚・子育て・家族に関する設問に回答する抵抗感

結婚の状況・希望や子育ての状況・希望を尋ねる設問について、抵抗を感じるという意見や回答が難しいと感じるという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 既婚・未婚を尋ねる設問にも抵抗を感じる。【同旨4団体】
- ・ 家族構成を聴取する設問では、同性パートナーが想定されていない、あるいは想定されているかどうか分からない場合には回答しづらい。例えば、何年も同居しているパートナーを内縁関係に含むのかなどが明記されていない場合が多いため、答えにくい。

- ・ 経済的理由で男性と結婚している、40～50代のレズビアン女性も地方部には多い。そのような人々も安心して正直に答えてもらえるような表現があるとよい。
- ・ 婚姻関係については、調査の目的によっては聴取する必要があると考えられるが、結婚後に性別違和を感じている人もおり、そのような場合は戸籍を変更することができない。
- ・ 「子どもが欲しいですか」と聞かれたことがあるが、子どもが欲しくても、男女のカップルのような出産はできないため、違和感を覚えた。聞いた人には悪意が無かったかもしれないが、このようなマイクロアグレッションで困ったことがある。
- ・ 子どもの有無について把握する場合は、同性カップルやトランスジェンダーの方で子どもがいる場合もあるため、調査の目的によっては考慮する必要があるだろう。
- ・ 回答に困る設問としては、将来的なライフプランを聴取するものが挙げられる。性的マイノリティ当事者にとっては、自分も結婚を考えてよいのかという発想であるため、いきなり将来のライフプランについて聞かれると困惑するだろう。たとえ、結婚や子育てなどの願望が心の奥底にあったとしても、そもそも諦めている人もいる。相談窓口があることすら十分に周知されていないため、将来どのようなことをしたいかを突然聞かれると、「自分が間違っているのだ」というマイナスな感情からスタートしてしまう。

③ 居住地を回答することへの抵抗感

人口が少ない地域等を対象とした調査や居住地に関する設問については、回答者が特定されてしまうことへの恐れから、細かく尋ねられることに抵抗を感じるという意見が多かった。個人が特定されない集計値を公表するとされているものの、母数が少ない地域のアンケートでは、個人が特定されないか、アウトティングへの恐怖感を抱くことがあるといった意見もあった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 調査によっては、個人が特定される形で公開しないと言われるが、回答者が分かってしまう可能性もある。地方公共団体の調査では、性の在り様と比べて、居住地域についてはあっさり尋ねているが、回答者にとっては気になるポイントである。【同旨2団体】
- ・ 地方在住者の場合、地域のことを細かく把握されるような内容があると、自身が特定されてしまうことを恐れて回答しにくいことがある。【同旨2団体】

これらの不安に対しては、個人を特定することはない旨の記載や居住地を把握する理由等の説明があるとよいとの意見があった。また、居住地に関する情報は調査の後半で把握したほうがよいとの意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 調査結果の公表時は、個人が特定されないようにするという旨の説明があるとよい。【同旨2団体】
- ・ 調査の最初の設問で居住地を選ばなければいけないことのハードルが高い。この情報が重要であるという説明が一言あれば、答える勇気が出るだろう。
- ・ 市区町村レベルで回答が集計され公開されてしまうと、回答したLGBTQ+が特定されることは十分に起こりえる。どの属性情報まで公開するのか明示していれば、回答者もイメージしやすくなるだろう。
- ・ 居住地に関する質問は、調査の最後に配置した方がよい。個人が特定されそうな情報を最初に聞いてしまうと、それ以降の質問にも答えづらくなってしまう。

④ 収入や学歴等、社会的な立場、経済的状況を把握する設問への抵抗感

収入や学歴等、社会的な立場、経済的状況を把握する設問について、回答者としては把握されている理由が分からず抵抗を感じるという意見があった。また、機微な情報であることから、団体が行う調査においては社会経済的状況を把握することをやめているという例があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 収入、学歴、就労形態などの社会経済的指標の回答に抵抗があると聞いたことがある。公衆衛生学の量的調査を実施する上では必ず必要な項目だが、回答者は何のために聞いているのかわからない、公的機関の調査にもかかわらず、なぜ収入を把握するのかと感じている。
- ・ 当団体で調査を実施した時に、心理的負担に配慮し、経済的な状況に関する質問はしないことにした。どのような経済状況で子どもを育てているかは重要な情報だが、デリケートな問題であり、回答することへの抵抗感もあると考え、当団体の調査では把握しないこととしている。

(3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関連した意見

① 性の多様性に関する理解の必要性

性的指向及びジェンダーアイデンティティだけでなく、性の在り方は多様であることを念頭に置いてもらいたいという意見があった。また、性的指向及びジェンダーアイデンティティの在り方など性の多様性を一意に決めることができないという回答者がいる中で、調査を通じて性の在り方を一意に決めることは暴力的でもあることを認識した上で調査を実施してもらいたいとの意見もあった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ LGBTという言葉は認知されてきたが、トランス女性やゲイ男性がイメージされやすく、一部の属性のみを念頭に置いて話されることがあると感じる。
- ・ 異性愛者か同性愛者を把握する質問を通じて、自身が同性愛者であることを再認識することがあり、特に自身のアイデンティティに対して葛藤を抱えている人にとっては回答負担が大きいと考えられる。一方で、その葛藤はアイデンティティが揺れ動く中で生じるものであり、自身のアイデンティティに対して葛藤を抱えている人もいつかは乗り越えなければならないことであるだろう。
- ・ アイデンティティや性自認については、1つに特定できない人もいる。また、ライフコースの中で性自認が変わる方もいる。特定の時点で、今どうなのかということであれば答えられるが、アンケート調査の回答で認識のゆれは表しにくい。トランスジェンダーに限らず、性的指向に関しても、インタビュー調査で話を聞くと、パンセクシュアルなど、いろいろな言葉を使って説明する方が多くいる。
- ・ カテゴリーされたくない考える当事者は多い。カテゴリーしないとなると、そもそもアンケート調査自体が困難になるが、カテゴリーが暴力的になる場合もあるということには留意が必要である。
- ・ アイデンティティを聞く際、大多数の人はいずれかの選択肢に当てはまり回答できるが、当てはまる選択肢がない人もいる。調査結果に基づいて施策が検討されるという場合に、そういった人の意見が反映されづらくなる懸念がある。カテゴリー化は、暴力的な行為であるという面がある。
- ・ 本心ではなくても、調査の仕組み上、何かしら選択しないといけない。例えば、バイセクシュアルで恋愛と性行為の相手が異なる方がいる。恋愛対象は男性だが、性行為は男女両方という人もいるが、アン

ケート調査などではこれを正確に回答することは難しい(バイセクシュアルと回答すると恋愛対象も性行為も両性が想定されてしまう)。

② 性的マイノリティ当事者に関する誤解や用語に関する誤用等

性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する認識の誤りや、性的マイノリティ当事者の実態に関する誤った認識に基づく表現があるという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ トランスジェンダーについて、「心の性別」と書かれることがある。一般向けの調査で分かりやすいため、そのように書いているのだと思うが、すでにトランスして生活している人は、自身に当てはまる選択肢が分からないだろう。また、心の性別という表記自体に嫌悪感を持つ人もいるかもしれない。
- ・ 出生時に医療的に割り当てられた性を「戸籍の性」と表すケースがあるが、誤りである。戸籍を変えた人、戸籍を持っていない人もいるが、戸籍を持っていない人には性がないということなのか。国境を越えても性の在り様は変わらない。定義付けをするにも、性の在り様を日本国内だけで語ることはできない。
- ・ 出生時の性と自認する性が違う方だと、一致することが前提のような文章はよくないと思う。
- ・ パートナーがいなかったら同性愛者ではないという誤った認識があるケースがある。また、結婚している人が、同性愛者であることもある。同性愛者でも、友情結婚など、自身で選択して結婚している場合もある。
- ・ 妊活や出産に当たって産婦人科に通っていたとき、「パートナーの男性がいる」という前提の質問が多く、ストレスを感じた。性行為の有無を聞かれるなど、質問の目的は何なのかと思うことがあった。
- ・ 「同性パートナーとともに子どもを育てている」というと、自動的に「同性愛者である(レズビアンやゲイ)」と決めつけられることがあるが、必ずしもそうではないため気を付けてほしい(「性自認はバイセクシュアルやパンセクシュアル、あるいはヘテロセクシュアルだが、たまたまパートナーとなったのが同性である」と考えている人もいる)。
- ・ 企業や大学生が実施しているアンケートで、ジェンダーアイデンティティにおけるマイノリティを「ジェンダーの人」と記載するような選択肢があった。
- ・ 性的マイノリティ、少数者、少数派という表現に抵抗を感じる方もおり、性的マイノリティという言葉が記載されていることで回答しにくい方もいる。フラットな表現としてLGBTQ+を使用することが考えられる。

③ 言葉の理解や解釈が一様ではないことの難しさ

性的指向及びジェンダーアイデンティティに関する言葉や性の在り方に関する表現について、その理解や解釈が一様ではないことから、調査実施主体が用いている言葉の定義と回答者が理解する言葉の意味内容が必ずしも一致するわけではないという点が指摘された。具体的には以下のような意見があった。

- ・ L、G、B、T以外のカテゴリーについては、当事者であると自認している場合であっても人によって用語の使い方や認識に幅がある。そのため、例えば「アセクシュアル」とはこのような人を指すといった形で、用語の意味が分かるように、最初に定義を提示しておくことよい。

- ・ 同性愛は、以前は same sex と言われていたが、いつしか same gender と呼ばれるようになっている。
- ・ インターネットを通じて、トランスジェンダーという言葉は大きく広がったが、人それぞれで言葉の理解度、使われ方が大きく異なり、当事者間でも様々である。

④ 複合的困難を抱えた性的マイノリティ当事者への配慮

調査の実施に当たっては、障害を持つ者、外国にルーツを持つ者、日本語でのアンケートの回答が難しい者、ウェブ調査の場合はインターネットへのアクセスが難しい者がいる可能性を考慮した上で調査が実施されるとよいとの意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ (聴覚障害者(ろう者)の回答) アンケート調査では、質問項目が多いと負担が大きい。日本手話を主に使っているろう者の中には、日本語の文章の読み書きが不得意な人もいる。ヒアリング調査で、手話通訳者も同席している場合には負担は軽い。
- ・ 記載内容を多言語化したり、日本語でも分かりやすい記述にするなどの配慮があるとよい。
- ・ 全ての人必ずしもアンケートの文章を読めたり理解したりできるわけではないため、アンケートを正確に回答できない人に対しての配慮が必要である。発達障害をもつ、あるいはその傾向がある当事者もおり、貧困層であることも多い。アンケートの文章にはふりがなを多くつけ、簡単な言葉で説明すべきである。
- ・ インターネットで情報をうまく得ることができない当事者が一定数おり、他の当事者がどのように生活しているかわからず、一人で悩みを抱え込んで生活していることがある。インターネットを活用して調査を行ったとしても、そうした当事者には情報が届かない。インターネットを活用することが苦手な人の声をどのように拾い上げていくのか検討する必要がある。
- ・ 当事者の中には、当事者団体のイベントに参加したくとも、数百円の交通費が高く、参加をためらう人がいる。調査をする際には、少額であっても謝礼をした方がよい。経済的に貧困な状況に置かれている人は、調査実施者の想像よりも厳しい状況に置かれていることがある。

(4) 調査の運営に関する意見

1) 調査対象に関する意見

こどもを調査対象とする際に留意が必要だという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ LGBTQ+に関する知識に触れていないこどもや、一人で悩んでいるこどもにとっては、こうした調査自体に不安を覚える可能性があるため留意が必要である。

2) 調査手法に関する経験や意見

ウェブ回答ができる調査がよいという意見や質的調査も実施するのがよいという意見、質的調査の場合は対面で実施することで調査対象者の様子に応じた対応がしやすいのではないかといい意見があった。また、過度な配慮はかえって不適切になり得るという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ ネット上の調査であれば、誰にも見られず、いつでも回答できるため、心理的・身体的負担は少ない。

- ・ 当事者の困難な実態を把握する場合、アンケート調査だけでなくヒアリング調査も実施し、性的マイノリティ当事者と直接話した方がよい。ただ、調査協力者を集めるのは非常に難しいため、性的マイノリティ当事者とつながりたいのであれば、国から直接アプローチするのではなく、関連団体を通して紹介してもらうのがよいだろう。
- ・ 性的マイノリティは一枚岩でなく、気が付かない部分に苦しみを抱えている方がいる。思い込みで傷つけてしまうなど、失敗することはあると思う。以前、当団体の交流会の中で、投げかけられる言葉などに違和感があったときはテーブル上の黄色フラッグや赤色フラッグを挙げてもらう、という試みをしたことがある。不快な思いをしたときに言葉では嫌と言えないこともあるため、意思表示しやすくするような工夫である。
- ・ 学生からインタビューされるときに、セクシュアリティなどについて根掘り葉掘り聞かれることがあり、自分ばかり自己開示していることに違和感を覚えることがある。インタビューする側からも自己開示があったほうが、LGBT当事者のリアルな意見や実体験を引き出すことができるのではないかと。
- ・ 対面で話を聞く場合で、相手がトランスジェンダーである場合は、その方の過去の性別や過去の名前を不意に出してしまう瞬間がある。これはモラルやマナーの観点では問題があるものの、悪いことをしているわけではないため、非常に申し訳なさそうに謝罪すると、かえって負担になってしまう。

3) 調査や設問の趣旨説明に関する経験や意見

アウトティングのリスクに加え、近年、性的マイノリティ当事者を対象とする多数の調査を依頼されることから回答者の負担が大きくなっている。調査に協力することにより、性的マイノリティ当事者を取り巻く環境にどのような改善が図れるのか、調査の目的及び趣旨、調査結果の取扱方法について、十分に説明することが必要であるとの意見が多かった。また、個別の設問においてその趣旨や必要性が説明されていると回答しやすいという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 社会に貢献したいために調査に協力してくれるセクシュアルマイノリティも多く、調査がどのように社会に還元されるのか、何の施策や対策に活かされるのかなど、調査趣旨をしっかりと説明してほしいと指摘される。調査結果がすぐに施策や対策につながらなくとも、研究成果を社会に還元することは研究者にとっても重要なことである。この調査が何の役に立つのか、端的に示すことが必要である。
- ・ 回答内容が何に活用されるかはっきり分からなければ、回答しづらい。例えば、セクシュアリティに関して、どのようなことを明らかにしようとしているか説明がないまま尋ねられると、アウトティングとまでは言わないが、情報だけ取られているように感じられ、快くはない。
- ・ 「誰もが心地よく回答できるアンケート」というものはそもそも作成不能なのかもしれない。それでも、調査に明確な目的があり、趣旨を伝える努力をすることで、率直な回答をしてもらえる可能性を上げられるのではないかと。
- ・ 調査内容について、個人的なことを深く聞くものではないと分かると、それも安心材料になる。性的マイノリティ当事者としての経験を聞きたいと漠然と依頼されると、何を聞きたいのかが分からないため、安心できない。趣旨の詳細が分かっていると、安心して回答することができる。
- ・ 調査結果の活用方法が分からないと、何のための設問なのか疑問に感じる。回答することで、自分たちの困難が解消しそうと感じられるよう、希望が持てるような聞き方をすれば、心理的負担も少なくなるだろう。

- ・ トランス男性として、戸籍上の性別について答える必要があれば答えるが、なぜ問われているか分からなければ答えない。設問の必要性を端的に説明しているかどうかのポイントとなる。

4) 情報の取り扱いや体制に関する経験や意見

① 回答データの取り扱いの留意事項

プライバシーの保護に関する意見のほか、回答内容を閲覧する人や集計作業者に関する説明があるとよいとの意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 調査趣旨において、調査目的の説明もなく、設問が次々と進んでいくようなアンケート調査は、自身の回答がどのように使われてしまうのか不安を感じる。最低限、調査目的とプライバシー保護等に関する注意事項の2点が記載されているべきである。それらは分けて記載されていると読みやすい。
- ・ アンケートやヒアリングで収集した情報は、その後、誰が確認するのか詳細に記載されている方が安心感は高まるだろう。
- ・ 知り合いに回答を見られることがないように、分析は地方公共団体が行うのではなく、外部の調査会社等に委託されているほうが不安を感じにくい。
- ・ 知人からアンケート回答を依頼された場合など、調査実施者が回答内容を見てしまうことを想像してしまい、正直に回答できないことがある。仮に回答を見ないと伝えられても気になってしまい、知人に回答を知られたくないと強く思うため、ウェブ上でアンケートに回答できる方が安心できる。
- ・ 回収した調査票の保管方法や、いつ破棄するかといったことについても、一文加えた方がよいのではないか。

② 調査結果の公表に関する説明や実際の結果公表

回答者に調査結果の公表方法が明示されるべきという意見や、自由回答の回答内容の公表の可否についても確認が必要などの意見があった。また、公表の際には分かりやすい方法で公表してもらいたいとの意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 調査結果の公表方法を明示し、調査に協力した方にどのように結果が還元されるのか示す必要がある。
- ・ 地方公共団体が実施する調査は、ホームページの分かりにくい場所に調査結果が掲載されていることが多く、一部の研究者しか調査結果を知らないということがよくある。調査を実施するだけでなく、調査結果を市民に伝えていくということ、特に回答したセクシュアルマイノリティに調査結果を還元していくことが重要である。
- ・ ヒアリング調査においても、聞いた内容の扱いが分かるよう、結果を取りまとめたものを一度見せてもらえると、情報が適切に扱われていると目に見えて分かりやすく、調査にも答えやすくなる。

③ 心理的な負担を感じた場合に備えた相談窓口等の設置・照会

調査への回答に当たって心理的な負担を感じた場合の備えとして、相談機関やヘルプラインを調査資料に掲載したり、調査画面上に表示したりするのがよいのではないかという意見が多かった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ いじめ等も含む過去に受けた被害を詳細に把握する調査は、回答者がフラッシュバックを起こしたり、嫌な気持ちになってしまう。回答を途中で止めてもよいことを示したり、回答の途中で辛くなった場合に相談できる場所を示すなど、バックアップ体制を整えておくことが必要である。
- ・ アンケート回答中に辛くなった場合に備え、支援につながる連絡先や相談支援施設の情報一覧などをアンケートと合わせて伝えられるとよい。コミュニティセンターなどで回答してもらえる場合、コミュニティセンターのスタッフが回答者のフォローをすることも考えられる。回答者が辛い現実と向き合う際、言いたいと思ったことを言うことができる場所を持っているかどうかで状況は異なる。
- ・ 心理的負担を軽減する方法として、回答者が困ったら相談できるヘルプラインを表示することが考えられる。アンケートの形式・媒体にもよるが、サポート的な方法を考えることで、対応できるのではないか。

④ 調査に関する意見を表明できる仕組み

調査事務局の窓口など、調査に対する意見を表明できる仕組みがあると、調査に対して何か意見をしたいことがある回答者に対して配慮を示すことができるのではないかという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 調査に対しての意見を伝えられる連絡先を用意することも考えられる。何か言いたいと思った回答者への配慮として、そういった情報を付記するだけでも大きく異なる。

⑤ その他、調査に関わる説明事項

調査に関わる説明事項として、調査実施主体を明示することや、回答しないことによって不利益が生じないことを説明することが必要であるという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 地方公共団体で実施している SOGI 関連の取組の認知度を尋ねる設問があると、地方公共団体の取組を知ることができ、それなら回答しよう、とポジティブな気持ちになる。
- ・ 性的マイノリティ当事者は、回答しないと不利益があるかもしれないと考え、質問者に迎合した答えをしてしまう可能性がある。非回答に対する不利益はないことを明言した方がよいと思う。
- ・ 調査の回答を後から使わないでほしいと思った時に、それを伝えられるよう連絡先を示すべきである。

4. 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関する意見

(1) 性的指向の把握方法について

1) 性的指向の把握方法例の評価

性的指向の把握方法に関する意見収集のため、ヒアリング対象者に「直接的に尋ねる方法」「二段階の設問を設ける方法」「恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」の3つの把握方法⁴を提示の上、各把握方法に対する評価や改善点などの意見を聴取した。

① 直接的に性的指向のアイデンティティを尋ねる方法に関する意見

⁴ 図表7(p.33)、図表8(p.34)及び図表9(p.35)。

性的指向について図表7の「異性愛者・ゲイ・レズビアン・バイセクシュアル・両性愛者・アセクシュアル・無性愛者」とした言葉を使い「直接的に尋ねる方法」について意見を聴取したところ、シンプルで答えやすいという意見、選択肢の補足があることがよいという意見、アセクシュアルの選択肢があることを評価する意見、「決めたくない・決めていない」や「質問の意味が分からない」という選択肢があることで多くの人が回答できるという意見、性的指向別の大まかな回答傾向を把握する上では選択肢として十分であるなど多様な意見があった。一方、設問中の「近いと思うもの」という言葉が曖昧であるという意見、最初の選択肢に「ゲイ・レズビアン等ではない」と「～ではない」という表現に抵抗を感じるという意見、選択肢文言が長いという意見、直接的に性的指向を尋ねられても回答が難しい場合があるという意見、自分のアイデンティティがはっきり特定できない場合には1つを選択することが難しい可能性があるという意見があった。

図表 7 性的指向の把握方法の例 A. 直接的に尋ねる方法

次の中で、あなたにもっとも近いと思うものに○をつけてください。(○は1つ)

- 1 異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない[異性のみに性愛感情を抱く人]
- 2 ゲイ・レズビアン・同性愛者[同性のみに性愛感情を抱く人]
- 3 バイセクシュアル・両性愛者[男女どちらにも性愛感情を抱く人]
- 4 アセクシュアル・無性愛者[誰に対しても性愛感情を抱かない人]
- 5 決めたくない・決めていない
- 6 質問の意味がわからない

(出所) 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和
(2023) 「家族と性と多様性にかんする全国アンケート結果概要」より作成

「異性愛者・ゲイ・レズビアン・バイセクシュアル・両性愛者・アセクシュアル・無性愛者」の補足説明で「性愛感情」という用語を使っていることについては、どのような感情を示しているのか分かりにくいという意見が多かった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 「性愛感情」は聞きなれない言葉であり、混乱する人もいるかもしれない。
- ・ 「性愛感情」は市民にとってあまり聞いたことが無い言葉ではないか。「性的関心」あるいは「恋愛感情」という書き方をし、前者であれば「性的関心を同性に抱く」とするほうが理解できるだろう。(ただし、「A. 直接的に尋ねる方法」で用いられている「性愛感情」の定義は分からないが、設問の趣旨は分かるため、当てはまると思うものを選ぶだろう。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」の「性愛感情を抱く」という表現が抽象的なので、恋愛感情を指すのか、性行為を指すのか、交際経験か、何をもって選択すればよいのか、専門家でも定義がぶれていると思うが、今回の調査をする上での定義は統一された方がよい。

また、選択肢として「ゲイ・レズビアン・同性愛者」などと言葉が併記されている点について違和感があるという意見もあった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 「ゲイ・レズビアン・同性愛者」となっているが、ゲイ、レズビアンに対する日本語訳のような書き方で同性愛者という言葉が併記するのは違和感がある。【同旨2団体】

具体的な改善点として、選択肢に「その他」や「わからない」を設けることや自由回答欄の追記が提案された。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 回答必須の項目として位置付けられると考えられるが、何かを選択しなければ先の質問に進めないことになるため、「その他」を選択肢に設け、選択が難しい人も何かを選択できるようにした方が望ましい。
- ・ 「決めたくない・決めていない」という選択肢以外にも、「わからない」があってもよい（「質問の意味がわからない」ではない）。自身のアイデンティティがわからないのと同様、性的指向についてもわからない場合もある。
- ・ 自由記述欄が加われればさらによい。アンケート設計者の意図に反するかもしれないが、ゲイで無性愛者と回答したい人もいるため、「その他」と自由記述欄があれば、そうした回答も可能である。「その他」と自由記述欄を設けることは、回答したい選択肢がないと感じる回答者への配慮として望ましい。ただし、集計上分類する際、ゲイで無性愛者という回答は、無性愛者に振り分けられるか、「その他」のまま集計されることになるだろう。

② 二段階の設問を設ける方法に関する意見

性的指向について異性愛者か否かを確認し、否と答えた者に「同性愛者・ゲイ・レズビアン・両性愛者・バイセクシュアル」等かを確認する図表8の「二段階の設問を設ける方法」については、異性愛者かどうかを確認していることから性的マイノリティ非当事者にとっては分かりやすいまたは回答しやすいのではないかという意見や、恋愛感情と性的な惹かれが併記されている点がよいという意見、「考えたことがない」と回答する割合が集計される点が興味深いという意見があった。一方、異性愛者という言葉が一般的ではなく、言葉を知らない人は回答しにくいのではないかという意見や異性愛を前提としているように読める点に抵抗があるとした意見があった。

図表 8 性的指向の把握方法の例 B. 二段階の設問を設ける方法

| | | |
|--|-----------------|--------------|
| ①あなたはご自身を、異性愛者（異性だけに恋愛感情を抱いたり、性的に惹かれたりする人）だと思えますか。（○は1つ） | | |
| 1 はい | 2 考えたことがない | 3 <u>いいえ</u> |
| ↓ | | |
| 【①で「3 いいえ」と答えた方におたずねします。】 | | |
| ②あなたご自身の認識にもっとも近いものに○をつけてください。 | | |
| 1 同性愛・ゲイ・レズビアン | 4 決めたくない・決めていない | |
| 2 両性愛・バイセクシュアル | 5 その他 | |
| 3 わからない | () | |

（出所）釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也（2015）「性的マイノリティについての意識 2015年全国調査」より作成

③ 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法に関する意見

性的指向について、恋愛対象となる性別を聞く図表9の「恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」については、「直接的に尋ねる方法」や「二段階の設問を設ける方法」で用いられているような「ゲイ」「レズビアン」「トランスジェンダー」などといった言葉は性的マイノリティ当事者であっても理解されていない可能性があるため、最もふさわしいとした意見があった。また、性的指向を一意に決めることができない場合を想定した際も「恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」のほうが回答しやすいのではないかという意見もあった。選択肢の文言については、平易で分かりやすいという意見もあった一方で、「異性が好き」「同性が好き」という選択肢の「好き」という言葉の定義が不明であるという意見もあった。

図表 9 性的指向の把握方法の例 C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法

| あなたの恋愛の対象となる性別について、あてはまるものをお答えください。(〇は1つだけ) | |
|---|-------------|
| 1 異性が好き | 2 同性が好き |
| 3 両性(男性・女性ともに)が好き | 4 好きになる性はない |
| 5 決めていない、決めたくない | |
| 6 その他(わからない・回答しない等) | |

(出所) 新潟県(2023)「性の多様性等に係る県民意識調査 報告書」より作成

2) 性的指向の把握方法に関する全般的な意見

① 性的指向として恋愛対象を把握するか、性行動を把握するか

性的指向の把握方法に関する意見として、性的指向を把握しようとする設問が、恋愛対象を尋ねているのかあるいは性行動を尋ねているのかが分かりにくいという意見が多かった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 恋愛感情と性行動は一致していないこともある。何を聞きたいか明確でないと答えにくい。例えば、性感染症の調査であれば性行動について聞く意義が分かるが、一般的な調査では性行動について回答しにくいだろう。
- ・ ゲイの方の中には、恋愛の対象は男性であるが、生活上は女性のパートナーがおり、夫婦としての性交渉もするという場合もある。**【同旨2団体】**
- ・ 性的マイノリティ当事者の中でも、性愛と恋愛感情を分けて考えている人はあまり多くないかもしれない。恋愛対象については答えやすいが、性的な欲求の対象を聞かれると答えにくいとの声もあるため、恋愛と性愛を分けて調査する場合は聞き方が難しいだろう。いずれにしても、質問をしている理由が丁寧に説明されていなければ、答えにくいのではないかと。

性行動を尋ねるかどうかという点に関連して、いわゆるMSM(男性間性交渉者。Men who have Sex with MenまたはMales who have Sex with Malesの略)のように、同性と性行為をするものの、恋愛対象が同性とは限らないような人の性的指向をどのように考えるかという論点も提示された。具体的には以下のような意見があった。

- ・ MSMの方でも、選択肢2「ゲイ・レズビアン・同性愛者」を選ばない人も必ずいる。「性愛感情」という言葉を用いて各選択肢が具体的に説明されているが、「性愛感情」は欲情も恋愛感情も両方含まれるため、MSMの中には選択できない人がいるだろう。どの程度の回答の割合になるか不明だが、ゲイ、バイセクシュアルのアイデンティティを持っていないが、男性との性行動がある人は選択肢1、2、3、5の何を選択するか分からない。
- ・ MSMは性的指向や性行動に関してマイノリティ性を有するため、セクシュアルマイノリティに含むものと考えられる。国や地方公共団体が実施するような大規模な調査において、性行動が調査項目から抜け落ちていることを気にしている。調査項目に性行動を含めるべきというわけではないが、性行動がマイノリティ性から外れてしまっていることに懸念を抱いている。

一方で、恋愛対象か性行動かについては多様な在り方があり得るため、性的指向をアイデンティティで把握する（自身が認めている性的指向を把握する）ことがよいのではないかという意見もあった。また、恋愛対象か性行動かの議論について正解があるわけではなく、調査の目的に応じて検討されることが必要ではないかとした意見もあった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 調査目的や対象者によって、恋愛感情と性行動の両方について聞くか、「A.直接的に尋ねる方法」の方法をとるか、正解はない。「A.直接的に尋ねる方法」の方法で直接的に尋ね、追加で詳細を聞くことも考えられるだろう。
- ・ 選択肢や設問を増やしたり減らしたりする余地があるのであれば、聞きたい内容によって、暮らしぶりや性生活の話に分けて把握することができるだろう。異性と暮らしていても、性的指向は同性愛であるという方も多いため、どのようなデータを取りたいか、調査目的によって設問を検討する方がよい。
- ・ 性行動や保健に関する調査であれば、恋愛感情を持たないが同性との性行為をする人も把握するために、性行為まで含める必要がある。一方で、生活全般に関する調査であれば、そこまで切り分けて聴取する必要はないだろう。

② パンセクシュアルやアロマンティックの選択肢

ヒアリング対象者に提示した「直接的に尋ねる方法」「二段階の設問を設ける方法」「恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」の3つの把握方法のいずれにおいても、パンセクシュアルの選択肢がないことに対する意見があった。また、「直接的に尋ねる方法」「二段階の設問を設ける方法」において、アロマンティックを捉える選択肢がないことを指摘する意見もあった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 「A.直接的に尋ねる方法」、「B.二段階の設問を設ける方法」、「C.恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」のどれについてもバイセクシュアルの選択肢があるのみで、パンセクシュアル（好きになる相手の性別は関係ない）の選択肢がなく、パンセクシュアルの方は回答に迷うかもしれない。
- ・ アセクシュアルは性行為に全く興味がない方であるのに対して、アロマンティックは恋愛に全く興味がない方を指し、この二つも区別できる。「C.恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」の聞き方で

あっても、恋愛対象を尋ねることと性行為の対象を尋ねることの違いを認識したうえで設問設計したか否かによって、この尋ね方への評価は異なるだろう。

- ・ 自分に当てはまる選択肢がないことが、一番違和感や心理的負担があり、回答にも困る。アセクシュアルやアロマンティックの方の存在が前提にされていない調査も多い。

③ トランスジェンダー、Xジェンダー等の性的指向

自身のジェンダーアイデンティティの捉え方次第で、性的指向の回答が同性になることも、異性になることもあるとの意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ トランスジェンダーの場合、自身の性自認の捉え方次第で、恋愛対象が同性か異性か判断しにくいことがあるため、恋愛対象が同性か異性かの聞き方では回答しにくい。
- ・ 例えば出生時の性別が男性で、自身が同性愛者であると認識し、そのことを通じて自身がトランスジェンダー女性であると認識した人の場合、女性本人から男性へと性的指向が向いているが、当初の認識に基づいて同性愛者と回答することがあり得る。一方で、同様の状況でも、現在は同性愛者ではなく、曖昧ではっきりとしないと考える人もおり、そうした場合への配慮としても「その他」が選択肢としてあるとよい。
- ・ Xジェンダーである自身は、性自認を男性／女性で捉えておらず、真ん中に位置するような中性で捉えている。一方で、好意を抱く相手は女性であるが、Xジェンダーであるため、異性愛／同性愛のどちらにも当てはまらない。男性も女性も異性だと考えることはできなくはないため、異性愛と回答することもできるが、自身の感覚では異性愛ではなく、「女性愛者」「男性愛者」という言い方があるように、性自認に結び付けない呼び方の方がしっくりくる。
- ・ 性自認が男性／女性のどちらかであれば、性的指向は「異性（愛）」「同性（愛）」の言葉で表現できるだろうが、性自認が流動的な場合や中性や無性の場合、性的指向の回答のあり方は多様であることが考えられる。自身は女性愛という表現がよく当てはまるが、それも人によって認識は異なるだろう。

④ 性的指向の認識経緯を考慮した把握方法に関する意見

同性愛者や両性愛者など、性的指向が異性ではない者は、「ゲイ」「レズビアン」「バイセクシュアル」「トランスジェンダー」などの言葉ありきで自身の性的指向を自覚するわけではないことから、そうした言葉を前提としない把握方法も検討されるとよいという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 当事者は、ゲイ・レズビアン・バイセクシュアル・トランスジェンダーといった名称で、自分自身のことを認識しているのではなく、ヘテロセクシュアル・シスジェンダーとの相対的な違いで、自分はゲイである、トランスジェンダーであるなどと認識するに至る。男性との交際経験が複数あり、今は特定の男性とカップルとして暮らしているという男性でも、自分自身をゲイと言うことに抵抗感を持つ人もいる。そのため、アンケートで、「あなたはゲイですか」という質問がいきなりあると、反発心を感じる人もいるかもしれない。それよりは、ヘテロセクシュアルを例に、それに当てはまるかどうかという聞き方がよいのではないか。

(2) ジェンダーアイデンティティの把握方法について

1) ジェンダーアイデンティティの把握方法例の評価

性的及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関し図表 10「3ステップ方式（3段階の設問を設ける方法）」、図表 11「2ステップ方式（2段階の設問を設ける方法）」(p. 40)、図表 12「性的マイノリティ当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」(p. 41)を提示して、それぞれ評価や改善点などの意見を聴取した。

① 3ステップ方式に関する意見

1 設問目で出生時の戸籍・出生届の性別を聞き、2 設問目で現在のジェンダーアイデンティティとの合致状況を聞いた上で、別のジェンダーアイデンティティを持つ者及び違和感を持つ者に対して、3 設問目で具体的なジェンダーアイデンティティを聞く図表 10「3ステップ方式」については、性別について出生時の戸籍・出生届の性別という定義がされている点がよいという意見、設問の作りが丁寧で機微に実態を把握しようとしていることが分かり答えようと思えるという意見、自由回答欄が用意されているのがよいという意見、分析に十分な選択肢構成になっているという意見などが多かった。一方で、「3ステップ方式」を評価しつつも、今の性別の認識と出生時の性別の不一致の状況について人によってはあまり不一致の度合いが強くなくても「違和感がある」などと回答する可能性があるのではないかという意見や「今の認識にもっとも近い性別」を1つに決めることが難しい場合があるのではないかという意見もあった。こうしたことから、研究の蓄積を踏まえた把握方法であることをアンケート内で説明してはどうかとの意見があった

また、「今の認識にもっとも近い性別」を尋ねている選択肢について、「男」と「男性」、「女」と「女性」が混在している点が気にかかるとした意見や「今の認識にもっとも近い性別」を尋ねている設問・選択肢について上の2つの設問と同様の見た目になるようなレイアウトのほうが分かりやすいという意見があった。

図表 10 ジェンダーアイデンティティの把握方法の例 A. 3ステップ方式

| | | |
|---|-----|----------------------|
| ①あなたの性別に○をつけてください。[出生時の戸籍・出生届の性別] (○は1つ) | | |
| 1 男 | 2 女 | |
| ※「出生時」とは、生まれたときにもっとも近い時点のことをさします。 | | |
| ②あなたは今のご自分の性別を、出生時の性別（①で○をつけたもの）と同じだととらえていますか。左側で2や3に○をした方は、今の認識をお答えください。 | | |
| (○はいくつでも) | | |
| 1 出生時の性別と同じ | | 今の認識にもっとも近い性別 (○は1つ) |
| 2 別の性別だととらえている | 1 男 | 3 男性・女性にあてはまらない |
| 3 違和感がある | 2 女 | (具体的に:) |

(出所) 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和 (2023) 「家族と性と多様性にかんする全国アンケート結果概要」より作成

「3ステップ方式」の具体的な改善点として、「回答しない」など何らかの性別やジェンダーアイデンティティを回答しなくてもよい選択肢を設けることや、「今の認識にもっとも近い性別」の

選択肢「3男性・女性にあてはまらない」について、男性・女性の間や両方に当てはまるという人も含むことが示されているとよいという意見、選択肢4として自由回答欄があるとよいという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 強い違和感を抱きながら割り当てられた性別で生きている人が答えたくない場合のために、「答えたくない」や「無回答」が用意されているとよい。
- ・ 「A. 3ステップ方式」の間①には選択肢が「1 男」と「2 女」しかないが、他に「回答しない」があってもよい。ただし、「回答しない」を選択する人はアンケート自体に協力しないことも考えられる。
- ・ 「A. 3ステップ方式」の3ステップ目について、男性・女性の両方という人が回答できないため、3を「男性・女性にあてはまらない」に限らないほうがよい。男性・女性の間や両方の人も含むという補足があるとよい。
- ・ 「(今の認識にもっとも近い性別)」の選択肢の) 4として自由記述欄が用意されているとよいのではないか。
- ・ 点線で囲まれている「今の認識にもっとも近い性別」の質問が、問い詰めるような聞き方に感じられる。

また、「3ステップ方式」は3つの設問を用いて性別及びジェンダーアイデンティティを把握するものであるが、1つ目の設問で出生時の戸籍・出生届の性別を回答した後、2つ目の設問の文章が1つ目の設問で把握した出生時の戸籍・出生届の性別ではなく、「今のご自分の性別」から始まっていることが、分かりにくいのではないかという指摘があった。どの時点の性別及びジェンダーアイデンティティなのかとした意見は多くの団体から指摘された。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 「A. 3ステップ方式」の間①で「あなたの性別に○をつけてください。(出生時の戸籍・出生届の性別)」を回答した後に、間②で「あなたは今のご自分の性別を、」という説明がされると、2ステップ目における性別が何の性別を指しているのかわからなくなってしまう。その観点で言えば、「B. 2ステップ方式」の間①と間②の説明の方が分かりやすい。「A. 3ステップ方式」の間②でも同様に、質問文の冒頭に出生時の性別という言葉があった方が分かりやすい。

ほかに、設問文中にある「[出生時の戸籍・出生届の性別]」という補足説明が、言葉足らずではないかという指摘もあった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 「A. 3ステップ方式」において、まず「あなたの性別に○をつけてください。」と記載されており、続いて()内に「出生時の戸籍・出生届の性別」と記載されている。それに対して、「B. 2ステップ方式」は「あなたが出生時に指定された性別(戸籍上の性別)について、」と記載されており、出生時の性別に関する補足説明の順番がそれぞれ異なる。一般の人にも聞く大規模調査であることを考えると、「A. 3ステップ方式」の説明方法の方が分かりやすいのかもしれないが、冒頭の「あなたの性別に○をつけてください。」だけ読まれると説明不足である。出生時の性別に関する補足説明の見せ方が悩ましい。

② 2ステップ方式に関する意見

最初に出生時の性別を問い、次に「男性・女性・男性/女性の間、男性/女性の両方、男性/女

性のどちらでもない、時により変化する、その他」からジェンダーアイデンティティを選択する
 図表 11「2ステップ方式」については、性的マイノリティ非当事者が答えやすいのではないかと
 という意見や性別の選択肢として「その他（回答しない）」が設けられている点が良いという意見、
 ジェンダーアイデンティティに関する設問の選択肢が細かく用意されている点が良いという意
 見があった。一方で、ジェンダーアイデンティティに関する設問の選択肢が多く用意されてい
 ることは必ずしも良いことではなく、「男性・女性のどちらでもない」「時により変化する」など回
 答割合が低いと考えられる選択肢に該当し得る人に対して、回答を強いているように読めてしま
 うという意見があった。また、性別を把握する設問の選択肢として「その他（回答しない等）」が
 設けられている点について、性分化疾患の当事者が当該選択肢を回答しづらく、「回答しない」と
 いう人も含めた選択肢であることから実際の集計では集計から除かれてしまう可能性を危惧す
 る意見もあった。さらに、性別を尋ねる設問において「出生時に指定された性別」とあり、「指定
 された」という表現が見慣れないのではないかとという意見があった。

図表 11 ジェンダーアイデンティティの把握方法の例 B. 2ステップ方式

| | |
|--|------------|
| ①あなたが出生時に指定された性別（戸籍上の性別）について、あてはまるものをお答えください。 | |
| 1 男性 | 2 女性 |
| 3 その他（回答しない等） | |
| ②あなたが出生時に指定された性別（戸籍上の性別）に関わらず、あなたが現在、自分自身で認識している性別について、あてはまるものをお答えください。 | |
| 1 男性 | 2 女性 |
| 3 男性・女性の中間 | 4 男性・女性の両方 |
| 5 男性・女性のどちらでもない | |
| 6 時により変化する | |
| 7 その他（わからない・回答しない等） | |

（出所）新潟県（2023）「性の多様性等に係る県民意識調査 報告書」より作成

③ 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法に関する意見

図表 12「当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」（p. 41）については、性的指向、ジェンダーアイデンティティに関する自身が思うアイデンティティが選択肢として置かれていることが分かりやすいという意見や性的指向とジェンダーアイデンティティを同時に把握しているのが効率的ではないかという意見があった。一方で、性的指向とジェンダーアイデンティティを分けずに把握している点が適切ではないという意見や「性的マイノリティ」という言葉を不快に感じる人がいるという意見、「あなたはご自身が性的マイノリティの当事者だと思いますか」と問われることで、アウティングを恐れる回答者が回答しにくいのではないかとという意見、各選択肢の補足説明について異論がある人もいるのではないかとという意見があった。

図表 12 ジェンダーアイデンティティの把握方法の例

C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法

| | | |
|--|-------|-------------|
| ①あなたの性別を教えてください。 | | |
| 1 女性 | 2 男性 | 3 どちらともいえない |
| 4 いずれも当てはまらない | 5 無回答 | |
| ②あなたはご自身は性的マイノリティの当事者だと思いますか。 | | |
| 1 はい | 2 いいえ | |
| 3 わからない | 4 無回答 | |
| ③②で「はい」の回答を選択した方は、ご自身の認識に近いものを選んでください。 | | |
| 1 L (レズビアン：女性の同性愛者) | | |
| 2 G (ゲイ：男性の同性愛者) | | |
| 3 B (バイセクシュアル：両性愛者) | | |
| 4 T (トランスジェンダー：心と体の性が一致しない人) | | |
| 5 X (エックスジェンダー：自認する性別が男女どちらでもない、どちらとも言い切れない人) | | |
| 6 Q (クエスチョニング：自らの性のあり方などについて特定の枠に属さない人、分からない人) | | |
| 7 わからない、決めたくない | | |
| 8 その他 | | |

(出所) 板橋区 (2022) 「パートナーシップ制度に関する調査報告書」より作成

また、性的マイノリティ当事者がふだんの生活から常に性的マイノリティであることを意識して生活しているとは限らないことから、「あなたはご自身が性的マイノリティの当事者だと思いますか」という問いかけをしても、当事者であるかどうかを確実に把握することが難しいのではないかという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 「あなたはご自身が性的マイノリティ当事者だと思いますか」と質問しているが、当事者は普段から性的マイノリティ当事者であることを意識しているというよりは、普通の生活を送る中で、不都合に直面した時に自分がマイノリティだと感じるものだと思うので、自身が当事者だと思うかという質問で把握するのは難しいのではないか。
- ・ LGBTQ+や性的マイノリティの実感がない人や、そうしたカテゴリーにラベリングされること自体に違和感がある人にとってはなじまない問い方だろう。そもそもマイノリティという認識がなければ「いいえ」を回答する。また、同性に関心はあるものの、自身は当事者ではないと思っている人もいる。「あなたはご自身が性的マイノリティ当事者だと思いますか。」という問い方は、アンケートで欲しい回答が得られない可能性がある。

2) ジェンダーアイデンティティの把握方法に関する全般的な意見

① 出生時の性別の把握に当たって留意が必要ではないかという意見

特に性分化疾患の人を念頭に、出生性の把握には留意が必要ではないかという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 「出生時」とは難しい言葉である。出生時の性別を聞く際、インターセックスの方を不可視化した状態になっている。【同旨4団体】

② 戸籍上の性別の把握に当たって留意が必要ではないかという意見

戸籍上の性別を回答することに抵抗を感じる人がいることを念頭に、戸籍上の性別の把握には留意が必要ではないかという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 戸籍性を最初に聞くのではなく、最初にジェンダーアイデンティティを聞いてほしいと当事者からよく聞かれる。調査実施者が戸籍性を重要視しており、戸籍性を基本軸にしていると当事者は感じ取ってしまい、抵抗を感じることもある。
- ・ 戸籍上の性別という聞き方をする必要はないだろう。出生時に割り当てられた性別という聞き方を使うことがよくある。出生時に割り当てられた性別として聞いても、集計上は戸籍上の性別と同じだと判断することになるだろう。また、単に性別と記載されているよりも、割り当てられたという表現があると配慮されていると感じられる。

③ ジェンダーアイデンティティの把握内容について

ジェンダーアイデンティティの把握に当たってはトランス男性かトランス女性かが分かるような把握方法がよいという意見やジェンダーアイデンティティに加えて、戸籍上の性別の変更状況など性別移行の状況が把握されるとよいという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ トランスジェンダーについては、トランス男性かトランス女性かが把握できた方がよい。
- ・ 「A. 3ステップ方式」では、性別移行について把握できない。戸籍を変えているかどうかも把握できるとよい。

④ 社会的な性別の把握について

ジェンダーアイデンティティの把握にとどまらず、現在どのような社会的な性別で暮らしているのかを把握するとよいという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 「現在どのような社会的な性別で生きているか」が明確になる調査であるとよい。社会的な性別について聞くことで、生きる中での困難が現れると考えている。休みの日はどうしているか、職場ではどうしているかなど、本人にとっての社会的な性別とは何か、聞けるとよいと考える。

(3) 性的指向の把握方法とジェンダーアイデンティティの把握方法全般に関する意見

① 性的指向とジェンダーアイデンティティの設問順について

性的指向とジェンダーアイデンティティを把握する際には、先にジェンダーアイデンティティを把握した後に性的指向を把握するのがよいという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 先に性自認を聞き、次に性的指向を聞いた方がよい。回答者にとって回答の筋が通るため回答しやすくなるだろう。先に性自認を回答することで、性的指向の回答も迷わずに選択肢を選びやすくなる。
- ・ 対面で話を聞くのであれば、相手の性自認を先に確認した上で進めた方がよい。

② 言葉の定義の記載について

設問や選択肢で用いる言葉について定義を記載すべきとした意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ ゲイ、レズビアン、バイセクシュアルは分かりやすいが、シスジェンダー、トランスジェンダー、Xジェンダー、パンセクシュアルなどは、定義が人によって異なったり、誤認していたりして、調査側の意図と違う考えで回答されるケースがあるので、各用語の説明は必要なのではないかと。
- ・ 行動や表現、現在の認識とアイデンティティは必ずしも一致しない。調査において何を聞かれているのか（アイデンティティなのか、行動や生活実態なのか）、毎度迷う。

③ 自由回答について

性的指向やジェンダーアイデンティティを把握する際に自由回答欄があるとよいという意見が多かった。ただし、自由回答により把握した場合、集計が困難であることへの理解を示す意見もあった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 当事者でも用語がわからないこともある。選択肢に、該当するものがあるのに、その他に○をつけて回答する人が出てくる。その他に自由回答欄を設けるなどして、選択肢での回答とは別に、その人の考えを書くことのできる欄があるとよい。その他への回答が多くなると集計が難しくなるが、一方で、自分に当てはまる選択肢がないことへの心理的な負担を感じる方もいるため、書くことのできる欄があれば、より配慮がある調査になると思う。
- ・ 自由記載欄における多様な回答が、集計において恣意的にまとめられることへの心配はある。例えば、バイセクシュアルとパンセクシュアルは異なるという認知が広まってきたが、同じという認識によりまとめて集計されてしまうことに懸念を持っている。

④ インジケーターによる把握について

性的指向やジェンダーアイデンティティをグラデーションとして捉え、その程度をインジケーターによって把握するという方法について、賛成する意見と反対する意見の両方があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 「A.直接的に尋ねる方法」のように、直接的にセクシュアリティを聞いた後で、インジケーターを使った設問を追加で設けるのはどうか。インジケーターを使った設問として、例えば、同性愛、又は両性愛を選択した回答者を対象として、両端に男性、女性を置いた座標を示し、どちらにより惹かれるかを指示してもらうことなど。

⑤ 性的指向及びジェンダーアイデンティティの認識と回答時点について

自らの性的指向及びジェンダーアイデンティティをはっきり認識していない時期があるという意見があった。また、性的指向やジェンダーアイデンティティは時点によって回答内容が変わり得るものであるから、調査の目的に応じて、回答時点を決める必要があるのではないかと意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 当団体が開催している交流会の参加者の中にも、「他の人とちょっと違う」と話す中で、自分に当事者性があるという自覚が芽生えてきたという人もいる。そのため、そのあたりも汲み取れると理想的だろう。
- ・ L、G、B、Tのいずれに該当するかという聞き方をして選択肢を選んだ人は、自身のSOGIについてある程度自覚がある人だと考えられる。そうではなく、好きになる人の対象は男性と女性のどちらか、という聞き方をすると、自身のSOGIについて迷っている人がもう少し多く含まれてくるだろう。
- ・ 調査に回答した時点の感覚を聞くだけでよいのかという懸念がある。例えば、学生時代に遡って聞いたほうがよいか等、調査次第である。
- ・ 「現時点でのお考えで構いません。」「現時点で最も近いものをお選びください。」などの補足説明があるとよい。

⑥ 集計分析方法の説明について

性的指向やジェンダーアイデンティティに関する言葉の理解は多様であることから、集計分析方法に関しても説明を明示すれば、調査実施主体と回答者の集計結果の受け止め方の齟齬が起きにくいのではないかという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 調査上どのように集約するか、示してほしい。自分が意図しない属性として集計されてしまうケースがあるため、前もって説明されているとよい。

5. 今後の調査において考えられる調査項目に関する意見

今後の調査において考えられる調査項目や調査の視点として以下のような意見があった。

(1) 考えられる調査テーマや調査内容

① 性的マイノリティ当事者の規模などを把握する調査

性的マイノリティ当事者の規模を把握するような調査が考えられるという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ LGBT当事者の実数を把握したい。

② 広く性的マイノリティ当事者の困難経験を把握する調査

性的マイノリティ当事者を対象とした調査において、広く性的マイノリティ当事者の生活上の困難を把握する調査が考えられるとした意見が多かった。また、カミングアウトの状況についても把握をしてはどうかという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 性的マイノリティ当事者が、どのような生活上の困難を抱えているのか、その背景にある社会的な構造の問題が見えてくるような調査設計にしてほしい。【同旨2団体】
- ・ ある地域の役所では、「田舎なので、この町に性的マイノリティ当事者はいない」と考えていた（障害者の施策も同様に、人数が少ないから必要ないとされていた）。また、流行りのように、隣町がやって

いるからと、当事者抜きで制度を作っている自治体もある。各地域で日々を生きている当事者の声を、自治体が政策に活かせるような調査を行ってほしい。

- ・ 家族や職場へのカミングアウトの状況についても把握した方がよい。必ずしもカミングアウトによって良い方向に向かうとは限らず、カミングアウトした後に家を追い出されたり、虐待に遭ったりすることもある。当団体でも、全ての結果を公開しているわけではないが、カミングアウトとメンタルヘルスに関する調査を実施したことがある。同調査によれば、カミングアウトをしており、家族と同居している性的マイノリティ当事者のメンタルヘルスが最も悪いという結果がみられた。そのため、カミングアウトしてその後どうなっているかも把握できるとよい。同居している人が家族なのかそれ以外かによっても状況は異なるだろう。

③ 個別の調査テーマ

個別の政策分野に関する調査テーマとして、性的マイノリティ当事者による子育てや性的マイノリティ当事者の家族に関する調査、貧困に関する調査、発達障害など障害に関する調査、老後や孤立や孤独、介護に関する調査、職場に関する調査、公衆衛生・医療に関する調査などが挙げられた。具体的には以下のような意見があった。

【子育て・家族】

- ・ LGBT 当事者に育てられたこどもの声を拾い上げたい。周囲に家族の実態を一切明かしていないという方もいる。そのこどもがどのように感じ、どのような困難を抱えているのか(いないのか)を調査してほしい。小さいこどもだけでなく、50代や60代の方の中にも「自分の親がLGBT当事者である」という場合もある。彼ら彼女らが、その困難や経験を誰にも話せずに来たという。そのような方についても調査する必要がある。
- ・ LGBTQ+のこどもとその保護者、きょうだい、そのほかの家族などを対象に、抱えている困難や身近に相談できる相手がいるかなどが調査されるとよい。これまで LGBTQ+のこどもやその家族にあまり目が向けられていなかったため、実態把握が必要である。ただし、当事者のこどもが自身の家族にカミングアウトしていない場合も多く、その家族と接点を持つことは難しいことが予想される。

【貧困】

- ・ 性的マイノリティには貧困層が多い可能性があり、貧困層の困難も取り上げてほしい。

【障害等】

- ・ 当団体の施設の利用者の中には、貧困や発達障害、精神障害、軽度の知的障害などをお持ちの方や、うつで休職している方など、セクシュアリティ以外の生きづらさを重複して抱えている方もかなり多い。そのため、セクシュアリティと他の困難を重複して抱えている状況を把握できるような調査項目があるとよい。これらの困難は自殺にも関連してくる。年代にもよるが、特に10代では不登校やいじめを受けた経験、自傷の経験があるこどもの割合がかなり高い。このような他の生きづらさや困難を抱えている人が、性的マイノリティ当事者のコミュニティの中に入れずに孤立している場合もある。

【孤独・孤立】

- ・ おひとりさまで未婚の方の中には、一定程度性的マイノリティの方がおり、性的マイノリティ非当事者とはライフスタイルも異なることが予想される。今後おひとりさまを対象とした調査を行う際は、SOGIを把握した上で、困難経験等をヒアリングするべきである。

【老後の暮らし】

- ・ シニア層向けに居場所づくりを行っている団体もある。シニア層は老後における孤独や孤立など、10～20代の若者とは異なる困難を抱えている。シニア層の実態把握のための調査も実施されるとよい。
- ・ 高齢の方は特に、カミングアウトできないまま今に至るといふ方も多いと考えられるが、介護を受ける年齢になってきており、介護施設の被介護者の中にも性的マイノリティ当事者がいらっしゃることも考えられる。ただでさえ生きづらい社会の中で性的マイノリティに関する困難も重なると、さらに重い課題を抱えている可能性が高いだろう。このように、性的マイノリティに関する問題に加えて介護や障害などにも目を向けると、対象者はさらに増えるだろう。

【介護】

- ・ 介護の領域についても、LGBTQの困難や実態の把握はされていない。

【職場】

- ・ 学校現場や若年層を対象にした調査が多く、働いている世代の調査は多くない。LGBTQ+当事者の職場におけるストレスなども把握したほうがよいだろう。また、性的マイノリティであることが収入にどの程度影響を及ぼすか関心を持っている。生活のための経済的基盤がLGBTQ+当事者と当事者でない方でどの程度差があるか把握できるとよい。

【公衆衛生・医療】

- ・ セクシュアルマイノリティの医療機関にかかるハードルや健康状態が調査項目に含まれるとよい。

④ 支援機関等を対象とした調査テーマ

支援機関の実態を把握するのがよいとの意見があり、具体的な分野として性暴力やパートナー間暴力が挙げられた。また、支援機関への相談状況などを調査することを通じて性的マイノリティ当事者の実態把握ができるのではないかとした意見もあった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 周知啓発を推進していくために、支援者におけるLGBTQ+についての理解や認識の程度を把握する調査が実施されるとよい。特に、医療、福祉、教育、行政に関する分野はLGBTQ+の生活に直結する分野であるため、そうした機関における実態把握（支援者の理解や認識に関する調査）が行われるとよい。分野ごとに理解や認識の程度を把握し、周知が足りていない分野を対象に啓発活動を行うことができればよい。
- ・ （パートナー間暴力（IPV）、DV、性暴力に関して）被害者が困難の中にいるということはすでに分かっており、国内外の調査で十分に示されてきたと考えている。日本の調査でも困難の把握項目において有意に高い数値が出ている。当事者に何度もアンケートを依頼するのも疲れている。相談体制の実態に関する調査をしてほしい。

- ・ 性的マイノリティ当事者の困難を把握することに焦点を絞ると、相談窓口を担っている場所に対し、普段どのような相談がきているか、どのような問い合わせが多くくるかを直接聞くことが早いだろう。例えば、東京都では東京いのちの電話が相談対応を行っているため、差別を受けた経験や心の病を持っている方等の話が集まっているだろう。ただし、相談したり窓口に来たりする当事者は非常に少ないため、相談窓口を通して把握できるのは全事例の1割程度に過ぎないという感覚であり、実際にはその10倍以上の性的マイノリティ当事者がいると思われる。

(2) 考えられる調査の視点

① 性的マイノリティ非当事者との比較ができる調査

性的マイノリティ当事者の生活上の困難等を把握する際には、性的マイノリティ非当事者との比較ができる調査が必要であるとした意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ LGBTQ+当事者の困難を把握するためには、何か比較できる対象を設けなければ実態を明らかにすることができない。当事者でない方にも同じ設問を聞き、両者の差を分析することが必要ではないか。両方で差が大きい項目ほど、政策上取り組むべき課題であると考えられる。LGBTQ+当事者と当事者でない方を一緒に調査で把握するとよいだろう。

② 性的マイノリティ当事者の多様な性の在り方を意識した調査

性的マイノリティ当事者全体の経験や実態だけではなく、トランスジェンダー男性、トランスジェンダー女性、男性同士のカップル、女性同士のカップルなど、それぞれの実態が分かるような調査をしたほうがよいとした意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ トランスジェンダー男性とトランスジェンダー女性では、社会において感じる葛藤や、摩擦を感じる場面が異なると思う。同性カップルでも、女性同士のカップルと男性同士のカップルでは、直面する課題が異なる。例えば、女性同士のカップルは、経済的にもものすごく困窮している場合がある。以前のパートナーとの子供を産んでいてシングルマザーの貧困が2人分組み合わさっているような事例もある。

③ 特にトランスジェンダーの困難経験を把握する調査

特にトランスジェンダーの経験する困難等が深刻であることから、トランスジェンダーの生活実態について調査が必要であるとした意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 特にトランスジェンダーは孤立しやすい状況である。経済的に貧困な状況に置かれている人も多く、また、学校などの男性と女性で分かれる空間は心理的負担が大きい。また、トランスジェンダーは医療機関にアクセスするハードルが高いにもかかわらず、メンタルヘルスやホルモン注射などにかかる診療料が異なるため、多くの医療機関にかかる必要がある。つまり、トランスジェンダーは医療ニーズが高いが、一方で利用できる資源が限られている。トランスジェンダーは孤立しがちで持っているネットワークが少なく、こうしたトランスジェンダーの置かれた実態が調査で明らかにされるとよい。メディアでよく取り上げられるようになり、トランスジェンダーも生きやすい世の中になったと世間から思われることがあるが、まずは生活実態が明らかになるような調査が行われるとよいだろう。

④ 特に性的マイノリティ女性の困難経験を把握する調査

特に性的マイノリティ女性の経験する困難等についての実態把握をしてほしいとの意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 特に性的マイノリティ女性をテーマとした調査を重点的に行ってほしい。例えば、女性同士という点での経済・貧困の問題を調査してほしい。また、当団体が小さいサンプルサイズでしか調査できていない、婦人科・乳腺科などの医療との連携の問題も取り上げる必要がある。

⑤ 都市と地方の差を意識した調査

性的マイノリティ当事者の生活上の困難等を把握する際には、都市と地方で差があることを念頭に置き、地方の実態が分かる調査が必要であるとした意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 都市と地方で当事者が置かれている状況は大きく異なるが、都市と地方の格差の状況は調査されておらず、実態を明らかにすることが必要である。
- ・ 同性愛者においても、東京や大阪にあるゲイタウンで様々な人とつながりを持つことができる当事者と、地方在住者でつながりを持つことができない当事者で置かれている状況は異なる。つながりを持つことができる当事者は、仲間と一緒にいる程度満足した生活を送ったり、また地方公共団体もそれらに呼応して施策等を推進したりしている。一方で、地方在住者はつながりを持つことができず完全に孤立してしまい、カミングアウトすることもできない。自身のセクシュアリティが周りに知られてしまうと、生きる場所を失ってしまう場合もある。【同旨2団体】
- ・ トランスジェンダーは医療アクセスに関する問題が地方において深刻である。例えば、地方にはジェンダークリニックが近くにないため、新幹線を利用して同クリニックがある遠方まで通院する人もいる。このように、地方在住者が直面する困難を調査することが必要である。【同旨2団体】
- ・ 地方や匿名性が低い都市で生きている性的マイノリティ当事者はより深刻な状況にあるだろう。都市部と地方では性的マイノリティ当事者の状況に大きな差があることを実感している。地方では匿名性がないため、アンケートの回答自体が難しかったり、アライであることを表明自体に抵抗があったりする。このような小規模都市のしんどさが伝わるとよい。
- ・ 近隣住人とのつながりが強い地域や、3世代同居の場合、近くに祖父母が住んでいる家庭などでは、親世代は理解があっても祖父母世代からの反対があり、トランスジェンダーの方が制服や身につけたい服装の話をする全くなれないという話も聞く。近隣住民や親や親戚との関係性も、性的マイノリティ当事者のしんどさに大きく影響するだろう。

⑥ 性的指向及びジェンダーアイデンティティを隠して生活している人の実態も捉えられる調査

性的指向及びジェンダーアイデンティティを隠して生活している人の実態が捉えられるような調査の設計や工夫がされるとよいという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 自身のセクシュアリティを隠して生活している（クローゼット）方の実態は、公にカミングアウトしている方と状況は全く異なると考えられるため、クローゼットの方からも回答が得られることが望ましい。インターネット調査であればクローゼットの方も回答しやすいだろう。
- ・ アンケートの回答しづらさは、クローゼット（自分のセクシュアリティを明かさずに生きている人）の方がより強く感じていると考えられる。だからこそ情報を集めるべきである。親にも言っていない方や、親しい友人にも自分の本名や住所を知らせていないという方さえいる。地方で孤立している可能性もある。クローゼットの方の声をどのように拾っていくか考えていきたい。

⑦ アイデンティティを確立していない人の実態も捉えられる調査

性的指向及びジェンダーアイデンティティに関するアイデンティティを確立していない人の実態が捉えられるような調査の設計や工夫がされるとよいという意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 自身のセクシュアリティが明確ではない、あるいは確立していない方々のことを、どれだけ見逃さずに把握できるかということも重要だろう。当団体の交流会には高校生くらいの年代も参加しているが、人に話したことがなければ自分のことも分からないという人もいる。そのような人も何かしら違和感があったりしんどい部分もあったりすると思われるため、何かの形で汲み取ることができるとよいと思う。

⑧ ライフイベントを視点とした調査

性的マイノリティ当事者が日頃からはっきりとした困難を感じているとは限らないことから、性的マイノリティ当事者の生活上の困難等を把握する際には、ライフイベントごとに把握したほうがよいとの意見があった。具体的には以下のような意見があった。

- ・ 当事者が困難なことがあるか聞かれた時に、日常生活で困難を感じていないと回答する人が多いが、日常生活で意識していない、しようとならない人が多いのだと考えている。ライフイベントごとに分けて考えると、困難なことはあるので、質問の仕方が重要である。
- ・ 地方都市に限らず、普段から何かしらしんどいことや変わってほしいことを抱えながら生きている性的マイノリティ当事者も多いだろう。ただ、何となくしんどい、何となく辛いことがあるという言語化ができていない状態では話しにくいと思われるため、調査する際には場面ごとに区切ったり、マイノリティ性が最も高そうな部分に焦点を絞ったりするなどの工夫が考えられる。

6. 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の留意事項

(1) 本節の目的及び掲載情報の取扱いについて

1) 本節の目的

本節は、文献調査、性的マイノリティ当事者団体へのヒアリング調査(以下「ヒアリング調査」という。)及び企画委員会における議論を踏まえ、関係府省庁や地方公共団体等が、令和7年度以降、性的マイノリティ当事者を調査対象とする調査を実施する場合に、その参考となるよう、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法、調査における配慮事項などの留意事項等を整理した。

2) 本節において想定する調査

性的マイノリティ当事者を対象とした調査とは、調査対象を性的マイノリティ当事者に限った調査だけでなく、性的マイノリティ非当事者と比較するという目的に合致する調査であれば、性的マイノリティ非当事者を含む調査も範疇とする。また、調査手法として、主にアンケート調査における留意事項を整理した。

3) 本節の掲載情報の活用にあたっての留意事項及び今後の検討課題

本節の掲載情報の活用にあたっては、以下の点に留意をいただきたい。

- ・ 本節では、調査一般に通ずると考えられる内容を掲載している。実際の調査の在り方や調査設計は調査目的によるものであり、調査実施主体において検討される必要があること。
- ・ 掲載内容は令和6年度事業において整理された内容である。今後、さらなる知見の蓄積や社会的な動向の変化を踏まえた、見直しや改善が図られることが必要であること。
- ・ なお、委員からは、性的マイノリティを対象とした調査だけでなく、将来的には、その他の調査においても、調査の趣旨や目的に応じ、本留意事項の観点を検討することも必要ではないかとの意見もあった。

(2) 性的マイノリティ当事者を対象とする調査の実施にあたって

ヒアリング調査では、性的指向及びジェンダーアイデンティティの在り方は非常に多様であり、選択肢等から回答を一意に決めることができないという回答者もいること、そうした回答者がいる中で調査を通じて性の在り方を一意に問うことは暴力的な側面もあるということを確認した上で調査を実施してもらいたいとの意見があった。

1つの調査によって、性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性や性的マイノリティ当事者の困難経験等の状況を完全に捉えることはできない。集計分析を行う際においては、こうした一定の限界を念頭に置きつつ、個々の調査の目的や制約に応じた調査の設計を行うことが必要である。

(3) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査方法

1) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の設計

性的マイノリティ当事者を対象とした調査には、「A.主に性的マイノリティ当事者を対象とす

る調査」(以下「A」という。)のほか、「B.性的マイノリティ当事者及び性的マイノリティ非当事者の比較を念頭に双方を対象とする調査」(以下「B」という。)が考えられる。

AとBは、どちらも性的マイノリティ当事者に関する調査であるが、Aは性的マイノリティ当事者の状況そのものを調査するものであるのに対し、Bはそれに加え、性的マイノリティ非当事者と比較して共通点、差異などの状況を把握することが可能である。

ただし、Bを採用するに当たっては以下の点に留意する必要がある。なお、クローズド型(モニター)調査(ウェブ)、オープン型調査(ウェブ)、住民基本台帳を用いた無作為抽出調査(郵送配布、郵送回答・ウェブ回答併用)に関する手法の概要を図表1「調査手法の比較」(p.7)に整理している。

- ・ 無作為抽出調査で調査する場合、性的マイノリティ当事者の回答者数が十分に集まらない可能性がある。
- ・ クローズド型(モニター)調査であれば、性的マイノリティ当事者を割付することで回答者数を確保することが可能だが、広く国民一般の傾向を代表する調査とはならない。また、全ての設問で当事者・非当事者の比較ができるわけではなく、設問の出し分けも必要になるなど、調査設計が複雑になりがちである。
- ・ オープン型調査(ウェブ)においても、性的マイノリティ非当事者及び性的マイノリティ当事者両方の回答を得ることが可能であるが、広く国民一般の傾向を代表する調査とはならない。また、なりすまし等に注意する必要がある。

上記を踏まえた上で、性的マイノリティ当事者の回答件数や性的マイノリティ当事者に焦点を置いた設問を優先する場合などは、Aを採用することも有効である。

また、上述のようなAとBのそれぞれの利点を活かすため、無作為抽出調査を実施しつつ、性的マイノリティ当事者の回答者数を確保する調査の実施方法として、委員からは、海外の研究では無作為抽出調査と性的マイノリティ当事者を主な調査対象とするオープン型調査(ウェブ)を併用する方法が用いられているとの意見があった⁵。

2) 性的マイノリティ当事者の回答者数確保の方法及び留意点

Aでは、性的マイノリティ当事者から回答を集めるが、十分な回答者数を確保するためには、以下のような調査の周知・依頼方法がある。

- ・ SNSを活用し、調査の依頼を周知する
- ・ 当事者団体等の協力を得てスノーボール(雪だるま)式に回答を募る
- ・ 性的マイノリティ当事者の利用が多いウェブサイト広告を掲示する

企画委員会では、性的マイノリティ当事者の回答者数確保に当たって、以下のような指摘があった。

- ・ 団体の協力を得て調査を行う場合、複数団体に所属している者が複数回、回答してしまう可能性がある。モニター調査においても他社の登録モニターを借りて回答者数を増やすことがあるが、複数の会社に登録している者がいれば複数回、回答をする可能性がある。

⁵ 例えば、Trachman, Mathieu., & Lejbowicz, Tania. (2018). Putting LGBT and non-binary people in boxes. Statistical categorization and criticism of gender and sexuality assignments in a study on violence, *Revue française de sociologie*, 59(4), 677-705. などがある。

- ・ 性的マイノリティ当事者といっても、性的マイノリティ当事者であることをオープンにして活動をしている者と、クローズドで暮らしている者とでは実態に差がある可能性に留意して調査方法を考える必要がある。
- ・ 目標となる回答者数は集計分析のどのような区分で行うかに影響される。調査の目的に応じ、性的指向及びジェンダーアイデンティティをどのように細分化して調査するか検討を行い、実現可能な規模の中で分析を見据えて回答者数の目標を考える必要がある。

(4) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法

1) 性的指向及びジェンダーアイデンティティを把握することの是非

調査における性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握については、調査の個別の目的によっては必ずしも必要ではない場合や回答者への配慮の点から把握しないほうがよい場合もある。企画委員会では、性的マイノリティ当事者を対象とした調査において、性的指向及びジェンダーアイデンティティを把握することに否定的な意見はなかった。

2) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法

① 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形作成の目的

文献調査の結果、性的マイノリティ当事者を対象とした調査において、様々な性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法があることを確認した。

今後、関係府省庁や地方公共団体等が実施する性的マイノリティ当事者を対象とした調査を実施する場合、その参考となるよう性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について事務局案を検討した。

② 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形の事務局案の考え方

性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関する既往調査として、JSPS 科研費 JP16H03709「性的指向と性自認の人口学 - 日本における研究基盤の構築」(平成 28 年度～令和 2 年度, 令和 3 年度に繰越)及び「性的指向と性自認の人口学の構築—全国無作為抽出調査の実施」(文部科学省所轄日本学術振興会 科学研究費助成事業(一般・基盤研究 A) 課題番号 21H04407(令和 3 年度～)がある(以下、同研究を率いる研究者グループを「SOGI 人口学科研費チーム」とする。また、参照した性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関する研究は参考文献(p. 60)に掲載。)

この性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法については、大阪市民を対象とした無作為抽出調査である「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」(令和元年)等で活用されている。また、SOGI 人口学科研費チームにおいても「家族と性と多様性に関する全国アンケート」(令和 5 年)でこの把握方法を実装していることから、これらの既存調査を通じ、既に実用の検証が行われているものと考えられる。

このため、この性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法を「性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形」の事務局案として採用することとした。

基本形の事務局案の具体的な設問及び選択肢は図表 13 (p. 53) 及び図表 14 (p. 53) のとおりである。

図表 13 性的指向の把握方法の基本形の事務局案

次の中で、あなたにもっとも近いと思うものに○をつけてください。（○は1つ）

- 1 異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない[異性のみに性愛感情を抱く人]
- 2 ゲイ・レズビアン・同性愛者[同性のみに性愛感情を抱く人]
- 3 バイセクシュアル・両性愛者[男女どちらにも性愛感情を抱く人]
- 4 アセクシュアル・無性愛者[誰に対しても性愛感情を抱かない人]
- 5 決めたくない・決めていない
- 6 質問の意味がわからない

(出所) 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和
(2023) 「「家族と性と多様性にかんする全国アンケート」の結果概要」より作成

図表 14 性別及びジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形の事務局案

①あなたの性別に○をつけてください。[出生時の戸籍・出生届の性別]（○は1つ）

1 男 2 女

※「出生時」とは、生まれたときにもっとも近い時点のことをさします。

②あなたは今のご自分の性別を、出生時の性別（①で○をつけたもの）と同じだととらえていますか。左側で2や3に○をした方は、今の認識をお答えください。

（○はいくつでも）

| | | | | | |
|---|--|-----|-----------------|-----|-------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 出生時の性別と同じ 2 別の性別だととらえている 3 違和感がある | <p style="text-align: center;">今の認識にもっとも近い性別（○は1つ）</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%;">1 男</td> <td style="width: 50%;">3 男性・女性にあてはまらない</td> </tr> <tr> <td>2 女</td> <td>（具体的に： ）</td> </tr> </table> | 1 男 | 3 男性・女性にあてはまらない | 2 女 | （具体的に： ） |
| 1 男 | 3 男性・女性にあてはまらない | | | | |
| 2 女 | （具体的に： ） | | | | |

(出所) 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和
(2023) 「「家族と性と多様性にかんする全国アンケート」の結果概要」より作成

③ 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形の活用について

企画委員会で性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形の事務局案を検討したところ、以下のとおり、様々な検討事項はあるものの、基本的には否定的な意見が出なかったことから、これを企画委員会としての基本形とした。

企画委員会で挙げられた基本形の活用にあたっての留意点は以下のとおりである。なお、ヒアリング調査において確認された基本形に対する主な意見とこれらの意見に対する考え方は「(5) (参考) ヒアリング調査において確認された、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形に関する意見について」(p. 55) に整理をしている。

【活用範囲】

- ・ 基本形は広く様々な調査で活用できるものと考えられる。ヒアリング調査では、幅広く、肯定的な意見も否定的意見もあった。設問の設定にあたってはできる限り多くの人が答えられるよう工夫することが必要であるものの、全ての人が納得するような把握方法を策定するこ

とは難しい。性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法は調査目的によって検討されるべきものであり、全ての調査において基本形の活用を推奨するものではない。本節で示す基本形については個別の調査の目的に沿って検討を行った上で活用する必要がある。

- ・ 性的マイノリティ非当事者の実態と比較するという目的に合致する調査であれば、性的マイノリティ非当事者も対象とした調査においても活用できる可能性がある。また、性的マイノリティ当事者のみを対象とする調査の場合、スクリーニング調査（事前調査）において性的マイノリティ当事者かどうかを判定する際に基本形を活用できる可能性がある。

【基本形に加えて性的指向及びジェンダーアイデンティティの関連事項を把握する】

- ・ 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法は個別の調査の目的に沿って設計すべきであり、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握を基本形のみで行うことを推奨するものではない。その上で、例えば、調査の目的に合致しているのであれば、調査間で比較ができるよう基本形を用いたり、調査の目的に応じて、性的指向及びジェンダーアイデンティティなどに関する関連事項を把握するための追加の設問を設けることが望ましい。例えば、職場に関連した調査であれば職場でどの性別で働いているかを把握する、性感染症に関連した調査であれば性行動について把握することなどが考えられる。
- ・ なお、基本形により性的指向及びジェンダーアイデンティティを把握するとともに、生活の場面に応じた性の在り方や行動などに関する複数の設問を設けることで、より詳細な回答者の性の在り方の把握が可能となる。また、複数の設問への回答を組み合わせることで性的指向及びジェンダーアイデンティティを判断することが考えられる。

【設問順】

- ・ ヒアリング調査では、性的指向は、本人のジェンダーアイデンティティが起点で決まるものであることから、先にジェンダーアイデンティティを把握することがよいのではないかとこの意見があった。
- ・ 調査票全体の中で、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握を行う設問をどのような位置に配置するかは調査の設計次第である。年齢など他の回答者の属性情報と合わせて、調査票の終盤に置くことも可能である。また、性的指向及びジェンダーアイデンティティに関わる話題に触れた後で、「あなた自身はどうですか」という流れで性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握を行う設問を配置してはどうかとした意見もあった。

(5) (参考) ヒアリング調査において確認された、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形に関する意見について

性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形について、ヒアリング調査において確認された主な意見について、企画委員会において検討・整理を行った。ヒアリング調査における主な意見とそれに対する考え方は以下のとおりである。

| | ヒアリングにおける主な意見 | 考え方 |
|--------------------------|--|--|
| 用語の定義 | 当事者の中でも、性的指向の把握方法の基本形の中で使われているゲイ・レズビアンなどの言葉の意味が分からない人もいる。 | ゲイ・レズビアンなどの言葉の意味が分からない人がいることを前提に、基本形では[同性のみに性愛感情を抱く人]などの説明を記載している。 なお、基本形は回答者が認識する自身の性的指向に関するアイデンティティの把握を意図するものであり、本来は、[同性のみに性愛感情を抱く人]などの説明書きを記載することで、調査実施主体が定義した言葉に当てはまるかどうかを問うのではなく、単に「ゲイ」などの選択肢を並べた上で、選択肢の文言を自らの解釈で回答をしてもらうことが望ましいと考えている。 調査実施主体において、調査の目的に応じて、[同性のみに性愛感情を抱く人]などの文言の変更・削除などを検討することが必要である ⁶ 。 |
| | 性的指向の把握方法の基本形に記載の「性愛感情」という言葉の意味が分からない、戸惑うといった意見があった。「性愛感情」という言葉を用いる趣旨は何か。 | 上述のとおり、ゲイ・レズビアン・同性愛者の用語の意味が分からない人もいることから記載している ⁷ 。回答者の性的指向に関するアイデンティティの把握を目的とする場合 ⁸ 、[同性のみに性愛感情を抱く人]などの説明書きを記載することは望ましいとは言えず、その点において、「性愛感情」という言葉の理解は重要ではない。例えば、回答者が自分を「ゲイ」であると思うなら、選択肢に記載の「ゲイ・レズビアン・同性愛者」の文言を見て「ゲイ」であるとして「ゲイ・レズビアン・同性愛者」を選択することが最も望ましい。 |
| 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法 | ジェンダーアイデンティティの把握方法の基本形について、「出生時の戸籍、出生届の性別」を最初に聞き、今の性別の認識を把握し、調査実施主体が回答者のジェンダーアイデンティティを判断する仕組みになっているが、トランスジェンダー、ノンバイナリーなどの選択肢を設け回答者が自身のアイデンティティを選択できるほうがよいのではないか。 | 基本形では、回答者自身で出生時の性別と今の性別が一致しているか、今の性別が何であるかを選び、必要に応じてトランスジェンダーやノンバイナリーといったアイデンティティを記載できる形になっている。また、出生時の性別と今の性別が一致しないことをもって、調査実施主体がトランスジェンダーとして集計できるようにしている。 実際に様々な選択肢を設けることの是非に関する研究も行われているが、様々な選択肢(カテゴリー)を並べた場合でも、適切な回答結果を得られるとは限らないことが示唆されている。 ⁹ なお、欧米では transgender identity を尋ねる設問 |

⁶ SOGI 人口学科研費チームによると、[同性のみに性愛感情を抱く人]などの説明についてヒアリング調査を実施したところ、これらの説明がないと選択肢の意味を理解できない人がいることが確認され、また、同チームが調べた研究等では、性的マイノリティ非当事者の中には、性的指向のアイデンティティの選択肢が提示された設問を見て自分には無関係だと思い回答しない人がいることも指摘されている。こうしたことから、研究を実施した時点では、それぞれの選択肢に説明を含めるのがもっとも適切であると判断したとのこと。

⁷ なお、辞書では「性愛」とは「性本能に基づく愛欲。」(『デジタル大辞泉』(小学館))とされている。

⁸ 例えば、Laumann, Edward O., John H. Gagnon, Robert T. Michael, and Stuart Michaels. 1994. The Social Organization of Sexuality: Sexual Practices in the United States. Chicago: The University of Chicago Press. では、性的指向には、少なくとも desire, behavior, identity の3つの側面があるとされている。また、Hiramori, D. and S. Kamano 2020 Asking about Sexual Orientation and Gender Identity in Social Surveys in Japan: Findings from the Osaka City Residents' Survey and Related Preparatory Studies. Journal of Population Problems, 76(4), 443-466. では一般的に性的指向には惹かれ (attraction)、行動、アイデンティティの側面があるとしている。

⁹ 関連する研究報告として、例えば、HIRAMORI Daiki and KAMANO Saori. (2020). Asking about Sexual Orientation and Gender Identity in Social Surveys in Japan : Findings from the Osaka City Residents 'Survey and Related Preparatory Studies. 『人口問題研究』, 76(4), 443-466. がある。

| | | |
|--|---|---|
| | | を用いられていることもあるが、「性同一性障害」だが「トランスジェンダー」ではないというアイデンティティを有する人もいる。こうした事情に対応しつつ、ジェンダーアイデンティティを直接尋ねる方法を採用するためには、さらなる試験的調査をする必要があると考えられる。 |
| | 「自分の中で〇%は異性愛者だが〇%は同性愛者」という人もいる。 | 「決めたくない・決めていない」を選ぶことも可能である。調査においては、選択肢を1つ選んでもらうことが現実的な設計となる。パラメーターで示す方法や自由記述欄のみとする場合は集計等において扱いが難しい。なお、調査の目的に応じ、基本形に加えて、さらに詳細に性的指向及びジェンダーアイデンティティの在り方を尋ねることなども検討していく必要がある。 |
| | 性的指向の把握方法の基本形では、恋愛感情について聞かれているのか、性行動について聞かれているのか分からないため、回答に戸惑う。 | 基本形では、性的指向に関する回答者のアイデンティティを把握することを目的としているが、性的指向には複数の側面があり、一個人の中でもそれらが一致しているとは限らない。 調査の目的に合わせて、例えば、結婚や交際についての調査であれば、アイデンティティだけでなく、恋愛的感情の惹かれや性的惹かれも把握し、すべての情報から当事者該当性を特定することを検討することが望ましい。 ヒアリング調査ではアロマンティックについても把握するとよいのではないかという意見があった。基本形に加え、恋愛的感情の惹かれと性的惹かれの双方を把握することで、細かな分類が可能となり得る。 なお、理解増進法では性的指向について「恋愛感情又は性的感情の対象となる性別についての指向」と定義されている。 |
| | 戸籍上の性を聞かれることに抵抗感を覚える回答者もいるとの意見があった。基本形において「出生時の戸籍」と記載しているのはなぜか。 | 戸籍性にこだわるものではなく、出生時の性別を把握することを目的としている。調査の必要性に応じ、文言を変更または削除することも可能である。 基本形においては、性的マイノリティ非当事者にも分かりやすいよう「出生時の戸籍・出生届の性別」と補足している。また、性分化疾患の人も念頭に、「生まれたときにもっとも近い時点」という注釈を記載しており、この注釈をより大きく記載することも一案である。 ジェンダーアイデンティティを先に尋ねることで、戸籍性を尋ねない方法も考えられるが、性的マイノリティ非当事者を含む調査でも活用することを考えると、本報告書作成時点では現実的ではない。 なお、戸籍がない人に対する配慮として、「出生届」も併記している。「出生届」がない人も考えられるものの、繰り返しになるが、出生時の性別を把握することを目的としているものであり、出生時の性別が把握できる限り、「出生時の戸籍・出生届の性別」との文言は変更または削除してもよいと考える。 |
| | 回答に困る人が無理に回答しなくてもよいよう「その他」や「回答しない」などの選択肢を設けてはどうか。 | こうした選択肢があることで、回答に当たっての心理的な不安や当てはまる選択肢がないという問題を多少解決できるかもしれない。他方、回答者の中には「よく分からない」「考えるのが面倒」などとした理由で、これらの選択肢を選ぶ人がいる可能性は否めず、そうした回答者の性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握は困難になる。 「その他」「回答しない」とした回答結果については、単純集計では数を示すかもしれないが、クロス集計をする場合は除外して集計することになる。例えば、性的指向の設問において「その他」の回答割合が何%を示すことはできるものの、性的マイノリティ当事者と性的マ |
| | 「その他」「回答しない」の選択肢 | |

| | | |
|--------|--|---|
| | | イノリティ非当事者を比較する場合、「その他」と回答した人は性的マイノリティ当事者にも性的マイノリティ非当事者にも含めることができない。 ¹⁰ 「その他」と回答した人を集計から除外してしまうことで、調査結果の全体像が歪むというリスクもある。こうした問題は、定量調査における限界として、致し方がないものと考えられる。 |
| 社会的な性別 | 性的マイノリティ当事者の実態把握に当たっては、性的マイノリティ当事者がどの性別で社会生活を送っているかを把握することが望ましいのではないか。 | 社会的な性別は、学校、職場、家族内、コミュニティ内などで異なることが指摘されており、基本形のみで把握することは困難であるが、調査の目的に応じ、設問を追加するなど検討することは可能である。 |

¹⁰ なお、「その他」の選択肢を用いても期待通りの結果が得られるとは限らないことが指摘されている。例えば、平森大規.(2024). 「性別を「その他」と回答する人はみな性的マイノリティなのか？—ジェンダー統計の精緻化に向けたクィア人口学的分析—」 『国際ジェンダー学会誌』 22:52-65. では、性別の把握方法を検証した調査において、性別に関する設問において「その他」と回答した回答者に、本報告書において基本形としているジェンダーアイデンティティの把握方法を用いた設問に回答してもらったところ、当事性を有すると判断される人（トランスジェンダーに該当する人）は41.0%に留まったことが報告されている。

(6) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査における配慮事項

文献調査、ヒアリング調査及び企画委員会での議論を踏まえて、性的マイノリティ当事者を対象とした調査における配慮事項を図表 15「性的マイノリティ当事者を対象とした調査における配慮事項」(p. 58) のとおり整理した(具体的な既存の事例については、参考資料「IV. 1. (3) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査における配慮事項」(p. 88) を参照のこと)。

図表 15 性的マイノリティ当事者を対象とした調査における配慮事項

| | 1. 留意事項 | 2. 留意する内容 |
|--------------|----------------|--|
| a. 調査票への記載事項 | ①説明事項 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 調査目的、結果の用途等の調査概要を簡潔かつ明確に説明する。 ✓ 調査対象者の説明に当たっては、調査実施主体の意図と回答者の受け止め方の齟齬を減らすよう調査の趣旨と調査対象者の関わりを説明する。 ✓ 用語の定義等の記載を検討する。 ✓ 問合せ先や回答中に気分が悪くなった場合の相談先を掲載する。 |
| | ②情報の取扱い方針の明示 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 個人情報の取得・処理方法等について明示する。 ✓ 無記名式であることを明記する。 ✓ 結果の公表や調査結果の還元方法について明示する。 |
| | ③回答方法に関する説明 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 答えにくい質問がある可能性を事前に説明する。 ✓ 途中で回答をやめることができることや回答を辞退しても不利益がないことを説明する。 |
| | ④関連情報の提供 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 調査に関する問合せ先、性的指向・ジェンダーアイデンティティに関する相談窓口(団体、地方公共団体、弁護士等)を掲載する。SNS相談や夜間でも相談できる窓口が望ましい。 ✓ 過去の調査や関連資料等の情報提供をする。 |
| b. 調査設計上の留意点 | ⑤機微な設問の要否の検討 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 回答に抵抗を感じる可能性のある設問の有無、要否を確認、検討する。具体的には、居住地、結婚や子育てに関する内容、人間関係に関する内容、収入や学歴等社会経済的状況に関する内容など。 ✓ 過去の困難経験等の把握に当たっては、回答者の心理的な負担に配慮する。調査の趣旨を丁寧に説明し、ポジティブな経験に関する設問を設けるなど心理的な負担を和らげる工夫を検討する。 |
| | ⑥用いる文言の検討 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性を念頭に置いた設問文・選択肢を用い、性的マイノリティ当事者について否定的な表現になっていないか確認する。 ✓ 注意が必要な言葉や概念について、誤用がないよう定義や社会における使い方を確認する。 |
| | ⑦設問の答えやすさへの配慮 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 該当する選択肢がないということがないように、幅広い選択肢を設け、「回答しない」「言いたくない」、自由記載欄等を設けることを検討する。 ✓ 調査全体の趣旨として記載をした内容と重複する場合であっても、個々の設問において設問の趣旨を個別に説明する。 |
| | ⑧回答方法の検討 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 匿名性が確保できているか確認する。 ✓ 必須/任意回答設定の必要性を検討する。 ✓ ウェブ回答を可能にすることで、回答における心理的な負担を軽減できる可能性があることから、ウェブ回答またはウェブ回答の併用を検討する。 ✓ 回答者において様々な意見があること、よりよい調査方法への改善点が見つかる可能性があることから、調査に対する意見を記入できる欄を設けることを検討する。 |
| c. 調査実施上の留意点 | ⑨有識者の監修・当事者の参画 | <ul style="list-style-type: none"> ✓ 適切な調査設計・分析を行うため、専門分野の有識者から構成される会議体を設ける等により、有識者による監修を受けることが望ましい。 ✓ 複数名の性的マイノリティ当事者及び支援団体等に参画や協力を依頼することが望ましい。 |

(7) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査項目

1) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査において想定される調査項目

性的マイノリティを対象とした調査に関し、共通で設定可能として想定される調査項目について、文献調査を踏まえて検討を行い、図表 16「性的マイノリティ当事者を対象とした調査に想定される調査項目」(p. 59) のとおり整理した(具体的な既往調査の事例については、参考資料「IV. 1. (4) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査項目」(p. 94) を参照)。

ただし、これらの調査項目には機微な情報が含まれることから、個別の調査目的に応じ、慎重に検討する必要がある。また、検討においては、上述の「(6) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査における配慮事項」も参照可能である。

図表 16 性的マイノリティ当事者を対象とした調査に想定される調査項目

| 分類 | 調査項目 |
|-------------------------|--|
| ①基本属性の項目 | <ul style="list-style-type: none">・ 年齢・ 居住地・ 最終学歴・ 同居者、パートナーの有無／関係性(例：法律婚、自治体のパートナーシップ制度の利用など) |
| ②回答者の暮らし向きに関する項目 | <ul style="list-style-type: none">・ 仕事・就労の状況・ 収入・経済的状況・ 住まい・ 心身の健康状態 |
| ③カミングアウトやアウティングに関わる項目 | <ul style="list-style-type: none">・ カミングアウトの有無、相手、人数・ カミングアウトすることへの意識・ カミングアウトした後の周囲の対応、対応への満足度・ カミングアウトしていない理由・ アウティングされた経験 |
| ④困りごとやハラスメントに関する言動に係る項目 | <ul style="list-style-type: none">・ 恋愛、結婚や人間関係等について悩みや困りごとを尋ねる設問・ 性的マイノリティ当事者への無理解に基づく言動を見聞きした経験・ 性的指向やジェンダーアイデンティティに関するいじめやハラスメントを見聞きした経験 |
| ⑤相談に関する項目 | <ul style="list-style-type: none">・ 相談先の有無及び具体的な相談先 |

2) その他、今後の性的マイノリティ当事者を対象とした調査

ヒアリング調査では、広く性的マイノリティ当事者の実態を把握する調査のほか、孤独・孤立、介護、職場、公衆衛生・医療などの分野における調査が必要であるとの意見があった。その他、性的マイノリティ当事者に関する必要な調査として、多様な性の在り方についてそれぞれの実態が把握できるような調査、都市と地方の差を把握できる調査、性的指向及びジェンダーアイデンティティを隠して生活している人の実態を捉える調査、ライフイベントを視点とした調査などが挙げられた。

(8) 参考文献

性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関する研究として参照した参考文献は以下のとおり。

HIRAMORI Daiki and KAMANO Saori. (2020). Asking about Sexual Orientation and Gender Identity in Social Surveys in Japan : Findings from the Osaka City Residents 'Survey and Related Preparatory Studies. 『人口問題研究』, 76(4), 443-466.

釜野さおり・平森大規・石田仁・小山泰代・千年よしみ・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇. (2020). 「性的指向における「決めたくない・きめていない」の回答を探るー「性的指向・性自認に関する設問の改善に向けた試験的調査」の結果よりー」.

千年よしみ. (2022). 「ミックスモード調査における郵送・ウェブ回答の回答率・回答者属性・項目無回答率の比較ー住民基本台帳からの無作為抽出による SOGI をテーマとした調査からー」『人口問題研究』, 76(44), 467-487.

平森大規・釜野さおり. (2021). 「性的指向と性自認のあり方を日本の量的調査でいかにとらえるかー大阪市民調査に向けた準備調査における項目の検討と本調査の結果ー」

平森大規. (2022). 「量的調査における性的マイノリティの課題」 (第 32 回日本家族社会学会大会テーマセッション(3)量的データからみる性的マイノリティと家族の現在ー研究の困難・研究と困難 報告要旨

平森大規・釜野さおり・小山泰代. (2023). 「性的指向と性自認のあり方 (SOGI) と家族研究ー量的調査を通じた試みー」『家族研究年報』, 48, 5-25.

平森大規・小山泰代・釜野さおり・千年よしみ・布施香奈・三部倫子・岩本健良・武内今日子・申知燕. (2023). 「高齢層の性的指向・性自認の在り方を量的調査でいかに捉えるかー認知インタビューの分析結果からー」『IPSS Working Paper Series』, 68.

IV. 参考資料

| | |
|---|-----|
| 1. 文献調査により収集した既往調査等 | 62 |
| (1) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法..... | 62 |
| (2) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査方法..... | 75 |
| (3) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査における配慮事項..... | 88 |
| (4) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査項目..... | 94 |
| 2. 性的マイノリティ当事者を対象としたヒアリング調査用資料（性的指向及びジェンダー アイデンティティの把握方法に関する意見収集用資料） | 103 |
| 3. 性的マイノリティ当事者を対象としたヒアリング調査の記録..... | 107 |
| (1) 特定非営利活動法人メリメロ | 108 |
| (2) （任意団体）性と生を考える会 | 113 |
| (3) 一般社団法人 Broken Rainbow-japan..... | 119 |
| (4) （任意団体）にじいろかぞく | 126 |
| (5) 北海道レインボー・リソースセンターL-Port..... | 132 |
| (6) （任意団体）プライド香川 | 137 |
| (7) 特定非営利活動法人 akta..... | 141 |
| (8) 特定非営利活動法人 SHIP..... | 147 |
| (9) （任意団体）ダイバーシティラウンジ富山 | 153 |
| (10) （任意団体）きんきトランス・ミーティング..... | 159 |
| (11) 一般社団法人レインボーフォスターケア..... | 165 |
| (12) 一般社団法人こどもまっふ | 172 |
| (13) 一般社団法人ピンクドット沖縄 | 178 |
| (14) 特定非営利活動法人レインボーコミュニティ coLLabo | 184 |
| (15) 一般社団法人ここいろhiroshima | 191 |
| (16) （任意団体）Tokyo Deaf LGBTQ bond..... | 196 |

1. 文献調査により収集した既往調査等

令和5年度報告書等を参考に、2015年以降に実施された性的マイノリティ当事者を対象とした既往調査を分析し、「性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法」「調査の方法」「配慮事項」「調査項目」の4つの観点から、情報を整理した。

(1) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法

1) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法（まとめ）

既存調査における性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法には、以下のような類型があった。

図表 17 性的指向の認識の把握方法

| 名称 | 把握方法 |
|----------------------|--|
| 直接的に尋ねる方法 | 選択肢の例:「異性愛者／同性愛／両性愛」、「決めたくない・決めていない」、「無性愛者」 |
| 二段階の設問を設ける方法 | 第1段階: 異性愛者か否か、あるいは性的マイノリティの当事者か否かを聞く 第2段階: 異性愛者でない、あるいは性的マイノリティの当事者であると回答した者に対して、詳細を尋ねる |
| 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法 | 性的指向の認識について尋ねる、性的な惹かれ(実際にどのような性の相手に性的に惹かれるかなど)や性行動(どのような性の在り方をする相手と性交渉をするかなど)について尋ねるもの等 |

図表 18 ジェンダーアイデンティティを含む性別情報の把握方法

| 名称 | 把握方法 |
|---------|--|
| 3ステップ方式 | 第1段階: 出生時の戸籍・出生届の性別を聞く 第2段階: 出生時の性別と別の性を認識しているか、性別違和があるかを尋ねる 第3段階: 第2段階目において、別の性を認識している、あるいは性別違和があると回答した者には、さらに性の在り方の認識について詳細を聞く(第1段階と第2段階は逆の順番としている既存調査もある) |
| 2ステップ方式 | 第1段階: 出生時の戸籍・出生届の性別を聞く 第2段階: ジェンダーアイデンティティを聞く |
| それ以外 | 性的マイノリティ当事者かどうかを直接尋ね、該当する場合には詳細を尋ねる方法等 |

2) 選択肢・集計方法の違い（まとめ）

既存調査では、同じ類型の把握方法でも、選択肢設定や集計方法に以下のような違いが見られた。

図表 19 選択肢に関する違い

| 違いの内容 | 詳細・具体例 |
|---------------------------------|--|
| 用語説明、 様々な表現への 対応 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 選択肢中に説明を記載する ・ 様々な表現を併記する 例:「アセクシュアル・無性愛者[誰に対しても性愛感情を抱かない人]」 ・ 調査票の冒頭に当該調査での定義を記載する場合もある |
| 答えたくない場合 や分からない場合 のための選択肢 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 「決めていない」「決めたくない」「わからない」(定まっていない場合や、明確にしたいと考えていない場合の選択肢) ・ 「答えたくない」「回答しない」、もしくは無回答でも次に進める設定とする（回答を希望しない場合に選べる選択肢） ・ 「考えたことがない」「質問の意味がわからない」 |
| 中間的、流動的だ と捉えている場合 のための選択肢 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 「両方」「男性と女性の間」「どちらでもない」「性別が揺れ動いている」「どちらかといえば男性／女性」等 |

図表 20 集計方法に関する違い

| 違いの内容 | 詳細・具体例 |
|---------------------------------------|--|
| 当事者・非当事者 を整理するための 分析軸の作成方 法 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 当事者か否かを直接聞き分類する場合と、性的指向やジェンダーアイデンティティに関する複数の設問の回答に基づいて分析軸を作成する場合とがある ・ 性的マイノリティ当事者かどうかで分類している調査も見られる一方、性的指向に関するマイノリティ、ジェンダーアイデンティティに関するマイノリティをそれぞれ分類している調査もある |
| 「決めたくない」 「わからない」とい った回答者の分 類 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 「決めたくない」といった回答を、性的マイノリティ当事者に含めるかどうかは、調査によって異なる |
| 性別の分類方法 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在の回答者の認識に基づいて分類する場合と、出生時の戸籍・出生届の性別に基づいて分類する場合がある |

3) 個別調査事例の性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法、出現率等

以降で、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の類型別に、調査事例及び各調査における性的マイノリティ当事者の出現率等を整理した。なお、調査票や単純集計結果が公表されている資料を抜粋している。

① 性的指向の認識の把握方法の類型別整理

性的指向の認識の把握方法に関する類型別に見た、具体的な調査事例及び出現率は以下のとおりである。

図表 21 「直接的に尋ねる方法」の具体事例
(無作為抽出調査／当事者・非当事者両者を対象とするもの)

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法(結果) ※特に示さない限り、単数回答の設問 | 分析軸 |
|--|-------------------------------------|---------------------|---|--|
| 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和 | 家族と性と多様性にかんする全国アンケート(2023) | 18,000人 (5,339件) | 次の中で、あなたにもっとも近いと思うものに○をつけてください。 「異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない [異性のみに性愛感情を抱く人]」(79.0%・4,218人) 「同性愛者[同性のみに性愛感情を抱く人]」(0.4%・19人) 「バイセクシュアル・両性愛者[男女どちらにも性愛感情を抱く人]」(1.8%・95人) 「アセクシュアル・無性愛者[誰に対しても性愛感情を抱かない人]」(0.9%・49人) 「決めたくない・決めていない」(5.6%・299人) 「質問の意味がわからない」(11.3%・603人) | ※同性愛者・両性愛者を合算して以下のとおり 「異性愛者」 「同性愛者・両性愛者」 「無性愛者」 「決めたくない・決めていない」 「質問の意味がわからない」 |
| 釜野さおり・石田仁・岩本健良・小山泰代・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇 | 大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート(2019) | 15,000人 (4,285件) | 次の中で、あなたにもっとも近いと思うものに○をつけてください。 「異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない [異性のみに性愛感情を抱く人]」(83.2%・3,567人) 「ゲイ・レズビアン・同性愛者 [同性のみに性愛感情を抱く人]」(0.7%・31人) 「バイセクシュアル・両性愛者 [男女どちらにも性愛感情を抱く人]」(1.4%・62人) 「アセクシュアル・無性愛者 [誰に対しても性愛感情を抱かない人]」(0.8%・33人) 「決めたくない・決めていない」(5.2%・222人) 「質問の意味がわからない」(7.5%・322人) 無回答(1.1%・48人) | ※分析例として以下の4つの方法を提示 ・[シスジェンダー・異性愛者]と[トランスジェンダー] ・[シスジェンダー・異性愛者]と[LGB] ・[シスジェンダー・異性愛者]と[LGBT] ・[シスジェンダー・異性愛者]と[LGBT/A] |

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法(結果) ※特に示さない限り、単数回答の設問 | 分析軸 |
|------|-----------------------------|---------------------|--|---|
| 埼玉県 | 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査(2020) | 15,000人 (5,606件) | 次の中で、あなたに最も近いと思うものを選んでください。 「異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない [異性のみに性愛感情を抱く人]」(83.8%・4,697人) 「ゲイ・レズビアン・同性愛者 [同性のみに性愛感情を抱く人]」(0.3%・19人) 「バイセクシュアル・両性愛者 [男女どちらにも性愛感情を抱く人]」(1.6%・92人) 「アセクシュアル・無性愛者 [誰に対しても性愛感情を抱かない人]」(0.7%・42人) 「決めたくない・決めていない」(3.6%・204人) 「質問の意味がわからない」(6.5%・366人) 無回答(3.3%・186人) | 「性的マイノリティ」と「性的マイノリティ以外」に分け、さらに「性的マイノリティ」を「性自認に関するマイノリティ」「性的指向に関するマイノリティ」に分類 |

図表 22 「直接的に尋ねる方法」の具体事例

(オープン型調査(ウェブ) / 当事者・非当事者両者を対象とするもの)

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法(結果) ※特に示さない限り、単数回答の設問 | 分析軸 |
|------|----------------------|------------------|--|---|
| 長崎県 | 性的少数者に関するアンケート(2019) | 688人 (※) | あなたの恋愛や性愛の傾向を教えてください。 「異性愛(ヘテロセクシュアル)」(24.7%・21人) 「同性愛(ゲイ・レズビアン)」(14.1%・12人) 「両性愛/全性愛(バイセクシュアル/パンセクシュアル)」(40.0%・34人) 「無性愛(アセクシュアル・エイセクシュアル) < 恋愛感情がわからない >」(7.1%・6人) 「わからない」(9.4%・8人) 「その他」(4.7%・4人) | CH(シスジェンダーヘテロセクシュアル)、非異性愛者、T(トランスジェンダー) |

(※)オープン型調査(ウェブ)(県ホームページへの掲載、ポスター・チラシ、調査委託先の当事者団体からの周知により回収)のため、数値は県民全体の傾向ではない。

図表 23 「二段階の設問を設ける方法」の具体事例
 (無作為抽出調査／当事者・非当事者両者を対象とするもの)

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法(結果) ※特に示さない限り、単数回答の設問 | 分析軸 |
|------------------------|---------------------------------|--------------------|---|-------------|
| 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也 | 性的マイノリティについての意識 2015年全国調査(2015) | 2,600人 (1,259件) | 問 57 あなたはご自身を、異性愛者(異性だけに恋愛感情を抱いたり、性的に惹かれたりする人)だと思いますか。 問 58【問 57 で「いいえ」と回答した人】あなたご自身の認識にもっとも近いものに○をつけてください。 問 57: 「はい」(65.2%・821人) 「考えたことがない」(24.2%・305人) 「いいえ」(4.9%・62人) 無回答(5.6%・71人) 問 58: 「同性愛・ゲイ・レズビアン、両性愛・バイセクシュアル」(0.3%・4人) 「決めたくない・決めていない」(10人・0.8%) 「わからない」(30人・2.4%) 無回答(14人・1.1%) | クロス集計での利用なし |

図表 24 「恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」の具体事例
 (無作為抽出調査／当事者・非当事者両者を対象とするもの)

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法(結果) ※特に示さない限り、単数回答の設問 | 分析軸 |
|------|-----------------------|--------------------|---|---|
| 新潟県 | 性の多様性等に係る県民意識調査(2023) | 3,000人 (1,376件) | あなたの恋愛の対象となる性別について、あてはまるものをお答えください。 「異性が好き」(93.0%) 「同性が好き」(0.5%) 「両方(男性・女性ともに)が好き」(1.8%) 「好きになる性はない」(0.8%) 「決めていない・決めたくない」(1.4%) 「その他(わからない・回答しない等)」(2.1%) 無回答(0.3%) | 性自認についての質問の回答も含めて整理 「性的マイノリティ」「性的マイノリティ以外」 |

② ジェンダーアイデンティティを含む性別情報の把握方法の類型別整理

ジェンダーアイデンティティを含む性別情報の把握方法に関する類型別に見た、具体的な調査事例及び出現率は以下のとおりである。

図表 25 「3ステップ方式」の具体事例
(無作為抽出調査／当事者・非当事者両者を対象とするもの)

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法(結果) ※特に示さない限り、単数回答の設問 | 分析軸 |
|--|-------------------------------------|---------------------|--|---|
| 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和 | 家族と性と多様性にかんする全国アンケート(2023) | 18,000人 (5,339件) | 1. 出生時の戸籍・出生届の性別 2. 今の性別を出生時の性別と同じだととらえているか 「出生時の性別と同じ」(98.7%・5,267人) 「別の性別だととらえている」・「違和感がある」(0.6%・32人) 3. 【別の性別だととらえている、もしくは違和感がある場合】今の認識にもっとも近い性別 男性／女性／男性・女性にあてはまらない(具体的に回答:) | ・現在認識する性別に基づいて性別を分類 男性／女性／男性・女性にあてはまらない ・シスジェンダー／トランスジェンダー |
| 釜野さおり・石田仁・岩本健良・小山泰代・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇 | 大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート(2019) | 15,000人 (4,285件) | 1. 出生時の戸籍・出生届の性別 2. 今の性別を出生時の性別と同じだととらえているか 「出生時の性別と同じ」(98.8%・4,219人) 「別の性別」(0.2%・10人)、「違和感がある」(0.6%・27人) 3. 【別の性別だととらえている、もしくは違和感がある場合】今の認識にもっとも近い性別 男性／女性／その他(具体的に回答:) | ・出生時の戸籍・出生届の性別に基づいて性別を分類 ・トランスジェンダーでない／トランスジェンダー |
| 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也 | 性的マイノリティについての意識 2015年全国調査(2015) | 2,600人 (1,259件) | 1. 戸籍上の性別 2. 自分の性別を戸籍上の性別と同じだと認識しているか 「はい」(95.2%・1,199人)、「いいえ」(0.4%・5人)、無回答(4.4%・55人) 3. (「いいえ」の場合)自身の認識にもっとも近い性別 男性／女性／その他() | 性自認に基づいて性別を分類 |
| 埼玉県 | 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査(2020) | 15,000人 (5,606件) | 1. 出生時の戸籍・出生届の性別 2. 今の性別を出生時の性別と同じだととらえているか 「出生時の性別と同じ」(98.5%・5,523人)、「別の性別だととらえている」(0.2%・13人)、「違和感がある」(0.6%・32人)、無回答(0.7%・38人) 3. (今の性別が出生時の性別と同じではない場合)今の認識にもっとも近い性別 男性(7人)／女性(6人)／両方(8人)／間(6人)／どちらでもない(4人)／性別が揺れ動いている(9人)／その他(4人)／無回答(1人) | 「性的マイノリティ」と「性的マイノリティ以外」に分け、さらに「性的マイノリティ」を「性自認に関するマイノリティ」「性的指向に関するマイノリティ」と分類 |

図表 26 「3ステップ方式」の具体事例
 (オープン型調査(ウェブ) / 当事者を対象とするもの)

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法(結果) ※特に示さない限り、単数回答の設問 | 分析軸 |
|----------------------|--------------------------|--------------------------------------|---|---|
| 三宅大二郎・今徳はる香・中村健・田中裕也 | Aro/Ace 調査 2022(2022) | アロマンティック/アセクシュアル・スペクトラム (*)2,318人 | 問 12 出生時の性別と、現在自分が捉えている性別が「一致」していると思いますか。「出生時の性別」とは、出生届や出生時の戸籍などに記載された性別のことを指します。 問 13 【12.で「思う」の場合】出生時の性別を、以下から選択してください。 問 14 【12.で「思わない」「わからない」の場合】現在、自分の性別についてどのように捉えていますか。以下の中から一番近いものを選択してください。 問 12 「思う」(65.1%)、「思わない」(15.0%)、「わからない」(19.9%) 問 13 「女性」(94.7%)、「男性」(5.3%) 問 14 「女性」(1.0%)、「どちらかといえば女性」(20.7%)、「どちらかといえば男性」(2.1%)、「男性」(1.2%)、「女性と男性の間」(6.5%)、「女性と男性の両方」(3.2%)、「性別がないと感じる」(34.4%)、「状況などによって変わる・揺れ動く」(16.8%)、「わからない」(6.7%)、「その他」(7.3%) | シスジェンダー／非シスジェンダー ※問 12.で「思わない」「わからない」の場合、非シスジェンダーに分類 |

(*)それに近い、そうかもしれないと思う人を含む。

図表 27 「2ステップ方式」の具体事例

(無作為抽出調査／当事者・非当事者両者を対象とするもの)

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法(結果) ※特に示さない限り、単数回答の設問 | 分析軸 |
|------|-----------------------|--------------------|---|--|
| 新潟県 | 性の多様性等に係る県民意識調査(2023) | 3,000人 (1,376件) | <p>問1 あなたが出生時に指定された性別(戸籍上の性別)について、あてはまるものをお答えください。</p> <p>問2 あなたが出生時に指定された性別(戸籍上の性別)に関わらず、あなたが現在、自分自身で認識している性別について、あてはまるものをお答えください。</p> <p>問1 「男性」(50.0%)、「女性」(50.0%)、「その他(回答しない等)」(0.0%)</p> <p>問2 「男性」(49.3%)、「女性」(49.1%)、「男性・女性の間」(0.4%)、「男性・女性の両方」(0.2%)、「男性・女性のどちらでもない」(0.3%)、「時により変化する」(0.5%)、「その他(わからない・回答しない等)」(0.3%)</p> | 「問1 戸籍上の性別」と、「問2 自分自身で認識している性別」が異なる人を「性的マイノリティ」に分類 |

図表 28 「2ステップ方式」の具体事例

(オープン型調査(ウェブ)／当事者・非当事者両者を対象とするもの)

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法(結果) ※特に示さない限り、単数回答の設問 | 分析軸 |
|------|----------------------|------------------|--|---|
| 長崎県 | 性的少数者に関するアンケート(2019) | 688人 (※) | <p>Q4 あなたの出生時の戸籍や出生届に記載された性別を教えてください。</p> <p>Q5 あなたの自認している性別を教えてください。</p> <p>Q4 「女性」(63.5%)、「男性」(36.5%)</p> <p>Q5 「女性」(57.3%)、「男性」(34.7%)、「Xジェンダー」(5.5%)、「わからない」(2.2%)、「その他」(0.3%)</p> | CH(シスジェンダーヘテロセクシュアル)、非異性愛者、T(トランスジェンダー) |

(※)オープン型調査(ウェブ)(県ホームページへの掲載、ポスター・チラシ、調査委託先の当事者団体からの周知により回収)のため、数値は県民全体の傾向ではない。

図表 29 「当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」の具体事例
 (無作為抽出調査／当事者・非当事者両者を対象とするもの)

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法(結果) ※特に示さない限り、単数回答の設問 | 分析軸 |
|------|---------------------------|------------------|---|--------------------------|
| 板橋区 | パートナーシップ制度に関する調査報告書(2022) | 2,000人 (589件) | (2)あなたはご自身が性的マイノリティの当事者だと思いますか。 (3)(2)で「はい」の回答を選択した方は、ご自身の認識に近いものを選んでください。(複数回答可) (2)「はい」(3.1%・18人)、「いいえ」(93.5%・551人)、「わからない」(2.2%・13人)、無回答(1.2%・7人) (3)「L(レズビアン:女性の同性愛者)」(3人) 「G(ゲイ:男性の同性愛者)」(0人) 「B(バイセクシュアル:両性愛者)」(7人) 「T(トランスジェンダー:心と体の性が一致しない人)」(1人) 「X(エックスジェンダー:自認する性別が男女どちらでもない、どちらとも言い切れない人)」(1人) 「Q(クエスチョニング:自らの性のあり方などについて特定の枠に属さない人、分からない人)」(3人) 「わからない、決めたくない」(1人) 「その他()」(3人) 無回答(0人) | (2)において、「はい」と答えた方を当事者と定義 |

③ 【参考】設問構成や分類に関する補足資料

3ステップ方式の具体事例として紹介した埼玉県「多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査（2020年）」の具体的な設問構成は図表 30 に示すとおりである。

その回答結果をもとに、図表 31 (p. 71)、図表 32 (p. 72) のとおり、当該調査における「性的マイノリティ」を定義づけて、調査結果の集計・分析を行っている。

図表 30 【参考】埼玉県「多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査（2020年）」における性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法

| | |
|---|-----------------|
| <p>ここからは、あなたの性別、恋愛、性にかかわることをうかがいます。 性のあり方を多角的にとらえ、今後の埼玉県の施策を考えるうえで 重要となつてまいりますので、無理のない範囲でお答えください。</p> | |
| <p>問23 あなたの性別をお答えください。（出生時の戸籍・出生届の性別） ※「出生時」とは、生まれたときにもっとも近い時点のことを指します。 (あてはまる番号1つに○)</p> | |
| 1. 男性 | 2. 女性 |
| <p>問24 あなたは今のご自分の性別を、出生時の性別（問23で○をつけたもの）と同じだととらえていますか。 (あてはまる番号1つに○)</p> | |
| 1. 出生時の性別と同じ | 2. 別の性別だととらえている |
| | 3. 違和感がある |
| <p>問25（問24で 2. 別の性別だととらえている や 3. 違和感がある と答えた方におたずねします。） 今の認識にもっとも近い性別をお答えください。（あてはまる番号1つに○）</p> | |
| 1. 男性 | |
| 2. 女性 | |
| 3. 男性・女性のどちらでもあると認識している | |
| 4. 男性・女性の間であると認識している | |
| 5. 男性・女性のどちらでもないと認識している | |
| 6. 自分の性別が認識動いていると認識している | |
| 7. その他（具体的に | ） |
| <p>問26 次の中で、あなたにもっとも近いと思うものに○をつけてください。（あてはまる番号1つに○）</p> | |
| 1. 異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない（異性のみに性愛感情を抱く人） | |
| 2. ゲイ・レズビアン・同性愛者（同性のみに性愛感情を抱く人） | |
| 3. バイセクシュアル・両性愛者（男女どちらにも性愛感情を抱く人） | |
| 4. アセクシュアル・無性愛者（誰に対しても性愛感情を抱かない人） | |
| 5. 決めたくない・決めていない | |
| 6. 質問の意味が分からない | |
| <p>問27（問26で 5. 決めたくない・決めていない と答えた方におたずねします。） その理由でもっとも近いものは次のうちどれですか。（あてはまる番号1つに○）</p> | |
| 1. 自分は異性愛者ではなく、クィア、パンセクシュアルなど、別のアイデンティティをもっている | |
| 2. まだ決めていない、今決めようとしている最中、迷っている、1つに決められない | |
| 3. 自分に「異性愛者」、「同性愛者」、「両性愛者」、「無性愛者」などといったラベルをつけていない・つけたくない、分類しない・したくない | |
| 4. その他（具体的に | ） |
| 5. 問26 で使われていた用語や、質問の意味がわからなかった | |

(出所) 埼玉県 (2020) 「埼玉県 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査報告書」

図表 31 【参考】埼玉県「多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査（2020年）」
における性的マイノリティの定義①

（3）本調査における性的マイノリティの定義について

・本調査における『性的マイノリティ』は、以下のように定義する。

①問23（出生時の性別）で「1. 男性」又は「2. 女性」と回答し、

問24（出生時の性別についての違和感）で

「2. 別の性別」又は「3. 違和感あり」と回答し、

問25（今の認識）で

「2. 女性」又は「1. 男性」、

「3. 男性・女性どちらでも」、「4. 男性・女性の間」、

「5. 男性・女性のどちらでもない」、「6. 揺れ動いている」のいずれかを回答

②問23が無回答で、

問24（出生時の性別についての違和感）で

「2. 別の性別」又は「3. 違和感あり」と回答し、

問25（今の認識）で

「1. 男性」又は「2. 女性」、

「3. 男性・女性どちらでも」、「4. 男性・女性の間」、

「5. 男性・女性のどちらでもない」、「6. 揺れ動いている」のいずれかを回答

③問26（性的指向）で「2. 同性愛者」、「3. 両性愛者」、「4. 無性愛者」のいずれかを回答

④問26（性的指向）で「5. 決めたくない・決めていない」を回答し、

問27（理由）で

「1. 異性愛者ではなく、クイア、パンセクシャルなど別のアイデンティティを持っている」

又は「2. まだ決めていない等」のいずれかを回答

（出所）埼玉県（2020）「埼玉県 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査報告書」

図表 32 【参考】埼玉県「多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査（2020年）」
における性的マイノリティの定義②

| | | | |
|----------------------|---|---|---|
| 性的自認に関する 性的マイノリティ | トランスジェンダー (生まれたときに割り当てられた性別と自認する性別が一致しない人) | 男女いずれかの性を自認している (割り当てられた性別が男性で現在の自認が女性である人及び割り当てられた性別が女性で現在の自認が男性である人) | 問 23 で「1」又は「2」を回答 ⇒問 24 で「2」又は「3」を回答 ⇒問 25 で「2」又は「1」を回答 |
| | | | あるいは、 問 23 で無回答 ⇒問 24 で「2」又は「3」を回答 ⇒問 25 で「1」又は「2」を回答 |
| | | 男女いずれの性も自認していない (Xジェンダー・ノンバイナリー) | 問 23 で「1」又は「2」を回答 ⇒問 24 で「2」又は「3」を回答 ⇒問 25 で「3」から「6」のいずれかを回答 |
| | | | あるいは、 問 23 で無回答 ⇒問 24 で「2」又は「3」を回答 ⇒問 25 で「3」から「6」のいずれかを回答 |
| 性的指向に関する 性的マイノリティ | 同性愛者 | | 問 26 で「2」を回答 |
| | 両性愛者 | | 問 26 で「3」を回答 |
| | 無性愛者 | | 問 26 で「4」を回答 |
| | クエスチョニング (※注) | | 問 26 で「5」を回答 ⇒問 27 で「1」又は「2」を回答 |

※注：クエスチョニングを、性自認も含めた自分のセクシュアリティ（性のあり方）を決めたくない、決めていない人と定義する場合は、問 25 のうち「3」～「6」を回答した人の中にもクエスチョニングに含めることができる人が存在する可能性がある。

(出所) 埼玉県 (2020) 「埼玉県 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査報告書」

3ステップ方式の具体事例として紹介した釜野他「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」では、**図表 33**のとおり、性的指向及びジェンダーアイデンティティを把握する設問と別に恋愛感情を抱く相手や性的に惹かれる相手についての設問も設定している。

図表 33 【参考】「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート（2019）」より、恋愛感情や性的な惹かれを尋ねる設問の例

| | | | |
|-----------------------------|----------------------|--|----------------------|
| 問 47 | | 次の (1)~(3) について、(ア) <u>これまでのこと</u> と、(イ) <u>最近の 5 年間のこと</u> について、それぞれもっとも近いものを 1~6 から 1 つずつ選んで○をつけてください。 | |
| (1) あなたが恋愛感情を抱く相手 | | | |
| (ア) これまで (○は 1 つ) | | (イ) 最近の 5 年間 (○は 1 つ) | |
| 1 | 男女どちらにも恋愛感情を抱いたことがない | 1 | 男女どちらにも恋愛感情を抱いたことがない |
| 2 | 男性のみ | 2 | 男性のみ |
| 3 | ほとんどが男性 | 3 | ほとんどが男性 |
| 4 | 男性と女性同じくらい | 4 | 男性と女性同じくらい |
| 5 | ほとんどが女性 | 5 | ほとんどが女性 |
| 6 | 女性のみ | 6 | 女性のみ |
| (2) あなたが性的に惹(ひ)かれる相手 | | | |
| (ア) これまで (○は 1 つ) | | (イ) 最近の 5 年間 (○は 1 つ) | |
| 1 | 男女どちらにも性的に惹かれたことがない | 1 | 男女どちらにも性的に惹かれたことがない |
| 2 | 男性のみ | 2 | 男性のみ |
| 3 | ほとんどが男性 | 3 | ほとんどが男性 |
| 4 | 男性と女性同じくらい | 4 | 男性と女性同じくらい |
| 5 | ほとんどが女性 | 5 | ほとんどが女性 |
| 6 | 女性のみ | 6 | 女性のみ |
| (3) あなたがセックスをする相手 | | | |
| (ア) これまで (○は 1 つ) | | (イ) 最近の 5 年間 (○は 1 つ) | |
| 1 | セックスをしたことがない | 1 | セックスをしたことがない |
| 2 | 男性のみ | 2 | 男性のみ |
| 3 | ほとんどが男性 | 3 | ほとんどが男性 |
| 4 | 男性と女性同じくらい | 4 | 男性と女性同じくらい |
| 5 | ほとんどが女性 | 5 | ほとんどが女性 |
| 6 | 女性のみ | 6 | 女性のみ |

(出所) 釜野さおり・石田仁・岩本健良・小山泰代・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇 (2019) 「大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート」

注) 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和 (2023) 「家族と性と多様性にかんする全国アンケート」では、同様の設問が用いられているが、選択肢 1 の文言について「男女どちらにも」の部分が「誰に対しても」に変更されている。また、選択肢 7 として「1~6 にあてはまらない ()」が追加されている。

(2) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査方法

1) 調査方法 (まとめ)

既存調査を①性的マイノリティ当事者のみを対象とする調査、②性的マイノリティ当事者及び非当事者を対象とする調査に大別し、用いられている調査方法について整理したところ、主に無作為抽出法、オープン型調査(ウェブ)、モニター調査(クローズド型調査(ウェブ))が確認された。なお、既存調査では、県政モニターによる調査は理解浸透度調査においてのみ確認されたが、参考情報として下表に掲載する。

図表 34 調査方法

| ①性的マイノリティ当事者のみを対象とする調査 | ②性的マイノリティ当事者及び非当事者を対象とする調査 |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ■ オープン型調査(ウェブ) ・ 実施主体の種別: 研究者／研究グループ、その他 ・ 回収方法: ウェブ(一部郵送・FAXの調査もあり) | <ul style="list-style-type: none"> ■ 無作為抽出法 ・ 実施主体の種別: 地方自治体、研究者／研究グループ ・ 回収方法: 郵送のみ、郵送・ウェブ併用、留置法(一部郵送回収)等 ・ 抽出方法: 層化二段無作為抽出法、単純無作為抽出法等 ・ 母集団: 住民基本台帳、選挙人名簿抄本等 ■ モニター調査(クローズド型調査(ウェブ)) ・ 実施主体の種別: 地方自治体、企業・就労、その他 ・ 回収方法: ウェブ ■ オープン型調査(ウェブ) ・ 実施主体の種別: 地方自治体、企業・就労 ・ 回収方法: ウェブ ■ (参考)県政モニターによる調査 ・ 実施主体の種別: 地方自治体 ・ 回収方法: 郵送・ウェブ併用、ウェブのみ等 ・ 調査対象: 県政モニター、県政サポーター、広聴モニター等 |

2) 性的マイノリティ当事者の回答者数を確保するための工夫（まとめ）

既存調査では、性的マイノリティ当事者の回答者数確保のための工夫として、主に以下のような内容が確認された。なお、無作為抽出法や県政モニターによる調査は整理の対象外としている。

図表 35 性的マイノリティ当事者の回答者数確保の工夫

| ①性的マイノリティ当事者のみを対象とする調査 | ②性的マイノリティ当事者及び非当事者を対象とする調査 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ■ オープン型調査(ウェブ) ・ 性的マイノリティ当事者が利用するウェブサイトやアプリにバナー広告を掲出 ・ SNS を通じた募集 ・ 調査実施団体のウェブサイトやブログでの広報 ・ メーリングリストやグループチャットでの広報(各地の性的マイノリティ当事者の団体等に協力依頼、性的マイノリティ当事者を対象としたメーリングリスト) ・ 性的マイノリティ当事者を対象とした雑誌への記事掲載 ・ フライヤー ・ 性的マイノリティ当事者の支援団体のニュースレター | <ul style="list-style-type: none"> ■ モニター調査(クローズド型調査(ウェブ)) ・ 調査の配信数の確保 ・ 他調査が実施した大規模スクリーニング調査の出現率をもとに、実回収数から内訳の補正 ・ ウェイトバック集計の実施(人口構成比、性的マイノリティ当事者の人口割合等に応じて) ・ (地方自治体を実施する場合)単独自治体ではなく、調査対象者の居住地を拡大(関東圏・関西圏等) ■ オープン型調査(ウェブ) ・ 地方自治体のホームページへの掲載、ポスター掲示、チラシ配置等 ・ 調査委託先(性的マイノリティ当事者の支援団体)の各種活動への参加者やその知人への周知 ・ ウェブサイトや SNS を通じた広報 ・ 講演会 ・ 性的マイノリティ当事者の支援団体の施設でのポスター掲示 ・ 調査実施主体(性的マイノリティ当事者の支援団体)のクライアントへのメールマガジンでの協力依頼 ・ 調査実施主体(性的マイノリティ当事者の支援団体)のメンバーへの協力依頼 ・ 就労支援の主体への協力依頼 |

3) 個別調査事例の調査方法等

以降で、個別調査事例の調査手法を、調査手法の類型別に整理した。

回収率に影響があると考えられる項目（実施主体、実施主体の種別、性的マイノリティ当事者のみを対象としているか、回収方法）について公開情報より整理するとともに、回収率と有効回収票の件数を一覧できるように整理した。

県政モニターによる調査の回収率が高いが、既存調査では理解浸透度調査のみ確認されたため、あくまでも参考値である。

① 無作為抽出法

図表 36 無作為抽出調査の調査事例

| 調査名・調査年 | 調査主体 | 調査主体の種別 | 性的マイノリティ当事者のみ対象 | 回収方法 | 回収率 | 有効回収票(集計対象) |
|-------------------------------------|--|------------|-----------------|------------|-------|-------------------------|
| 性の多様性等に係る県民意識調査(2023) | 新潟県 | 地方公共団体 | — | 併用(郵送・ウェブ) | 47.1% | 1,376 (有効回答率: 45.9%) |
| 埼玉県 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査(2020) | 埼玉県 | 地方公共団体 | — | 併用(郵送・ウェブ) | 37.6% | 5,606 |
| 性的マイノリティに関する市民意識調査報告書(2019) | 岡山市 | 地方公共団体 | — | 併用(郵送・ウェブ) | 36.3% | 1,089 |
| 家族と性と多様性にかんする全国アンケート(2023) | 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和 (独立行政法人日本学術振興会 科学研究費助成事業「性的指向と性自認の人口学の構築—全国無作為抽出調査の実施」(JSPS 科研費 JP21H04407)) | 研究者／研究グループ | — | 併用(郵送・ウェブ) | 29.9% | 5,339 |
| 大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート(2019) | 釜野さおり・石田仁・岩本健良・小山泰代・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇 (独立行政法人日本学術振興会 科学研究費助成事業「性的指向と性自認の人口学—日本における研究基盤の構築」(JSPS 科研費 JP16H03709)) | 研究者／研究グループ | — | 併用(郵送・ウェブ) | 28.9% | 4,285 |
| 性的少数者(セクシュアル・マイノリティ)など性 | 名古屋市 | 地方公共団体 | — | 郵送 | 46.6% | 4,655 |

| 調査名・調査年 | 調査主体 | 調査主体の種別 | 性的マイノリティ当事者のみ対象 | 回収方法 | 回収率 | 有効回収票(集計対象) |
|--------------------------------------|--|------------|-----------------|-----------------|-------|-------------|
| 別にかかわる市民意識調査(2018) | | | | | | |
| パートナーシップ制度に関する調査報告書(2022) | 板橋区 | 地方公共団体 | — | 郵送 | 29.5% | 589 |
| 性的マイノリティについての意識:2019年(第2回)全国調査(2019) | 石田仁・風間孝・釜野さおり・河口和也・平森大規・吉仲崇 (独立行政法人日本学術振興会 科学研究費助成事業「セクシュアル・マイノリティをめぐる意識の変容と施策に関する研究」(JSPS 科研費 18H03652)) | 研究者／研究グループ | — | 留置法 (一部郵送回収) | 47.9% | 2,632 |
| 性的マイノリティについての意識2015年全国調査(2015) | 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也 (独立行政法人日本学術振興会 科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」(JSPS 科研費 25283018)) | 研究者／研究グループ | — | 留置法 (一部郵送回収) | 48.4% | 1,259 |

② オープン型調査 (ウェブ)

図表 37 オープン型調査 (ウェブ) の調査事例

| 調査名・調査年 | 調査主体 | 調査主体の種別 | 性的マイノリティ当事者のみ対象 | 回収方法 | 回収率 | 有効回収票(集計対象) |
|--|---|------------|-----------------|------|-----|-------------|
| LGBTQ 医療・福祉調査 2023(2023) | 認定 NPO 法人 ReBit | その他 | ○ | ウェブ | — | 961 |
| 第3回 LGBTQ 当事者の意識調査(2023) | 日高庸晴(ライフネット生命保険株式会社委託) | 研究者／研究グループ | ○ | ウェブ | — | 10,449 |
| Aro/Ace 調査 2022(2022) | 三宅大二郎・今徳はる香・中村健・田中裕也 | その他 | ○ | ウェブ | — | 2,318 |
| 日本における性的マイノリティの出産・子育てに関する実態把握に関する調査報告書—2021年に実施したインターネット調査の結果から—(2021) | 新ヶ江章友・長村さと子・茂田まみこ・渡辺ゆきこ・手塚りさ・高橋千春・吉田ひかる | その他 | ○ | ウェブ | — | 534 |

| 調査名・調査年 | 調査主体 | 調査主体の種別 | 性的マイノリティ当事者のみ対象 | 回収方法 | 回収率 | 有効回収票(集計対象) |
|--|--|------------|-----------------|---------------|-----|-------------|
| トランスジェンダーとセクシュアルヘルス2021年オンライン調査から(2021) | トランスジェンダーとセクシュアルヘルス・プロジェクト (厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「HIV 受検勧奨のための性産業従事者や事業者等に対する効果的な介入に向けた研究」) | 研究者／研究グループ | ○ | ウェブ | — | 276 |
| Aro/Ace 調査 2020(2020) | 三宅大二郎・今徳はる香・中村健 | その他 | ○ | ウェブ | — | 1,685 |
| 第2回 LGBT 当事者の意識調査～世の中の変化と、当事者の生きづらさ～(2020) | 日高庸晴(ライフネット生命保険株式会社委託) | 研究者／研究グループ | ○ | ウェブ | — | 10,769 |
| LGBT 当事者の意識調査(2016) | 日高庸晴(ライフネット生命保険株式会社委託) | 研究者／研究グループ | ○ | ウェブ | — | 15,064 |
| LGBT 当事者アンケート調査～2600人の声から～(2015) | 日本放送協会 | その他 | ○ | ウェブ(一部郵送・FAX) | — | 2,600 |
| REACH Online 2014(2014) | 日高庸晴(研究代表者) (厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究」) | 研究者／研究グループ | ○ | ウェブ | — | 20,821 |
| REACH Online 2005(2005) | 日高庸晴・木村博和・市川誠一 | 研究者／研究グループ | ○ | ウェブ | — | 5,731 |
| LGBTQ 子ども・若者調査 2022(2022) | 認定 NPO 法人 ReBit | 学校・児童生徒 | ○ | ウェブ | — | 2,623 |
| LGBT の学校生活に関する実態調査(2013) | いのちリスペクト・ホワイトリボンキャンペーン(特定非営利活動法人ストップいじめ!ナビ) | 学校・児童生徒 | ○ | ウェブ | — | 609 |
| 性的少数者に関するアンケート(2019) | 長崎県 | 地方公共団体 | — | ウェブ | — | 688 |
| niji VOICE 2022 ～LGBTQ の仕事と暮らしに関するアンケート調査～(2022) | 特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ | 企業・就労 | — | ウェブ | — | 2,242 |

| 調査名・調査年 | 調査主体 | 調査主体の種別 | 性的マイノリティ当事者のみ対象 | 回収方法 | 回収率 | 有効回収票(集計対象) |
|---|-----------------|---------|-----------------|------|-----|--|
| LGBT や性的マイノリティの就職活動における経験と就労支援の現状(2018) | 認定 NPO 法人 ReBit | 企業・就労 | — | ウェブ | — | <LGBT や性的マイノリティの就職活動に関する現状調査> 241 <LGBT や性的マイノリティの就労支援に関する現状調査> 239 |

③ クローズド型（モニター調査）（ウェブ）

図表 38 クローズド型（モニター調査）（ウェブ）の調査事例

| 調査名・調査年 | 調査主体 | 調査主体の種別 | 性的マイノリティ当事者のみ対象 | 回収方法 | 回収率 | 有効回収票(集計対象) |
|--|-----------------|---------|-----------------|------|-----|-------------------------------------|
| LGBTQ+ 調査 2023(2023) | 株式会社電通グループ | その他 | — | ウェブ | — | 6,240 |
| LGBTQ+ 調査 2020(2020) | 株式会社電通 | その他 | — | ウェブ | — | 6,240 |
| LGBT 意識行動調査 2019(2019) | 株式会社 LGBT 総合研究所 | その他 | — | ウェブ | — | (事前調査) 428,036 (本調査) 計 2,578 |
| LGBT 調査 2018(2018) | 株式会社電通 | その他 | — | ウェブ | — | (事前スクリーニング調査) 60,000 (本調査) 6,229 |
| LGBT 調査 2015(2015) | 株式会社電通 | その他 | — | ウェブ | — | (事前スクリーニング調査) 69,989 (本調査) 900 |
| 令和 4 年度ネットリサーチ「性の多様性」(2022) | 茨城県 | 地方公共団体 | — | ウェブ | — | 1,000 |
| 性的マイノリティ当事者等に対する意識実態調査(2020) | 江東区 | 地方公共団体 | — | ウェブ | — | 数値補正前の実回収数 1,039 (非 LGBT 層 260 人) |
| 性的マイノリティの方々への支援に関する調査(2018) | 港区 | 地方公共団体 | — | ウェブ | — | 400 |
| 労働者アンケート調査(令和元年度職場におけるダイバーシティ推進事業)(2019) | 厚生労働省 | 企業・就労 | — | ウェブ | — | 2,405 |

④ 【参考】県政モニターによる調査

以下の既存調査はいずれも理解浸透度調査（広く個人を対象とし、性的指向及びジェンダーアイデンティティを問わないもの）であるが、参考までに掲載している。

図表 39 【参考】県政モニターによる調査の調査事例

| 調査名・調査年 | 調査主体 | 調査主体の種別 | 性的マイノリティ当事者のみ対象 | 回収方法 | 回収率 | 有効回収票(集計対象) |
|---------------------------------|------|---------|-----------------|------------|--|---------------------------|
| LGBT(性的少数者)に関するアンケート調査結果(2019) | 山梨県 | 地方公共団体 | — | 併用(郵送・ウェブ) | 80.3% ・郵送 195 人(回収率 85.1%) ・ウェブ 119 人(回収率 73.4%) | 314 |
| 広聴モニターアンケート結果「性の多様性について」(2019) | 浜松市 | 地方公共団体 | — | 併用(郵送・ウェブ) | 86.3% | 208 |
| 第 209 回簡易アンケート「性の多様性について」(2022) | 埼玉県 | 地方公共団体 | — | ウェブ | 67.6%(うち埼玉県内在住 67.4%) | 2,158(うち埼玉県内在住 1,987 人) |
| 性的少数者への理解に関するアンケート集計結果(2021) | 大分県 | 地方公共団体 | — | ウェブ | 不明 | 576(一般 506 件、県政モニター 70 件) |

4) 調査方法別の性的マイノリティ当事者の出現率等

調査方法によって、性的マイノリティ当事者の出現率等には違いが見られた。一部「(1) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法」と重複する内容はあるが、本項では、調査方法別に性的マイノリティ当事者の出現率等について整理を行った。なお、オープン型調査（ウェブ）は調査対象の母数が不明であるため、整理の対象外としている。

① 無作為抽出法

図表 40 性的指向による出現率等（無作為抽出調査）

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法 | 出現率 | 出現率算出に含まれる選択肢の内訳 |
|--|-------------------------------------|---------------------|--|-----------------------------|--------------------------------|
| 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和 | 家族と性と多様性にかんする全国アンケート(2023) | 18,000人 (5,339人) | 1. 「次の中で、あなたに最も近いと思うものを選んでください」 異性愛者／同性愛者／両性愛者／無性愛者／決めたくない・決めていない／質問の意味がわからない | 3.1%（決めたくない・決めていないを含むと8.7%） | 同性愛者／両性愛者／無性愛者／（決めたくない・決めていない） |
| 釜野さおり・石田仁・岩本健良・小山泰代・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇 | 大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート(2019) | 15,000人 (4,285人) | 1. 「次の中で、あなたに最も近いと思うものを選んでください」 異性愛者／同性愛者／両性愛者／無性愛者／決めたくない・決めていない／質問の意味がわからない | 8.1% | 同性愛者／両性愛者／無性愛者／決めたくない・決めていない |
| 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也 | 性的マイノリティについての意識2015年全国調査(2015) | 2,600人 (1,259人件) | 1. 異性愛者か否か 2. (「いいえ」の場合)性的指向 同性愛／両性愛／わからない／決めたくない・決めていない／その他 | 3.8% | 同性愛／両性愛／決めたくない・決めていない／わからない |
| 新潟県 | 性の多様性等に係る県民意識調査(2023) | 3,000人 (1,412人) | 1. 「恋愛の対象となる性別について、当てはまるものをお答えください」 異性／同性／両方／好きになる性はない／決めていない・決めたくない／その他 | 4.5% | 同性愛者／両性愛者／無性愛者／決めていない・決めたくない |
| 埼玉県 | 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査(2020) | 15,000人 (5,606人) | 1. 「次の中で、あなたに最も近いと思うものを選んでください」 異性愛者／同性愛者／両性愛者／無性愛者／決めたくない・決めていない／質問の意味がわからない | 6.2% | 同性愛者／両性愛者／無性愛者／決めたくない・決めていない |

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法 | 出現率 | 出現率算出に含まれる選択肢の内訳 |
|------|---|---------------------|---|-------|------------------|
| 岡山市 | 性的マイノリティに関する市民意識調査(2019) | 3,000人 (1,089人) | 1. 「あなたは性的マイノリティの当事者だと思いますか」 はい／いいえ／わからない 2. (「はい」の場合)「あなた自身に近いものはどれですか」 「こころ」と「からだ」の性が一致していないことがある／好きになる性が少数派 | 0.64% | 好きになる性が少数派 |
| 名古屋市 | 性的少数者(セクシュアル・マイノリティ)など性別にかかわる市民意識調査(2018) | 10,000人 (4,655人) | 1. 「あなたはご自身は性的マイノリティの当事者ですか」 はい／いいえ 2. (「はい」の場合)「あなたご自身の認識に近いものはどれですか」 L／G／B／T／X／Q／わからない、決めたくない／その他 | 0.99% | レズビアン／ゲイ／バイセクシャル |

(出所) 令和5年度内閣府委託事業「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律第9条に規定する学術研究等の遂行に資する既存研究等の調査分析報告書」p67の図表34を引用

図表 41 ジェンダーアイデンティティによる出現率等(無作為抽出調査)

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法 | 出現率 | 出現率算出に含まれる選択肢の内訳 |
|--|-------------------------------------|---------------------|--|-------|---------------------------|
| 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和 | 家族と性と多様性にかんする全国アンケート(2023) | 18,000人 (5,339件) | 1. 出生時の戸籍・出生届の性別 2. 今の性別が出生時の性別と同じととらえているか 3. (今の性別が出生時の性別と同じではない場合) 今の認識にもっとも近い性別 男性／女性／男性・女性にあてはまらない | 0.6% | MtF / FtM / 男性・女性にあてはまらない |
| 釜野さおり・石田仁・岩本健良・小山泰代・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和・吉仲崇 | 大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート(2019) | 15,000人 (4,285件) | 1. 出生時の戸籍・出生届の性別 2. 今の性別が出生時の性別と同じととらえているか 3. (今の性別が出生時の性別と同じではない場合) 今の認識にもっとも近い性別 男性／女性／その他 | 0.75% | MtF / FtM / その他、を含む |

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (有効回答数) | 把握方法 | 出現率 | 出現率算出に 含まれる選択 肢の内訳 |
|------------------------|---|---------------------|---|-------|-------------------------------------|
| 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也 | 性的マイノリティについての意識 2015年全国調査 (2015) | 2,600人 (1,259件) | 1. 出生時の戸籍・出生届の性別 2. 今の性別が出生時の性別と同じとらえているか 3. (今の性別が出生時の性別と同じではない場合) 今の認識にもっとも近い性別 男性/女性/その他 | 0.2% | MtF / FtM / その他 |
| 新潟県 | 性の多様性等に係る県民意識調査 (2023) | 3,000人 (1,412件) | 1. 出生時の戸籍・出生届の性別 2. 性自認 男性/女性/両方/間/どちらでもない/時により変化する/その他 | 0.71% | MtF / FtM / 両方/どちらでもない/時による変化する |
| 埼玉県 | 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査 (2020) | 15,000人 (5,606件) | 1. 出生時の戸籍・出生届の性別 2. 今の性別が出生時の性別と同じとらえているか 3. (今の性別が出生時の性別と同じではない場合) 今の認識にもっとも近い性別 男性/女性/両方/間/どちらでもない/性別が揺れ動いている/その他 | 0.54% | MtF / FtM / 両方/間/どちらでもない/性別が揺れ動いている |
| 岡山市 | 性的マイノリティに関する市民意識調査 (2019) | 3,000人 (1,089件) | 1. 「あなたは性的マイノリティの当事者だと思いますか」 はい/いいえ/わからない 2. (「はい」の場合)「あなた自身に近いものはどれですか」 「こころ」と「からだ」の性が一致していないことがある/好きになる性が少数派 | 0.46% | 「こころ」と「からだ」の性が一致していないことがある |
| 名古屋市 | 性的少数者(セクシュアル・マイノリティ)など性別にかかわる市民意識調査 (2018) | 10,000人 (4,655件) | 1. 「あなたはご自身は性的マイノリティの当事者ですか」 2. (「はい」の場合)「あなたご自身の認識に近いものはどれですか」 L/G/B/T/X/Q/わからない、決めたくない/その他 | 1.12% | トランスジェンダー/エックスジェンダー/クエスチョニング |

(出所) 令和5年度内閣府委託事業「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律第9条に規定する学術研究等の遂行に資する既存研究等の調査分析報告書」p70-71の図表37を引用

② クローズド型（モニター）調査（ウェブ）

図表 42 性的指向による出現率等

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (出現率算出の母数) | 把握方法 | 出現率 | 出現率算出に含まれる 選択肢の内訳 |
|----------------|--------------------------------|------------------------------|---|-------|--|
| 株式会社電通グループ | LGBTQ + 調査 2023(2023) | 57,500 人 (スクリーニング調査) | 1. 性自認 2. 性的指向 男性／女性／男性か女性か 変わることがある、一定では ない／男性・女性どちらも好 きになる／相手の性別は問 わない／性別に関係なく、他 者に恋愛感情を抱かない／ 性別に関係なく、他者に性的 に惹かれない／性的に惹か れる相手の性別がわからない ／答えたくない・質問の意味 がわからない | 9.37% | 同性愛／両性愛／アロ マンティック／アセクシ ュアル／クエスチョニン グ |
| LGBT 総合研 究所 | LGBT 意識行動 調査 2019 (2019) | 347,816 人 (スクリーニ ング調査) | 1. 性自認 2. 性的指向 異性愛／同性愛／両性愛／ 無性愛／クエスチョニング／ その他 | 7.0% | 同性愛／両性愛／無 性愛／クエスチョニン グ／その他 |
| 東京都 | 性自認及び性 的指向に関する 調査(2021) | 66,113 人 (スクリーニ ング調査) | 1. 「あなたが、望む恋愛や性 愛の対象・性的指向(好きに なる性別)について、当てはま るものをひとつだけお答えくだ さい」 異性が好き／同性が好き／ 両性が好き／好きになる性 はない／わからない／上記には 該当しない／答えたくない | 3.5% | 同性愛者／両性愛者 ※アセクシュアル／ク エスチョニングについ ては、「その他の性的少 数者」3.6%のうちに 含む。なお「その他の性的 少数者」には、性自認 が両性／無性／中性 ／不定性／わからない 者も含む |

(出所) 令和5年度内閣府委託事業「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律第9条に規定する学術研究等の遂行に資する既存研究等の調査分析報告書」p68の図表35を引用

図表 43 ジェンダーアイデンティティによる出現率等

| 調査主体 | 調査名・調査年 | 調査対象数 (出現率算出の母数) | 把握方法 | 出現率 | 出現率算出に含まれる選択肢の内訳 |
|------------|-------------------------|--------------------------|---|-------|--|
| 株式会社電通グループ | LGBTQ + 調査 2023 (2023) | 57,500 人 (スクリーニング調査) | 1. 出生時に割り当てられた性別 2. 性自認 男性／女性／男性か女性かわることがある、一定ではない／男性・女性のどちらでもある／男性・女性のどちらでもない／男性か女性かどちらかわからない／答えたくない・質問の意味がわからない | 2.79% | MtF／FtM／ノンバイナリー・X ジェンダー／クエスチョニング |
| LGBT 総合研究所 | LGBT 意識行動調査 2019 (2019) | 347,816 人 (スクリーニング調査) | (詳細不明) 1. 出生時に指定された性別 2. 生活している、生活したいと望む性別(選択肢詳細不明) 男性／女性／中性／両性／不定性／分からない／その他 | 6.1% | MtF／FtM／X ジェンダー／クエスチョニング／その他 |
| 東京都 | 性自認及び性的指向に関する調査(2021) | 66,113 人 (スクリーニング調査) | 1. 出生時に指定された性別 2. 性自認 男性／女性／中性／両方／無性／不定性(時により変化する)／わからない／上記には該当しない／答えたくない | 0.6% | MtF／FtM ※性自認が両性／無性／中性／不定性／わからない、については「その他の性的少数者」3.6%のうちに含む。なお「その他の性的少数者」には、アセクシュアル／クエスチョニングも含む。 |

(出所) 令和5年度内閣府委託事業「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律第9条に規定する学術研究等の遂行に資する既存研究等の調査分析報告書」p71の図表38を引用

③ サンプルサイズに関する参考資料

サンプルサイズについて、埼玉県が実施した「多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査（2020年）」を例に挙げると、調査対象は埼玉県内に住む満18歳以上64歳以下の男女15,000人であった。このうち、有効回答数は5,606件であり、性的マイノリティ当事者の出現率は6.2%であった。さらに、図表44 埼玉県「多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査（2020年）」におけるサンプルサイズに示すように、回答数は性的マイノリティ非当事者の中でも、性自認に関する性的マイノリティの方が、性的指向に関する性的マイノリティよりも少ないことが分かる。

図表 44 埼玉県「多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査（2020年）」
におけるサンプルサイズ

(1)調査対象 令和2年7月1日時点で県内在住の18歳～64歳以下の県民
(2)標本数 15,000人
(3)抽出方法 住民基本台帳に基づく層化二段無作為抽出
(4)調査方法 郵送送付、郵送回収・インターネット回収併用
(5)調査時期 令和2年9月11日～10月4日
(6)調査実施主体 埼玉県県民生活部人権推進課
(7)調査委託機関 株式会社サーベイリサーチセンター

[標本誤差早見表（主なもの）]

| 区 分 | 基 数 | 回 答 率 | | | | | |
|--------------------------------|----------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|---------|---------|
| | | 90%または 10%程度 | 80%または 20%程度 | 70%または 30%程度 | 60%または 40%程度 | 50%程度 | |
| 全 体 | 5,606 | ± 1.1% | ± 1.5% | ± 1.7% | ± 1.9% | ± 1.9% | |
| 性的 マイ ノリ ティ 以 外 | 性的マイノリティ | 184 | ± 6.3% | ± 8.3% | ± 9.6% | ± 10.2% | ± 10.4% |
| | 性的マイノリティ 以外 | 5,422 | ± 1.2% | ± 1.5% | ± 1.8% | ± 1.9% | ± 1.9% |
| | 性自認に関する 性的マイノリティ | 30 | ± 15.5% | ± 20.7% | ± 23.7% | ± 25.3% | ± 25.8% |
| | 性的指向に関する 性的マイノリティ | 171 | ± 6.5% | ± 8.7% | ± 9.9% | ± 10.6% | ± 10.8% |

※「性自認に関する性的マイノリティ」と「性的指向に関する性的マイノリティ」に分けた集計表は、参考として97ページ以降に掲載しています。

(出所) 令和5年度内閣府委託事業「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律第9条に規定する学術研究等の遂行に資する既存研究等の調査分析報告書」p71の図表38を引用

(3) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査における配慮事項

① 説明事項

調査実施の際には、依頼状や調査冒頭などで、以下のような内容について説明が行われている。

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ✓ 調査目的、調査結果の用途の説明 ✓ 調査対象者の抽出方法の説明 ✓ 調査結果の公表方法の説明 ✓ 性的指向・ジェンダーアイデンティティに関する用語の定義の記載 ✓ 回答中に気分が悪くなった場合の相談先の紹介 |
|---|

図表 45 説明事項の具体事例

| 調査事例 | 記載例(調査票より抜粋) |
|---|--|
| <p>パートナーシップ制度に関する調査報告書(2022、板橋区)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 冒頭で調査の背景・目的を説明し、公表方法についても明示している。加えて、調査票内に性的マイノリティ、性自認、性的指向の定義を掲載している。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>日頃から、区政にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。</p> <p>板橋区の行政計画「いたばしアクティブプラン 2025」では、性的マイノリティ*支援のための「パートナーシップ制度の導入検討」を重点事業の1つとしています。性的指向*や性自認*に関わらず、誰もが人生を共にしたい人と暮らしていくことを支援するため、現在、パートナーシップ制度に関する調査・検討を行っています。(*については、下記「2 性的マイノリティについて」を参照してください。)</p> <p>そこで、皆様からのご意見を、検討を進める上での基礎資料とするため、板橋区に在住している方へアンケート調査を実施いたしますので、ご協力をお願いいたします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 匿名でのアンケートであり、回答内容から個人が特定されることはありません ● 調査結果は、まとまり次第、板橋区公式ホームページで公表します </div> |
| <p>性の多様性等に係る県民意識調査(2023、新潟県)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査目的に加え、無作為に抽出した対象者に依頼している旨を説明している。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>本県では、多様な性のあり方への無理解や偏見等により困難な立場に置かれている方がいます。このため、性のあり方にかかわらず誰もが活躍できる社会を実現するため、性の多様性の理解促進を図る啓発等に取り組んでいます。</p> <p>今後の取組の参考にするため、調査に御協力をお願いします。</p> <p>ご多用のところ大変恐れ入りますが、今後の県政推進の基礎となる重要な調査でありますので、7月14日(金)までに、本調査票にご回答いただき同封の返信用封筒によりご投函いただくか、以下の専用WEBページからご回答くださいますよう、お願いします。</p> <p>なお、この調査は選挙人名簿抄本から無作為に抽出した県民の皆さま3千人にお願いするものです。(調査項目は令和5年5月末現在の情報で作成しています。)</p> </div> |
| <p>第3回男女のあり方と社会意識に関する調査(2023、「男女のあり方と社会意識」研究グループ)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査票に同封のQ&Aにて、調査目的や調査対象者の抽出方法について説明している。 <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div style="width: 45%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>Q1 これは何のためのアンケートですか？</p> <p>第2回調査以降の皆さまのご経験やお考えをおたずねし、男女のあり方や多様性などに関する意識・実態を把握することを目的としています。「〇〇と答えた人が30パーセント」といった形で集計し、割合や傾向を分析するための学術的なアンケートです。セールスを目的とするアンケートではございません。</p> <p>本アンケートは、文部科学省所轄日本学術振興会科学研究費補助金「セクシュアル・マイノリティをめぐる意識の変容と施策に関する研究」の助成を受けて実施する学術調査です。</p> </div> <div style="width: 45%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>Q2 なぜ、私に送られてきたのですか？</p> <p>2019年6～7月に実施した「第2回男女のあり方と社会意識に関する調査」で、第3回調査に「(場合によっては)協力してもよい」と回答くださった皆さまにお送りしています。</p> <p>第2回調査では、法令等が定める住民基本台帳の利用に関する手続きを経て、全国の20～79歳の方々5,500人を無作為抽出(×)し、一般社団法人新情報センターの調査員がご自宅を訪問して回答をお願いしました。</p> <p>※「くじびき」のように、誰が選ばれるかを偶然にゆだねる、科学的調査の標準的抽出方法</p> </div> </div> |

② 情報の取り扱い方針の明示

回答内容をはじめとした情報の取り扱いについても、以下のような説明が設けられている。

- ✓ 集計・分析・公表の過程における個人情報の処理方法・第三者提供の有無の明示
- ✓ (どうしても記名式とする必要がある場合を除き) 無記名式であることの明記

図表 46 情報の取り扱い方針の明示の具体事例

| 調査事例 | 記載例(調査票より抜粋) |
|--|--|
| <p>nijiVOICE 2023～LGBTQの仕事と暮らしに関するアンケート調査～ (2023、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 個人が特定されない形で集計結果を取りまとめて公開する旨を、その意図とともに説明している。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>このアンケートは、性的マイノリティの仕事や暮らしの状況を明らかにするための調査です。心身の健康や周囲の人との関係についての質問もあります。学生(満15歳以上)や現在働いていない方、性的マイノリティの当事者以外の方も回答することができます。正解、不正解はありませんので、思ったままをお答えください。 お答えいただいた内容は個人が特定されない形で集計結果として取りまとめられ、ホームページなどで公開予定です。</p> <p>・本調査の個票データは、個人を特定できる可能性のある情報を削除した上で、学術目的での二次分析が行えるよう公開する予定です。統計処理可能なデータを公開することで、回答者が類似した調査を何度も受けることによる負担を軽減するとともに、この調査の成果を広く社会に還元することを意図しています。</p> </div> |
| <p>性的マイノリティに関する市民意識調査報告書 (2019、岡山県)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査が返送の過程も含めて無記名であり、個人情報が外部に漏れることはないことを説明している。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>◆この調査は、無記名でお願いしており、ご回答いただいた内容はすべて統計的に処理しますので、調査の過程や公表にあたり、個人のお名前や回答内容が外部に漏れるなど、ご迷惑をおかけすることは一切ありません。</p> <p>◆この調査は、上記目的以外に使用することはありません。また、個人情報保護など、情報管理には十分留意します。</p> <p>以上、調査の趣旨をご理解の上、あなたのお考えを率直にご回答いただきますようお願い申し上げます。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>◆ご記入いただいた調査票は、同封の返信用封筒に入れて、8月31日(土)までにご投函くださるようお願いいたします。</p> <p>◆切手を貼ったり、差出人の名前を書いたりする必要はありません。</p> </div> |
| <p>第3回男女のあり方と社会意識に関する調査 (2023、「男女のあり方と社会意識」研究グループ)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査票に同封のQ&Aにて、個人の特定がされないことを説明している。 <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 48%; border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>Q5 回答から個人を特定できるのではないですか？</p> <p>回答いただいたアンケートから回答者を特定することは決していたしません。アンケートの実務は調査実施機関の新情報センターが行うため、研究グループが皆さまの住所や名前を知ることはできません。どなたの回答かを特定できない仕組みの下で統計分析がなされます。またアンケートは、広島修道大学で研究倫理審査申請を行い、プライバシーが守られ、個人の特定ができないなど、研究倫理上問題がないという承認を受けた上で実施しています(承認番号第2022-0019)。</p> </div> <div style="width: 48%; border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>Q6 インターネットで回答したら、誰の端末から送られたのかが、わかるのではないですか？</p> <p>インターネットの回答を集めるサーバーには端末の情報が届くこととなりますが、回答が出そろった時点で、まず端末に関する情報を完全に除去し、そののちに、集計を行います。また、回答の送信には暗号化がほどこされますので、安心してご回答ください。</p> </div> </div> |

③ 回答方法に関する説明

回答に当たっても、任意回答とできることや途中で回答をやめることができることなど、以下のような内容について事前説明されている。

- ✓ (どうしても必須回答とすべき質問以外) 任意回答である旨の明記
- ✓ 途中で回答をやめることが可能な場合、明記
- ✓ 答えにくい設問への対応方法の説明

図表 47 回答方法に関する説明の具体事例

| 調査事例 | 記載例(調査票より抜粋) |
|--|---|
| <p>『性的マイノリティについての意識—2015年全国調査報告書』科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ(研究代表者 広島修道 大学 河口和也)編 (2016、釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 回答者が安心して答えられるよう、答えにくい質問もあるだろうが学術的な見地からのものであること、答えたくない／答えられない質問がある場合は飛ばしてよいこと等を説明している。 <div data-bbox="480 779 1321 965" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>このアンケートは、文部科学省の科学研究費の助成を受け、日本における男女のあり方、性の多様性や社会に関する国民の意識やお考えを把握するため、全国の20才から79才の男女2,600人の方にご協力をお願いしているものです。ここに回答された内容は、統計として取りまとめるだけです。皆様の個人的な内容が明らかにされることはありません。お答えになりにくい質問もあるかと思いますが、純粋に学術の見地からの質問となっておりますので、安心してありのままのことをできるだけ正確にお答えください。</p> </div> <div data-bbox="480 981 1321 1144" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>7) どうしても答えたくない／答えられない質問がある場合は、飛ばして次の質問にお進みください。正確にあてはまる選択肢がない場合でも、ご自分で最も近いと思うものをお選びください。</p> <p>8) なお、記入上おわかりにならない点などがありましたら、お伺いした調査員にお尋ねいただくか、調査の実施機関である下記の(一社)新情報センターにお問い合わせください。</p> </div> |
| <p>家族と性と多様性にかんする全国アンケート結果概要 (2023、釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査票に同封の「Q&A」にて、答えたくない場合は回答しなくても不利益はないこと、当てはまる選択肢が無い場合は余白に回答できることを説明している。 <div data-bbox="469 1323 1380 1487" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>8 答えたくない質問があります / 自分にあてはまる選択肢がありません</p> <p>正確な結果につなげるために、できるだけお答えいただきたいところですが、どうしても答えたくない質問がありましたら、次に進んでいただいて構いません。回答は任意であり、回答しなくてもあなたに不利益になることはありません。途中でやめることもできます。一部しか答えられなかった場合にも、アンケートをご返送ください。また、あてはまる選択肢がない場合は、余白にあなたのご回答をお書きください。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 回答に抵抗がありそうなテーマについて、調査目的とともに設問の意義を説明している。 <div data-bbox="469 1608 1380 1854" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>9 なぜ、結婚や子ども、性別や恋愛についての質問がたくさんあるのですか？</p> <p>昨今、日本でも家族や性の多様性への関心は高まりつつありますが、家族や性という面から見たときにさまざまな生き方をしている人たちは、数としては多くないかもしれませんが、依然として、日常生活の中で生きづらさを感じる場面が少なくありません。そうした人たちが全国にどれくらいいるのか、どのような生きづらさを感じているのかを把握するために、すべての方に家族や性について詳しくおたずねしています。全国にはさまざまな暮らし方をしている人がいますが、この調査は誰にとってもより暮らしやすい社会にしていこうための貴重なデータを収集するための調査です。答えにくいこともあるかもしれませんが、あなたのプライバシーや個人情報厳重に守られますので、ご理解の上、お答えくださいますようお願いいたします。</p> </div> |

④ 関連情報の提供

調査に関する問い合わせ先の記載や、その他関連する相談窓口の掲載等を行うことも実施されている。

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ✓ 調査に関する問合せ先の記載 ✓ 性的指向・ジェンダーアイデンティティに関する相談窓口の掲載 ✓ 過去調査・関連資料等の情報提供 |
|---|

図表 48 関連情報の提供の具体事例

| 調査事例 | 記載例(調査票より抜粋) | | | |
|--|---|--|--|---|
| <p>パートナーシップ制度に関する調査報告書 (2022、板橋区)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査票に「東京都パートナーシップ宣誓制度」素案を掲載。 | | | |
| <p>第3回男女のあり方と社会意識に関する調査 (2023、「男女のあり方と社会意識」研究グループ)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 過去の調査結果を一部掲載することで、分析の活用イメージを紹介している。 | | | |
| <p>nijiVOICE 2023～LGBTQの仕事と暮らしに関するアンケート調査～ (2023、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 最終頁で、個別の労働相談や生活相談等が可能な窓口(よりそいホットライン、各都道府県弁護士会、各都道府県労働局)の電話番号、対応時間帯、URLを紹介。 | | | |
| <p>家族と性と多様性にかんする全国アンケート結果概要 (2023、釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査に関する意見欄を設けている。 ・ 調査に関する問合せ先として、電話番号・メールアドレスを掲載しているほか、Web サイトにて回答方法や調査の経緯、Q&A等を公開している。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>10 アンケートに対して意見があります</p> <p>最後のページ(インターネット回答の場合は最後の画面)の感想欄に、ご記入ください。 重要な意見として、学術研究および今後のアンケートの実施方法を改善するために参考にいたします。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center; color: red;">アンケートにかんするお問い合わせ先</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>☎ 0120-100-190 [無料]</p> <p>🕒 平日 9:00-12:00 / 13:00-17:00</p> <p>✉ zenkoku-chosa@sjc.or.jp</p> </td> <td style="width: 10%; text-align: center; vertical-align: middle;">  </td> <td style="width: 40%; vertical-align: top;"> <p>zenkoku-chosa.jp</p> <p>詳しくは Web サイトでもご案内しています</p> </td> </tr> </table> </div> | <p>☎ 0120-100-190 [無料]</p> <p>🕒 平日 9:00-12:00 / 13:00-17:00</p> <p>✉ zenkoku-chosa@sjc.or.jp</p> |  | <p>zenkoku-chosa.jp</p> <p>詳しくは Web サイトでもご案内しています</p> |
| <p>☎ 0120-100-190 [無料]</p> <p>🕒 平日 9:00-12:00 / 13:00-17:00</p> <p>✉ zenkoku-chosa@sjc.or.jp</p> |  | <p>zenkoku-chosa.jp</p> <p>詳しくは Web サイトでもご案内しています</p> | | |

⑤ 用いる文言の検討¹¹

設問の作成に当たっては、用いる文言の検討を行うことが必要である。

- ✓ 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性を前提とした念頭においた設問文・選択肢を用い、性的マイノリティ当事者の存在を否定していないか注意する。
- ✓ 注意が必要なことばや概念について、誤用がないよう定義や社会における使い方を確認する。

⑥ 設問の答えやすさへの配慮¹²

文言の検討と同時に、設問の答えやすさへの配慮として、以下のようなことを行うことが考えられる。

- ✓ 回答者が答えたくないという気持ちにならず、かつ、間違えずに回答できる設問となるよう検討する。否定的な質問項目について、その必要性や、回答者・社会への影響を検討する。
- ✓ 答えにくい質問についてスキップしたり、途中で回答を終了したりできるよう設定する。
- ✓ 該当する選択肢がない場合の回答方法を用意する。
 - 例) 無回答・回答しない／分からない／上記には該当しない／質問の意味が分からない／答えたくない／自由記載欄 等

⑦ 回答方法の検討¹³

不必要に記名式としない、必須回答としないといった配慮も必要である。

- ✓ 匿名の調査とすることが可能であるか検討する。
- ✓ 調査全体あるいは設問単位での必須／任意回答設定を検討する。

11 ⑤⑥⑦は、以下の参考文献より整理した。

釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也、『性的マイノリティについての意識—2015年全国調査報告書』科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ（研究代表者 広島修道大学 河口和也）編（2016年）

釜野さおり「社会調査にSOGI項目を含める— Why & How—」ジェンダー統計の観点からの性別欄検討WG（第3回）（2022年）

性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会、「LGBTQ報道ガイドライン」（2019年）

パーソルホールディングス株式会社、社内研修資料「多様な性のあり方を学ぶ」（2024年）

12 同上

13 同上

⑧ 有識者の監修・当事者の参画

調査実施に際し、有識者や当事者からの監修・アドバイスを受けるような工夫も実施されている。

- ✓ 適切な調査設計・分析を行うため、幅広い分野の有識者による監修を受ける。あるいは、幅広い分野の有識者から構成される会議体を設ける。
- ✓ 複数名の性的マイノリティ当事者に参画を依頼する。

図表 49 有識者の監修・当事者の参画の具体事例

| 調査事例 | 記載例(調査票より抜粋) |
|--|---|
| LGBT 当事者アンケート調査～2600 人の声から～ (2015、日本放送協会) | <ul style="list-style-type: none"> ・ LGBT 法連合会が調査協力し、分析を釜野さおり氏、岩本健良氏が担当。 |
| 性的少数者(セクシュアル・マイノリティ)など性別にかかわる市民意識調査 (2018、名古屋市) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査項目の検討及び調査結果の分析等を行うため、有識者ワーキングを開催。 (メンバー) <ul style="list-style-type: none"> ➢ 太田 有矢氏 (株式会社 G-pit net works 取締役) ➢ 風間 孝氏 (中京大学 国際教養学部 教授) ➢ 末盛 慶氏 (日本福祉大学 社会福祉学部 准教授) ➢ 松岡 成子氏 (NPO 法人 ASTA 共同代表理事) |
| 性的少数者に関するアンケート (2019、長崎県) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 長崎県にて活動する団体「Take it!虹」に調査を委託。 |

(4) 性的マイノリティ当事者を対象とした調査の調査項目

以降では、既存調査において確認された質問文・選択肢例を例示している。

黄色の網掛けは当事者のみを対象とした調査項目、網掛けなしは当事者及び非当事者を対象とした調査項目である。なお、当事者及び非当事者を対象とした調査であっても、当事者のみが回答する項目については黄色の網掛けとしている。

1) 基本属性の項目

図表 50 基本属性の項目の具体事例

| 分類 | 調査事例 | 設問文・選択肢例(報告書等より抜粋) |
|------|----------------------------------|---|
| 最終学歴 | Aro/Ace 調査 2022 (2022、三宅他) | Q 最後に通った学校の種類を選択してください。 小・中学校／高校／専門・専修学校(高卒後)／短大・高専／大学／大学院／その他 |
| | 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査(2020、埼玉県) | 問4 あなたが最後に通った学校の種類はこの中のどれにあたりますか。 1.小・中学校／2.高校・専修学校(高等課程)／3.専門・専修学校(高卒後)／4.短大・高専／5.大学／6.大学院／7.特別支援学校／8.その他(具体的に:) |
| | 性的マイノリティ当事者等に対する意識実態調査(2020、江東区) | Q5 あなたの最終学歴としてあてはまるものをお答えください。 1.大学院卒／2.4年生大学卒／3.短大卒／4.専門学校・高専卒／5.高校卒／6.中学卒／7.その他(具体的に:)／8.答えたくない |

注) 年齢と居住地については、調査対象の設定や調査実施地域によって聞き方が大きく異なるため、掲載していない。

2) 回答者の暮らし向きに関する項目

図表 51 回答者の暮らしむきに関する項目の具体事例

| 分類 | 調査事例 | 設問文・選択肢例(報告書等より抜粋) |
|-----------|---|---|
| パートナーの有無 | LGBT 当事者アンケート調査～2600人の声から～(2015、日本放送協会) | Q 現在のパートナーの有無は？ いる／いない |
| | LGBT 当事者の意識調査(2016・2019・2022、日高庸晴) | Q 日本在住の方にお尋ねします。あなたは現在、男女間で法律上の結婚をしていますか？ 結婚したことがない／結婚している／別居中／離婚／死別 Q あなたは、自治体の同性パートナーシップ宣誓制度を利用していますか？ 利用している／今後利用する予定／利用していない／過去に利用したが、現在は解消した／住んでいる自治体に制度がない |
| 家族と性と多様性に | 家族と性と多様性に | Q 現在のパートナー関係 |

| 分類 | 調査事例 | 設問文・選択肢例(報告書等より抜粋) |
|----------|---|---|
| | かんする全国アンケート(2023、釜野他) | 法律婚／事実婚／同棲／交際／いずれも該当しない ※結婚や交際に関する複数の問いの回答を組み合わせで上記5つに分類している |
| | 男女の意識と生活実態調査(2020、秋田県) | 問 32 結婚の有無(事実婚を含む) ※事実婚＝婚姻届けの手続きをとっていない夫婦 1.未婚／2.既婚(配偶者・パートナーあり)／3.既婚(離婚・死別) |
| | 性的マイノリティ当事者等に対する意識実態調査(2020、江東区) | Q2 あなたの現在の婚姻状況をお知らせください。 1.既婚／2.未婚／3.同性パートナーシップ(自治体指定のものを活用)／4.離死別 |
| 同居者 | LGBT 当事者の意識調査(2016・2019・2022、日高庸晴) | Q あなたは現在、どなたと住んでいますか?(生活形態) 一人暮らし／寮／親または兄弟姉妹と同居／友達と同居／パートナー・恋人と同居／その他 |
| | 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査(2020、埼玉県) | 問3 あなたはどなたと一緒に暮らしていますか。 「異性の配偶者(夫・妻)／パートナー※法律婚・婚姻届を提出」／「異性の配偶者(夫・妻)／パートナー※事実婚」／「同性の配偶者／パートナー」／子ども／父／母／義父／義母／祖父・祖母／兄弟姉妹／上記以外の親族／障害福祉施設等職員／友人やシェアハウス、グループホーム等の利用者／その他／一人暮らし |
| | 家族と性と多様性にかんする全国アンケート(2023、釜野他) | Q 親(父親・母親)との同別居 亡くなった／あなたと同居／あなたと別居／その他 |
| 仕事・就労の状況 | LGBT 当事者アンケート調査～2600 人の声から～(2015、日本放送協会) | Q 就労の形態 正社員／非正規社員(パート・アルバイト・派遣契約含む)／自営業／無職(就学中、家事・育児・介護)、その他 |
| | LGBT 当事者の意識調査(2016・2019・2022、日高庸晴) | あなたの現在の職業を教えてください。 無職／学生／パート・アルバイト／常勤(正規雇用)／常勤(非正規雇用)／自営業／その他 |
| | 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査(2020、埼玉県) | 問 5 あなたのお仕事(2 つ以上あてはまる場合には主なものは、大きく分けてこの中のどれにあたりますか。 1.正社員／2.パート・アルバイト・臨時雇い／3.派遣社員／4.契約社員・嘱託／5.会社などの経営者・役員／6.自営業者・自由業者／7.家族従事者(家業の手伝い)／8.内職／9.その他のお仕事(具体的に:)／10.学生／11.家事育児(家族介護を含む)／12.定年退職・高齢のため無職／13.心身の事情で働けない／14.失業中／15. 10～14 以外の理由で仕事をしていない |
| 収入・経済的状況 | トランスジェンダーとセクシュアルヘルス2021 年オンライン調査から(2021、トランスジェンダーとセクシ | Q 年収 200 万円未満／200－400 万円未満／400 万円以上／わからない |

| 分類 | 調査事例 | 設問文・選択肢例(報告書等より抜粋) |
|---------|--|---|
| | ユアルヘルス・プロジェクト) | |
| | 静岡県女性の労働実態調査報告書(2021、静岡県) | Q 令和2年の年間収入 103万円未満/103~150万円未満/150~250万円未満/250~500万円未満/500~750万円未満/750~1,000万円未満/1,000万円以上/収入はない |
| | 性的少数者(セクシュアル・マイノリティ)など性別にかかわる市民意識調査(2018、名古屋市) | F5 現在のあなたの暮らしむきについて、もっともあてはまるものはどれにあたりますか。 1.たいへんゆとりがある/2.ややゆとりがある/3.ふつう/4.やや苦しい/5.たいへん苦しい |
| | niji VOICE 2023 ~ LGBTQ の仕事と暮らしに関するアンケート調査~(2023、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ) | Q34 あなたは、個人として、現在までの1年間で、以下のような経験がありましたか。当てはまるものすべてにチェックしてください。(複数回答) お金がないために食事やイベントの誘いを断った/預金残高が1万円以下になった/通信費(テレビ受信料、携帯電話代、インターネット利用料等)を滞納した/水道光熱費(水道、電気、ガス代等)を滞納した/家賃や住宅ローンを滞納した/健康保険料、年金保険料を滞納した/カードローンや金融機関からお金を借りた/お金がないために食事を食べなかった/寝泊りする場所に困った/上記のような経験はなかった |
| 住まい | LGBT 当事者アンケート調査~2600人の声から~(2015、日本放送協会) | Q 住まい 賃貸/持ち家(パートナーの持ち家を含む)/実家で親と同居/社宅や官舎/シェアハウス/その他 |
| | 性的マイノリティの生きやすい社会づくりに向けたアンケート調査(2023、株式会社JobRainbow・株式会社MSS) | Q あなたの現在のお住まいをお知らせください。 持ち家(戸建て)/持ち家(マンション、アパート)/賃貸(戸建て)/賃貸(マンション、アパート)/その他 |
| 心身の健康状態 | LGBT 当事者アンケート調査~2600人の声から~(2015、日本放送協会) | Q LGBTであることで健康への影響はあったか。 あった/ややあった/あまりなかった/なかった |
| | 性的少数者に関するアンケート(2019、長崎県) | 問9 あなたは、現在も含めこれまでに、病気や健康上の問題などを抱えたことがありますか。(複数回答) 1.発達障害(自閉症スペクトラム・ADHD・学習障害など)/2.うつ病・躁うつ病/3.性感染症/4.HIV・AIDS(エイズ)/5.依存症(アルコール・ギャンブル・薬物など)/6.特に病気や健康上の問題は抱えていない/7.その他(具体的に:) |
| | | 問10 現在も含めこれまでの、あなた自身について回答してください。(複数回答) |

| 分類 | 調査事例 | 設問文・選択肢例(報告書等より抜粋) |
|----|---|---|
| | | 1.自分を大切に思えない／2.自分を受け止めてくれる人はいないように感じる／3.将来に希望を持つことができない／4.死んでしまいたいと思ったことがある／5.不登校経験がある／6.自分をわざと傷つけた(自傷行為)ことがある／7.自殺未遂をしたことがある／8.上記のような経験はない |
| | LGBT 当事者の意識調査(2016・2019・2022、日高庸晴) | Q 最近1か月の心の状態(K6) 神経過敏に感じましたか／絶望的だと感じましたか／それぞれ、落ち着かなく感じましたか／気分が沈み込んで、何が起こっても気分が晴れないように感じましたか／何をしても骨折れだと感じましたか／自分は価値のない人間だと感じましたか ※それぞれについて、「まったくない／少しだけ／ときどき／たいがい／いつも」で回答 |
| | 家族と性と多様性にかんする全国アンケート(2023、釜野他) | Q 最近1か月の心の状態(K6) 神経過敏に感じましたか／絶望的だと感じましたか／それぞれ、落ち着かなく感じましたか／気分が沈み込んで、何が起こっても気分が晴れないように感じましたか／何をしても骨折れだと感じましたか／自分は価値のない人間だと感じましたか ※それぞれについて、「まったくない／少しだけ／ときどき／たいがい／いつも」で回答 |
| | niji VOICE 2023～LGBTQの仕事と暮らしに関するアンケート調査～(2023、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ) | 問36 あなたは、このところ健康だと思いますか。 健康である／どちらかといえば健康である／どちらかといえば健康でない／健康でない／わからない 問37 現在、あなたは通院、服薬、経過観察をしていますか。通院、服薬、経過観察をしている場合、その理由として、当てはまるものすべてにチェックしてください。(複数回答) 通院、服薬、経過観察はしていない／性同一性障害、性別違和、性別不合(心理療法、ホルモン療法、外科手術等)／性分化疾患(DSDs)／高血圧、動脈硬化、心疾患／糖尿病／悪性腫瘍(がん)／統合失調症／うつ病／双極性障害／適応障害、パニック障害／自閉症スペクトラム障害／ADHD(注意欠如・多動性障害)／学習障害／アルコールなどの依存症／HIV/AIDS(エイズ)／膀胱炎などの排泄障害／その他(具体的に:) |

3) カミングアウトやアウティングに関わる項目

図表 52 カミングアウトやアウティングに関わる項目の具体事例

| 分類 | 調査事例 | 調査項目例(報告書等より抜粋) |
|---------------|---|---|
| カミングアウトの有無／相手 | 性的マイノリティの生きやすい社会づくりに向けたアンケート調査(2023、株式会社 JobRainbow・株式会社 MSS) | Q カミングアウトしたことがあるか。 はい／いいえ／LGBTQ+の当事者ではない |
| | 多様性を尊重する共 | Q28 あなたが、最初にかミングアウトした時期はいつですか。 |

| 分類 | 調査事例 | 調査項目例(報告書等より抜粋) |
|--------------------------|---|--|
| | 生社会づくりに関する調査(2020、埼玉県) | 1.小学校 1～3 年生の頃/2.小学校 4～6 年生の頃/3.中学校の頃/4.高等学校・16～18 歳頃/5. 19～29 歳/6. 30～39 歳/7. 40～49 歳/8. 50～59 歳/9. 60～64 歳/10.誰にもカミングアウトしていない/11.この質問は自分に当てはまらないと思う |
| | LGBT 意識行動調査(2019、株式会社 LGBT 総合研究所) | Q あなたは、ご自身の性的指向や性同一性(性自認)について、どなたにカミングアウト(公表)したことがありますか。(複数回答) 誰にもしていない/友人/家族/職場 |
| | LGBT 当事者の意識調査(2016・2019・2022、日高庸晴) | あなたは親に、自分がセクシュアルマイノリティであることをカミングアウトしていますか? カミングアウトしていない/両親ともにカミングアウトしている/母親にだけカミングアウトしている/父親にだけカミングアウトしている/親はいない |
| | LGBT 当事者アンケート調査～2600 人の声から～(2015、日本放送協会) | Q カミングアウトした人数は? 1～4 人/5～9 人/10～19 人/20～49 人/50 人以上/人数不明だがカミングアウトしている/誰にもしていない Q カミングアウトした相手は?(複数回答) LGBT ではない友人/LGBT の友人/家族(親・きょうだい・配偶者)/職場・学校/医療・援助職関係者/親戚/近隣・地域/その他 |
| カミングアウトすることへの意識 | LGBT 意識行動調査(2019、株式会社 LGBT 総合研究所) | Q カミングアウトに対する意識 生活や仕事に支障がなければ、カミングアウトしたいと思う/生活や仕事に支障がなくても、カミングアウトは必要ないと思う ※それぞれ肯定的選択肢、否定的選択肢を設定と思われる(ただし公開情報からは詳細は不明) |
| | LGBT 調査 2018(2018、株式会社電通) | Q あなたは、職場の同僚(上司、部下含む)に LGBT 当事者であることをカミングアウトすることに、抵抗がありますか。 抵抗がある/まあ抵抗がある/どちらともいえない/あまり抵抗はない/抵抗はない |
| カミングアウトした後の周囲の対応、対応への満足度 | 性的マイノリティの生きやすい社会づくりに向けたアンケート調査(2023、株式会社 JobRainbow・株式会社 MSS) | Q カミングアウト後の周囲の対応への満足度 とても満足している/満足している/どちらともいえない/満足していない/全く満足していない |
| カミングアウトしていない理由 | 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査(2020、埼玉県) | Q32 誰にもカミングアウトしていない、カミングアウトしたいと思っている相手にカミングアウトしていない、あるいは(今後)カミングアウトしたいと思う相手はいない、主な理由は次のうちどれですか。 |

| 分類 | 調査事例 | 調査項目例(報告書等より抜粋) |
|--------------|---|---|
| | | 1.カミングアウトしても理解されるか不安なため／2.どうカミングアウトしたらよいかわからないため／3.カミングアウトすると、いじめや差別を受けそうな気がするため／4.その他(具体的に:)／5.理由は特にない |
| | 性的少数者に関するアンケート(2019、長崎県) | Q23 Q22 で当事者であることを「1.誰にもカミングアウトしていない」と回答された方へお尋ねします。その理由を教えてください。 1.特に話す必要性を感じていない／2.理解されるか不安である／3.話すといじめや差別を受けそうである／4.どう話したらいいかわからない／5.その他 |
| アウトティングされた経験 | 性的マイノリティの生きやすい社会づくりに向けたアンケート調査(2023、株式会社 JobRainbow・株式会社 MSS) | Q あなたの性自認・性的指向をカミングアウトした後、アウトティングの被害にあったことはありますか。また、あうことに心配していますか。 被害にあったことがある／被害にあったことは無いが、心配している／被害にあったことはなく、心配もしていない |
| | 令和4年度ネットリサーチ「性の多様性」(2022、茨城県) | Q5 あてはまるものを全て選んでください。(複数回答) 性的マイノリティであることを周囲に打ち明けている／性的マイノリティであることを自身の了解なく暴露されたことがある／どちらも該当しない |
| | パートナーシップ制度に関する調査報告書(2022、板橋区) | Q5(1) これまでご自身が性的マイノリティであることが理由で経験して辛かったことがあれば選択してください。特にあてはまるものを3つまで回答してください。 【理解促進・普及啓発の不足に起因した経験の項目】 親や親族の無理解／友人や知人の無理解、差別、いじめ／学校における無理解、差別、いじめ／就業活動における無理解、差別、ハラスメント／職場における無理解、差別、いじめ、ハラスメント／職員・教職員等の知識不足や配慮に欠けた対応／許可なき暴露(アウトティング) |

4) 困りごとやハラスメントの見聞きを尋ねる項目

図表 53 困りごとやハラスメントの見聞きを尋ねる項目の具体事例

| 分類 | 調査事例 | 調査項目例(報告書等より抜粋) |
|-----------------------------|--------------------------------|--|
| 恋愛結婚や人間関係等について悩みや困りごとを尋ねる設問 | 家族と性と多様性にかんする全国アンケート(2023、釜野他) | Q 次の項目について、日常生活の中で悩みや困りごとがあるか。(複数回答) ※それぞれ、「あてはまる／あてはまらない」で回答 |
| | | 自分の健康／自分の仕事や就職／自分の恋愛や結婚／出産・子育てや子どもを持つことについて／家族の介護／現在の収入や家計／住まい／老後の生活／家族・親族間の人間関係／職場の人間関係／職場以外の友人・知人との関係／近隣・地域での人間関係／ハラスメントや差別的な扱い・不利益／家族の健康／子どもの教育／子どもの生活／親の生活／その他／とくに |

| 分類 | 調査事例 | 調査項目例(報告書等より抜粋) |
|--|---|--|
| | | ない |
| 性的マイノリティ当事者への無理解に基づく言動を見聞きした経験 | niji VOICE 2023～LGBTQの仕事と暮らしに関するアンケート調査～(2023、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ) | Q32 現在までの1年間で、あなたの周囲(学校や職場など)で以下のような経験がありましたか。(複数回答) 女らしさ・男らしさに関して、誰かが決めつけるような発言をしているのを見聞きした／同性愛や両性愛に関して、誰かがネガティブな発言をしているのを見聞きした／性別を変更して生きることに関して、誰かがネガティブな発言をしているのを見聞きした／性的な目で見られたり、身体を触られたりした／自分の性のあり方やパートナー関係について、からかわれたり、侮辱的な発言をされたりした／その他(具体的に:)／自分の性のあり方やパートナー関係について、他の人から第3者に暴露された(アウティングされた) |
| | 性の多様性等に係る県民意識調査(2023、新潟県) | 問 8-1 これまでに性的マイノリティを理由にした以下のことについて、ご自身が経験したことや身近で見聞きしたことはありますか。(複数回答) 1.家族や親族の無理解／2.友人の無理解／3.教職員の無理解／4.上司や同僚の無理解／5.地域住民の無理解／6.相談相手の不在／7.家庭(配偶者やパートナー含む)内暴力／8.性暴力被害／9.死にたいほどつらいと感じる／10.アウティング／11.いじめ、いやがらせ／12.施設を利用する際、自認する性で利用できない／13.書類の性別記載欄で自認する性を選択できない／14.職場や就職活動でのハラスメント／15.人間関係の構築が難しい、孤立やコミュニケーション不足となる／16.職場で法的な家族と同様の福利厚生が受けられない(内容:)／17.公的サービスで法的な家族と同様の対応が受けられない(内容:)／18.民間サービスで法的な家族と同様の対応が受けられない(内容:)／19.その他(具体的に:)／20.特になし |
| 性的マイノリティ当事者への無理解に基づく言動を見聞きした経験(つづき) | 学校における性的指向・性自認に係る取り組み及び対応状況調査(2023、認定NPO法人 ReBit) | Q 勤務校の子どもたちによる性の多様性を尊重しない言動への気づき(過去3年) (※「性の多様性を尊重しない言動に気づいた」ことがあるという者が、その内容を複数回答で回答) |
| | | 「もっと女らしく」「男子は〇〇すべき」等 性別を理由に理想的な行動を示すような言動／オカマ・ホモ・レズ・オネエ等 LGBTQの人を笑いものにする言葉／男の人が女の人の・女の人が男の人の格好や振る舞いを、笑いものにする言動／恋人がいないことや結婚していないことを、笑いものにする言動／女の人同士・男の人同士が付き合っていることを、笑いものにする言動 |
| 性的指向やジェンダーアイデンティティに関するいじめやハラスメントを見聞きした経験 | LGBTに関する職場の意識調査(2016、日本労働組合総連合会) | Q 職場(飲み会等含む)で、いわゆる「LGBT」に関するハラスメントを経験したこと、または、見聞きしたことはあるか (※LGBT非当事者に対するLGBTをネタにしたようなハラスメントも含まれる、複数回答) |
| | | 自分が受けたことがある(LGBT当事者・非当事者問わず)／直接見聞きしたことがある／間接的に聞いたことがある／受けたことも、見聞きしたこともない／その他 |

| 分類 | 調査事例 | 調査項目例(報告書等より抜粋) |
|----|---|---|
| | 働きやすさと職場の多様性に関するアンケート調査(2021、全日本自治団体労働組合) | Q18. あなたは、自治会・町内会や子ども会など、地域のコミュニティのなかで「性的マイノリティ」に関する差別的な言動を受けたり、見聞きしたことがありますか。(複数回答) 1.自分が受けたことがある／2.直接見聞きしたことがある／3.間接的に聞いたことがある／4.受けたことも、見聞きしたこともない |
| | 大学教員の性的指向・性自認(SOGI)についての知識と態度に関する全国調査報告(2022、風間他) | Q 勤務している大学で同性愛・両性愛およびトランスジェンダー等に関する否定的・差別的な言動を見たり聞いたりしたことがあるか。 よくある／ときどきある／あまりない／ない |
| | niji VOICE 2023～LGBTQの仕事と暮らしに関するアンケート調査～(2023、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ) | Q33 現在までの1年間で、あなたの周囲(学校や職場など)で、性的マイノリティに関する差別的な言動を見聞きしたことがどの程度あるか、お答えください。授業・就業時間、休憩時間、授業・就業時間後(部活や職場の宴会など)を含みます。 よくある／ときどきある／どちらともいえない／あまりない／まったくない |

5) 相談に関する項目

図表 54 相談に関する項目の具体事例

| 細分類 | 調査事例 | 調査項目例(報告書等より抜粋) |
|------------|---|--|
| 相談先の有無・相談先 | 多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査(2020、埼玉県) | 問 13 あなたには、心配事を聴いてくれる人はいましたか。 (1)小学校1～3年生の頃／(2)小学校4～6年生の頃／(3)中学生の頃／(4)高等学校・16～18頃／(5)19歳以降現在まで ※それぞれについて、「いた／いなかった／心配事はなかった」で回答 |
| | niji VOICE 2023～LGBTQの仕事と暮らしに関するアンケート調査～(2023、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ) | Q47 もし、何らかの不安や悩みがあるとしたら、以下の人に話すことができると思いますか。 配偶者・パートナー／母親(義理を含む)／父親(義理を含む)／きょうだい(義理を含む)／上記以外の親族／友人／教職員・教育関係者／職場(同僚、上司、部下、人事等)／行政の相談窓口／弁護士・税理士などの専門職／医療・福祉関係者／NPO・民間団体／インターネット・SNS上のつながり ※それぞれについて、「話ができる／わからない／話ができない／該当なし」で回答 |
| | 性的少数者に関するアンケート(2019、長崎県) | 問 28 当事者の方へお尋ねします。性的少数者として悩んだ時や困ったときに、どこ(誰)に相談していますか。 |

1.困ったことがない／2.誰にも相談しない／3.友人／4.家族(親・兄弟姉妹・配偶者／パートナー・子ども)／5.親戚(親・兄弟姉妹・配偶者・子ども以外)／6.医療・援助職関係者(医師・カウンセラーなど)／7.学校関係者(担任・養護教諭・スクールカウンセラーなど)／8.職場関係者(同僚・上司など)／9.性的少数者の支援団体／10.行政などの相談窓口／11.その他の民間機関／12.その他(具体的に:)

2. 性的マイノリティ当事者を対象としたヒアリング調査用資料 (性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法に関する意見収集用資料)

以下をヒアリング調査事項として予め提示の上、ヒアリングを行った。

1. 団体の概要について

- (1) 団体の活動内容・活動目的
- (2) 活動規模（所属人数、活動地域など）
- (3) 活動参加者の主な属性

◆下記の事項に関してご意見をお聞かせください。

2. アンケートやヒアリング調査への回答に係るご経験・お考えについて

※ここでのアンケート調査は、性的マイノリティ当事者（以下「当事者」という。）の方を対象とした調査と、当事者に限らず広く個人を対象としている調査の両方を想定しています。それぞれの調査について、ご経験・お考えをお聞かせください。

- (1) アンケートの設問や選択肢への違和感について
 - ① 性別や、その他性的指向・ジェンダーアイデンティティに関わる質問で、当事者が回答に困る（自分に当てはまる選択肢がない等）と考えられる、設問・選択肢
 - ② 当事者に関して誤った認識の設問があると感じたことはあるか。どのような設問・選択肢だったか。
- (2) 回答の心理的負担に関するご経験について
 - ③ 当事者を対象としたアンケート調査やヒアリング調査で、どのような時に心理的な負担を感じるか。
 - ④ アンケート調査中の設問や選択肢で、差別的な表現に感じることはあるか。ある場合、どのような内容だったか。
 - ⑤ ヒアリング調査中の質問者の発言で、気になったことや、配慮してほしいと感じたことはあるか。
- (3) その他留意すべきことについて
 - ⑥ 調査への回答の際、調査趣旨について説明不足だと感じる事
 - ⑦ 調査で回答した情報の取扱いに関して不安を感じることはあるか。情報の取扱いに関して、どのような説明があるとよいか。

3. 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

※当事者の方にとって「抵抗感が少ない」・「配慮がある」・「適切な表現ができる」のは、どのような把握方法か、という観点から教えていただけますと幸いです。

※当事者を対象とした調査と、当事者に限らず広く個人を対象としている調査で異なりましたら、それぞれ教えていただけますと幸いです。

(1) 性的指向の把握方法について

- ① 直接的に尋ねる方法、二段階の設問を設ける方法、恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法へのご意見
- ② ①以外で、どのような聞き方や選択肢が考えられるか

＜性的指向の認識の把握方法＞

| 名称 | 把握方法 |
|----------------------|---|
| 直接的に尋ねる方法 | 選択肢の例:「異性愛者／同性愛／両性愛」、「決めたくない・決めていない」、「無性愛者」 |
| 二段階の設問を設ける方法 | 第1段階:異性愛者か否か、あるいは性的マイノリティの当事者か否かを聞く 第2段階:異性愛者でない、あるいは性的マイノリティの当事者であると回答した者に対して、詳細を尋ねる |
| 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法 | 性的指向の認識について尋ねるもの、性的な惹かれ(実際にどのような性の相手に性的に惹かれるかなど)や性行動(どのような性のあり方をする相手と性交渉をするかなど)について尋ねるもの等 |

(2) ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ① 3ステップ方式、2ステップ方式、それ以外の方法へのご意見
- ② ①以外で、どのような聞き方や選択肢が考えられるか

＜ジェンダーアイデンティティを含む性別情報の把握方法＞

| 名称 | 把握方法 |
|---------|---|
| 3ステップ方式 | 第1段階:出生時の戸籍・出生届の性別を聞く 第2段階:出生時の性別と別の性を認識しているか、性別違和があるかを尋ねる 第3段階:第2段階目において、別の性を認識している、あるいは性別違和があると回答した者には、さらに性のあり方の認識について詳細を聞く |
| 2ステップ方式 | 第1段階:出生時の戸籍・出生届の性別を聞く 第2段階:ジェンダーアイデンティティを聞く |
| それ以外 | 性的マイノリティ当事者かどうかを直接尋ね、該当する場合には詳細を尋ねる方法 等 |

4. 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

※当事者の方への調査経験のある団体向けのご質問です。

- (1) 過去に実施された調査の目的と調査手法
- (2) 調査を実施した際の、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法（設問・選択肢の作り方）と、その方法を選択した理由
- (3) 調査の実施・集計・分析に当たって、どのようなことに留意したか。

5. 今後の研究等において考えられる調査項目について

今後、政策の検討を目的として、当事者が経験する困難等を把握するために、どのような対象（個人）に対し、どのような項目（調査内容）の調査を行うことが考えられるか。

以上

また、ヒアリング当日、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法の例として以下を提示して意見を聴取した。

【性的指向の把握方法】

A. 直接的に尋ねる方法

問 55 次の中で、あなたにもっとも近いと思うものに○をつけてください。(○は1つ)

- 1 異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない [異性のみに性愛感情を抱く人] >.....
- 2 ゲイ・レズビアン・同性愛者 [同性のみに性愛感情を抱く人] >.....
- 3 バイセクシュアル・両性愛者 [男女どちらにも性愛感情を抱く人] >.....
- 4 アセクシュアル・無性愛者 [誰に対しても性愛感情を抱かない人] >.....
- 5 決めたくない・決めていない > ①へ
- 6 質問の意味がわからない > 問56へ

(出所) 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和 (2023) 「家族と性と多様性にかんする全国アンケート結果概要」. <https://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI2/ZenkokuSOGISummary20231027.pdf> (令和7年3月31日閲覧)

B. 二段階の設問を設ける方法

問 57 あなたはご自身を、異性愛者 (異性だけに恋愛感情を抱いたり、性的に惹かれたりする人) だと思いますか。(○は1つ)

1. はい (→ 問 59 へ) 2. 考えたことがない (→ 問 59 へ) 3. いいえ

【問 57 で「3. いいえ」と答えた方におたずねします。】

問 58 あなたご自身の認識にもっとも近いものに○をつけてください。

1. 同性愛・ゲイ・レズビアン
2. 両性愛・バイセクシュアル
3. わからない
4. 決めたくない・決めていない
5. その他 ()

(出所) 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也 (2015) 「性的マイノリティについての意識 2015年全国調査」. <https://alpha.shudo-u.ac.jp/~kawaguch/chousa2015.pdf> (令和7年3月31日閲覧)

C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法

問 3 あなたの恋愛の対象となる性別について、あてはまるものをお答えください。(○は1つだけ)

- 1 異性が好き
- 2 同性が好き
- 3 両性 (男性・女性ともに) が好き
- 4 好きになる性はない
- 5 決めていない、決めたくない
- 6 その他 (わからない・回答しない等)

(出所) 新潟県 (2023) 「性の多様性等に係る県民意識調査 報告書」. <https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/378455.pdf> (令和7年3月31日閲覧)

【性別及びジェンダーアイデンティティの把握方法】

A. 3ステップ方式

問 53 あなたの性別に○をつけてください。[出生時の戸籍・出生届の性別](○は1つ)

1 男 2 女

※「出生時」とは、生まれたときにもっとも近い時点のことをさします。

問 54 あなたは今のご自分の性別を、出生時の性別(問53で○をつけたもの)と同じだと考えていますか。左側で2や3に○をした方は、今の認識をお答えください。

(○はいくつでも)

1 出生時の性別と同じ 今の認識にもっとも近い性別(○は1つ)

2 別の性別だととらえている >----- 1 男 3 男性・女性にあてはまらない

3 違和感がある >----- 2 女 具体的に _____

(出所) 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和 (2023) 「家族と性と多様性にかんする全国アンケート結果概要」. <https://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI2/ZenkokuSOGISummary20231027.pdf> (令和7年3月31日閲覧)

B. 2ステップ方式

問 1 あなたが出生時に指定された性別(戸籍上の性別)について、あてはまるものをお答えください。(○は1つだけ)

1 男性 2 女性

3 その他(回答しない等)

問 2 あなたが出生時に指定された性別(戸籍上の性別)に関わらず、あなたが現在、自分自身で認識している性別について、あてはまるものをお答えください。(○は1つだけ)

1 男性 2 女性

3 男性・女性の間 4 男性・女性の両方

5 男性・女性のどちらでもない

6 時により変化する

7 その他(わからない・回答しない等)

(出所) 新潟県 (2023) 「性の多様性等に係る県民意識調査 報告書」. <https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/378455.pdf> (令和7年3月31日閲覧)

C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法

(1) あなたの性別を教えてください

女性 男性 どちらともいえない いずれも当てはまらない 無回答

(2) あなたはご自身が性的マイノリティの当事者だと思いますか。

はい いいえ わからない 無回答

(3) (2)で「はい」の回答を選択した方は、ご自身の認識に近いものを選んでください。

L (レズビアン: 女性の同性愛者)

G (ゲイ: 男性の同性愛者)

B (バイセクシュアル: 両性愛者)

T (トランスジェンダー: 心と体の性が一致しない人)

X (エックスジェンダー: 自認する性別が男女どちらでもない、どちらとも言い切れない人)

Q (クエスチョニング: 自らの性のあり方などについて特定の枠に属さない人、分からない人)

わからない、決めたくない

その他 (_____)

無回答

(出所) 板橋区 (2022) 「パートナーシップ制度に関する調査報告書」. https://www.city.itabashi.tokyo.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/041/208/houkokusyo.pdf (令和7年3月31日閲覧)

3. 性的マイノリティ当事者を対象としたヒアリング調査の記録

【留意事項】

- ・ 「性的マイノリティ」「LGBT」等の表現については、ヒアリング対象者の発話の中で使用した表現を尊重しており、表記に揺れがある。一方で、性的マイノリティ非当事者については、特段の事情がない限り「性的マイノリティ非当事者」と表記を統一している。

(1) 特定非営利活動法人メリメロ

| | |
|------|----------------------------|
| 実施日時 | 2024年11月27日(水) 13:00~14:30 |
|------|----------------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|--|------|--------|
| 活動目的・活動内容 | 中高年の性的マイノリティをめぐる問題に取り組んでいる。学びの場の提供、情報発信、交流事業などを行っている。具体的には、外部講師を招聘した講演会を年1回、「おひとりさまの料理教室」を年4~6回ほど開催している。 | | |
| 所属人数(2024年度) | 6名(コアメンバー) | 活動地域 | 静岡県沼津市 |
| 活動参加者の主な属性 | コアメンバーは性的マイノリティ当事者・アライ。 料理教室は、性的マイノリティの方であれば誰でも参加できる。ゲイ男性が多いが、アセクシュアルやトランスジェンダーの方の参加もある。 | | |

- ・ 若い人向けの活動団体や、性的マイノリティの自認が定まったばかりの人に向けたピアサポートの組織はどの地域にもあったが、中高年をサポートする団体がないという問題意識から、2015年に団体を設立した。おひとりさま的な生活形態を持っている人が、中高年ならではの課題を乗り越えていくために知恵を出し合おうという趣旨で設立した。
- ・ 主な活動内容として、外部講師を招聘した講演会を年1回行っている。講師には、おひとりさまの性的マイノリティのライフハックや、お金の問題のことなどを話してもらっている。また、おひとりさま的な生活を送っている方への支援として、料理教室を開催している。料理教室では、心にも身体にもお財布にも優しい献立を学ぶことを目指している。新型コロナウイルス感染症によって一時中止していたが、現在は再開している。
- ・ 料理教室は、おひとりさまかどうかに関わらず、性的マイノリティの方は誰でも参加できる。会員制ではなく、誰でも参加可能である。何度も参加する方もいるが、新規の参加者も一定数いる。県外からの参加者もいる。市の広報誌である「広報ぬまづ」と、SNSで告知し、参加者を募集している。料理教室の講師は、性的マイノリティの当事者ではなく、ストレートの女性。趣旨を理解し、毎回献立を考えてくださっている。団体設立年の2015年から開始し、コロナ禍の時期を除き、年4~6回程度開催している。
- ・ 参加者の属性は、団体の代表者がゲイ男性であることもあり、ゲイの方が多いが、アセクシュアルの方やトランスジェンダーの方も料理教室に参加している。
- ・ 団体は、コアメンバーが6名おり、持ち回りで事業を行っている。コアメンバーは、マイノリティ当事者とアライである。
- ・ 料理教室などの参加者に対し、アンケート調査を行ったことはない。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 医療機関の間診票で性別の記入欄があるが、男性・女性・その他とした区分を見かけることがある。また、自分が経験したわけではないが、SNS上で、男性・女性・LGBTという選択肢

があったと聞いたことがある。そういった、雑な選択肢を作るくらいなら、自由記入欄にした方がよいと感じている。

- ・ 心理学分野の研究などで、LGBTQIA…など 30 以上の分類が考案されていると聞いたことがあるが、懇意にしている心理学の先生は、専門家が分類をして、研究をするための分類であって、自分探しのツールではないと言っていた。アンケート調査に、30 数個の選択肢を設定するわけにはいかないこともあり、自由に書いた方がよいと思っている。

② 回答の心理的負担に関する経験

③ その他留意すべきこと

- ・ 性的マイノリティ当事者は、回答しないと不利益があるかもしれないと考え、質問者に迎合した答えをしてしまう可能性がある。非回答に対する不利益はないことを明言した方がよいと思う。
- ・ 自身の就職活動の際に、心理検査で、「同性に惹かれることがある」、「同性を性的対象と感じたことがある」という項目に対して答える設問があった。正直に答えたところ、最終面接で面接官から本当に同性愛者なのか聞かれた。ホモソーシャルな組織風土の中で同性愛者はなるべく排除したいという思惑が働いていたのだらうと思う。設問を設定するに当たって、性的指向や性自認に関して、誘導的になるような仕方はよくない。
- ・ なお、心理検査は、受験先の組織が作成したものではなく、入社試験時のフォーマットとして販売されているものだった。就職活動のような、回答によって利益・不利益が発生する場面で、安易に性的指向についての設問を設けない方がよい。調査で性別や性的指向を聞かれることについて、自分は、今は何とも思わないが、性的マイノリティであることを隠している方は、聞かれたくない場面もあるだろう。回答してもよいと思うかどうかは、調査の匿名性がどこまで担保されるかによる。例えば、回答した調査票を提出する際に、厳封される封筒に入れるのか、はがきを封筒に入れずに出すのかによって、印象が変わる。また、無記名であっても、回答内容や、その他の情報と照合することで本人の類推が可能であるならば、精度の高い回答は期待できないかもしれない。匿名性や情報の取扱の信頼性が重要である。
- ・ 既婚か未婚かという設問に対しては、現在の法制度では同性愛者は結婚できないので、差別的な取り扱いとを感じる。また、出生時の性と自認する性が違う方だと、一致することが前提のような文章はよくないと思う。例として、トイレの利用などの話がある。また、女性向けのアンケートで、月経に関する質問をすることや、男性限定のアンケートで、男性であることを前提として性的なことに関する質問をすることがあるかもしれないが、出生時の性と自認する性が違う場合には、答えにくいだろうと思う。
- ・ ヒアリング調査に関する経験として思い出すのは、先にも述べた就職活動の採用試験の経験である。面接で、心理検査の回答はどういうことなのか、本当に同性愛者なのかと聞かれ、不利に扱われた。自身が同性愛者であることに対して、面談者からコメントがあったわけではないが、同性愛者を採用するつもりがないならあらかじめ言ってほしいと感じた。今となつては、就職差別に該当することであるが、同性愛に関わる質問を含んだ心理検査のフォーマットは、3～4年前まで使われていたと聞く。政策の検討に活用される調査など、間接的に効力を及ぼす調査と、就職試験など直接の利害関係がある際の調査とでは状況が異なるが、

調査の際には、回答の内容の如何に関わらず、不利益な取り扱いをしない旨を断るべきである。

- ・ アンケート調査で回収される調査票がどのように扱われ破棄されるのか気になる。情報の取扱いという観点では、回収した調査票の保管方法や、いつ破棄するかといったことについても、一文加えた方がよいのではないか。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 若い世代を対象とした調査であれば、「A. 直接的に尋ねる方法」のように、ゲイ、レズビアン、アセクシュアルなどの選択肢を設け、その中から選んでもらうことでもよいだろう。しかし、中高年の性的マイノリティの中には、セクシュアリティやジェンダーアイデンティティに関する言葉をよく知らない方もいる。そのため、「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」のように恋愛の対象になる性別を聞く方が回答しやすいのではないか。
- ・ さらに回答しやすい方法は自由回答である。ゲイであってもバイセクシュアル寄りの方もおり、どちらを選ぶかその時々によって迷うこともある。自由回答で、それぞれの状況を自由に回答できる方がよい。
- ・ あるいは、セクシュアリティについて、インジケータのようなものを使って回答してもらうことも考えられる。インジケータだけでは分析上不都合があるならば、「A. 直接的に尋ねる方法」のように、直接的にセクシュアリティを聞いた後で、インジケータを使った設問を追加で設けるのはどうか。インジケータを使った設問として、例えば、同性愛、又は両性愛を選択した回答者を対象として、両端に男性、女性を置いた座標を示し、どちらにより惹かれるかを指示してもらうことなど。
- ・ なお、最初に異性愛者か否かを尋ねる「B. 二段階の設問を設ける方法」については、異性愛を前提とした問いかけであるように見える点に抵抗がある。性的マイノリティ当事者からすれば、快くはない。そのため、「B. 二段階の設問を設ける方法」よりは、「A. 直接的に尋ねる方法」の方が回答しやすいだろう。
- ・ 性的指向やジェンダーアイデンティティは流動的であり、選択肢化して一つを選ぶことは難しい。ただし、アンケート調査を行う上ではやむを得ないと思うので、「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」のような聞き方で把握するのがよい。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」では、「ゲイ・レズビアン・同性愛者」となっているが、ゲイ、レズビアンに対する日本語訳のような書き方で同性愛者という言葉の併記するのは違和感がある。
- ・ また、「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」の聞き方については、恋愛対象となる性別を聞いており、性行為の対象は聞いていないが、「同性愛者」とすると、恋愛対象も性行為の対象もどちらも包含できるように思う。そのため、「A. 直接的に尋ねる方法」の聞き方で選択肢2「ゲイ・レズビアン・同性愛者」を選んだ方が、皆「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」で「同性が好き」であると回答するとは限らない。また一般にアセクシュアルは性行為に全く興味がない方であるのに対して、アロマンティックは恋愛に全く興味がない方を指し、この二つも区別できる。「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方

法」の聞き方であっても、恋愛対象を尋ねることと性行為の対象を尋ねることの違いを認識した上で設問設計したか否かによって、この尋ね方への評価は異なるだろう。

- ・ なお、MSM (Men who have sex with men : 男性間性交渉者) の中には、男性と恋愛はしないが、性行為はするという方もいるが、そのような方は、自身をゲイとは認識していないので、「A. 直接的に尋ねる方法」や「B. 二段階の設問を設ける方法」の聞き方では、異性愛者と回答するだろう。聴取の方法によって、拾えない属性があることも考えられる。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」のように、ジェンダーアイデンティティと性的指向を直接聞くのが効率的ではないか。
- ・ 「A. 3ステップ方式」や「B. 2ステップ方式」のように、出生時の性別を尋ねる方法は、性分化疾患の方への配慮に欠けている。性分化疾患の場合には、出生時の性別は医師が便宜上定めただけであり、本人が認識する性別とは関係がない。ラディカルな立場の方の中には、16歳までは性別欄は空白にしておき、16歳になったときに自分で選ぶようにすべきだと主張する方もいる。
- ・ 「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」の調査事例のように、性別違和の有無を先に聴取して、性別違和がなければ出生時の性別を聞き、性別違和があれば現在の性自認を聞くという方法について、性別違和がある場合に出生時の性別を聞かないで済む点は評価できる。ただし、性分化疾患の方の中には性別違和はないが、出生時の性別と性自認が異なるケースがあり、そうした方にも出生時の性別を問うことになるため、依然問題は残されている。当事者性のある方には、出生時の性を聞かずに済む方法を取った方がよい。
- ・ なお、「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」の調査事例では、その前にも、性別について聞いている設問があるが、「性別を教えてください。」という聞き方では、戸籍性のことを指すのか、性自認のことを指すのか分かりにくい。「どちらともいえない」という選択肢があるので、性自認と解する方がよいのだと思うが、もう少し分かりやすく聞いてほしい。
- ・ また、トランスジェンダーについては、トランス男性かトランス女性かが把握できた方がよい。その場合もトランスジェンダーであると回答した方に性自認を聞けばよいのであり、出生時の性別を聞く必要はない。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

- ・ 当団体では、調査は実施したことがない。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ 孤独・孤立の問題に関心を持って取組を進めている。おひとりさまで未婚の方の中には、一定程度性的マイノリティの方がおり、性的マイノリティ非当事者とはライフスタイルも異なることが予想される。今後おひとりさまを対象とした調査を行う際は、SOGI を把握した上で、困難経験等をヒアリングすべきである。また、そこで得られた結果は我々のようなNPOにもフィードバックいただきたい。

- ・ 孤独・孤立問題は、孤立が原因でセルフネグレクトになったり、精神的苦痛を抱えてしまったりすることである。これらの問題について、何とか自分で対処できる方はよいが、難しい方には支援が必要である。
- ・ 特に地方では、性的マイノリティであることを隠さざるを得ず、地域コミュニティに出ていくこともできない方が多い。アンケート調査でこうした方を把握することには限界があるので、きっかけを捉えて人と人とのつながりを作り、丁寧に聞きとりを行っていくことが必要である。困難事例の支援に入る中で、本人が性的マイノリティであることが判明する、といった例も聞いたことがある。このような機会を捉えて、適切な支援につないでいけるように、地道に取り組んでいくことが重要である。
- ・ 調査の中で SOGI について細かく聞かれることについて、性的マイノリティか否かを把握するだけでは不十分なのか、細かな属性まで把握する必要があるのかと疑問に思う時もある。細かく SOGI を把握することが調査の目的に合致していれば納得感も変わるだろう。
- ・ SOGI についての質問の仕方について、フォーマットを作成し公開してもらえれば、医療機関の間診票などにも反映されるだろう。どのような聞き方であれば性的マイノリティが傷つかないか十分に検討の上、広く公開されることを期待している。

以上

(2) (任意団体) 性と生を考える会

| | |
|------|-----------------------|
| 実施日時 | 11月29日(金) 14:00~15:30 |
|------|-----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|--|------|--------|
| 活動目的・活動内容 | 講演会や研修会の講師、自治体への要望書提出、冊子作成等 | | |
| 所属人数(2024年度) | 会員の名簿はないが、5、6名規模で活動。 | 活動地域 | 奈良県奈良市 |
| 活動参加者の主な属性 | これまでには、LGBTQX等性的マイノリティも、性的マイノリティ非当事者も、多様な人が参加している。 | | |

- ・ 2000年設立。「性」は生きることや生活に深く関わっているにもかかわらず、人権であるとの認識は、当時広く共有されていなかったため、性を人権の視点で考えることをテーマに活動を開始。勉強会やサロンのような集まりを継続するうちに、性的マイノリティ当事者の参加者が増え、カミングアウトしていなかったメンバーもお互いに話せるようになった。当事者に限らずどのようなセクシュアリティやジェンダーの人でも自由に参加することができる。
- ・ その時必要なことを、プロジェクト形式で取り組んできた。以前は会報を発行していたが、現在は冊子作成や講演が主な活動である。これまでに、教職員や学校、介護職、看護職向けなどの冊子を作成し、ホームページで公開している。
- ・ 県内全自治体等へ、環境整備に関する要望書を何度も提出している。書類やトイレ・更衣室などハード面に関わること、研修会の実施、教育啓発、災害時のマニュアル作成など、生活全般に必要な12項目を要望した。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

■アンケートの目的について

- ・ 自治体の意識調査などの一般的な調査では、男・女しか性別に関する選択肢が無いことが多い。また、ネット上の調査では、選択肢を選ばなければ次の設問に進めないことがある。調査の目的や説明事項を確認した上で、身体性別で答えるかどうか選択している。
- ・ アンケートの目的と設問の整合性に疑問を持つことがある。例えば、仕事の担当者に関するアンケートで、関係のない学歴について聞かれたことがある。目的と関係のない設問を設けないという配慮は必要だろう。
- ・ トランス男性として、戸籍上の性別について答える必要があれば答えるが、なぜ問われているか分からなければ答えない。設問の必要性を端的に説明しているかどうかポイントとなる。

■用語の認知度を問う設問について

- ・ 自治体等のアンケートでよくある「LGBTという言葉を知っていますか」という言葉の認知度を聞く設問や、「言葉の意味を知っているか」という設問は、意味が無いとは思わないが、目的が不明瞭のように思う。同じ言葉でも日本と海外、国内でも使い方が異なる場合や、辞書に載っていない言葉も多い¹⁴。例えば、「セクシュアルマイノリティ」は英語圏では性的指向のマイノリティを指し、性自認のマイノリティは「ジェンダー・マイノリティ」という。また、「トランスジェンダー」の説明は国内でも様々である。「違和感がある人」という説明をよく見るが、違和感の有無は問われないはずである。自治体では性同一性障害や性別違和などの疾患概念で説明している例もあるが、トランスジェンダー、性同一性障害、性別違和、性別不合が同義ではないということに注意が必要である。意味を知っているかと質問して、言葉の説明が記載されていたら、それが正解だと思われる。言葉の説明については、注意が必要だと考える。言葉の使い方には幅があること、変化し得るということも書いてあると良い。一方で、質問するだけで言葉の説明がない調査も多いが、これでは本当に意味を知っているのか判断できないのではないかと疑問である。
- ・ 自治体の調査で「アライと表明していますか」や「アライという言葉を知っていますか」とした設問がある。日本では、アライとは「理解者・支援者」「支援の意思がある性的マイノリティ非当事者」というような説明がされている。マジョリティも含む皆が「多様な性を生きる当事者」であり、「社会的課題の解決に自分ごととして向き合う当事者」と考えれば、「マジョリティ／マイノリティ」「支援者／被支援者」「理解する側／される側」という前提や、「マイノリティへの理解」という言い方に上から目線を感じて違和感がある。また、「アライの表明が良いこと」という前提の質問にも違和感がある（企業や自治体など団体が表明するのは良いと考える）。

■「理解」について

- ・ まずは、何を理解すべきか、「性」をどのように捉えるかということがあるだろう。性の在りようが多様であることを理解する、多様性を尊重するという土台がない状態で言葉だけが普及しても、理解増進とは言えないのではないかと。
- ・ 「性的マイノリティについてどのような考えやイメージを持っていますか」「男性が男性に恋愛感情を抱くことについてどう思いますか」という設問には失礼だと感じるものもあるし、その解答にある「理解できる／理解できない」という選択肢や表現にも違和感を抱く。どういう意味で理解できるかと質問しているのか、分かりにくい。
- ・ 回答の中には「自分が同性を好きになれないので、同性愛は理解できない（自分は同性を好きになれない）」という誤解も見受けられる。誤解を招かないよう、質問の文章や表現に工夫が必要だと考える。一方で、理解できなくても差別しない・排除しないという姿勢や行動があれば良いのではないだろうか。「理解できない」理由や背景、どう行動するのかなどが見えるような設問があると良いと考える。

¹⁴ 後述するもののほか、アセクシュアルは英語圏では「性的に惹かれない」「性愛の感情を抱かない」ことを意味するが、日本では単に「恋愛感情を抱かない」「あるいは恋愛感情も性愛感情もない」を指すこともあるなど混在している。（最近では日本でも恋愛的に惹かれないアロマンティックと区別する使い方も見られるようになっている）そのほか、アライは英語圏では「同盟：共に闘う味方」というニュアンスが強いと認識しているが、日本ではよく「理解者・支援者」という意味合いで使われている。

■多様性について

- ・ 分岐により、回答できる選択肢が狭められてしまうことがある。本心ではなくても、調査の仕組み上、何かしら選択しないといけない。例えば、バイセクシュアルで恋愛と性行為の相手が異なる方がいる。恋愛対象は男性だが、性行為は男女両方という人もいるが、アンケート調査などではこれを正確に回答することは難しい（バイセクシュアルと回答すると恋愛対象も性行為も両性が想定されてしまう）。これは、恋愛感情と性行動は、必ずしも一致しないということが認識されていないからだと思うが、自分の本来の在りようが反映されないような設定には違和感を抱くことがある。
- ・ 行動や表現、現在の認識とアイデンティティは必ずしも一致しない。調査において何を聞かれているのか（アイデンティティなのか、行動や生活実態なのか）、毎度迷う。何を聞くための質問なのか、どのような集計をして、どのように生かすのかが示されていると、回答者も判断して回答しやすい。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 住民数が少なくコミュニティが小さい地域では、すぐに話が広まってしまうため、性的マイノリティ当事者は、自治体単位の調査では答えにくいだろう。さらに、職場のように、集団が小さくすぐに回答者が特定されてしまいそうな場合は、調査は難しいだろう。性的マイノリティに関する調査に限らず、職場で行われるセクハラ・パワハラに関するアンケートでは、回収者に回答を見られないか不安を抱く。秘匿性が確保された調査であってほしい。
- ・ ネット上の調査であれば、誰にも見られず、いつでも回答できるため、心理的・身体的負担は少ない。
- ・ 戸籍の性別を聞かれることの心理的負担については、目的次第である。ただし、自身は団体に活動しているため、目的次第だと思えるが、一切聞かないで欲しいという人もいる。答えたくないという選択肢があるとありがたい。
- ・ 否定的な内容や表現の選択肢が入っている設問を見ることもあり、心理的負担になり得る。
- ・ 自治体で実施している SOGI 関連の取組の認知度を尋ねる設問があると、自治体の取組を知ることができ、それなら回答しよう、とポジティブな気持ちになる。
- ・ 調査実施主体が何者なのか、分かるとよい。

③ その他留意すべきこと

- ・ 調査をすれば改善するというのではないと承知しているが、性的マイノリティの可視化、社会的な問題の解決につながる調査だということが分かると、回答しようと思える。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 恋愛感情と性行動は一致していないこともある。何を聞きたいか明確でないと答えにくい。例えば、性感染症の調査であれば性行動について聞く意義が分かるが、一般的な調査では性行動について回答しにくいだろう。
- ・ 「B. 二段階の設問を設ける方法」と「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」は、恋愛対象と性的な惹かれを併記しているが、どちらについて答えればよいのか迷う人もいだろう。質問が「恋愛対象」だけの場合には、恋愛対象と性的対象が異なる人が不可視化される。また、分けて質問した場合には、恋愛対象と性的な惹かれの違いが分からない人は混乱するだろう。「A. 直接的に尋ねる方法」が、シンプルで答えやすい。
- ・ 性的指向の多様さを示したいのであれば、「B. 二段階の設問を設ける方法」や「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」の方法になるだろう。ただし、前述のとおり何を聞きたいのか明確でない点は改善の必要がある。
- ・ 調査の結果、性的マイノリティの中にも様々な方がいるということを示したいのであれば、「あなたは自分のことをどう表現しますか」という聞き方になるだろう。当会も、「どんなに長くても、あなたが書いたとおりに載せます」と伝えて聞きとったことがある。一方で、大きな傾向を見るのであれば、シンプルな聞き方が良いだろう。その場合は、どのように集計するか、予め示してほしい。自分が意図しない属性として集計されてしまうケースがあるため、前もって説明されているとよい。
- ・ 当事者目線で言うと、おそらく恋愛感情でなく性行為の相手を選ぶ人が多いのではないかと。「A. 直接的に尋ねる方法」の「性愛感情」は聞きなれない言葉であり、混乱する人もいかもしれない。広く一般に聞く調査であれば、説明を付けず、ゲイ、バイセクシュアルなどの属性を選択肢にするのが良いだろう。性的指向については比較的言葉が知られており、ジェンダーアイデンティティほど複雑ではない。
- ・ 調査目的や対象者によって、恋愛感情と性行動の両方について聞くか、「A. 直接的に尋ねる方法」の方法をとるか、正解はない。「A. 直接的に尋ねる方法」の方法で直接的に尋ね、追加で詳細を聞くことも考えられるだろう。
- ・ 性的マイノリティ当事者の中にも、自分の属性のことしか知らない人もい。学校で教わる機会もなく、言葉の意味や使い方については必ずしも統一されていない。「あなたは何者ですか」と聞かれて困る人もいだろう。言葉の意味や使い方が共有されていないという前提で、設問を考える必要があるのではないかと。また、必要に応じて意図について説明があるとよい。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」、「B. 二段階の設問を設ける方法」では「もっとも近いと思うもの」と書かれているため、選択しやすい。「決めたくない・決めていない」「質問の意味が分からない」という選択肢に加え、自由記述欄があるとさらに回答しやすいだろう。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ ジェンダーアイデンティティをはっきり認識している人と、曖昧な人がいるため、把握方法を考えるのは難しい。あえて尋ねるのであれば、今の自身の性別と出生時の性別が「違うかどうか」は一つのポイントだろう。

- ・ 久喜市が令和2年に行った「性的マイノリティに関する市民アンケート」では、性自認について表に数字を入れて○をつける方法で尋ねていた。誘導にも感じるし、自分をどこかに当てはめさせられるようで、不快である。学校等、性の多様性に関する学習の一環で、性別の図を使うことはあるかもしれないが、調査対象の性別を尋ねるために説明もなく、図だけを使うことは、多様性理解のために有効とは思えない。
- ・ 3つの例のうち、「B. 2ステップ方式」がよい。「A. 3ステップ方式」では、点線で囲まれている質問が、問い詰めるような聞き方に感じられる。また、性的マイノリティ非当事者にとっても「B. 2ステップ方式」が答えやすいだろう。
- ・ 「A. 3ステップ方式」の2ステップ目で、複数選択が可能なのは、一つだけ選ぶのは難しい人もいるためということだろうが、選択肢の意味が分からず混乱する人もいるかもしれない。また、シスジェンダーの人でも違和感がある人はいるだろうが、そういう多様性を拾う目的もあるのだろうか。違和感とは何を意味するのか、分からない人もいるだろう。日本では、性の在りようについての前提が社会的に共有されていないので、選択肢の設定や説明が難しいと感じる。
- ・ 「B. 2ステップ方式」が用いられている調査報告書を読んだところ、回答した選択肢がそのまま報告書に載っていたが、集計によっては、回答した選択肢によって後から属性の名前を当てはめていく場合もある。その際に、自身の認識と異なる属性に含められてしまうことがある。
- ・ 調査によっては、トランスゲイ、トランスレズビアンなどの人々が、「トランスジェンダー」として集計され、性的指向に関するマイノリティとして集計されないことがある。Xジェンダーかつバイ（パン）セクシュアルなどの場合も同様である。どちらで集計されているかによって、数字は異なる。最近では性的指向とジェンダーアイデンティティを分けて集計するケースもある。数字を見せる際に、その説明は必要ではないだろうか。
- ・ 「性的マイノリティは〇%もいます」という数字のアピールには違和感がある。マイノリティの話なのに、どうして数をアピールするのだろうか。
- ・ Xジェンダーはトランスジェンダーに含まれると考えるかどうか、当事者の中でも人によって様々である。集計の際、含めるかどうかで、数字は大きく異なる。当事者にとってはアイデンティティとのずれが生じる可能性もある。集計時にまとめるかどうかは、調査の目的や説明によると考える。
- ・ 「A. 3ステップ方式」の間53に「回答しない」という選択肢は設けないのか。強い違和感を抱きながら割り当てられた性別で生きている人が答えたくない場合のために、「答えたくない」や「無回答」が用意されているとよい。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

- ・ 当団体では、調査は実施したことがない。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ 性的マイノリティ当事者が、どのような生活上の困難を抱えているのか、その背景にある社会的な構造の問題が見えてくるような調査設計にしてほしい。

- ・ ある地域の役所では、「田舎なので、この町に性的マイノリティ当事者はいない」と考えていた（障害者の施策も同様に、人数が少ないから必要ないとされていた）。また、流行りのように、隣町がやっているからと、当事者抜きで制度を作っている自治体もある。各地域で日々を生活している当事者の声を、自治体が政策に活かせるような調査を行ってほしい。
- ・ 自治体の取組を努力義務でなく、強制力のあるものにすることも考えられる。困りごとを抱えている人がいても、自治体は費用対効果を考え、取組をやめてしまうことがある。
- ・ 自治体担当者と話していると、マイノリティのためだけの施策はできない、地域住民の理解が必要など、施策を行わない多様な理由を述べてくる。性的マイノリティ当事者も一市民であるのに、性的マイノリティ非当事者と同じ選択肢が得られない現状は、公平性を欠く状態だと考える。目指すべきは、自分と異なる存在に対し、理解できるかどうかではなく、理解できなくても尊重できること、不公平を是正することだと考える。調査の前提として、どのような社会を目指すのかということ整理した上で、そのために必要な材料が抽出できるような調査設計をお願いしたい。
- ・ 「奈良県内には性的マイノリティ当事者はいない」と言われて作成したのが、手記『わたしたちはここにいる 性的マイノリティの声：奈良県版』である。性的マイノリティ当事者の声と、困難の背景を理解してもらいたいと思い、作成した。調査では、データの背景や課題をどのように捉え、どのように解決していくかが重要である。課題の解決につながるような調査にしてほしい。

以上

(3) 一般社団法人 Broken Rainbow-japan

| | |
|------|----------------------|
| 実施日時 | 12月2日(月) 13:00~14:30 |
|------|----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|---|------|----|
| 活動目的・活動内容 | LGBTIQAの性暴力被害に関する支援体制の構築、政策提言等 | | |
| 所属人数(2024年度) | 理事: 4名 社員: 20名程度 | 活動地域 | 全国 |
| 活動参加者の主な属性 | シスジェンダー、トランスジェンダー、インターセックス、レズビアン、バイセクシュアル、アセクシュアル、ヘテロセクシュアルなど、多様な属性の方が参加している。 | | |

- ・ 2003年から性暴力に関する活動を開始した。当初は女性に対する性暴力に着目していたが、性の在り様に関わらず被害に遭っている人がいるということが不可視化されていることに気づいた。2009年にレイプクライシス・ネットワークを立ち上げ、性の在り様に関わらず、被害に遭った人が助けを得られるようにと活動してきた。
- ・ 2015年に刑法改正に関する議論が始まったが、LGBTIQの性暴力に関して活動している団体が日本には無かった。レイプクライシス・ネットワークは性の在り様に関わらず活動していたが、LGBTIQAに特化した団体を作るべきと考えようになった。まずはレイプクライシス・ネットワーク内のプロジェクトチームとして活動を始め、国の検討会等にも参画していたが、2017年に独立した団体として一般社団法人 Broken Rainbow-japanを立ち上げた。2024年5月に法人化している。
- ・ 性暴力の被害を受けた当事者から話を聞き、WHOのレイプの定義に日本の法律を合わせることを政策提言の中心的課題として、活動してきた。日本にはLGBTIQAの性被害に関して取り組んでいる団体がなく、コミュニティの中でも取り組んでいる人が少なかった。海外の団体とも連携し、情報収集しながら活動してきた。
- ・ 団体の事務所は、代表が在住の青森県に置いているが、政策提言等、日本全国で活動している。個人的に、コミュニティカフェやプライドパレードなどの地域活動も行っている。また、LGBTIQAのジェンダーに基づく暴力(GBV)に関するアジアの地域ネットワークにも参加しており、連携を取っている。欧米からの情報は比較的入ってきやすいが、アジアにおいてGBVをどう語っていくかという点で、強い連携を取っている。OutRight Action Internationalが中心となって運営されているネットワークであり、始まって5年目である。
- ・ 団体のメンバーは、理事が4名、社員が約20人である。メンバーを増やそうと活動するのではなく、コアメンバーで話し合っ活動している。
- ・ 活動参加者の年齢層は20-60代と幅広く、SOGIESCの面でも、シス男性やシスヘテロセクシュアルの人も含めて多様な属性の人がいる。
- ・ 団体メンバー以外にも、国内外問わず多くの人に応援してもらっており、分野に応じて様々な人に協力をお願いしている。例えば、公表する文書の監修を依頼することがある。日本のコミュニティでよく使われる言葉と、国連や国際学会で使われる言葉にはニュアンスの違いがあるため、どのように読み手に捉えられるか注意している。

- ・ LGBTQIA、LGBTIQA などの呼称も、センシティブな問題である。アジアのネットワークでは、ILGA や国連のように、もともと LGBTI を使っていたが、より不可視化されやすい人々を可視化すること、SOGIESC の多様性を可視化するためにも、Q や A、+ などが加えられ、LGBTIQA+ を用いるようになった。一方、米国では LGBTQIA+ が使われている。派閥のようになるのは望んでいないが、何を重視するかにより変わる。
- ・ レイプクライシス・ネットワークでは相談対応が活動の中心であった。これは、活動時、性犯罪・性暴力被害者のための性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センター（ワンストップ支援センター）などの相談に対応できる体制が無かったためである。現在は、相談窓口を設けてはいないが、団体のメールアドレスを公開しており、支援を必要とする人から連絡をもらっている。また、他団体からの紹介で、相談に対応することもある。
- ・ 現在は、政策提言のためのネットワークづくりに特に注力している。2023 年の刑法改正により、男性器だけでなく、手指及び器具の挿入が不同意性交等となるなど、中心的な課題として要望してきたことが最低限反映されたため、ワンストップ支援センター等の支援機関が LGBTIQA+ からの相談に対応できるようプログラムの作成や研修を実施している。一方、レイプシールド法の制定や、同意に関しての年齢の段階的要件など、まだ政策に反映されていない課題も残っている。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 役所の書類等では疑問も持たず名前と性別が聞かれることがあり、青森県の自治体に対して不要な性別に関する質問を削除するよう要望してきた。一方で、近年では、LGBTI を可視化する目的で、性別を聞かれることも増えてきた。性別を聞く目的が明確であれば、回答しようと思える。
- ・ 性的マイノリティ当事者の方から、図書館の登録の際に性別を聞かれるのが嫌だと言われたことがある。図書館にとって、利用者のジェンダーは、学問におけるジェンダーギャップについて把握するために重要な情報なのかもしれないが、SOGIESC は個人情報であるため、不要な個人情報の聞き取りが無いかという視点を土台とすることが重要である。
- ・ 全国調査（アンケート等）では、フェイス項目で居住地を聞かれることがある。青森県の回答者は少ないため、追跡すると誰が回答したか分かってしまう恐れがある。個人が特定される形では公開しないと言われるが、回答者が分かってしまう可能性もある。居住地を聞く必要がないとは思わないが、結果の公表方法も含めて、「不安を感じる必要はない」ということが明示されているとよい。自治体の調査でも、性の在り様と比べて、居住地域についてはあっさり尋ねているが、回答者にとっては気になるポイントである。不安を軽減させる方法を考えられるとよい。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 心理的負担の大小はアンケートの内容によるだろう。例えば、性暴力に関するアンケートでは、暴力についての設問で心理的負担が生じる。また、母数が少ない地域のアンケートでは、アウティングへの恐怖感を抱くことがある。SOGIESC に加えて人間関係についても聞くアンケートであると、地域や対人関係への影響について心理的負担を感じるだろう。

- ・ 性暴力被害に関する調査は、心理的負担は大きい重要な調査であるため、実施しなければならない。心理的負担を軽減する方法として、回答者が困ったら相談できるヘルプラインを表示することが考えられる。例えば、スウェーデンのユースクリニックや米国のRAINN (Rape, Abuse & Incest National Network) のホームページでは、全てのページからすぐにヘルプラインにつながるようになっている。アンケートの形式・媒体にもよるが、サポートティブな方法を考えることで、対応できるのではないか。
- ・ 質的調査の場合は、対面で行うのがよい。対面であれば、回答者が辛くなったらお茶を出す、少し雑談をするなど工夫できるだろう。紙面の場合は、回答する場所によって負担が生じる可能性がある。自宅で紙面で回答することが安全でない人があることを考えるとオンラインが良いと思うが、調査としてのデメリットもあるかもしれない。予算のかからない方法を選ぶのではなく、一斉の電話調査や対面調査で実施できるよう、予算を確保することも重要である。

③ その他留意すべきこと

- ・ トランスジェンダーについて、「心の性別」と書かれることがある。一般向けの調査で分かりやすいため、そのように書いているのだと思うが、すでにトランスして生活している人は、自身に当てはまる選択肢が分からないだろう。また、心の性別という表記自体に嫌悪感を持つ人もいるかもしれない。人によって認識の違いがあり、言葉をどのように定義するかが重要だと思う。
- ・ 無性愛、A セクシュアル等の選択肢について、これにアロマンティックは当てはまるのかという話がある。限定した書き方となっており気になることがある。
- ・ 近年、行政の文書で疑問に思うのは、性の在りようについて「4つの性」という説明をしているケースである。おそらくミルトン・ダイヤモンド氏のPRIMO（性を構成する5つの要素）の考え方から来ているのだろうと考えている。
- ・ 出生時に医療的に割り当てられた性を「戸籍の性」と表すケースがあるが、誤りである。戸籍を変えた人、戸籍を持っていない人もいるが、戸籍を持っていない人には性が無いということなのか。国境を越えても性の在り様は変わらない。定義付けをするにも、性の在り様を日本国内だけで語ることはできない。
- ・ 2015年にNHKが実施した調査では、青森県の回答者は50人以下であった。2014年には市議会の議事録に、「青森では（性的マイノリティ当事者が）確認されておりません。」という発言が残っている。性の多様性は都会の問題であり、田舎では言いづらいので目立ちたい人は東京に行くだろうという考え方は今でもある。どの地域でも重要な問題なのだとすることを知らせなければいけない。
- ・ 調査の最初の設問で居住地を選ばなければいけないことのハードルが高い。この情報が重要であるという説明が一言あれば、答える勇気が出るだろう。2017年に行った青森県の当事者向け調査では約200人に答えてもらった。学校で困ったことなどの自由記述欄も、多くの人が回答してくれた。パレードで歩くななんて想像もつかなかったという人も、地域のためになるのであれば、回答してくれる。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」について、「ゲイ・レズビアン・同性愛者」と中黒で区切られているが、ゲイやレズビアンは同性愛者に含まれるのではないのか。
- ・ 当事者にとっては「A. 直接的に尋ねる方法」でよいが、広く市民対象の調査では、「B. 二段階の設問を設ける方法」が答えやすいだろう。問 57 の「考えたことがない」という人の数を可視化することも興味深い。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」では、一般市民は面倒になるだろう。自分ごととして捉えず、ふざけて記入する人が稀にいる。やはり「B. 二段階の設問を設ける方法」がよいと思う。
- ・ 「性愛感情」は市民にとってあまり聞いたことが無い言葉ではないか。「性的関心」あるいは「恋愛感情」という書き方をし、前者であれば「性的関心を同性に抱く」とするほうが理解できるだろう。また、アセクシュアルについては性愛と言えるのか違和感がある。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」で用いられている「性愛感情」の定義は分からないが、設問の趣旨は分かるため、当てはまると思うものを選ぶだろう。
- ・ 「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」について、MSM (Men who have sex with men : 男性間性交渉者) についてそもそも聞く必要があるのか。性感染症や性暴力に関する調査であれば、性行為の相手を聞くことは重要である。ただし、同性愛者かどうかという話とは異なる。同性愛者でも異性とセックスできる人もおり、分けて考えるべきである。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 「出生時」とは難しい言葉である。出生時の性別を聞く際、インターセックスの方を不可視化した状態になっている。これまでの調査で、出生時の戸籍が「その他」であった人は一定数存在する。回答したくないのではなく、決定できていない人のことである。「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」の法律名には、性的指向とジェンダーアイデンティティまでしか含まれていないが、性的特徴をどのように捉えるかという論点もある。
- ・ 「B. 2ステップ方式」では男女以外の選択肢が「その他（回答しない等）」となっており、インターセックスの当事者は答えづらいだろう。
- ・ 自治体のアンケートで、むやみに SOGI に関する項目を入れるケースがある。その多くでは、「その他」を選んだために集計から省かれてしまう。「人権に関する姫路市民意識調査」で、差別に関しての認識が男女間でどう違うかという項目があったが、LGBT の人々が含まれていない。LGBT の人々の多くは男・女に振り分けられるはずであるのに、SOGI の設問で「その他」を選択したがゆえに不可視化されてしまった。このように、回答した内容が反映されないという事態にならないよう、「その他」の取扱いは気をつけなければいけない。また、LGBT、男、女という軸でなく、男性の中にもいろんな性があるというように考えて欲しい。
- ・ 「現在どのような社会的な性別で生きているか」が明確になる調査であるとよい。社会的な性別について聞くことで、生きる中での困難が現れると考えている。休みの日はどうしているか、職場ではどうしているかなど、本人にとっての社会的な性別とは何か、聞けるとよいと考える。
- ・ 調査において男性・女性の捉え方が明確でないと、トランスの人は回答するのが辛いだろう。数十年間女性として生きていても、出生時に割り当てられた性別が男であったために、調査

の最初の項目が戸籍の性であれば「男」と回答しなければいけないのか、戸籍の性がそこまで大事なもののなのかということも考えなければいけない。

- ・ ドメスティック・バイオレンス (DV) や性暴力に関する調査では、「B. 2ステップ方式」の方法を選ぶ。性暴力は若年の被害者が多いが、若年層は LGBT コミュニティ以外で被害に遭うケースの方が多いため、LGBT であることによる被害に特化した調査が必要とは考えておらず、「B. 2ステップ方式」で十分であると考えている。ただし、「その他 (X ジェンダー、ノンバイナリーなど)」と「回答したくない」は選択肢を分けるだろう。
- ・ 性暴力の被害者には、LGBT の文脈で被害に遭った人と、そうでない人がいる。若年層では LGBT コミュニティでない場における被害が多い。一方、中高年では LGBT コミュニティ内で、身近な人から被害に遭っている人が多い。内閣府など国が行う調査のように、比較的中高年の回答が多い調査の場合は、LGBT コミュニティ内における被害が多いことを踏まえ、より丁寧に SOGI について尋ねる必要があるだろう。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

① 過去に実施された調査の目的と調査手法

- ・ 2017 年に、レイプクライシス・ネットワークで「AOMORI 性的マイノリティ当事者アンケート」を実施した。青森出身あるいは青森在住の性的マイノリティ当事者を対象としてウェブアンケートを行い、216 票 (有効回答数 200) の回答があった。また、同時に性的マイノリティ当事者 10 名に対してインタビュー調査を実施している。

② 調査を実施した際の、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法 (設問・選択肢の作り方) と、その方法を選択した理由

- ・ 調査項目は、以下のとおりである。

| | | |
|------|---|--|
| 調査項目 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 出身・居住区分 ・ 年代 ・ 性別 ・ 性的指向 ・ 差別・偏見・生き辛さの経験値 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 差別・偏見・生き辛さの内容 ・ カミングアウトの有無 ・ カミングアウト対象者の属性 ・ 青森への想い・望む事 |
|------|---|--|

- ・ 性的指向及びジェンダーアイデンティティは、以下の属性で把握している。

| | | |
|---------------|--|---|
| 性的指向 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 同性愛 ・ 両性愛 ・ 異性愛 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 無性愛 ・ 全性愛 ・ その他 |
| ジェンダーアイデンティティ | <ul style="list-style-type: none"> ・ 女性 ・ 男性 ・ トランス女性 | <ul style="list-style-type: none"> ・ トランス男性 ・ その他 |

(参考) RC-NET (レイプクライシス・ネットワーク) BLOG. 「AOMORI 性的マイノリティ当事者アンケート」. <https://blog.goo.ne.jp/rc-net/e/251b0c3d120d001613f200c6fd4e10f9/?img=d8b69c9457bf909da07faa524f9628d2> (令和 7 年 3 月 31 日閲覧)

- ・ アジアの地域ネットワーク（Asia Regional Network on SOGIE and GBV - Sexual Orientation, Gender Identity and Expression and Gender Based Violence）では、2024年11月にバンコクでフォーラムが開催された。GBV や LGBTIQ+などの言葉について、活発な議論がなされたが、法整備の状況が国によって異なり、調査における性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法は統一されていない。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ 近年、パートナー間暴力（IPV）、DV、性暴力に関しては、様々な法律が改正されている。困難な問題を抱える女性への支援に関する法律にもLBT女性が含まれることになったとのことだが、研修の項目に含まれていないという現実がある。法律の文言としては、トランス女性もシェルターを利用できることになっていると思うが、実際には難しいだろう。
- ・ 被害者が困難の中にいるということはすでに分かっており、国内外の調査で十分に示されてきたと考えている。日本の調査でも困難の把握項目において有意に高い数値が出ている。当事者に何度もアンケートを依頼するのも疲れている。
- ・ 今後の調査では、実態を調べてほしい。当団体では、2017年の刑法改正以降、ワンストップ支援センターで性的マイノリティに関する研修・相談体制が構築されているかという調査を2021年に実施した。レズビアン、ゲイなどの言葉の解説や、研修資料のみの共有、15分以内の短時間のものを含めた研修の実施状況について聞いたところ、実施したと回答したセンターは半数程度であった。ただ、言葉の意味を知れば相談に対応できるようになるわけではないと考える。LGBTの性暴力に特化した研修を実施しているのは、回答した31センターのうち7センターのみであった。特に体制整備が遅れているのは医療機関との連携や医療的な支援についてであった。補助金が婦人科以外の医療機関で使えないなど、制度や予算が無いことも背景にある。相談があってもセンターが対応できているかよく分からない。このような相談体制の実態に関する調査をしてほしい。
- ・ National Coalition of Anti-Violence Programs (NCAVP)の調査¹⁵でも、相談機関においてLGBTQの方の相談を断っている様子を見たことがある相談員がどれくらいいるか聞いている。自身も、他の相談員が「男性からの相談は受けられない」と電話を切る場面を数多く見てきた。アンケートなどで「あなたは差別をしましたか」と聞かれても答えられないだろうが、他人の言動については回答してもらいやすいため、実態把握のための一つの方法となる。
- ・ 日本には性的マイノリティのシェルターが無く、団体に相談に来た人がつながる場所が無いため、困っている。使える制度がないことを明らかにする調査も行ってほしい。
- ・ 性的マイノリティ当事者がこれ以上声を上げる必要がないよう、自治体の体制を整えてほしい。警察、学校など、LGBTが困難を経験する可能性のある場所について、実態を把握する調査をしてはどうか。
- ・ 各分野について、実施した方がよい調査は色々考えられる。婚姻制度や経済的状況、性の在りようを原因として、不安が増進しているということや、性の在り様によって人権が押さえつけられているということは、明確にすべきである。また、介護の領域についても、LGBTQの困難や実態の把握はされていない。

¹⁵ National Coalition of Anti-Violence Programs (NCAVP). (2016). Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Queer, and HIV-Affected Intimate Partner Violence in 2015. New York, NY: Emily Waters.

- ・ 様々な領域における困難について、エビデンスを付けるのが、ナショナルデータの重要な役割ではないか。調査を行うのであれば、今さら全体像を把握するのではなく、すでに表れている様々な困難に照らし合わせて調査を設計し、エビデンスとして利用できるようなるとよい。
- ・ 理解増進の目標ラインを決め、それを達成するにはどうするかということを、性的マイノリティ当事者に任せる時期ではない。当事者においては、声を挙げるのが恐ろしいと思っている人、疲れ切っている人が増えた印象があり、当事者任せでは性的マイノリティ当事者が不可視化されることが増えるだろうと考えている。回答することで、回答者にとって少しでも癒しにつながるような調査ができるとよい。

以上

(4) (任意団体) にじいろかぞく

| | |
|------|----------------------|
| 実施日時 | 12月9日(月) 13:00~14:30 |
|------|----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|----------------|--|------|----|
| 活動目的・活動内容 | 「子育てする LGBT とその周辺をゆるやかにつなぐ」をコンセプトに、交流会や勉強会といった LGBT 家族の交流支援や、LGBT 家族を知ってもらうための講演活動などを実施。 | | |
| 所属人数 (2024 年度) | 運営スタッフ：7 名 寄付会員：70 名～80 名 | 活動地域 | 全国 |
| 活動参加者の主な属性 | 子育て中又はこどもを育てたいと考えているレズビアンやバイセクシャル、ゲイなど様々なセクシャルマイノリティが参加している。 | | |

- ・ 2010 年から活動しており、2025 年で活動 16 年目。
- ・ LGBT の家族が社会の中で安心して暮らせるようにすることを目的に活動している。子育てをする LGBT を緩やかにつなぐために、子育て中の方、子育てしたい方に向けた「当事者向け」の活動、アライや支援者、あるいは興味関心のある方向けの「外向けの活動」をともに行っている。
- ・ 当事者向けの活動としては、LGBT 当事者の家族でのオフライン／オンラインでの交流会、情報共有・勉強会などによって、孤独な子育てを解消し、支え合っている。LGBT 当事者の家族は当事者同士でつながりにくいため、こどもを含めて家族でつながる機会・場所は重要である。
- ・ 外向きの活動としては、全国各地でのレインボーパレードへのブース出展や、プライドマーチへの参加を行っている（札幌・東京・大阪・山口・九州は固定でブースを出展。その他地区のプライドイベントにも適宜参加）。ブースでは、リアルな LGBT 家族の暮らしや様子を映した「にじいろかぞく写真展」を展開しているほか、LGBT 当事者が育児体験を語るスモールトークイベントなど、実際の声を届け、LGBT 当事者にも将来こどもを授かって子育てする未来があることを知ってもらう機会を設けている。社会には「実際に LGBT 当事者に会ったことがない」と思っている人も多いため、具体的な姿を知ってもらうよう心がけている。
- ・ 以前、当時の首相が「LGBT 当事者の家族がいると、社会の根幹が変わってしまう」という発言をしたことを受け、既に全国各地に LGBT 当事者家族が暮らしているという事実や、そこで育っているこどもたちについて、政治家に知ってもらう必要があると考え、当時の首相に手紙を書くプロジェクトを行った。大人のほか、LGBT 当事者たちの家族の中で育ったこどもからの手書きのはがきも多く寄せられた。2025 年には現首相に手紙を書く取組をスタートしている。
- ・ 運営スタッフは 7 名で構成されており、それぞれが担当をもって活動している。北海道、東京、大阪、九州など、日本全国に運営スタッフがいるほか、海外在住のスタッフや寄付会員もいるため、活動は国内にとどまらない。各地の運営スタッフを中心に活動を行っている。

運営スタッフの中には、初期の頃にはサポート会員として参加していたが、その後実際に子どもを持つようになってから、運営側のスタッフとなり、活動している者もいる。

- ・ 会員は毎年更新しており、2024 年は寄付会員が 70 名～80 名弱いる。会員の属性としては、レズビアンやバイセクシャル、ノンバイナリーの方が多い。子育てに関する活動を行っていることから、性的マイノリティの女性が多い。ただし、近年は子どもを育てている・育てたいというゲイ男性も増えており、ゲイ男性のための分科会も開催しているため、男性参加者も増加傾向にある。
- ・ 当団体は約 15 年活動している。活動初期は LGBT 当事者にとって「子どもを持つ」ということは考えにくく、語りにくい状況があった。その後、全国の自治体にパートナーシップ制度が広まっていく中で、若い世代を中心に、将来は子どもを持ちたいという希望を持つ LGBT 当事者が多くなってきた。当団体では、妊娠していない人も対象に含めた、助産師による研修会を実施している。パートナーが産むなど「自分は産まない」が「法的に『父親』ではない」という立場の人の多くは、公に開催される助産師研修の対象外であることが多いのが現実であるためである。また、最近は里親になりたいというニーズもあり、里親をしている LGBT 当事者による勉強会・交流会も開催している。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 一般的なアンケートで、まず性別を尋ねられることに違和感がある。自分の回答に性別情報がどこまで紐づけられているのかと考えてしまう。一方で、自身がアンケート調査を実施する側になるときもあり、データを分析するために性別を聴取せざるを得ないという事情も理解できる。そのため、性別情報を聴取する理由を開示した上で設問を設けているのであれば、問題ない。例えば、医療の場面では性別情報を聞かざるを得ないため、必要性は理解できる。一方、よく趣旨が分からないが定型文的に性別情報を聞かれているという状況では、回答に戸惑う LGBT 当事者も多いだろう。質問の意図が理解できれば、回答者の精神的ハードルは下がる。そのほか、選択肢として「上記に当てはまらない」という項目を選ばざるを得ないとき、アンケート調査から除外され、アンケート調査への意欲を失うこともある。
- ・ 「既婚者・未婚者」という表現に戸惑う。LGBT 当事者の場合、長期でパートナーと連れ添っていても、同性同士のため「婚姻」はできていない状況の者も多い。その場合、どの項目を選択すべきなのか、例えば「20 年以上パートナーと生活を共にしている」という状況の者が法的立場に基づいて「未婚」と回答することが、アンケートとして正しい結果につながるのか、などと迷う。事実婚をしている異性カップルの場合も同様の疑問が生じるはずである。何を調べたい調査なのか目的が分かれば、どのように回答するかが分かるが、いずれにせよ悩ましい。これは、トランスジェンダーの方が性別を聞かれた際に、出生時性を回答すればよいのか、性自認を回答すればよいのか悩むのと同じ感覚かもしれない。調査の目的に応じて、何をもちて既婚とするか明示してほしい。例えば、同性のパートナーと長年子育てをしており、法律上は結婚していないが意識としては既婚という場合は含まれるのか。
- ・ 「子どもがいる人」の中には、「LGBT 当事者かつひとり親」も存在することを想定してほしい。特に子育てについてのアンケートでは、「親がカップル」であることを想定されている場合が多く、意見を求められていないと疎外感を感じることもある。

- ・ 性的指向を聴取されるアンケートでは、恋愛対象と性行為の対象が異なる場合もあるため、可能であれば別項目とすることが望ましい。このようなアンケートでは、たいてい暮らしぶりを聞いていると思われるため、単なる性行為の対象というよりは、生活の中で重要な相手について回答している。
- ・ アンケート上で、生殖と性行為が無条件に結び付けられていたり、古い家族観が前提とされたりしていると、抵抗を感じる。どちらが「男性役」か、どちらが子どもにとっての「父親役」か、といった偏見に基づく質問を受けることもある。調査実施者の無自覚の思い込みにLGBT当事者は敏感に気づく。しかしこれはLGBT当事者に限らず、古い家族観の押しつけに対して窮屈に感じている多くの人も同様なのではないかとも思う。
- ・ アンケート作成者が、「性的指向」と「ジェンダーアイデンティティ」を、基本的に変化しないものであるという考えを前提としているように感じる。しかし、セクシュアリティとは、実際には流動的でもある。例えば、自身が働く社員数の多い企業において30歳以下の若手社員とセクシュアリティについて話をすると、「性的指向やジェンダーアイデンティティを定めていない」という人が増えてきていると感じている。そのような方は、多くのアンケートには内面や実態とはずれていても「暫定的に」女性や男性という回答をしているだろう。
- ・ 妊活や出産に当たって産婦人科に通っていたとき、「パートナーの男性がいる」という前提での質問が多く、ストレスを感じた。性行為の有無を聞かれるなど、質問の目的は何なのかと思うことがあった。関連して、同性のパートナーと「婚姻」をしていないため、法律上は「子どもがいない単身女性」ということになり、実際には日々親として子どもを育てているにもかかわらず、「子どもがいる方」を対象としたアンケート調査では「対象外」とされてしまう等の経験をしている場合もある。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ アンケート回答者が、最後に思いの丈が書けるような、自由回答の感想を記入できる設問を設けることが重要である。
- ・ 学生からインタビューされるときに、セクシュアリティなどについて根掘り葉掘り聞かれることがあり、自分ばかり自己開示していることに違和感を覚えることがある。インタビューする側からも自己開示があったほうが、LGBT当事者のリアルな意見や実体験を引き出すことができるのではないか。
- ・ 「同性パートナーとともに子どもを育てている」というと、自動的に「同性愛者である（レズビアンやゲイ）」と決めつけられることがあるが、必ずしもそうではないため気を付けてほしい（「性自認はバイセクシュアルやパンセクシュアル、あるいはヘテロセクシュアルだが、たまたまパートナーとなったのが同性である」と考えている人もいる）。

③ その他留意すべきこと

- ・ 現代ではジェンダーアイデンティティの質問に素直に回答すると、バッシングを受ける可能性がある。万が一、自分の回答が第三者に漏れたらと思うと不安である。アンケートの信頼性を高めるために、匿名性の担保について明示してほしい。匿名性の担保がある上でこの質問がされていると分かれば安心して回答できる。加えて、回答してもあなたに不利益がない、ということを示明してほしい。

- ・ ヒアリングは常に緊張する。性的マイノリティは一枚岩でなく、気がつかない部分に苦しみを抱えている方がいる。思い込みで傷つけてしまうなど、失敗することはあると思う。以前、当団体の交流会の中で、投げかけられる言葉などに違和感があったときはテーブル上の黄色フラッグや赤色フラッグを挙げてもらう、という試みをしたことがある。不快な思いをしたときに言葉では嫌と言えないこともあるため、意思表示しやすくするような工夫である。また、不快なことはなかったか、気がついていないところはなかったかなど、聞いて改善していくことも重要である。
- ・ 当団体は子育てに関して活動しているが、出産や子育てのような場面では性的マイノリティ女性がマジョリティになりやすい。そのような中でも、それ以外の方々が安全性を感じながら交流できるように、例えばゲイ男性だけで話し合う場を設けるなどしている。
- ・ LGBT 当事者が多様であることを前提に、声を挙げづらかったとしても LGBT 当事者の声が必要であると伝え続けること、さらに、フラッグの取組のように相手を傷つけてしまったらその都度学びながら、取組を続けていくということも重要である。それでもやはり近い立場同士でなければ深い話ができないというときには、傷つけてしまう人もいるかもしれないが、ある一定のラインで対象者を切り分けるしかないということもある。その後の情報の取り扱いも丁寧に話をする必要がある。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 「B. 二段階の設問を設ける方法」の方法がよいと考える。「自分が異性愛者であるかどうか」を、そもそも考えたことがない方がおそらくほとんどであるため、「2 考えたことがない」という選択肢が入っている点が良い。自身がヘテロセクシュアルであっても、「B. 二段階の設問を設ける方法」であれば回答しやすいと思う。
- ・ 「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」の方法はかなり踏み込んだ質問であるように感じる。バイセクシュアルであれば、悩ましいが選択肢「3 両性(男性・女性ともに)が好き」を選択することになるだろう。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」の選択肢1に「ゲイ・レズビアン等ではない」という表現があるが、ゲイやレズビアン以外の LGBT 当事者を「等」としてまとめられると抵抗感がある。また、「〇〇ではない」という否定形の表現を、選択肢の最初に持ってこない方が印象がよいのではないか。そのほか「性別に関わらず惹かれる」という選択肢もあった方がよい。好きになる対象が同性愛や異性愛には限らないし、パンセクシュアルの方もいることを想定すべきである。
- ・ 選択肢や設問を増やしたり減らしたりする余地があるのであれば、聞きたい内容によって、暮らしぶりや性生活の話に分けて把握することができるだろう。異性と暮らしていても、性的指向は同性愛であるという方も多いため、どのようなデータをとりたいか、調査目的によって設問を検討する方がよい。例えば、ゲイの方の中には、恋愛の対象は男性であるが、生活上は女性のパートナーがおり、夫婦としての性交渉もするという場合もある。
- ・ 様々なセクシュアリティの方がいるため、「こどもがほしいゲイ男性の会」などのようなイベント名を付けると、取りこぼされたと感じる LGBT 当事者が出てくる。そのため、当団体を含め、LGBT 当事者も、常に悩みながら言葉を選択している。そう考えると、「誰もが心地

よく回答できるアンケート」というものはそもそも作成不能なのかもしれない。それでも、調査に明確な目的があり、趣旨を伝える努力をすることで、率直な回答をしてもらえ可能性を上げられるのではないか。

- ・ 多様なセクシュアリティをパラメータで把握する方法は試してみたいが、どのようにデータ化するかは難しいだろう。どのような人も、全てにおいて「保留」や曖昧にしているわけではないため、職場など「限定したこの場面では、どうか」といった形で、回答してほしい社会的な文脈を明示すれば、不快感を減らすことができるかもしれない。
- ・ さらに自由記述欄を加えることで心理的負担が減少し、その先の回答がしやすくなるだろう。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 「B. 2ステップ方式」がよい。出生時性を聞かれることに負担を感じる方も多いと思うが、「B. 2ステップ方式」の1段階目では「その他（回答しない等）」という選択肢があるため、回答しやすい。LGBT当事者であっても自身が性的マイノリティであると認識していない人もいるため、事実を率直に聞いて、「シスジェンダーでない」ということが分かるとよいだろう。逆に、「LGBT当事者か否か」といった断定的な形式では聞かない方がよい。
- ・ 「B. 2ステップ方式」がよいと感じるが、調査の趣旨がきちんと説明されており、その趣旨を理解できる場合は「A. 3ステップ方式」でも問題ない。
- ・ 「A. 3ステップ方式」や「B. 2ステップ方式」の2段階目の設問（性自認を尋ねる設問）は、どのように集計分析するかにもよるが、男⇄女で10段階に分け、当てはまる段階を選んでもらうなどパラメータで把握するのがよい設問なのではないか。また、出生時の性別では性分化疾患の方が回答できない可能性があるため、配慮があった方がよいのではないか。その他という選択肢や自由記述欄などもあるとよい。あるいは、「自認と異なる場合も含まます」といった注意書きがあると回答しやすくなるかもしれない。
- ・ 「C. 当事者がどうか尋ね、認識を尋ねる方法」ではセクシュアリティの選択肢が入っており、違和感がある。
- ・ 身体の性の問題と社会的な性別の問題は、本来は異なる軸だろう。身体的には女であるという人であっても、社会的な性別が女かと言われると違和感がある人もいる。ジェンダーアイデンティティについては、服装や身体などの様々な観点があり、全てを考慮するのは難しいということは理解できる。
- ・ 3ステップ方式などが研究の蓄積によってLGBT当事者に配慮した聞き方であるという旨を明示するのはよいと考える。
- ・ トランスジェンダーの方が差別的な扱いを受ける中で、どのような目的や趣旨で調査をしているのか、はっきりとさせることが重要である。繊細に設計してほしい。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

- ・ 活動参加者に事前アンケートや事後アンケートを実施することもあるが、当団体の中であるからこそ言葉にできることがあると考えられる。
- ・ 文字で書く方が、ハードルが高いということもあり、調査手法は状況に応じて検討すべきである。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ 本来は国勢調査で把握すべきであると考えますが、LGBT 当事者の実数を把握したい。そこで、シングルの子育てや、パートナーと一緒に子育てをしている方がどのくらいいるのかを知りたい。
- ・ 性的マイノリティの老後や、この先の人生に起こる課題や不安について考えたい。LGBT 当事者であることを一生隠したまま亡くなる方も多いため、実態を把握してほしい。
- ・ アンケートの回答しづらさは、クローゼット（自分のセクシュアリティを明かさずに生きている人）の方がより強く感じていると考えられる。だからこそ情報を集めるべきである。親にも言っていない方や親しい友人にも自分の本名や住所を知らせていないという方さえいる。地方で孤立している可能性もある。クローゼットの方の声をどのように拾っていくか考えていきたい。
- ・ LGBT 当事者に育てられたこどもの声を拾い上げたい。周囲に家族の実態を一切明かしていないという方もいる。そのこどもがどのように感じ、どのような困難を抱えているのか（いないのか）を調査してほしい。小さいこどもだけでなく、50代や60代の方の中にも「自分の親が LGBT 当事者である」という場合もある。彼ら彼女らは、その困難や経験を誰にも話せずにきたという。そのような方についても調査する必要がある。
- ・ こどもを持つことを結婚している男女のみに認めるかのような「特定生殖補助医療法案」が、今国会に提出されている。しかし、こどもを持つ権利は誰にでもあるため、こどもを産みたいという LGBT 当事者の声を聞き、そのような人がどのくらいいるのか明らかにしてほしい。こどもを産みたいという方には多様な方がいることも数値化して示してほしい。加えて、少子化の問題に取り組む際には、こどもが欲しいにも関わらず産むことができていない方の理由を丁寧に調べてほしい。
- ・ LGBT 当事者であることが万一職場に漏れてしまったら全てが終わってしまうと懸念し、当団体のイベントに出席している記録を消してほしいという方もいる。そのくらい苦しい方もいることを認識してほしい。

以上

(5) 北海道レインボー・リソースセンターL-Port

| | |
|------|----------------------|
| 実施日時 | 12月10日(火) 9:30~11:00 |
|------|----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|----------------------|------|-----|
| 活動目的・活動内容 | 相談事業/居場所事業/講師派遣事業 | | |
| 所属人数(2024年度) | 30名程度(主たるメンバーは20名程度) | 活動地域 | 北海道 |
| 活動参加者の主な属性 | LGBTQ+当事者、アライ | | |

- ・ LGBTQ+をはじめとする多様なセクシュアリティを生きる人やその家族、周囲が「自分で自分の生き方を選ぶことができる」社会の実現を目指し活動している。
- ・ 当団体は2012年3月11日に設立した。設立当初は、東日本大震災の被災三県におけるLGBTQ+当事者で被災された方への支援を主な活動としていた。現在は、相談事業/居場所事業/講師派遣事業の3つを主な活動とし、札幌市と旭川市を中心に北海道を活動拠点にしている。
- ・ 所属人数は30名程度である。当団体の運営方針を決めるメンバーは6名、事業を実施する主たるメンバーは20名程度である。
- ・ 相談事業では、2018年からLGBTQ+当事者向けのセクシュアリティ専門SNS相談窓口「にじいろ talk-talk」を実施している。SNSアプリのLINEを活用した日本で初めての相談事業である。定期的に開設しており、全国のLGBTQ+当事者から相談を受け付け、支援を行っている。また、LINEを活用した相談事業のノウハウを他団体にも伝えている。
- ・ 相談事業の利用者のほとんどがLGBTQ+当事者、もしくは当事者かもしれない方である。利用者のうち、10~20代の利用者が80%程度を占めており、若年層が主な利用者である。中学生や高校生の利用者が最も多く、次いで大学生、20代の社会人の順となっている。全国から相談を受け付けているが、居住地は把握しておらず、年齢だけ把握している。なお、性的指向とジェンダーアイデンティティも把握はしていない。
- ・ 居場所事業は、コロナ禍で一時期休止していたが、2022年から新たに「にじいろ談話室」を実施している。リソースセンター(書籍や他団体のパンフレットからセクシュアリティに関する肯定的な情報を得られる場所)を併設し、定期的に札幌市と旭川市で開設している。
- ・ 居場所事業は基本的にLGBTQ+当事者、もしくは当事者かもしれない方を参加対象にしている。札幌市の居場所事業では、奇数月のみ友人や家族などの周囲の方も参加できるようにしている。自分一人ではそうした機会に一步踏み出せないLGBTQ+当事者にも参加してもらいたいと考え、友人や家族やその他の支援者(ソーシャルワーカー等)なども参加してよいとしている。旭川市の居場所事業では、参加する若年層の心理的安全性の確保を目的に、年齢制限を設けており、25歳未満を参加対象にしている。
- ・ 講師派遣事業は、北海道内の自治体や教育機関などに性の多様性に関する研修を実施している。研修は10~80代までを広く対象にしており、LGBTQ+当事者が講師となり、年間50件程度実施している。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 性別や、その他性的指向・ジェンダーアイデンティティに関わる質問のうち、当事者が回答に困るものとして、性別の選択肢が男女の2つしかないことが未だによくある。男女の他に、「その他」、「無回答」などが選択肢としてある方がよい。また、男女いずれかを回答しなければ先の設問に進めないアンケートもあるが、そうした回答制御は心理的負担が増す。
- ・ また、「その他」を選択することに抵抗を感じる方も多くいるため、集計における問題は生じ得るが、性別等を自由記述で回答できることが理想的である。
- ・ 「戸籍上の性別」、「出生届の性別」、「自認する性別」を回答してほしい旨が具体的に記載してあると、回答者がいつの時点の何を回答すればよいか分かりやすい。
- ・ 調査や設問の趣旨等の説明書きがなく、性別等の個人の属性に関する項目がアンケートの冒頭に設けられている場合、それが気になる方も一定数いるだろう。例えば自身のセクシュアリティを隠して生活している方は不安を感じる可能性がある。
- ・ これまでに経験したアンケートにおいて、当事者に関して誤った認識がされているものが実際にあった。調査実施者の知識不足に起因するものだが、民間企業や大学生が実施しているアンケートで、ジェンダーアイデンティティにおけるマイノリティを「ジェンダーの人」と記載するような選択肢があった。おそらくトランスジェンダーを指していると思われる。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 当事者を対象としたアンケート調査やヒアリング調査は、当事者自身の経験を把握することが多いが、辛い経験を詳細に思い出させる内容は心理的負担が大きい。過去に受けた傷をもう一度自分で見つめなければならぬことになる。
- ・ 国民の意識を広く一般に把握する調査などにおいて、例えば「同性婚を認めるべきか」、「LGBTQ+が社会と一緒に暮らしてもよいと思うか」のような設問がある。直接的に差別的な表現であるとは言い切れないが、認めるべきか否か、一緒に暮らしてもよいかどうかなどの設問は、性的マイノリティは下の立場であり、そうでないマジョリティの国民は上の立場であることを暗に意味しているように感じられる。そもそも制度の必要性などは、差別を受ける当事者が必要と思っていることが重要なはずだが、メディア等でも行われる意識調査は、当事者ではない方への質問を通して、社会における必要性の判断を下すようにも見える。法制度の必要性は、当事者ではない方の判断に委ねられるものではなく、社会に存在する差別の解消や、当事者が必要に思っているなど、合理性に基づいた判断があるべきだと考えている。
- ・ また、調査実施者が得たい結果に左右されることだが、必要な制度（〇〇な制度があるとよい）、困難経験の有無（△△な辛い経験をした）、などを当事者から把握することがある。それらを把握する必要性は理解しているが、性的マイノリティは困っており、社会的弱者であるという側面ばかりの内容であると心理的負担が大きくなる可能性がある。調査を通じて、当事者が虐げられていることばかり強調されてしまうと負担が大きい。確かに辛い経験はあるが、同時に嬉しい経験もあるため、ポジティブな側面も調査に含められるとよいのではないか。また、性的マイノリティ以外のアイデンティティもあり、環境次第で必ずしも性的マイノリティ当事者が社会的弱者に属するわけではない。

③ その他留意すべきこと

- ・ アンケートに回答する際、事前説明で個人が特定されないと記載があっても、アウトティングを恐れて自分のことを正直に回答できないことがよくあるため、丁寧に事前説明する必要がある。
- ・ アンケートの趣旨説明において、個人が特定されないように加工して結果を公表するという説明書きがよく見られるが、どのように加工されて公表されるのか気になることがある。例えば自身のセクシュアリティを隠して生活している方は、自身の個人情報明らかになってしまわないように意識して生活している。調査において、一つの属性情報を用いるだけでは不安に思わないが、同性愛者×30代×社会人×北海道在住のような複数の情報がかけ合わされれば、公表結果の回答者が自身であると分かってしまうのではないかと心配に思うことがある。
- ・ アンケートやヒアリングで収集した情報は、その後、誰が確認するのか詳細に記載されている方が安心感は高まるだろう。
- ・ また、性的マイノリティ、少数者、少数派という表現に抵抗を感じる方もおり、性的マイノリティという言葉が記載されていることで回答しにくい方もいる。フラットな表現としてLGBTQ+を使用することが考えられる。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 補足資料中の「A. 直接的に尋ねる方法」「B. 二段階の設問を設ける方法」「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」のどれについてもバイセクシュアルの選択肢があるのみで、パンセクシュアル（好きになる相手の性別は関係ない）の選択肢がなく、パンセクシュアルの方は回答に迷うかもしれない。
- ・ 3つの把握方法どれについても、「答えたくない」が選択肢にない。回答の精神的負担が大きい人もおり、何かを必ず選択しなければならないことに困難を覚える可能性がある。
- ・ 3つの把握方法どれについても、個人的にはそこまで抵抗感を感じない。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 戸籍性を最初に聞くのではなく、最初にジェンダーアイデンティティを聞いてほしいと当事者からよく聞かれる。調査実施者が戸籍性を重要視しており、戸籍性を基本軸にしていると当事者は感じ取ってしまい、抵抗を感じることもある。
- ・ 「A. 3ステップ方式」において、「今の認識にもっとも近い性別」を把握しているが、男性8割、女性2割のような場合は回答できるが、男性6割、女性4割のような場合は回答が難しいだろう。男性／女性の2つの性別の枠に当てはまらないわけではないが、どちらも同程度の中性の場合、どれを回答すればよいか分からない。「男性5割：女性5割」のように具体的に自由記述できる方がどのようなジェンダーアイデンティティを持った方でも回答することができる。また、「3 男性・女性にあてはまらない」という表現に違和感を持つ方もいるかもしれない。4として自由記述欄が用意されているとよいのではないか。
- ・ 「B. 2ステップ方式」で示されている例について、この程度細かく選択肢があった方が様々なジェンダーアイデンティティの方が回答しやすいだろう。「中間」「両方」「どちらでもな

い」が記載されているように、言葉のニュアンスがそれぞれ異なっており、「3ステップ方式」の例と比較して回答しやすい。

- ・ 「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」における「(1) あなたの性別を教えてください」は、何を基準にして回答すればよいか迷う。また、「(2) あなたはご自身が性的マイノリティの当事者だと思いますか」は、アンケート冒頭の趣旨説明を詳細に行わないと、当事者だと思ってもアウティングを恐れる方は回答しにくい。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

① 過去に実施された調査の目的と調査手法

- ・ SNS 相談事業の利用者を対象にアンケート調査を実施した。10～20 代の若年層で LGBTQ+ 当事者のリアルな生活の実態を把握することを目的に実施した。
- ・ LINE の友達登録をしている方全員に、オンラインウェブアンケート作成ツール (Google フォーム) を活用し、ウェブ上でアンケートを実施した。

② 調査を実施した際の、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法 (設問・選択肢の作り方) と、その方法を選択した理由

- ・ 性的指向とジェンダーアイデンティティは把握していない。SNS 相談事業の利用者は LGBTQ+ 当事者、もしくは当事者かもしれない方であり、事前にアンケート調査の対象者が想定されていたため、性的指向とジェンダーアイデンティティを把握する必要がなかった。

③ 調査の実施・集計・分析に当たって、どのようなことに留意したか。

- ・ リアルな生活の実態を把握することを目的に、カミングアウトの状況などを把握した。そうした項目を把握するに当たって、他の属性情報は不要と判断していた。また、属性のかけあわせから自身が回答者であることが明らかになってしまう不安をなくすべく、SOGIE、居住地も把握しておらず、学生か社会人かどうかしか把握していない。
- ・ 学生と社会人で、カミングアウトをしている相手について大きな有意差はなかったが、両者共に最もカミングアウトをしている相手は「友人」であった。親や学校の先生、職場の人等の割合は相対的に低い。
- ・ 「友人」について、学校の友人／近所の友達／幼馴染などに細分化することも考えられるが、どこで出会った友人なのかを分類しすぎないことに留意した。不登校のこどももおり、「学校の友人」などが選択肢にあげられていると回答しにくいと考え、こどもの回答の心理的負担を考慮して、選択肢を作成した。「学校にはみんな友達がいるものだ」といった調査実施者の思い込みに基づく設計を極力排除するように気を付けた。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ LGBTQ+ 当事者の困難を把握するためには、何か比較できる対象を設けなければ実態を明らかにすることができない。当事者でない方にも同じ設問を聞き、両者の差を分析することが必要ではないか。両者で差が大きい項目ほど、政策上取り組むべき課題であると考えられる。LGBTQ+ 当事者と当事者でない方を一緒に調査で把握するとよいだろう。

- ・ 現状、学校現場や若年層を対象にした調査が多く、働いている世代の調査は多くない。LGBTQ+当事者の職場におけるストレスなども把握したほうがよいだろう。また、性的マイノリティであることが収入にどの程度影響を及ぼすか関心を持っている。生活のための経済的基盤がLGBTQ+当事者と当事者でない方でどの程度差があるか把握できるとよい。
- ・ 自身のセクシュアリティを隠して生活している（クローゼット）方の実態は、公にカミングアウトしている方と状況は全く異なると考えられるため、クローゼットの方からも回答が得られることが望ましい。インターネット調査であればクローゼットの方も回答しやすいだろう。
- ・ アンケートサイトを案内する際には、各地域の当事者団体を頼ってもらってよい。当事者団体は各地域でネットワークを持っており、アンケートサイトを広く案内することにも長けている。当事者団体に協力を仰ぎ、当事者団体を通じてアンケートを発信してもらおうとよいだろう。

以上

(6) (任意団体) プラウド香川

| | |
|------|-----------------------|
| 実施日時 | 12月11日(水) 14:00~15:30 |
|------|-----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|-------------------------------------|------|-----|
| 活動目的・活動内容 | 交流会開催、相談対応、講師派遣、映画祭開催 | | |
| 所属人数(2024年度) | 33名(賛助会員含む) | 活動地域 | 香川県 |
| 活動参加者の主な属性 | 性的マイノリティ当事者が8割程度を占める。SOGIの属性に偏りは無い。 | | |

- ・ 交流会開催をベースとして活動している。LGBTQの孤立防止を目的としており、毎月、世代や属性の対象を変えながら開催している。相談は電話・メール・LINEで受け付けており、香川県の相談対応事業も請け負っている。
- ・ 行政や学校向けに研修講師も派遣している。市民への啓発活動として、2005年から毎年、レインボー映画祭を開催している。過去には出前講座やパネル展も行った。
- ・ 団体の事務局は1名、広報担当が3名である。交流会運営や相談対応を行うコアメンバーは10名程度である。正会員と賛助会員を併せると、33名が所属している。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 性別の選択肢を、「男性・女性・その他」とするアンケートが増えている。自身はノンバイナリーであり、「その他」を選ぶが、雑なカテゴリーだと感じるため、「答えたくない」という選択肢のほうがよい。過去には男性・女性・LGBTという選択肢も見たことがある。
- ・ 既婚・未婚を尋ねる設問にも抵抗を感じる。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 過去に実施したアンケートで、ネガティブな設問が多く、性的マイノリティにネガティブなイメージを持たれているのではないかという感想が寄せられた。病気や精神面、自殺や自傷行為など、ネガティブな内容ばかりでは、回答者の負担が大きい。そこで、自身が調査を行う際は、コミュニティへの参加や、参加して良かったこと、カミングアウト時に嬉しかった反応など、ポジティブな内容も尋ねるようにしている。
- ・ 香川県内の居住地や年代の設問があると、回答者が特定されるのではないかと感じ、答えにくい。調査結果の公表時は、個人が特定されないようにするという旨の説明があるとよい。また、自由記載については、回答を公表してもよいか確認があるとよい。
- ・ 知り合いに回答を見られることが無いように、分析は自治体が行うのではなく、外部の調査会社等に委託されているほうが不安を感じにくい。

③ その他留意すべきこと

- ・ セクシュアリティに関する設問が大雑把だと感じる。例えば、トイレに関して困りごとがあるのは、トランスジェンダーの人だけでなく、服装表現が中性的な人も考えられる。性的指向とジェンダーアイデンティティだけでなく、性表現や性的特徴についても考慮した設問であるとよい。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 「B. 二段階の設問を設ける方法」は、異性愛者が前提とされている点が不快である。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」について、同性・異性という感覚が明確でない人もいる。「決めたくない」を選ぶか迷う人もいるだろう。ただ、「B. 二段階の設問を設ける方法」よりは「A. 直接的に尋ねる方法」が良いと思う。
- ・ 男性的な女性に惹かれる人、男性又は男性的な人に惹かれるという人もおり、表現が難しい。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」はアセクシュアルの選択肢があるのはよい。「バイセクシュアル・両性愛者 [男女どちらにも性愛感情を抱く人]」とあるが、パンセクシュアルの人も多くいるため、性別にこだわらないという人も広く含めた選択肢のほうが良い。
- ・ 同性と性的関係・恋愛感情を持ったことがあるかという設問を見たことがある。異性愛と認識していても、同性と性行為をした経験がある人など、自分自身の捉え方と実際の性行動が異なることもある。HIV/AIDS に関する調査でもそのようなケースがあると思うが、調査によってどの程度踏み込んで尋ねるかは難しい。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 「A. 3ステップ方式」では、性別移行について把握できない。戸籍を変えているかどうか把握できるとよい。
- ・ 「A. 3ステップ方式」よりも「B. 2ステップ方式」のほうが、2問目の選択肢が多いため、答えやすい。ただ、選択肢が多いが故に、迷ってしまう人もいるだろう。「男性・女性の間」「男性・女性の両方」「男性・女性のどちらでもない」はまとめてよいのではないか。
- ・ 「A. 3ステップ方式」のように、出生時と今の性別に違和があるかを自身で答えられるほうがよいかどうかは、何とも言えない。
- ・ 「A. 3ステップ方式」問 54 の「別の性別だととらえている」という表現は、自分の感覚を聞いており、良いと思う。「B. 2ステップ方式」も社会的な性別でなく自分の認識を聞いており、この点ではどちらでも答えやすいだろう。
- ・ 「A. 3ステップ方式」の3ステップ目について、男性・女性の両方という人が回答できないため、3を「男性・女性にあてはまらない」に限らないほうがよい。男性・女性の間や両方の人も含むという補足があるとよい。
- ・ 「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」はアイデンティティが選択肢になっているという点で、分かりやすい。
- ・ 調査に回答した時点の感覚を聞くだけでよいのかという懸念がある。例えば、学生時代に遡って聞いたほうがよいか等、調査次第である。社会で認知される属性の分類が細かくなってきたことで、自分の属性に気付く人もいる。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

① 過去に実施された調査の目的と調査手法

- ・平成28年度高松市協働企画提案事業「[LGBT～性的少数者って何だろう?]ぐるり出張講座とパネル展」の一環として、アンケート調査を実施した。「性的少数者に対する正しい理解を深め、差別・偏見をなくすための、より効果的な取組を図ること」を目的としており、調査結果の一部は高松市のホームページでパネル化して紹介している。
- ・高松市とは2年連続で協働事業を行った。当時は人権啓発課とコミュニティ推進課市民協働推進室が担当であった。調査設計に市は関わっておらず、調査項目を提示した際も、特に意見はもらわなかった。集計やパネル製作に掛かる費用、デザイナーの人件費等は市が負担した。
- ・対象は香川県在住の性的マイノリティ当事者である。インターネットと紙面で調査票を用意し、ゲイバーやレズビアンイベントで配布した。100人超から回答を得た。
- ・調査項目は、他団体が実施した調査を参考に作成した。居住自治体、年齢、戸籍性と性自認、好きになる相手の性別に加え、パートナーの有無、カミングアウト・就労・健康・幼少期・地域等に関する困難経験、行政に望むこと、調査への意見について尋ねている。

② 調査を実施した際の、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法（設問・選択肢の作り方）と、その方法を選択した理由

- ・性的指向及びジェンダーアイデンティティは、以下の設問・選択肢で把握している。

| |
|---|
| <p>(2) あなたの出生登録時の戸籍性と現在の性自認をお答えください。あてはまる答えを1つ選んでください。</p> <p>①M/M（出生時も自認も男性） ②F/F（出生時も自認も女性） ③MtF（出生時は男性、自認は女性）</p> <p>④FtM（出生時は女性、自認は男性） ⑤MtX（出生時は男性、自認は中性・両性・無性）</p> <p>⑥FtX（出生時は女性、自認は中性・両性・無性）</p> <p>⑦その他（具体的に： _____）</p> <p>(3) あなたが好きになる相手の性別をお答えください。あてはまる答えを1つ選んでください。</p> <p>①男性 ②女性 ③両性（男性、女性） ④相手の性別は問わない</p> <p>⑤特定の人を好きにならない（恋愛感情や性的欲求を抱かない）</p> <p>⑥その他（具体的に： _____）</p> |
|---|

（出所）プラウド香川「香川県在住の性的少数者の方へのアンケート調査」。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・パートナーシップ制度は整備されてきたが、利用しない人や利用しにくいと感じる人がいる。同居していないカップルや、遠距離恋愛のカップル、不動産関係で困難経験のある人、周囲に知られたくない人、結婚制度自体に反対である人などがいる。そのような現状を把握した調査があるとよい。

- ・ 性的マイノリティ当事者でなくマジョリティの差別意識も調査した方がよい。香川県でも、「令和5年度香川県県政世論調査」で、県民の差別意識について聞いている。言葉や服装表現など、規則には載らないことに関する差別意識である。企業の規定の見直しにつながるとよい。

以上

(7) 特定非営利活動法人 akta

| | |
|------|-----------------------|
| 実施日時 | 12月12日(木) 15:00~16:30 |
|------|-----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|---|------|---------|
| 活動目的・活動内容 | HIV/AIDSの予防啓発活動/コミュニティセンター運営/HIV検査の普及活動 | | |
| 所属人数(2024年度) | 常勤・非常勤スタッフ8名 | 活動地域 | 南関東1都3県 |
| 活動参加者の主な属性 | 男性と性交渉を行う男性(MSM)を主な対象としている。 その他のセクシュアルマイノリティやセクシュアルマイノリティではない人も参加している。 | | |

- ・ 2003年に東京都新宿区にコミュニティセンターを設立し活動を開始した。日本ではHIV感染がゲイ、バイセクシュアル男性に集中しており、ゲイ、バイセクシュアル男性を主な対象としてHIV/AIDSの予防啓発活動を行っている。3名の常勤スタッフと5名の非常勤スタッフに加え、ボランティアスタッフ120名程度で活動している。
- ・ コミュニティセンターは厚生労働省の委託を受け運営している。厚生労働省の委託を受けたコミュニティセンターは、現在は全国で7か所(宮城、東京、愛知、大阪(2か所)、福岡、沖縄)あり、ゲイ、バイセクシュアル男性が集う街に設置されている。当団体は新宿二丁目を拠点にし、南関東(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県)を主な活動場所としている。コミュニティセンターを起点にHIV/AIDSの情報発信をしている。
- ・ 当団体は自治体とも連携し、保健所等で行われる性感染症の検査情報を集約し、当事者コミュニティに向けて情報発信している。研修でセクシュアルマイノリティに対して留意すべきことなどを受講した検査施設を当事者コミュニティに勧めている。
- ・ また、当団体はゲイ、バイセクシュアル男性の性行動や性感染症予防の調査も実施しており、質問紙調査やヒアリング調査の経験がある。また、性感染症以外の調査も行っており、コロナ禍においては新型コロナウイルスの感染症や、最近ではMSM(Men who have sex with men、男性間性交渉者)の間でエムポックスウイルスの感染症が流行していた時期があったため、そうした感染症に関する調査も実施してきた。なお、2024年の日本エイズ学会学術集会・総会の会長は当団体の理事が務めた。
- ・ 当団体の近隣にあるプライドハウス東京レガシーでは、広くセクシュアルマイノリティのメンタルヘルスや孤立支援を行っており、それに対して当団体では、MSMを主な対象としており、性感染症に関するパンフレット作成やウェブサイトからの情報発信、相談支援を行っている。サービスを提供する対象(コミュニティセンターの訪問者)と性感染症を主に扱う点が他のコミュニティセンターと異なる。なお、当コミュニティセンターはゲイ、バイセクシュアル男性に限らず誰にでも開かれており、トランスジェンダーやクィアなど、多様なセクシュアルマイノリティの方々が利用している。トランスジェンダーや外国籍のセクシュアルマイノリティにも配慮して活動を展開している。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ これまでに当団体が実施したアンケートにおいて、性別や、その他性的指向・ジェンダーアイデンティティに関わる質問について、自分に当てはまる選択肢がないという意見は多く聞かれた。補足資料に記載されたような広くセクシュアルマイノリティを対象とした調査例とは異なり、当団体はMSMを対象にした調査を実施してきた。イベントやウェブサイトを通じて、アンケートを広く配布・回収してきており、そうした中で、ゲイ、バイセクシュアル男性以外のセクシュアルマイノリティにもアンケートが配布されることもあった。ゲイ、バイセクシュアル男性以外のセクシュアルマイノリティからは、自分たちは回答の対象ではないのか、回答できる選択肢がないと指摘を受けることが多かった。したがって、調査の目的や対象を明示して説明することが非常に重要である。
- ・ なお、これまでに当団体が実施した調査において、ゲイ、バイセクシュアル男性から調査項目や設問、選択肢に違和感があると言われたことはほとんどない。調査趣旨や、倫理審査を通した調査であることに加え、18歳以上の男性と性行為をする男性が対象であることを明示している。
- ・ 他方、最近では、トランスジェンダーのゲイからアンケートの回答方法が分からないと言われることがある。補足資料の性別及びジェンダーアイデンティティの把握方法における「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」のように、性的指向 (L、G、B) と性自認 (T、X、Q) の選択肢が並列に並べられることがあるが、トランスジェンダーのゲイにとっては回答が困難である。
- ・ また、Xジェンダーの回答も増加している。ジェンダーアイデンティティの多様化が進んでおり、性的指向とジェンダーアイデンティティの両方でマイノリティであるような人も回答できるようにしてほしいとよく言われる。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 収入、学歴、就労形態などの社会経済的指標の回答に抵抗があると聞いたことがある。公衆衛生学の量的調査を実施する上では必ず必要な項目だが、回答者は何のために聞いているのか分からない、公的機関の調査にもかかわらず、なぜ収入を把握するのかと感じている。
- ・ いじめ等も含む過去に受けた被害を詳細に把握する調査は、回答者がフラッシュバックを起こしたり、嫌な気持ちになってしまう。回答を途中で止めてもよいことを示したり、回答の途中で辛くなった場合に相談できる場所を示すなど、バックアップ体制を整えておくことが必要である。

③ その他留意すべきこと

- ・ 社会に貢献したいために調査に協力してくれるセクシュアルマイノリティも多く、調査がどのように社会に還元されるのか、何の施策や対策に活かされるのかなど、調査趣旨をしっかりと説明してほしいと指摘される。調査結果がすぐに施策や対策につながらなくとも、研究成果を社会に還元することは研究者にとっても重要なことである。この調査が何の役に立つのか、端的に示すことが必要である。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 補足資料の3つの方法のうち、「A. 直接的に尋ねる方法」が最も分かりやすい。
- ・ ただし、「A. 直接的に尋ねる方法」も「B. 二段階の設問を設ける方法」も「〇〇ではない場合、次のうちどれですか。」という把握の仕方が気になった。特に「B. 二段階の設問を設ける方法」は、異性愛者ではない場合、次の設問で把握する方法になっており、気になる人がいるだろう。
- ・ また、「A. 直接的に尋ねる方法」において、[] 内で「〇〇な人」と具体的に説明されている。選択肢1の異性愛者は具体的な説明以外にも、「ゲイ・レズビアン等ではない」と記載されており、追加の説明が加えられている。分かりやすさを優先すると、そのような記載が必要になるのだろうが、その記載に対して気になる人がいると考えられる。ただし、回答者から見て分かりやすく、使用しやすい方法は「A. 直接的に尋ねる方法」であるだろう。
- ・ MSMの方でも、選択肢2「ゲイ・レズビアン・同性愛者」を選ばない人は必ずいる。「性愛感情」という言葉を用いて各選択肢が具体的に説明されているが、「性愛感情」は欲情も恋愛感情も両方含まれるため、MSMのなかには選択できない人がいるだろう。どの程度の回答の割合になるか不明だが、ゲイ、バイセクシュアルのアイデンティティを持っていないが、男性との性行動がある人は選択肢1、2、3、5の何を選択するか分からない。
- ・ 公衆衛生学における調査では、自身のアイデンティティと性行為の対象をそれぞれ別々に把握し、回答者がMSMかどうか判断している。公衆衛生学ではない他の大規模な調査においては、それらの把握は難しいかもしれない。
- ・ 一方で、国や自治体を実施する調査において、MSMを正確に把握できなければ、対象層の人口規模が過小評価（MSMが実際の人口よりも少ない）されてしまう懸念があり、施策に影響を及ぼす可能性がある。例えばHIV陽性者は年間1000人程度が新規で報告されており、厚生労働省のエイズ動向委員会は感染経路を把握している。感染経路が性的接触によるものである場合、同性間によるものか異性間によるものかまで確かめており、医師がインタビューして把握している。しかし、聞き方によって回答が左右されており、異性間の性的接触で感染したと回答した人の半数が実際は同性間による性的接触によるものだったと判明した。施策の対象層を確かめる重要なデータが過小評価されてしまう例である。今後、国や自治体を実施する調査において、MSMが「A. 直接的に尋ねる方法」の選択肢1の異性愛者や、選択肢5の決めたくないなどを回答する場合、セクシュアルマイノリティの人口に占める割合が過小評価されてしまう可能性がある。
- ・ なお、MSMは性的指向や性行動に関してマイノリティ性を有するため、セクシュアルマイノリティに含むものと考えられる。国や自治体を実施するような大規模な調査において、性行動が調査項目から抜け落ちていることを気にしている。調査項目に性行動を含めるべきというわけではないが、性行動がマイノリティ性から外れてしまっていることに懸念を抱いている。
- ・ 公衆衛生学の調査においては、直接的に尋ねる設問を設けることで性行動を把握している。性的指向の設問の回答を条件分岐させても、性的指向の設問中に性行動の設問を含めることは難しいだろう。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 補足資料の「A. 3ステップ方式」の把握方法が丁寧である。回答者にとってもポジティブに回答しやすい把握方法である。
- ・ また、補足資料の例は、セクシュアルマイノリティに限定した調査ではなく、全ての人を対象にした調査であるため、全体の回答数に占めるセクシュアルマイノリティの回答数は限られ、集計時にセクシュアルマイノリティとして選択肢を統合して分析するということだろう。最終的に統合して分析するのであれば、選択肢を多く設けることが必ずしも優れているわけではない。その観点からも「A. 3ステップ方式」の把握方法がよいと考えている。
- ・ また、「A. 3ステップ方式」は、出生時の性別と別の性別だと捉えている人や違和感がある人の割合をそれぞれ確かめることができる。回答者目線で見ても、「出生時の性別と同じ」、「別の性別だと捉えている」、「違和感がある」の3つの選択肢と自由記述があれば、十分に回答できると考えている。
- ・ 「C. 当事者がどうか尋ね、認識を尋ねる方法」は、選択肢に性的指向と性自認が混在している点が最大の問題である。性的指向と性自認は異なるものであるということを通認識として受け取ってもらいたい。国や自治体を実施する調査において、性的指向と性自認が混在するような把握方法をしていると、国や自治体の性的指向と性自認の理解度を疑ってしまうだろう。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

① 過去に実施された調査の目的と調査手法

- ・ ゲイ、バイセクシュアル男性の性行動や性感染症予防の行動を調査した。MSM を調査対象としており、ゲイ、バイセクシュアル男性が主な回答者である。質問紙調査やヒアリング調査¹⁶を実施した。

② 調査を実施した際の、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法（設問・選択肢の作り方）と、その方法を選択した理由

- ・ MSM を調査対象としており、ゲイ、バイセクシュアル男性が主な回答者であるため、セクシュアリティは「あなたはどれにあてはまりますか？ーゲイ／バイセクシュアル／その他」のように把握しており、性行動は「これまでに男性とセックスをしたことがありますか？ーない／ある」のように把握している。

③ 調査の実施・集計・分析に当たって、どのようなことに留意したか。

- ・ （「2. アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え」も参照）
- ・ 調査項目によっては、過去の経験のフラッシュバックを起こす場合があるため、回答者の心理的負担に留意が必要である。
- ・ 調査対象者である市民やコミュニティの人々などと一緒に調査項目を作成している。当団体はボランティアメンバーなども含めた一般の人にも調査設計に加わってもらい、一般の人か

¹⁶ 詳細は「令和元年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業『MSM に対する有効な HIV 検査提供とハイリスク層への介入方法の開発に関する研究』（研究代表者：金子典代）：平成 29 年度～令和元年度総合研究報告書、2020.」を参照。

ら見た調査仮説の項目立てを行うことがある。研究者や行政の立場から見れば、立てられた調査項目の意図が理解しにくい場合もあるが、調査対象となる市民を巻き込んで一緒に調査設計を行うことが理想と考えている。

- ・ 当団体は、トランスジェンダーにおけるゲイを分類する際、戸籍上の性別ではなく性自認を基準にして性的指向が同性に向くかどうかで分類している。戸籍上の性別ではなく、本人の性自認を尊重するようにしており、性自認に基づいた当事者の固有の経験を大切にしている。
- ・ なお、厚生労働省のエイズ動向委員会における調査では、トランスジェンダーを正確に把握できていないことが課題である。トランスジェンダーと思われる回答者の件数を注釈のような形式で追記している¹⁷。調査結果を公表する際においても、注釈をつけるなどの対応をすることがある。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ 公衆衛生や医療に関する調査項目を含めてほしい。新型コロナウイルス感染症やエムボックスが蔓延したとき、感染の疑いがある場合、最寄りの医療機関やかかりつけ医に相談することが行政から伝えられていた。また、エムボックスが蔓延した当初、保健所で相談対応の準備ができていなかったため、厚生労働省からも最寄りの医療機関やかかりつけ医に相談することが発信されていた。一方で、トランスジェンダーはかかりつけの医療機関がないことが多く、そもそも医療機関にかかることのハードルが高い。感染症への不安を抱えながらも、最寄りの医療機関やかかりつけ医に相談できず、どうしてよいか分からない状態になっていた。こうした経緯から、セクシュアルマイノリティの医療機関にかかるハードルや健康状態が調査項目に含まれるとよい。
- ・ セクシュアルマイノリティの医療アクセスに関する調査研究は、それを専門とした調査研究グループがいくつか実施している。そのような医療アクセスを専門とした既往研究と比較できるように、国や自治体を実施する調査においてもセクシュアルマイノリティの医療アクセスに関する困難が把握され、セクシュアルマイノリティが抱える困難の一つとして世の中に認識されるとよい。
- ・ 言語的な側面も考慮にいれて調査が実施されるとよい。例えば日本国籍のMSMにおけるHIV新規感染者は経年的に減少しているが、外国籍のMSMにおけるHIV新規感染者は増加傾向であり、2023年の外国籍のHIV新規感染者数は過去最高だった。日本国籍と外国籍で状況が異なる様子が見受けられるように、日本に居住しているセクシュアルマイノリティの使用している言語も調査項目に含まれるとよい。また、調査実施に際しては、記載内容を多言語化したり、日本語でも分かりやすい記述にするなどの配慮があるとよい。
- ・ 自治体を実施する調査は、自治体ホームページの分かりにくい場所に調査結果が掲載されていることが多く、一部の研究者しか調査結果を知らないということがよくある。調査を実施するだけでなく、調査結果を市民に伝えていくということ、特に回答したセクシュアルマイノリティに調査結果を還元していくことが重要である。

¹⁷ 例えば「注」令和2（2020）年にトランスジェンダー女性（出生時に割り当てられた性別が男性で性自認が女性）のHIV感染者新規報告が1件あったが、出生時の性別に従って男性に分類した。」と記載されている。（厚生労働省エイズ動向委員会（2021）「令和2（2020）年エイズ発生動向-概要-」. <https://api-net.jfap.or.jp/status/japan/data/2020/nenpo/r02gaiyo.pdf>（令和7年3月31日閲覧））

- ・ セクシュアルマイノリティを対象にした調査研究は、大学においても盛んに行われている。当事者に数多くの回答依頼が届き、調査被害とも呼ばれる問題が生じている。当事者は同じような調査に何度も回答することになるため、内容が重複しないように注意する必要がある。
- ・ 各調査でセクシュアルマイノリティの分類方法が異なっており、統一されることが望ましい。

以上

(8) 特定非営利活動法人 SHIP

| | |
|------|-----------------------|
| 実施日時 | 12月12日(木) 19:30~21:00 |
|------|-----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|---|------|------|
| 活動目的・活動内容 | 基本理念として、性的マイノリティの心と体の健康支援、HIV感染者の減少、性的マイノリティが暮らしやすい社会づくり、の3つを掲げている。直接支援に焦点を当てており、健康支援（電話相談、カウンセリング、HIV検査）、ネットワークづくり（行政や教育機関との連携）、コミュニティ支援（居場所づくり、情報提供、ソーシャルワーク機能）の3つが主な柱となっている。 | | |
| 所属人数（2024年度） | コミュニティ支援や健康支援：ボランティアが30名程度、HIV関係：医療従事者10名 | 活動地域 | 神奈川県 |
| 活動参加者の主な属性 | 活動参加者にはL、G、B、Tいずれの当事者も、その家族もいる。また、年齢別の交流会は、10代限定、20代まで、40代以上それぞれを対象に開催している。また、セクシュアリティ別の交流会や、家族や支援者向け交流会も開催しており、属性ごとに同じ立場で話せるように対象を分けている。他者やコミュニティとの接触が少なく、孤立している方もいる。 | | |

- ・ 2007年に団体を立ち上げ、約17年半活動している。
- ・ 団体の基本理念として、性的マイノリティの心と体の健康支援、HIV感染者の減少、性的マイノリティが暮らしやすい社会づくり、の3つを掲げている。具体的な活動としては、健康支援（電話相談、カウンセリング、HIV検査）、ネットワークづくり（支援の手が届きやすくするために行政や教育機関との連携）、コミュニティ支援（居場所づくりと情報提供、ソーシャルワーク機能）の3つが柱となっている。
- ・ NPO法人としての活動前は任意団体として活動しており、ゲイ・バイセクシュアル男性を対象としてエイズの予防啓発に取り組んでいた。その後、2007年からは神奈川県との協働事業として、対象範囲を広げて活動し、2012年にNPO法人化している。現在も自治体と連携しながら、個別相談や居場所づくりなど様々な活動を行っている。
- ・ 活動を開始した当時は、LGBTに関する話題が現在ほどは多くなかったため、学校や職場にカミングアウトできずに孤立している性的マイノリティ当事者が多かった。そうした性的マイノリティ当事者をコミュニティにつなぐための活動を行い、教育や行政とも連携してきた。
- ・ 現在はコミュニティ支援として、コミュニティスペース「SHIPにじいるキャビン」を週4日開いている。また、神奈川県内の3自治体・6か所において、年齢・セクシュアリティ別に6種類の交流イベントを開催している。

- ・ 健康支援として、厚生労働省の研究班の一環で、月 1 回 HIV 検査を無料で実施している。また、毎週木曜の夜間は電話相談を行っているほか、臨床心理士によるカウンセリングを月 4 日実施している。さらに、神奈川県、横浜市、横須賀市、大和市の委託事業として個別相談も実施している。
- ・ ネットワークづくりとして、学校や行政向けに講演会を実施しており、昨年度は年間 130 件、累計で 1,200 回程度行った。また、啓発資料を作成し、教育委員会を通じて学校に送付している。
- ・ 当団体の施設利用者の特徴としては、周囲にカミングアウトをしていない方や、パートナーがいない方、他者やコミュニティとの接触が少ない方が比較的多い。特に、自らのセクシュアリティに気づいたばかりで孤立している層や、自らのセクシュアリティを受容しているがコミュニティに入れられない人、社会的弱者（障害者・高齢者・子ども・低所得者など）などが含まれる。他の団体とは利用者層が異なると考えられる。
- ・ LGBT に関する様々な団体が直接支援や間接支援を行っており、ロビー活動やパレード等は間接支援に該当するが、当団体ではそうした活動よりも直接支援に焦点を当てている。
- ・ 団体の活動メンバーについては、コミュニティ支援や健康支援に関してはボランティアが 30 名程度いる。このほか、HIV 関係では 10 名の医療従事者がいる。また団体の立ち上げ期から、臨床心理士のスタッフが活動しており、相談やカウンセリング、グループのファシリテーターを担当している。
- ・ 活動参加者には L、G、B、T いずれの当事者も、その家族もいる。また、年齢別の交流会は、10 代限定、20 代まで、40 代以上で分けて実施している。また、セクシュアリティ別の交流会では、属性ごとに同じ立場で話せるように対象をレズビアン・ゲイ・トランスジェンダーの 3 種類に分けている。このほかに、性的マイノリティ当事者の家族の交流会がある。また、2023 年度には支援者の交流会も開始した。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 例えば、性別及びジェンダーアイデンティティの把握方法のうち、「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」の方法は一見すると分かりやすく詳細に聴取できるように見えるが、自分がこのカテゴリーだとはっきり認識していない人や迷っている人、カテゴリーの狭間にいる人にとっては、自身の存在が選択肢の中に含まれていないと受け取るかもしれない。例えば、C の選択肢のいずれにも該当しない人からすると、自身の存在があまり認識されていないのだと思うだろう。逆に、「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」で提示されたカテゴリーに 2 つ以上当てはまる方は、選択する際に迷うことになるだろう。
- ・ このように、アイデンティティを尋ねる設問では、選択しづらい場合やいずれも当てはまらない場合がある。当団体が開催している交流会では、最近では LGBT という用語を使うようになったが、はっきりと同性愛者やトランスジェンダーであると認識していない方のアンテナにも引っかかるように、以前はゲイや LGBT などの用語を意図的に使っておらず、「同性を好きな人」「性別に違和感のある人」といった表現を使っていた。
- ・ どのような目的の調査かによるが、例えば X ジェンダーの困りごとや経験について知りたいのであれば、調査対象者が X ジェンダーであるという情報がある程度集める必要がある。例

えば、性別欄に男性・女性・その他という選択肢を設けている場合、その他を選択した人が X ジェンダーであるとは限らない。あくまでも、男性でも女性でもないものを選択した人であるという結果でしかないため、X ジェンダーの人の経験を調査したいのであれば、ラベリングするような選択肢を作っておく必要がある。ただし、自治体が調査するのであれば、特定のセクシュアリティに焦点を絞るわけではなく、いわゆるマジョリティではない人の生きづらさを調べるという場合が多くなるのではないか。

- ・ L、G、B、T のいずれに該当するかという聞き方をして選択肢を選んだ人は、自身の SOGI についてある程度自覚がある人だと考えられる。そうではなく、好きになる人の対象は男性と女性のどちらか、という聞き方をすると、自身の SOGI について迷っている人がもう少し多く含まれてくるだろう。
- ・ 性的指向については、男性が好きか女性が好きかという聞き方のほかに、異性が好きか同性が好きかという聞き方もあるが、X ジェンダーの場合は性的指向の判断基準となる自身の性別が男女どちらでもないため、異性や同性が何を指すかも分からず答えづらい。
- ・ 性感染症に関する調査の場合、性行為の相手が同性か異性かという情報も必要であり、性的指向の中でも恋愛感情と性的な感情の 2 種類を切り分けて聴取することも考えられる。性行為について把握したいのであれば、L、G、B、T のカテゴリーとは別の選択肢を作った方がよい。当団体の調査の結果をみると、性別違和を感じるよりも前に性行為をしていたというトランスジェンダーの方もいたが、性行為をすることによって、性別の違和に気づくという場合もある。年代によって性行動の対象が異なることに留意が必要である。ただし、性行動について聞く調査であればこのような観点があってもよいかもしれないが、今後実施される調査はもっと広いテーマの調査を想定していると考えられるため、調査の目的に応じて検討するとよい。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 家族に関する調査項目が含まれている場合、回答に困る。設問文の中で、家族が何を指しているのか説明がなければ、家族の中に同性パートナーも含まれているのか、あるいは血のつながった人だけが想定されているのかが分からず、自分たちの存在が含まれていないと感じてしまう。家族の定義については、一般的には血縁関係が想起されるが、法律上は家族の定義は存在しない。そのため、調査の際には何をもって家族とするかを詳細に記載したほうがよい。
- ・ 調査で差別を受けた経験や辛かった経験について聞かれると、答える側も辛くなる事がある。そのため、そのような時は途中で調査をやめる権利があることや、調査に回答した後で辛くなった場合に相談できる連絡先の情報は記載すべきである。
- ・ 居住地に関する質問は、調査の最後に配置した方がよい。個人が特定されそうな情報を最初に聞いてしまうと、それ以降の質問にも答えづらくなってしまう。
- ・ 倫理的な事情により、当団体の調査では最初に年齢を把握している。18 歳未満と 18 歳以上で区切るなど、年齢によって質問が変わってくることもあるためである。
- ・ 何を目的とした調査であるかは最初に明示する必要がある。

③ その他留意すべきこと

- ・ 当団体の調査の中には K6 のような尺度を用いた設問があるが、特に若い世代にとっては尺度に出てくる用語の意味や内容が分からないという人も多く、質問を頻繁に受ける。一方で、尺度を用いる場合は既定の聞き方をする必要があるので、補足説明を入れると結果に影響出る可能性があり、悩ましい。
- ・ L、G、B、T 以外のカテゴリについては、当事者であると自認している場合であっても人によって用語の使い方や認識に幅がある。そのため、例えば「アセクシュアル」とはこのような人を指すといった形で、用語の意味が分かるように、最初に定義を提示しておくといよい。
- ・ 情報の取扱いについては、どのくらいの範囲に公開されるか等、性的マイノリティに関する調査に限らず調査一般で留意すべき事項が守られていけば問題ないだろう。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 「異性愛者」は一般的に広く使われている用語ではないため、「B. 二段階の設問を設ける方法」のように異性愛者であるかどうかを最初に聞いてしまうと、異性愛者という概念や言葉を知らない人は戸惑うだろう。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」には用語の説明が記載されているためよいのではないかと。用語を知らない人であっても、補足説明を読めば分かるだろう。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」の選択肢 1～4 には、かっこ書きの説明の中で「性愛感情」と記載されているが、恋愛と性行為の両方を含むか、一方のみを指すかについては、調査目的によって異なるだろう。性行動や保健に関する調査であれば、恋愛感情を持たないが同性との性行為をする人も把握するために、性行為まで含める必要がある。一方で、生活全般に関する調査であれば、そこまで切り分けて聴取する必要はないだろう。また、調査の目的によっては、性行為の対象が男性か女性かをはっきりと聞いてしまってもよいだろう。
- ・ 「B. 二段階の設問を設ける方法」では恋愛と性行為の両方を含めて広く把握しようとしているのだろう。この場合、恋愛感情を抱く対象と性的な惹かれの対象が一致している人は回答できるが、恋愛感情はあるが性行為はできないという人やその逆の人もいるため、両方含めるべきか別々で把握するべきか悩ましい。
- ・ 一方で「A. 直接的に尋ねる方法」は、性行為に限定せずに、性的な感情も含めた上でのというニュアンスが伝わってくる。なるべく幅広く補足しようと苦労して検討した跡が感じられる。属性と関連して細かく分析するのであれば、恋愛感情と性行為・性的な惹かれを分けて聴取した方が正確だとは考えられるが、自治体などの調査であくまでも性的マイノリティ当事者の生活実態を把握するというのであれば、そこまで厳密に分ける必要はないだろう。その際、「A. 直接的に尋ねる方法」には選択肢 5 「決めたくない・決めていない」や選択肢 6 「質問の意味がわからない」も設けられているため、選択肢 1～4 に当てはまらない人であっても回答できるだろう。「A. 直接的に尋ねる方法」では「その他」という選択肢や自由記述欄は設けられていないが、集計の限界なども考慮すると現状の形で問題無いと考える。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 「A. 3ステップ方式」はシンプルかつ全体を網羅できるように設計されているという印象を受ける。「A. 3ステップ方式」の3段階目では今の認識に最も近い性別を把握するに当たり、男・女以外の選択肢や自由記述欄も設けられているため、シンプルかつ性的マイノリティ当事者を排除していないと感じる。このような理由で、「A. 3ステップ方式」は現状のような形でよいと考える。性分化疾患の場合も考えられるが、設問文のかつこ書きでは「出生時の戸籍・出生届の性別」と明記されているため、問題ない。このかつこ書きがなく、「あなたの性別は」とだけ記載されている場合は回答しづらいだろう。
- ・ 「B. 2ステップ方式」の2段階目では様々なバリエーションを聴取しており、様々な性の在り方の人が存在するとは把握できるが、それらの回答を集めたところでどのくらい分析するかという問題がある。1段階目で「出生時に指定された性別」と記載されているが、「指定された」という表現はあまり見慣れない。「割り当てられた」という表現の方が分かりやすいだろう。そのような表現面も含めて、「A. 3ステップ方式」のほうが分かりやすいのではないか。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

- ・ 当団体の調査は対外的には公開していないが、コミュニティスペースの利用者に対して、10年近く調査を実施している。調査では、性的指向を把握する設問、性自認を把握する設問、セクシュアリティのカテゴリーを把握する設問を設けている。ただし、性的指向・性自認を把握した結果と、セクシュアリティのカテゴリーを把握する設問の回答ではずれがある。例えば、女性・ゲイと回答している人もいた。
- ・ また、性別違和を感じたことがあるかどうかについては、何となく違和感を抱いた時期と、はっきりと違和感に気づいた時期の2つに分けて聴取している。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ 婚姻関係については、調査の目的によっては聴取する必要があると考えられるが、結婚後に性別違和を感じている人もおり、そのような場合は戸籍を変更することができない。また、こどもの有無について把握する場合は、同性カップルやトランスジェンダーの方でこどもがいる場合もあるため、調査の目的によっては考慮する必要があるだろう。
- ・ 当団体の施設の利用者の中には、貧困や発達障害、精神障害、軽度の知的障害などをお持ちの方や、うつ病で休職している方など、セクシュアリティ以外の生きづらさを重複して抱えている方もかなり多い。そのため、セクシュアリティと他の困難を重複して抱えている状況を把握できるような調査項目があるとよい。これらの困難は自殺にも関連してくる。年代にもよるが、特に10代では不登校やいじめを受けた経験、自傷の経験があるこどもの割合がかなり高い。このような他の生きづらさや困難を抱えている人が、性的マイノリティ当事者のコミュニティの中に入れずに孤立している場合もある。
- ・ セクシュアリティ以外の生きづらさを抱えている人は、その困難に関する支援につながっている場合もある。しかし、そこで自身のセクシュアリティを表明できていない人や、表明したところ差別的な対応に遭い、当団体に相談に来たという人もいる。このような状況を踏まえると、困難を抱えている性的マイノリティ当事者の実数と、支援者側が実際に把握できている性的マイノリティ当事者の実数は異なるだろう。支援につながっているかという調査項

目もあるが、支援の定義も人によって異なる。福祉や教育などの分野別に聴取してもよいだろう。

- ・ 家族や職場へのカミングアウトの状況についても把握した方がよい。必ずしもカミングアウトによって良い方向に向かうとは限らず、カミングアウトした後に家を追い出されたり、虐待に遭ったりすることもある。当団体でも、全ての結果を公開しているわけではないが、カミングアウトとメンタルヘルスに関する調査を実施したことがある。同調査によれば、カミングアウトをしており、家族と同居している性的マイノリティ当事者のメンタルヘルスが最も悪いという結果がみられた。そのため、カミングアウトしてその後どうなっているかも把握できるとよい。同居している人が家族なのかそれ以外かによっても状況は異なるだろう。
- ・ 複合的な困難を抱えている方の中で当団体の施設に来ている方は、全体のごく少数に過ぎないだろう。対象者を絞って詳細にヒアリングするのがよいと考える。

以上

(9) (任意団体) ダイバーシティラウンジ富山

| | |
|------|-----------------------|
| 実施日時 | 12月17日(火) 10:00~11:30 |
|------|-----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|---------------|---|------|-----|
| 活動目的・活動内容 | 「誰も取り残さない - SOGI (性的指向・性自認) のあり方など、たがいにさまざまな『ちがひ』を持つすべての人々が、ひとしく尊重され、安心・安全を感じられる大学づくり・社会づくり」を目標に、月1回の交流会や啓発活動、講演、会議やイベントへの参加、情報交換等を行っている。 | | |
| 所属人数 (2024年度) | 会員5名 | 活動地域 | 富山県 |
| 活動参加者の主な属性 | 個々人のセクシュアリティの詳細は確認していないが多様である。交流会の参加者は年代もセクシュアリティもその時々で様々であり、富山県内だけでなく近隣県からの参加者もいる。 | | |

- ・ 富山大学人文学部の林夏生准教授が2015年に団体を立ち上げた。富山大学の五福キャンパス・人文学部を拠点として、様々なマイノリティのことを考えていく場づくりという趣旨で活動を始めた。
- ・ 交流イベントとして、月1回の「やわかフェ」を開催している。富山大学人文学部の協力を得て、構内において実施しており、性のことやそれ以外のことについても安心して話せる場を提供している。また、「やわかフェ」の開催日には、「多様性ライブラリ」も開放している。学生の研究のためなど、個別にメール等で連絡があった場合には資料を提供している。
- ・ 上記のような定期的な活動のほか、シンポジウムや学内イベント等も開催している。また、主に富山県内において、講演や研修講師の依頼にも対応している。さらに、年1回、北陸甲信越地域での会議も開催しており、情報共有や日常の困り事の相談などを実施している。他の地域に赴き、各地の団体との交流も行っている。
- ・ 富山大学との関わりについて、人文学部の学部長や教員の理解もあり、前代表の林夏生准教授が逝去した後も、富山大学人文学部の協力を得て活動している。2024年8月には、大学内のダイバーシティ推進センターと協力してイベントを開催した。また、やわかフェに参加した学生を中心に「やわかフェクラブ」という学生サークルも発足した。メンバーは当団体のスタッフとしても活動しており、協力し合っている。
- ・ 団体の会員は5名いる。他にも毎回のやわかフェで数名がスタッフとして対応しており、受付などを担当している。イベントの際にもその都度手伝うスタッフもいる。
- ・ 運営スタッフは富山大学の関係者や学生が多い。個々人のセクシュアリティについては詳細を確認していないものの、多様である。やわかフェの参加者は富山県内の在住者がほとんどだが、近隣県から参加する方もいる。年代もセクシュアリティもその時によって様々である。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 性別欄で男性・女性の選択肢しか設けられていない設問については、男性と女性のどちらか一方だけでは選択できない。また、男性・女性・回答しないという選択肢の設け方では、何かしら性別について回答したいという思いがあっても選択できないため、違和感がある。
- ・ 男性・女性・LGBT といった形で選択肢を設けているものをネット上で見かけたことがあるが、不適切だと感じる。性別情報に関して、性的指向に関することと、ジェンダーアイデンティティに関することが並列で記載されているものは、あまり適切ではないことが多い。
- ・ 家族構成を聴取する設問では、同性パートナーが想定されていない、あるいは想定されているかどうか分からない場合には回答しづらい。例えば、何年も同居しているパートナーを内縁関係に含むのかなどが明記されていない場合が多いため、答えにくい。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 回答内容が何に活用されるかはっきり分からなければ、回答しづらい。例えば、セクシュアリティに関して、どのようなことを明らかにしようとしているか説明がないまま尋ねられると、アウトティングとまでは言わないが、情報だけ取られているように感じられ、快くはない。
- ・ 全国各地の学生から卒業論文の執筆や高校の探求学習の授業のためにアンケートへの回答を依頼されることがあるが、他の人に情報を共有した時に安全性が担保されるか懸念があるため、指導教官のような信頼できる後ろ盾が無ければ協力は難しい。
- ・ アンケート調査やヒアリング調査を依頼されるときに、もともと信頼関係があったり、長年付き合いがあったりするところからの紹介があると、安心感につながる。以前、研究者から個人的な体験も含めてヒアリングされたことがあったが、相手は当団体での活動を通してある程度つながりのあった人物であったため、詳細まで話すことができたように感じる。一方、初対面であれば、個人的なことを深く話すのは難しいだろう。自身について話し慣れている人であれば初対面でも話せるかもしれないが、そうでない場合は相手がどのような人かある程度分かっていた方が話しやすい。
- ・ 調査内容について、個人的なことを深く聞くものではないと分かると、それも安心材料になる。性的マイノリティ当事者としての経験を聞きたいと漠然と依頼されると、何を聞きたいのかが分からないため、安心できない。趣旨の詳細が分かっていると、安心して回答することができる。

③ その他留意すべきこと

- ・ 調査結果のデータが公開される範囲、活用や検討のあり方、公開される際にはどの程度匿名性が担保されるかが特に気になる。例えば、大都市で実施されたアンケートであれば匿名性が高いかもしれないが、地方で開催されたイベント参加者向けのアンケートにおいて、「どこから来ましたか」という質問に回答し、「富山県から1人の参加者があった」という結果が出ると、匿名性が担保されない。このように、質問の内容によっては答えにくくなるだろう。
- ・ ヒアリング調査においても、聞いた内容の扱いが分かるよう、結果を取りまとめたものを一度見せてもらえると、情報が適切に扱われていると目に見えて分かりやすく、調査にも答えやすくなる。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 明確にというわけではないが、「B. 二段階の設問を設ける方法」や「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」が答えやすいように感じる。
- ・ 「B. 二段階の設問を設ける方法」では性的マイノリティ当事者であるかどうかを最初に確認しているため、回答しやすい。一方、「A. 直接的に尋ねる方法」のように、多様なセクシュアリティをいきなり並べられると戸惑う人もいるのではないかと。はっきりとセクシュアリティを認識している人もいれば、何となく違和感がある人やアセクシュアルの人など、性的マイノリティ当事者であるかどうかにはグラデーションがある。少しだけ当事者性があるかもしれないという人もいる中で、「A. 直接的に尋ねる方法」のように様々なセクシュアリティが並べられていると、選択するのが難しいのではないかと。これに対し、「B. 二段階の設問を設ける方法」であれば、「自分はこのセクシュアリティだ」とアイデンティティが確立していない段階の人であっても答えやすいだろう。性的マイノリティ当事者である可能性のある人を広く補足できるのは「B. 二段階の設問を設ける方法」ではないかと。
- ・ 当団体が開催している交流会の参加者の中にも、「他の人とちょっと違う」と話す中で、自分に当事者性があるという自覚が芽生えてきたという人もいる。そのあたりも汲み取れると理想的だろう。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」の選択肢1の異性愛者に該当せず、さらに選択肢2～6のいずれにも当てはまらないという人もいるだろう。ただ、そのような回答が実際にどの程度あるかは分からない。誰を調査対象とし、どの範囲までを性的マイノリティ当事者として補足するかにもよる。
- ・ また、「A. 直接的に尋ねる方法」にはアセクシュアルという選択肢が設けられているが、恋愛感情はないが性的欲求はあるという人や、その逆の人などもいるため、どこまで正確に把握するかという論点もある。選択肢5のように決めたくない・決めていないわけでもなければ、選択肢6のように質問の意味が分からないわけでもない人にとっては、「A. 直接的に尋ねる方法」の選択肢の中で選べるものがないだろう。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」の選択肢に「性愛感情」と記載されているが、ある程度性愛の対象がはっきりしている人は回答することはできるが、回答者がセクシュアリティについてどれくらい考えたことがあるかにもよるだろう。性的マイノリティ当事者の中でも、性愛と恋愛感情を分けて考えている人はあまり多くないかもしれない。恋愛対象については答えやすいが、性的な欲求の対象を聞かれると答えにくいとの声もあるため、恋愛と性愛を分けて調査する場合は聞き方が難しいだろう。いずれにしても、質問をしている理由が丁寧に説明されていなければ、答えにくいのではないかと。
- ・ また、「A. 直接的に尋ねる方法」と「B. 二段階の設問を設ける方法」ともに、スティグマや抵抗感が強い場合、同性愛者やアセクシュアルであるとはっきり答えること自体に抵抗がある人もいるだろう。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 団体メンバーに確認したところ、どれか1つがよいという強い考えがあるわけではないが、「B. 2ステップ方式」の方法が答えやすいという意見が多かった。「B. 2ステップ方式」では「その他(回答しない等)」という選択肢も設けられており、匿名の調査であっても回答したくないという人が選択できるため、よいと考える。また、「B. 2ステップ方式」の2段階目では、自分自身で認識している性別に近い選択肢を選びやすいと感じる。
- ・ 「A. 3ステップ方式」の2段階目が必要かどうかについては、判断が難しい。例えば、出生時に割り当てられた性別が男性で、女性への移行がある程度進んでいる場合、身体的には違和感が少なくなっていると考えられるため、どのように回答することになるか分かりづらい。
- ・ 「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」については、トランスジェンダーやクエスチョニングを分かりやすく伝えるために説明文を記載していると見受けられるが、説明が正確ではないと受け取られる懸念がある。
- ・ 「A. 3ステップ方式」～「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」のいずれの方法であっても、多少腑に落ちないように感じることはあるかもしれないものの全く回答できないわけではない。比較的「B. 2ステップ方式」がよいという程度であり、どれが絶対よい・悪いという議論にはならなかった。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

- ・ 当団体では、調査は実施したことがない。富山県でパートナーシップ制度を創設するに当たって性的マイノリティ当事者に任意で意見を聴取し、20人程度の意見を県に伝えたことはある。その際はセクシュアリティの情報は未記入も可とし、制度に賛成か反対か、制度に求めること等を自由記述で把握した。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ はっきりと調査項目という形では伝えられないが、都市部と地方では大きな違いがあるため、それを考慮した調査ができなければ、地方の深刻な状況は明らかにならないだろう。いわゆるコミュニティや交流会だけでなく、レズビアンバーやゲイバーも含めて、他の性的マイノリティ当事者とセクシュアリティのことも話せる場とどれだけつながれるか、そのような場があったとしてもそこに行けるかなど、身近なコミュニティの有無や、つながれる場所や人がどれだけいるかは都市部か地方か、あるいはどのようなセクシュアリティかによって異なり、それによって性的マイノリティ当事者のしんどさも変わってくると考えられる。地方や匿名性が低い都市で生きている性的マイノリティ当事者はより深刻な状況にあるだろう。東北のパレードに参加した際も富山県と状況に近いと感じた。
- ・ 富山で長年活動が続ける中で、都市部と地方では性的マイノリティ当事者の状況に大きな差があることを実感している。地方では匿名性がないため、アンケートの回答自体が難しかったり、アライであることの表明自体に抵抗があったりする。このような小規模都市のしんどさが伝わるとよい。
- ・ また、近隣住人とのつながりが強い地域や、富山県で多くみられるような3世代同居の場合、近くに祖父母が住んでいる家庭などでは、親世代は理解があっても祖父母世代からの反対があり、トランスジェンダーの方が制服や身につけたい服装の話をして全くできないという話も聞

く。近隣住民や親や親戚との関係性も、性的マイノリティ当事者のしんどさに大きく影響するだろう。

- ・ 学齢期については、公立学校と私立学校でも状況が異なる。富山県では公立学校において制服や頭髪の対応がある程度進んできているが、私立学校では各学校の方針により状況が大きく異なる。調査や研究でこのような状況にどのようにアプローチできるかは分からないが、多様な性に関する理解が遅れている地域では、私立の学校の意思決定に関わる者の理解も無く、性的マイノリティ当事者のしんどさは大きくなっているかもしれない。
- ・ また最近聞いた話であるが、ある学校では来客時に女性がお茶を出すという習慣が未だに残っているとのことであった。厳密には分からないが、そのような地域では男らしさや女らしさが求められ、性的マイノリティ当事者の生きづらさにも関連してくるだろう。また、金融機関で働いている方からは、結婚していなければ一人前ではないと飲み会の席で言われるという話も聞いており、異性愛者ではなく同性愛者やアセクシャルなどの場合は会社での立場や関係も築きにくいということもあるだろう。
- ・ 当団体が開催している交流会や富山県内の交流会だけでなく、近隣の石川県の交流会に参加することもあるが、富山在住の方が石川県の交流会に参加していたこともあった。年代や周囲の環境によっても異なるかもしれないが、地元で交流会があったとしても、安全だと思えず参加できない等、地方都市では地元で動くことが難しいという状況もあるだろう。
- ・ 現状では交流会を開催するとなると、どうしても富山県の中心部や市内の富山駅付近となる。しかし、県の端の方から来るには電車で1時間ほどかかったり、居住地の最寄り駅が遠いと車などを持っていない人やそもそも運転免許を持てる年齢ではない人にとっては行きづらい場所であったりするなど、誰でもアクセスしやすい場所で開催するのは難しい。また、地方の団体は都市部と比べるとスタッフの数も多くはない。当団体の場合は学生のメンバーも多いが、大学卒業後に離れることもあるため、人的資源の確保や維持という難しさもある。
- ・ 交流会やイベントを開催する意義は、性的マイノリティ当事者が集まって話せる場を作ることだけではない。例えば、その地域で会議室を借りて実施することで、そのようなニーズがあることが自治体職員にも伝わる。また、良い場所がなかったとしても、地域で交流会やイベントを開催しようという話を SNS で発信することで、交流会に来なかった人にも、この地域で性的マイノリティに関する取組が行われているということが周知され、エンパワーメントにもつながるだろう。参加者の多寡に関わらず、様々な地域で開催できることが望ましいだろう。
- ・ 地方都市であっても自治体が比較的前向きに取組を実施しているところもあり、自治体主導で性的マイノリティ当事者の居場所を作ったり、地域の団体と連携して取組を進めたりしている場合もある。しかし、現状は熱意のある職員がいる自治体に限られ、ばらつきがあるため、ある程度平準化されると地方の性的マイノリティも生きやすくなるのではないかと感じる。感覚的ではあるが、国や自治体が動けば「これは取り組むべきことなのだ」と感じる人や企業は増えるだろう。
- ・ 地方都市に限らず、普段から何かしらしんどいことや変わってほしいことを抱えながら生きている性的マイノリティ当事者も多いだろう。ただ、何となくしんどい、何となく辛いことがあるという言語化ができていない状態では話しにくいと思われるため、調査する際には場面ごとに区切ったり、マイノリティ性が最も高そうな部分に焦点を絞ったりするなどの工夫

が考えられる。例えば、当団体での活動を通して「地方都市在住かつ性的マイノリティ当事者であることのしんどさ」を実感することが多いが、更に発達の特徴や病気、障害といった他のマイノリティ性にも着目し、それらとの重なりで起こってくるしんどさが分かるとういだろう。当団体の交流会でファシリテーターを務める中で、人との交流や人との会話が苦手な場合、その場限りでその後の人とのつながりにまで発展しない方もいることを感じており、そのような状況も把握できるとよい。

- ・ 自身のセクシュアリティが明確ではない、あるいは確立していない方々のことを、どれだけ見逃さずに把握できるかということも重要だろう。当団体の交流会には高校生くらいの年代も参加しているが、人に話したことがなければ自分のことも分からないという人もいる。そのような人も何かしら違和感があったりしんどい部分もあったりすると思われるため、何かの形で汲み取ることができるとよいと思う。

以上

(10) (任意団体) きんきトランス・ミーティング

| | |
|------|-----------------------|
| 実施日時 | 12月18日(水) 10:00~11:30 |
|------|-----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|---|------|-----|
| 活動目的・活動内容 | トランスジェンダーの人権問題への理解を深める活動(カフェ・サロンなどのイベントの実施/シンポジウム・勉強会の開催など) | | |
| 所属人数(2024年度) | 8名程度 | 活動地域 | 近畿圏 |
| 活動参加者の主な属性 | 20代~60代まで幅広い年代層が参加 | | |

- ・ 2019年12月に当団体は発足した。お茶の水女子大学が2018年7月、トランスジェンダー女性の入学を認めることを発表し、インターネット上でトランスジェンダーバッシングが激しさを増したことに危機感を募らせ、対面で集まることができる場所を作ろうと活動を開始した。
- ・ 参加者は大学教員などの大学関係者が多い。企画運営などをする主なメンバーは8名程度である。後述のカフェイベントには10~20名程度が参加している。友人・知人以外にもインターネットを通じて参加者が集まっている。
- ・ 大阪府大阪市北区にあるコミュニティセンターdistaで「kinky cafe」というカフェイベントを隔月で実施している。トランスジェンダーや多様な性について、お茶をしながら話し合うサロンである。カフェイベントはオープンに開かれており、10~20名程度が参加している。ほかにも、年末や夏季休暇には期間限定のイベントも開催しており、トランスジェンダーを中心に、多様なセクシュアリティの方々が参加している。参加者の具体的なセクシュアリティは把握していないが近畿圏から参加される方が多い。
- ・ 2020年2月に関西大学で当団体初めてのシンポジウムを開催し、2023年3月には同志社大学で2回目のシンポジウムを開催した。それぞれ135名、440名が参加した。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 近年、トランスジェンダーが広い意味で使われるようになっており、例えば「出生時の身体の性別と心の性別が一致しない人」、「出生時に割り当てられた性別と自認する性別が異なる人」、「出生時の性別に沿って生活しない人」のように、様々な説明がなされている。一方で、アンケートの選択肢にMtF/FtMしかない場合があり、女性に生まれたわけでも男性になりたいわけでもないと感じている人にとって、その選択肢では回答しにくい。男性/女性の2つの区分ではなく、自身の性のあり方を多様に捉えている人にとっても回答しやすい選択肢が設けられるとよい。
- ・ インターネットを通じて、トランスジェンダーという言葉は大きく広がったが、人それぞれで言葉の理解度、使われ方が大きく異なり、当事者間でも様々である。近年、トランスジェンダーを指す対象が大きく広がってしまったことを踏まえると、回答者がトランスジェンダーであるかどうか判断するために、アンケート等の質問を通して、回答者がどのような生活

をしているか把握し、出生時の性別と異なるかどうか明らかにできるアンケート設計をすることが求められる。

- ・ また、質問で「性別（男性/女性/その他）」と単に聞いても、何の性別を回答すればよいか分からない。参考として HIV/エイズの分野においては、出生時に割り当てられた性別として AFAB/AMAB (assigned female at birth/ assigned male at birth) という言葉がよく使われており、AFAB/AMAB を把握した上で、回答者が経験したことを把握している。
- ・ トランスジェンダーは戸籍上の性別を変えている場合がある。心理的に変更した後の性別で回答したいと考えることがある。
- ・ 性自認という言葉が示す内容も様々になっており、心の性別と考える人もいれば、そもそも自身の中で性自認を捉えていない人もいる。性自認を把握する質問において、例えば性自認がないと考えている人は男性/女性の選択肢だけでは回答できない。
- ・ トランスジェンダーはトランスジェンダーとしてのアイデンティティを受け入れている場合もあれば、性同一性障害という疾患として受け入れている場合もある。また、それらの両方に当てはまらない場合もある。一方で、アンケート等でトランスジェンダーのそのような状況の違いを把握していくことは難しいと感じている。
- ・ 当事者に関して誤った認識の質問としては、属性を把握する質問で男性/女性しか選択肢になかった場合や男性/女性/LGBT のような選択肢になっていた場合があった。
- ・ 身体の性別を把握するような質問についても、身体の状態が複雑な場合もあり、男性/女性の2つの選択肢だけでは回答しにくい。出生時に割り当てられた性別という質問内容であれば、比較的男性/女性の2つで回答しやすい。ただし、出生時に割り当てられた性別であっても、インターセックスや保留になっている場合もあるため、男性/女性に当てはまらず、その他になるような場合もある。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ セクシュアリティに関するアンケートや、HIV/AIDS の予防啓発活動を実施する中で、ネガティブなことを把握する質問が長く続くと心理的負担が大きいとよく言われた。辛い経験を把握することが続くと回答者はしんどくなってしまうため、配慮することが求められる。
- ・ ネガティブな内容があまりにも長く続くと上述のような心理的負担が大きいと言われるが、どの程度の量に抑えるべきかは、アンケートによって異なる。アンケート結果が政策等に活かされ、自身に恩恵をもたらすものであると思えるものであれば、辛い経験を回答することにも協力できる。辛い経験をしたり、様々な問題を抱え、しんどさを感じている当事者から情報を収集することは必要なことだと理解している。
- ・ アンケート回答中に辛くなった場合に備え、支援につながる連絡先や相談支援施設の情報一覧などをアンケートと合わせて伝えられるとよい。コミュニティセンターなどで回答してもらえる場合、コミュニティセンターのスタッフが回答者のフォローをすることも考えられる。回答者が辛い現実と向き合う際、言いたいと思ったことを言うことができる場所を持っているかどうかで状況は異なる。また、調査に対しての意見を伝えられる連絡先を用意することも考えられる。何か言いたいと思った回答者への配慮として、そういった情報を付記するだけでも大きく異なる。

- ・ 調査項目だけでなく、調査方法への配慮が必要である。特に知人からアンケート回答を依頼された場合など、調査実施者が回答内容を見てしまうことを想像してしまい、正直に回答できないことがある。仮に回答を見ないと伝えられても気になってしまい、知人に回答を知られたくないと強く思ってしまうため、ウェブ上でアンケートに回答できる方が安心できる。
- ・ 異性愛者か同性愛者を把握する質問を通じて、自身が同性愛者であることを再認識することがあり、特に自身のアイデンティティに対して葛藤を抱えている人にとっては回答負担が大きいと考えられる。一方で、その葛藤はアイデンティティが揺れ動く中で生じるものであり、自身のアイデンティティに対して葛藤を抱えている人もいつかは乗り越えなければならないことであるだろう。異性愛者だけでなく、同性愛者の選択肢があること自体は適切だが、自身のアイデンティティに対して葛藤を抱えている人への配慮も必要である。また、異性愛者、同性愛者以外にも、何のアイデンティティを選択肢として設けるかで影響は様々だろう。
- ・ 同性愛者というアイデンティティを把握する方法以外にも、恋愛対象を質問するように、行動や欲望の対象を把握する方法もある。HIV/AIDSの調査においては行動や欲望の対象が把握されている。調査目的に応じてアイデンティティを把握するか、行動や欲望の対象を把握するか、適切に使い分けることが必要である。

③ その他留意すべきこと

- ・ 地方在住者の場合、地域のことを細かく把握されるような内容があると、自身が特定されてしまうことを恐れて回答しにくいことがある。
- ・ 調査において、ネガティブな項目が長く続くと心理的負担が大きいことは確かであるが、当事者の利益につながるものと分かれば協力しようと思えることができる。自身の利益につながるかどうか疑問を持ちながら回答を続けるとしんどくなってしまい、なぜ協力しなければならないのかと考えてしまう。仮にアンケートが短かったとしても、利益にならないのであればアンケートには協力しない。アンケートに回答する労力に見合う利益が得られるかが重要である。1年後、2年後に自分達にとって暮らしやすい社会や世の中、未来になると思うことができる調査であれば、困難に思っていることをしっかりと回答したいと考えている。
- ・ 回答者の心理的負担を考慮し、ネガティブな項目が長く続かないように、複数回に分けて調査を実施することも考えられる。仮に一度しか調査が実施できず、ネガティブな項目も含め、多くのことを把握する調査をするのであれば、調査の目的をはっきりと示し、当事者が辛い人であると認識するだけで終わらせず、調査結果を基に社会を改善していくためのアンケートであると調査対象者に伝えてもらいたい。調査に意義があると理解できれば回答しやすい。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 補足資料の3つの方法の中で、「A.直接的に尋ねる方法」が最もよい。「その他」と自由記述欄が加わればさらによい。アンケート設計者の意図に反するかもしれないが、ゲイで無性愛者と回答したい人もいるため、「その他」と自由記述欄があれば、そうした回答も可能である。「その他」と自由記述欄を設けることは、回答したい選択肢がないと感じる回答者への配

慮として望ましい。ただし、集計上分類する際、ゲイで無性愛者という回答は、無性愛者に振り分けられるか、「その他」のまま集計されることになるだろう。

- ・ また、選択肢として「パンセクシュアル」よりも「その他」があった方がよいと思われる。「その他」がない場合、パンセクシュアルの人が両性愛者を回答するのか、「決めたくない・決めていない」を回答するのか、予想できない。加えて、「決めたくない・決めていない」という選択肢以外にも、「わからない」があってもよい（「質問の意味がわからない」ではない）。自身のアイデンティティが分からないのと同様、性的指向についても分からない場合もある。
- ・ トランスジェンダーの場合、自身の性自認の捉え方次第で、恋愛対象が同性か異性か判断しにくいことがあるため、恋愛対象が同性か異性かの聞き方では回答しにくい。ノンバイナリーの場合についても同様、恋愛対象が同性か異性かの聞き方では回答しにくい。
- ・ 例えば出生時の性別が男性で、自身が同性愛者であると認識し、そのことを通じて自身がトランスジェンダー女性であると認識した人の場合、女性本人から男性へと性的指向が向いているが、当初の認識に基づいて同性愛者と回答することがあり得る。一方で、同様の状況でも、現在は同性愛者ではなく、曖昧ではっきりとしないと考える人もおり、そうした場合への配慮としても「その他」が選択肢としてあるとよい。
- ・ 本項目は、回答必須の項目として位置付けられると考えられるが、何かを選択しなければ先の質問に進めないことになるため、「その他」を選択肢に設け、選択が難しい人も何かを選択できるようにした方が望ましい。
- ・ 「その他」を選択肢として設けることができない場合、「わからない」や「決めたくない・決めていない」を選択することになるだろう。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 補足資料の3つの方法の中で、「A. 3ステップ方式」が最も回答しやすい。「A. 3ステップ方式」の問53には選択肢が「1 男」と「2 女」しかないが、他に「回答しない」があってもよい。ただし、「回答しない」を選択する人はアンケート自体に協力しないことも考えられる。
- ・ 「A. 3ステップ方式」において、まず「あなたの性別に○をつけてください。」と記載されており、続いて（）内に「出生時の戸籍・出生届の性別」と記載されている。それに対して、「B. 2ステップ方式」は「あなたが出生時に指定された性別（戸籍上の性別）について、」と記載されており、出生時の性別に関する補足説明の順番がそれぞれ異なる。一般の人にも聞く大規模調査であることを考えると、「A. 3ステップ方式」の説明方法の方が分かりやすいのかもしれないが、冒頭の「あなたの性別に○をつけてください。」だけ読まれると説明不足である。出生時の性別に関する補足説明の見せ方が悩ましい。
- ・ 戸籍上の性別という聞き方をする必要はないだろう。出生時に割り当てられた性別という聞き方を使うことがよくある。出生時に割り当てられた性別として聞いても、集計上は戸籍上の性別と同じだと判断することになるだろう。また、単に性別と記載されているよりも、割り当てられたという表現があると、配慮されていると感じられる。また、戸籍性ではなく法的性別の方が正確な記載である。戸籍という言葉をあえて使う必要はない。「A. 3ステップ方式」において、出生時に判定保留になったケースは注釈によって配慮されていると理解した。

- ・ 「A. 3ステップ方式」の問53で「あなたの性別に○をつけてください。(出生時の戸籍・出生届の性別)」を回答した後に、問54で「あなたは今のご自分の性別を、」という説明がされると、問54における性別が何の性別を指しているのか分からなくなってしまう。その観点で言えば、「B. 2ステップ方式」の問1と問2の説明の方が分かりやすい。この観点で考えると、「A. 3ステップ方式」の問54でも同様に、質問文の冒頭に出生時の性別という言葉があった方が分かりやすい。
- ・ 「A. 3ステップ方式」は「男」と「男性」、「女」と「女性」の表記にゆれがある。
- ・ 性的指向と性自認の把握方法全体を通じて、先に性自認を聞き、次に性的指向を聞いた方がよい。回答者にとって回答の筋が通るため回答しやすくなるだろう。先に性自認を回答することで、性的指向の回答も迷わずに選択肢を選びやすくなる。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

- ・ 当団体では、調査は実施したことはない。他方で、イベント等の参加者に対しての申込フォームを用意しており、質問等でいくつかの項目(年代やイベントを知ったきっかけなど)を把握しているが、性別、性的指向、性自認は項目として設けていない。当団体は小規模であるため、参加している人は互いに顔が分かっており、自身のセクシュアリティなどを言いたくない人は言う必要もなく、当団体として把握する必要もない。
- ・ また、当団体の参加者がトランスジェンダーのセクシュアルヘルスの調査¹⁸に関わったことがある。アンケートにトランスジェンダーフラッグなどのビジュアルを装飾し、回答してもらえるような工夫を施している。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ 都市と地方で当事者が置かれている状況は大きく異なるが、都市と地方の格差の状況は調査されておらず、実態を明らかにすることが必要である。
- ・ 特に、トランスジェンダーは医療アクセスに関する問題が地方において深刻である。例えば、地方にはジェンダークリニックが近くにないため、新幹線を利用して同クリニックがある遠方まで通院する人もいる。このように、地方在住者が直面する困難を調査することが必要である。
- ・ 同性愛者においても、東京や大阪にあるゲイタウンで様々な人とつながりを持つことができる当事者と、地方在住者でつながりを持つことができない当事者で置かれている状況は異なる。つながりを持つことができる当事者は、仲間と一緒にいる程度満足した生活を送ったり、また自治体もそれらに呼応して施策等を推進したりしている。一方で、地方在住者はつながりを持つことができず完全に孤立してしまい、カミングアウトすることもできない。自身のセクシュアリティが周りに知られてしまうと、生きる場所を失ってしまう場合もある。
- ・ アンケート調査による実態把握は重要だが、全ての人が必ずしもアンケートの文章を読めたり理解したりできるわけではないため、アンケートを正確に回答できない人に対しての配慮が必要である。発達障害をもつ、あるいはその傾向がある当事者もおり、貧困層であることも多い。アンケートの文章にはふりがなを多くつけ、簡単な言葉で説明すべきである。

¹⁸ トランスジェンダーとセクシュアルヘルス・プロジェクト (<https://trans-sh.jp/>) (令和7年3月31日閲覧)

- ・ 当事者の中には、当事者団体のイベントに参加したくとも、数百円の交通費が高く、参加をためらう人がいる。調査をする際には、少額であっても謝礼をした方がよい。経済的に貧困な状況に置かれている人は、調査実施者の想像よりも厳しい状況に置かれていることがある。
- ・ ウェブ上でアンケートに回答できる方がプライバシーの観点から好ましいが、対面で話すからこそ拾うことができる当事者の声もあるため、聞き取り調査も行われるとよい。ゲイのセックスワーカーの研究において、調査項目で薬物等の内容に触れることがあるが、回答者はそうした内容のアンケート調査に回答しても問題ないか不安に思っている。アンケート調査だけでなく、調査実施者が実際に町に出て当事者から聞き取るなど、その場から得られる情報も重要である。
- ・ インターネットで情報をうまく得ることができない当事者が一定数おり、他の当事者がどのように生活しているか分からず、一人で悩みを抱え込んで生活していることがある。インターネットを活用して調査を行ったとしても、そうした当事者には情報が届かない。例えば、過去にトランスジェンダーを対象にして行われたインターネット調査では、高学歴であり正規雇用でインターネットリテラシーが高い人の回答が多かった。インターネットを活用することが苦手な人の声をどのように拾い上げていくのか検討する必要がある。そもそも経済的に貧困な状況に置かれている人はスマートフォンなどの端末を持っていないこともある。そうしたインターネットにアクセスできない人に対する調査も必要である。
- ・ また、高齢の当事者の困難や課題も未だ表面化されていない。LGBT という言葉がよく分からない高齢の当事者もおり、調査によって実態が明らかにされるとよい。
- ・ LGBT で一括りにすることができない実態があり、特にトランスジェンダーは孤立しやすい状況である。経済的に貧困な状況に置かれている人も多く、また、学校などの男性と女性で分かれる空間は心理的負担が大きい。また、トランスジェンダーは医療機関にアクセスするハードルが高いにもかかわらず、メンタルヘルスやホルモン注射などで診療科が異なるため、多くの医療機関にかかる必要がある。つまり、トランスジェンダーは医療ニーズが高いが、一方で利用できる資源が限られている。トランスジェンダーは孤立しがちで持っているネットワークが少なく、こうしたトランスジェンダーの置かれた実態が調査で明らかにされるとよい。メディアでよく取り上げられるようになり、トランスジェンダーも生きやすい世の中になったと世間から思われることがあるが、まずは生活実態が明らかになるような調査が行われるとよいだろう。
- ・ 調査対象者へ依頼する際には、ビジュアル上の装飾を施すなど、回答を促す工夫を設けた方がよい。例えばトランスジェンダー向けの調査を実施する際、トランスジェンダーは人口の1%未満であるため、少しでもトランスジェンダーの回答数を多くする工夫が必要である。トランスジェンダーフラッグなどのビジュアルをアンケートウェブサイトや依頼状などに施し、この調査がトランスジェンダーを対象にしていることを分かりやすく示すことが考えられる。
- ・ また、近年、LGBT 向けの調査が多いため、この調査が何のための調査であるか、結果がどこで確かめられるのか、分かりやすく示してほしい。

以上

(11) 一般社団法人レインボーフォスターケア

| | |
|------|-----------------------|
| 実施日時 | 12月18日(水) 15:30~17:00 |
|------|-----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|--|------|----|
| 活動目的・活動内容 | 「LGBT」×「社会的養護」をテーマとして活動している。LGBT(性的マイノリティ)が里親や養親として子どもを養育するための法制度等の課題の解決と、里親家庭や児童養護施設で暮らすLGBTの児童たちが直面する問題の解決を目指し、国や自治体に対する働きかけや、自治体職員・児童養護施設職員を対象とした研修の実施などに取り組んでいる。 | | |
| 所属人数(2024年度) | 5名 | 活動地域 | 全国 |
| 活動参加者の主な属性 | LGBT×社会的養護というテーマに関心のある人。 団体の協力者は、里親をしているLGBT当事者、児童養護施設職員、社会的養護出身者など。調査実施の際は、研究者と協働している。自治体職員や児童養護施設職員、里親や里親に関心のある人が研修に参加している。 | | |

- ・ 代表理事が国会議員の秘書として勤務する中で、社会的養護やLGBTの課題について知る機会があった。里親が不足しているという課題がある一方、子どもを育てたいLGBTもいることから、LGBT当事者が社会的養護の人的資源になりうるのではないかと考え、里親に関心のあるLGBT当事者や福祉関係者で集まって、法律や制度についての勉強会を行ったことが活動の始まりだった。有志で任意団体を2013年に立ち上げ、勉強会の開催を続けた。
- ・ 当時の状況として、里親委託に関するガイドラインでは、養育里親の認定を行う際の要件として、同性カップルを禁じていないものの、実態としては同性カップルとして認定を受けている事例が無かった。里親会に聞いたところ、同性のパートナーがいる当事者が、単身者として里親登録をして、同性パートナーの存在を隠している場合もあるといったことが分かってきた。そこで、法律の運用に問題があるのではないかと考え、政治家・議員に対して現状を伝えるなど、発信活動を行うようになった。2017年に、大阪府で同性カップルが養育里親に認定され、前例ができたことで、LGBTが里親認定を受けるケースが全国で増加した。
- ・ 「LGBT」×「社会的養護」をテーマとして活動してきたことから、次第に児童養護施設から相談が寄せられるようになった。具体的には、児童養護施設は男女別に部屋を分ける造りになっている施設がほとんどであるので、「トランスジェンダーの児童の扱いに悩んでいる」、「ゲイの児童を男子部屋に入れてよいのか」といった相談があった。全国調査をして実態把握をする必要があるのではないかと考え、また増加していく相談に対応していくためにも、法人化することとし、2015年に一般社団法人を設立した。
- ・ 活動内容としては、2016年~2018年に、児童養護施設職員向けのアンケート・ヒアリングを実施し、現在その調査の追跡調査を行っている。男性として生まれたものの性別違和があった子どもが、今は女性として社会人になっているというケースもあった。

- ・ 児童養護施設向けの研修も実施してきた。コロナ禍の期間は、対面での講義研修ができなかったが、最近は対面の研修を再開している。
- ・ LGBTの里親ならではの悩みや課題を話し合う場を提供している。
- ・ スタッフについて、団体に所属している人数は5名だが、日頃から実働しているのは代表1名である。他のメンバーは、関心のあるプロジェクトに参加するという形で活動している。団体所属のメンバーに限らず、「LGBT」×「社会的養護」というテーマに関心のある人や児童養護施設職員、社会的養護経験者と緩やかなつながりを持ち、その都度関心のある人が集まりながら活動している。
- ・ 活動場所について、登記上の団体所在地は埼玉県であるが、活動は関東中心というわけではなく、全国からの活動参加者がいる。
- ・ 社会的養護に関心のある性的マイノリティは、こどもが好きで子育てをしたいということもあるかもしれないが、自分の生活の余力を社会に還元したい、自分たちが役に立ちたいという気持ちで里親になるケースもある。同性カップルが里親になりにくいことで、こどもたちがケアを受けられる場所を狭められているのではないかという問題意識を持って活動している。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 当事者は、ゲイ・レズビアン・バイセクシュアル・トランスジェンダーといった名称で、自分自身のことを認識しているのではなく、ヘテロセクシュアル・シスジェンダーとの相対的な違いで、自分はゲイである、トランスジェンダーであるなどと認識するに至る。男性との交際経験が複数あり、今は特定の男性とカップルとして暮らしているという男性でも、自分自身をゲイと言うことに抵抗感を持つ人もいる。そのため、アンケートで、「あなたはゲイですか」という質問がいきなりあると、反発心を感じる人もいるかもしれない。それよりは、ヘテロセクシュアルを例に、それに当てはまるかどうかという聞き方がよいのではないか。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ ジェンダーアイデンティティ・性的指向についての質問は回答者の属性を把握する設問として設定され、それ以外に調査目的に応じた本論の質問が設けられていると思うが、属性を把握する設問において、住民票や戸籍に記載されている法律上の性別を答えることが直ちに心理的負担になるわけではないと思う。匿名性が担保され、調査の目的が分かっているのであれば、問題ないのではないか。一方で、前述のとおり「あなたはトランスジェンダーか」ということをいきなり聞くことには、抵抗感を持つ人もいるかもしれない。

③ その他留意すべきこと

- ・ 回答者に対する想像力を持っていて、自分たちのことをよく分かった上で聞いていると感じられるアンケートであれば、答えたいと思うだろう。アンケート調査の最初の数行で、調査に対する信頼感を持つことが重要である。

- ・ カテゴリーされたくないとする当事者は多い。カテゴリーしないとなると、そもそもアンケート調査自体が困難になるが、カテゴリーが暴力的になる場合もあるということには留意が必要である。
- ・ アンケート調査の目的を明示することが必要である。周囲の当事者から、調査に協力しても、何に使われるのか分からないという話を聞く。調査結果をフィードバックするということがあって初めてよい調査と言えるだろう。
- ・ 当団体が実施した調査は、調査結果が国会で取り上げられ、児童福祉法の一部を改正する法律案の附帯決議として、性的マイノリティ児童への適切な対応について盛り込まれるという結果につながった。調査の実施後に、そういったフィードバックがあるとよい。
- ・ 調査の実施前に回答対象者となる属性の人から意見を収集することが有効である。当団体で調査を実施する前に、児童養護施設職員 15 名程度に対し、ヒアリングを行ったが、施設の建物の造りについて教えてもらうなど、自分たちでは想定できなかった意見があがってきて、とても参考になった。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ これまでアセクシュアルは見過ごされがちだったので、そういった人がこぼれないようにすることが重要である。
- ・ 「B. 二段階の設問を設ける方法」では、問 57 に「考えたことがない」という項目もあるのがよいと思った。また、「いいえ」と答えた人について、次の設問で、「決めたくない・決めていない」と回答する余地が残っているのもよい。3つの調査事例の中では、「B. 二段階の設問を設ける方法」の調査事例がよいのではないかと思った。「A. 直接的に尋ねる方法」のように、直接的に聞くのは難しい面があるのと、「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」の場合、調査事例での、「好き」という言葉の定義が曖昧であると思った。
- ・ 性的指向についての質問項目について、以下の3パターンを提案する。

<パターン1>

質問：ご自身の性別について「男性」とであると自覚される方について、ご自身に当てはまる項目に○を付けてください。

選択肢：

1 女性に対する恋愛感情を、これまで自然と自覚したことがある。

2 女性に対する性的欲求を、これまで自然と自覚したことがある。

3 男性に対する恋愛感情を、これまで自然と自覚したことがある。

4 男性に対する性的欲求を、これまで自然と自覚したことがある。

※カテゴリーの定義として「ゲイ」となるような人でも上の選択肢で、1・3・4を選択するという回答パターンとなる可能性が考えられます。

※ただそれは当該回答者（ゲイとした場合）の過去の体験等による部分もあると思うので、その人について「深掘り」したいのであれば、この回答パターンは、結果の分析を混乱させる回答になるかもしれません（例えばこの回答に基づき、この人を「バイセクシュアル」と「誤った」分類を誘発することになると思います。）

<パターン2>

質問：あなた自身の性的指向であてはまるものに○をしてください。

選択肢：

- ・ヘテロセクシュアル
- ・バイセクシュアル
- ・ゲイ
- ・レズビアン
- ・アセクシュアル
- ・ノンセクシュアル
- ・いずれでもない

※各カテゴリーの定義について、回答者がしっかり把握しているのであれば、結果の分析を混乱させるような回答は出にくいと思います。

※ただ一般的に幅広い人を対象とするアンケート調査となった場合、回答選択の基準が千差万別になってしまうので、結果の信用性が乏しくなるのではないのでしょうか。

<パターン3>

あなた自身の性的指向（恋愛感情や性的欲求）について例示する典型例との比較をした場合のことをお答えください。

「私は男性であり自分の恋愛感情と性的欲求が女性を対象としていると自覚している」

- ・典型例と全く同じである。
- ・典型例とほぼ同じである。
- ・典型例と同じ部分があれば違う部分もある。
- ・典型例と同じ部分はほとんどない。
- ・典型例はほとんど自分に当てはまらない。
- ・典型例は自分には全く当てはまらない。

※社会の全体像としての性的指向の多様性についての理解を把握したいという程度であれば、この程度で良いのかもしれませんが。

<パターン3'>

次の一文のうち、下線部①から④についてあなた自身と比較して、全く同じである場合は「◎」を、ほぼ同じである場合は「○」を、同じ部分があまりない場合は「△」を、ほとんど違う場合は「▲」を、全く違う場合は「●」を書いてください。

「私は男性であり (①) ()

自分の恋愛感情 (②) ()

と

自分の性的欲求 (③) ()

が

女性を対象としている (④) . . . ()

と自覚している」

- ・ 調査の目的によるが、ゲイ・レズビアン・バイセクシュアルなどのそれぞれの人数や割合を知ることに意味があるのであれば、名称で聞けばよいが、本来は個人の感じ方や経験を詳細に把握していくような調査が必要なのではないか。
- ・ ヘテロセクシュアルやシスジェンダーの枠から外れる人、違和感のある人が意外と多いということを知りたいのであれば、パターン1のような聞き方が有効だと考えられる。
- ・ 社会の実相を把握したいのか、ゲイ・レズビアン・バイセクシュアル・トランスジェンダーといった属性別の割合を把握したいのかによって、質問方法は変わる。理解増進法に基づいて調査をするのであれば、社会の実相を把握する目的で、社会の典型とされる人のモデルパターンに当てはまる人と、そこには当てはまらない人を分けて把握し、性的指向やジェンダーアイデンティティの多様性について理解が乏しいことが、幾らかの人の生活の障壁になっているということを知りたいのかを浮かび上がらせる必要があるのではないか。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 「A. 3ステップ方式」の調査事例について、「あなたの性別はどちらですか」という設問については、性別の聞かれ方に苦しんできた人に対し、最初に性別を聞くのは、辛く感じる人がいるのではないか。回答しない余地もあるとよい。出生時の性であっても聞かれることが辛い人はいる。
- ・ 負担を減らすとすれば、何のために聞いているのか明示した上で、機械的に悩まず答えられるような聞き方にするのがよい。あなたの住民票に記載されている性別、健康保険証の性別はなどといった質問にして、統計として把握したいから質問しているという説明をつけるということである。
- ・ 「B. 2ステップ方式」については、問2で、男性、女性以外に、「男性・女性の間」「男性・女性の両方」「男性・女性のどちらでもない」「時により変化する」「その他」と様々な選択肢を設けているが、このような選択肢は、対象になる人が少ない上に、その人たちに細かく自己申告を強いているように感じる。細かく聞いたとして、その結果をどのように使うのか、客観的な調査結果になるのか疑問がある。
- ・ 「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」の調査事例では、「あなたはご自身が性的マイノリティ当事者だと思いますか」と質問しているが、当事者は普段から性的マイノリティ当事者であることを意識しているというよりは、普通の生活を送る中で、不都合に直面した時に自分がマイノリティだと感じるものだと思うので、自身が当事者だと思うかという質問で把握するのは難しいのではないか。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

① 過去に実施された調査の目的と調査手法

- ・ 当団体では、2016年に児童養護施設を対象とした調査を実施した。施設では男女別に分けられて対応されるケースが多く、LGBTのこどもが苦しんでいるという状況があると聞いていた。そのような状況も踏まえ、LGBTのこどもに対し施設職員がどのように対応しているのか、好事例を集めることが調査の目的だった。こどもに直接聞くことはできないので、施設職員を調査の対象とし、全国の児童養護施設にアンケート用紙を郵送する形で、調査を実施した。

- ・ また、2018年には先行調査となる2016年のアンケート調査を踏まえ、全国の児童養護施設を訪問し深掘りのヒアリング調査を実施するとともに、施設で過ごしたことがあるLGBT当事者や、児童養護施設で勤務するLGBT当事者に対するヒアリング調査も実施した。

② 調査を実施した際の、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法（設問・選択肢の作り方）と、その方法を選択した理由

- ・ 児童養護施設職員を対象とする調査であり、LGBT当事者へ対する調査ではない。ただし、調査では、「性自認・性的指向が「一般的」「典型的」な形とは違う「性的マイノリティの児童（もしくはそうだと推察される児童）」はいましたか」という表現を用いて質問した。かなりざっくりとした聞き方である。参考資料として、性的マイノリティの定義の説明も同封した。
- ・ 性的マイノリティであるかどうか、他者が判定するのは暴力的なことであるが、性的マイノリティの児童の数を集約することが目的ではないということ、施設職員が考えた限りの回答結果であり留意が必要ということを何度も注意書きとして書いた。施設職員には、どのようなケースだったかエピソードを書いてもらい、その情報をもとにケースの分類を行った。
- ・ 調査結果に対し、施設職員からそう見えただけで、本当はLGBTではないこどもも含まれているのではないかという意見をもらったが、この調査は、実態の数の集約が目的ではないので、そういったこどもが含まれていてもよく、エピソード・施設職員の対応を収集するものであるということを説明した。しかし、メディアで調査結果が取り上げられる際には、どうしても数値が見出しになってしまうので非常に悩ましかった。

③ 調査の実施・集計・分析に当たって、どのようなことに留意したか。

- ・ 自由回答の中には、差別的な表現も含まれていたが、報告書には、「回答内容のニュアンスを大切にするために残している」旨を記載した上で元の回答を活かす形で掲載した。
- ・ また、報告書をこどもが将来目にした時に、勝手に職員から報告されたと思わないか（アウトティングにつながるか）ということにも留意した。学識経験者からの助言も得て、個別の情報は文意が変わらない範囲での加工修正を行うとともに、加工修正した旨を報告書に記載した。
- ・ 当事者へのヒアリング調査では、言いたくないことは言わないでよいと予め伝えるのはもちろんのことだが、傷ついた経験を自分ではそう認識していないこともあることに留意が必要である。インタビューで経験を話す過程で、傷つき体験が出てくることもある。言いたくないのに全て話してしまうこともある。ヒアリングの際には、話した内容は、掲載前に取り下げできること、いつでも撤回できることを伝えている。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ トランスジェンダー男性とトランスジェンダー女性では、社会において感じる葛藤や、摩擦を感じる場面が異なると思う。同性カップルでも、女性同士のカップルと男性同士のカップルでは、直面する課題が異なる。例えば、女性同士のカップルは、経済的にもものすごく困窮している場合がある。以前のパートナーとの子供を産んでいてシングルマザーの貧困が2人分組み合わさっているような事例もある。

- ・ 一方で、男性同士のカップルの困難は、経済的な課題は少ないが、自分がゲイであることがばれると男の沽券に関わるというような思いを持っていることがあり、長年のパートナーを放って終活するといった事例に関わったことがある。そういった、男性、女性によっておかれている立場の違いから生じる課題を捉えられるような調査があるとよい。
- ・ 社会的養護に関する課題では、社会的養護出身ということアイデンティティとして持ち、出身者でNPOを立ち上げて発信活動をしている人もいる一方、社会的養護出身であることをアイデンティティにしておらず（したくもなく）、卒業した児童養護施設に全く連絡をとらない人、行方不明になる人もいる。そういった人たちのことも把握して、政策に反映してほしい。

以上

(12) 一般社団法人こどもまっぷ

| | |
|------|-----------------------|
| 実施日時 | 12月18日(水) 19:00～20:30 |
|------|-----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|--|------|-------------------------|
| 活動目的・活動内容 | こどもを持つ性的マイノリティの家族同士やアライでの交流会や、こどもを持ちたいと考える性的マイノリティ向けの情報提供を行っている。「LGBTQがこどもを持つ未来を当たり前を選択できる」社会を目指して、活動している。 | | |
| 所属人数(2024年度) | 運営メンバー9名、 賛助会員約300名 | 活動地域 | 東京、大阪を中心に全 国各地／オンライン |
| 活動参加者の主な属性 | こどもを持ちたいと考えている性的マイノリティ。特に女性が多い。 | | |

- ・ 「LGBTQがこどもを持つ未来を当たり前を選択できる」社会を目指し、2010年から活動している。東京・大阪を中心として活動しているが、全国から参加者が集まっており、団体として全国各地に出向くこともある。コロナ禍以降、オンラインでの活動も増加しており、全国の仲間とのつながりを作ることを大切にしている。当事者同士のつながりだけでなく、こどもも同士のつながりづくりも重要だと考えている。
- ・ 団体の主な活動として、第一に、こどもを持ちたいと思っている方に対する情報提供がある。性的マイノリティがこどもを産み育てたいという時にどうしたらよいか説明する初心者講座を10年以上行っている。講座では、産まない側の親と子の関係や現在の日本の生殖補助医療の現実や知識の共有、妊活前に考えておくべきことを整理したチェックリストなども提供している。その上で医療への橋渡しをするための個別のヒアリングをしている。
- ・ 2か月に1度「まっぷひろば」という名称で、当事者の家族やアライがつながる居場所づくりの活動を行っている。こどもがいる家族同士でのつながりを作り、こども同士もつながることのできる場として、ピクニックやクリスマス会など季節ごとのイベントを開催し、こどもの成長を見守りながら活動している。
- ・ 社会への働きかけという点では、理解を促進するためのメディア発信に取り組んでいる。自治体に対してファミリーシップ制度の導入の働きかけを行っているほか、国に対してこどもを育てたいと思っている性的マイノリティの女性当事者を生殖補助医療の対象に入れてもらえるよう働きかけを行っている。
- ・ 団体の所属人数は、運営メンバー9名、賛助会員は現在約300名である。賛助会員は、1年に1回更新のタイミングがあり、更新しない人が半分程度で、新規会員が100名以上増加するといった形で毎年入れ替わりがある。団体に対する問い合わせも増加しており、こどもが欲しいがどうしたらよいかといった相談が、以前は月に10件程度だったが、現在は1日に少なくとも2～3件、多い時は10件以上ある。国外からの問い合わせもある。
- ・ 活動参加者の主な属性は、シスジェンダー女性で、同性のパートナーとこどもを産み育てたいと考えている人が多い。最近では、選択的シングルの女性の問い合わせも増えている。
- ・ 活動の拠点は、東京・大阪である。2か月に一度の「まっぷひろば」は、主に東京・大阪で開催しているが、他のエリアで開催することもある。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 性的指向に関することでは、結婚するのが当たり前だという前提の設問や、子どもが欲しいと思うかどうかという設問は困る。設問の選択肢が、未婚・既婚の2つのみだと、パートナーがいることを回答できない。
- ・ また、性別の違和を感じる人にとっては、性別の選択肢が2択のみだと回答に困るということはあるだろう。
- ・ アイデンティティや性自認については、1つに特定できない人もいる。また、ライフコースの中で性自認が変わる方もいる。特定の時点で、今どうなのかということであれば答えられるが、アンケート調査の回答で認識のゆれは表しにくい。トランスジェンダーに限らず、性的指向に関しても、インタビュー調査で話を聞くと、パンセクシュアルなど、いろいろな言葉を使って説明する方が多くいる。
- ・ 同じ用語を使っているとしても、自身にとっての定義が人それぞれ異なっている場合もある。調査上での定義と自分が考えている定義が違うこともある。アイデンティティの揺らぎや、定義の揺れをカバーできるような工夫があるとよいだろう。具体的には、ノンバイナリーとXジェンダーの使い分けがある。Xジェンダーは日本で独特の呼び方だと思うが、当事者と関わる中では、自分はXジェンダーだという認識で用語にこだわっている人もいるようである。
- ・ パートナーがいなかったら同性愛者ではないという誤った認識があるケースがある。また、結婚している人が、同性愛者であることもある。同性愛者でも、友情結婚など、自身で選択して結婚している場合もある。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 性的マイノリティ当事者にヒアリング調査を行った時の経験として、インタビュー後に結果をまとめる段階で、「やっぱり使わないでほしい」と言われたことがあった。そのインタビューは、匿名の調査として行っていて、調査結果から個人が特定できるわけではなかった。匿名性が担保されていても、後から自分の回答を使ってほしくないと思うケースもある。
- ・ 別の調査で当事者からもらった意見として、事細かに質問されると、回答内容から個人が特定されるかもしれないと不安になることがあると聞いた。また、個人の特定につながらなくとも、長く詳細に答えること自体が負担になる場合もある。
- ・ 個人の特定を気にする当事者は多い。自分のアイデンティティや経験をオープンにしている人が少ないコミュニティなので、断片的な情報でも個人を特定されるおそれを感じやすく、答えること自体に不安を感じる。回答内容が最終的にどのように扱われるのかという見通しがあるとよいのではないか。
- ・ 当団体で「日本における性的マイノリティの出生・子育てに関する実態把握に関する調査」を実施した時に、心理的負担に配慮し、経済的な状況に関する質問はしないことにした。どのような経済状況で子どもを育てているかは重要な情報だが、デリケートな問題であり、回答することへの抵抗感もあると考え、当団体の調査では把握しないこととしている。

③ その他留意すべきこと

- ・ 調査の回答を後から使わないでほしいと思った時に、それを伝えられるよう連絡先を示すべきである。また、調査の意図や、調査結果がどういった施策の検討に活用されるのか、施策が今後どのような方向で進んでいくのかといったことについての説明がないと、調査協力者が自分の回答がいいように使われたと誤解してしまう可能性がある。
- ・ 公表できる情報はなるべく出してもらいたい。アンケートは分量が多くなるほど、回答者の負担となり、回答する時間を捻出するのが難しい人もいる。事前に調査目的や結果の活用方法などが明確に示されることで、その調査の重要性が回答者に伝わるのではないか。
- ・ 調査をして終わりにならないよう、調査結果の公表方法を明示し、調査に協力した方にどのように結果が還元されるのか示す必要がある。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」について、自分のアイデンティティがはっきり特定できない場合には、1つを選択することが難しい可能性がある。例えば、昔は異性を好きになったことがあるが現在は同性が好きという人が回答する場合に、世間的にはバイセクシュアルに分類されるかもしれないが、レズビアンを選ぶということもあるだろう。各項目に対して、自分がどのくらい当てはまるのか、◎○△で答える形式であれば回答できるだろう。もしくは、今の認識として近いものは何かという聞き方にするると答えやすくなる。過去も含めて聞いているのか今を指しているのかといった、時間軸についても示されているとよい。
- ・ 当団体でインタビュー調査を行った際には、ノンバイナリーやパンセクシュアルと答える人が多かった。性的指向に関して言えば、パンセクシュアルという認識の人は、「A. 直接的に尋ねる方法」の選択肢では回答が難しい可能性があり、どこまで細かく選択肢に上げるのか、検討する必要がある。自由回答欄やその他の欄を設けることについては、回答者目線で考えるとあった方がよいが、集計が難しくなる懸念がある。
- ・ 用語の定義が人によってずれているので、調査上での定義を示さないと人によって解釈が異なってしまうだろう。ゲイ、レズビアン、バイセクシュアルは分かりやすいが、シスジェンダー、トランスジェンダー、Xジェンダー、パンセクシュアルなどは、定義が人によって異なったり、誤認していたりして、調査側の意図と違う考えで回答されるケースがあるので、各用語の説明は必要なのではないか。今の調査例の説明よりは、「異性としか付き合ったことがない」「異性にだけ恋愛感情を持つ」などといったかみ砕いた説明があると回答のぶれは少なくなるのではないだろうか。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」の「性愛感情を抱く」という表現が抽象的なので、恋愛感情を指すのか、性行為を指すのか、交際経験か、何をもちて選択すればよいのか、専門家でも定義がぶれていると思うが、今回の調査をする上での定義は統一された方がよい。同性の相手との交際経験や、性行為をした経験があっても、自身を異性愛者と答える人はいる。反対に、同性愛者と答えても、結婚している場合もある。同性との交際経験の有無を聞く形式にすると、思いのほか多くの人々が当てはまるかもしれない。何を把握したいかによって、どのような定義にするべきかわ変わってくる。

- ・ 当事者でも用語が分からないこともある。選択肢に、該当するものがあるのに、その他に○をつけて回答する人が出てくる。その他に自由回答欄を設けるなどして、選択肢での回答とは別に、その人の考えを書くことのできる欄があるとよい。その他への回答が多くなると集計が難しくなるが、一方で、自分に当てはまる選択肢がないことへの心理的な負担を感じる方もいるため、書くことのできる欄があれば、より配慮がある調査になると思う。当団体の調査でも、セクシュアリティを尋ねると、フェムネコといった回答が来ることがある。コミュニティの中で使っている言葉で回答されるケースもある。
- ・ セクシュアリティごとに、回答傾向の違いを見たいのであれば、「A. 直接的に尋ねる方法」のように大まかな分類で聞くということでもよいと思う。当団体の調査を実施した際は、自身のアイデンティティに加え、現在どのような生活を送っているのかなど、細かい部分まで把握したかったため、アンケート調査とインタビュー調査を両方実施した。性的指向やジェンダーアイデンティティについての質問項目をどう設定すべきかは、その後の質問で何を聞くか、どう集計するかよって、変わってくる部分だろう。
- ・ 回答者の中には、文章を読み取れない方もいると思う。また、設問や選択肢が長くなるほど、回答に抵抗感を抱いたり、途中で回答をやめたりする可能性がある。答えやすさという観点では、「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」のようなかみ砕いた表現で説明した設問の方が、多くの方に答えてもらえるだろう。「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」の内容を聞いて、ジェンダーアイデンティティの「A. 3ステップ方式」の質問の回答結果と組み合わせて集計するというのも方法としては可能である。
- ・ 惹かれの対象ではなくアイデンティティを答えたいという考えの当事者がいるという見方については、アイデンティティを把握する必要性は調査の目的によって異なると考えられるので、一概に答えるのは難しい。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 「A. 3ステップ方式」の1問目では、出生時の戸籍上の性を聞いているので、回答しやすいと考えられる。設問に違和感を覚えることはなく、機微に実態を拾おうとしていると感じる。その上で、調査目的と照らして、本人が認識するアイデンティティのカテゴリー別に分析したいのであれば、カテゴリーを選択肢として聞くとよいし、設問を丁寧に作りたい場合には、ステップを踏んで集計していくのがよいのではないか。
- ・ 「B. 2ステップ方式」のように、「時により変化する」という選択肢が設けられているのは、自分は嬉しいと思った。
- ・ 「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」では、「あなたの性別」と聞いているが、今の自認の話なのか、生まれた時なのか分からない。また、「ご自身は性的マイノリティの当事者だと思いますか」という設問は、性自認についてなのか、性的指向の話なのか、補足説明が必要だと感じた。
- ・ アイデンティティを聞く際、大多数の人はいずれかの選択肢に当てはまり回答できるが、当てはまる選択肢がない人もいる。調査結果に基づいて施策が検討されるという場合に、そういった人の意見が反映されづらくなる懸念がある。カテゴリー化は、暴力的な行為であるという面がある。アイデンティティがはっきりしていて、いずれかの選択肢に当てはまる場合はよいが、当団体での調査で実施したインタビューを通して、女性で子育てしている人の自

認は多様であることが分かった。女性の回答者で、選択肢の中でうまく回答できないケースが多く出てくるだろう。実際に、HIVに関する調査でゲイ男性を対象とする場合、アイデンティティがはっきり出てくると思うが、子育てのテーマでの調査では、回答者の自認が多様であった。アイデンティティを聞くこと自体は問題ないが、選択肢で答えられない人がいることに留意が必要である。

- ・ アンケート調査とインタビュー調査を両方行うと、具体的な経験を聞き取ることができ、アイデンティティについての詳細が分かるだろう。定量調査だけでもある程度のことは分かるので、調査の目的次第で判断するとよい。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

① 過去に実施された調査の目的と調査手法

- ・ 当団体で、性的マイノリティで出産・子育てをしている人、あるいはこれからしようと考えている人を対象として、アンケート調査とインタビュー調査の両方を実施した。

② 調査を実施した際の、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法（設問・選択肢の作り方）と、その方法を選択した理由

- ・ アンケート調査では、ジェンダーアイデンティティについては3ステップ法、性的指向については、直接的に尋ねる方法で聞いた。以前は異なる聞き方で調査を実施していたが、有識者と共同研究をする機会があったことから、「A. 3ステップ方式」の採用に至った。
- ・ アンケート回答者のうち協力してもらえらる人に対してインタビュー調査も行った。アンケートでは選択肢で答えるので、はっきりとした回答結果が出るが、インタビュー調査でセクシュアリティや性自認について改めて聞くと、人によって、うまく定義ができない曖昧な状況であったり、変遷していたりすることが明らかになった。アンケートの選択式の設問の回答結果と、インタビューで聞く話にはずれがあった。男性と女性で傾向が異なり、男性ははっきりと自分は同性愛者であると認識している人が多く、バイセクシュアルと答えた方は少ないが、女性の場合は、自認が多様であり、様々な状況があった。
- ・ 性的指向についての設問では、「異性愛者／ゲイ・レズビアン・同性愛者／バイセクシュアル・両性愛者／アセクシュアル・無性愛者」を選択肢としたが、「その他」の自由記述欄にパンセクシュアルと答えた回答者が多くいたため、調査結果の集計時には、パンセクシュアルも項目として追加した。「その他」の選択肢には、ノンバイナリーや X ジェンダーなどと答えた回答者もいた。研究者は性自認と性的指向を分けて考えるが、性的指向を尋ねる設問で、性自認について回答されるケースもあった。

③ 調査の実施・集計・分析に当たって、どのようなことに留意したか。

- ・ 当団体の調査では性的指向についての設問はいわばおまけのような位置づけで、調査上注目しているのは、出生時に割り当てられた性別と、パートナーの有無・性別である。出産というテーマを扱っている以上、生殖という観点で、生まれた時に割り当てられた性別を聞いて、回答者自身は産む性なのか、産まない性なのかということにまず着目している。また、パートナーの有無、パートナーの性別も聞く必要があると考え、設問としている。なお、アセク

シユアルやアロマンティックは友情結婚されている方に多く、選択的シングルでもアセクシユアルに該当する人もいるが、本人にその自覚がない場合がある。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ 調査をするが何も施策が進まないというのは問題だと思うので、前向きに政策の検討を行っていくことを前提として調査を行ってほしい。困難を把握したいということであれば、性的マイノリティとそれ以外の人では、ライフイベントの経験の仕方が違うため、ライフイベントごとに法律で保護されていない部分について、抜き出して把握することのよい。就職、結婚、出産、育児などのライフイベントごとに焦点を絞るとよいのではないか。
- ・ 当事者が困難なことがあるか聞かれた時に、日常生活で困難を感じていないと回答する人が多いが、日常生活で意識していない、しようとしめない人が多いのだと考えている。ライフイベントごとに分けて考えてみると、困難なことはあるので、質問の仕方が重要である。
- ・ 当団体の調査では、誰と生活をしているのか、子育てを誰が手伝っているのか、親族関係がどうかなど、実態を詳細に把握し、こどもがどのような状況におかれているかを明らかにしていくことが必要だと考えて取り組んでいる。また、同性カップルで子育てをしている家庭がたくさんあるが、その世帯が、社会保険や、養子縁組、生殖補助医療のことなど、法律・医療の面で保護されていないという課題に問題意識を持っている。異性カップルと同じような保障を得られない状況について、把握していただきたい。
- ・ 国勢調査で、パートナーとの関係を配偶者として回答しても、その他の親族と集計されてしまうという問題がある。パートナーと一緒に子育てをしても、そのように集計されると、こどもとどのような関係なのか全く分からない状況になる。一つの家族であるということを回答できるようにしてほしい。
- ・ 同性婚の制度がないこと、特定生殖補助医療法案において、生殖補助医療の対象が法律婚をした夫婦のみに限定されようとしていることが課題だと考えている。法案が成立すると、同性カップルでの子育てがますます難しくなる。どのくらい同性カップルのニーズがあるか明らかにすることは重要である。ニーズがあるのに施策ができていないことを示す資料として、今後の調査が必要だと考えられる。
- ・ 同性婚を認めない規定は憲法違反とする高裁判決が出ている。今後最高裁判決が出れば、数年で法律を変えることになると思うが、同性婚が可能になった場合のことを想定して準備を行う必要があるだろう。子育てをしている同性カップルの親子関係がどうなるのか、同性のパートナーと養子縁組をしているカップルが、同性婚できるのかなど、検討すべきことが出てくる。そういったことを検討するためにも、現在どのくらいのカップルが養子縁組をして戸籍上の結びつきを作っているのかなど、調べる必要があるのではないか。

以上

(13) 一般社団法人ピンクドット沖縄

| | |
|------|-----------------------|
| 実施日時 | 12月26日(木) 10:00~11:30 |
|------|-----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|--|------|-----|
| 活動目的・活動内容 | 「すべての人が、自分らしく生きやすい社会を」という思いを持つ人やアライズとしてサポートする人が、ピンク色のものを身につけて集い、理解を深め、その思いを共有し、表現するイベント（ピンクドット沖縄）を年1回開催している。 | | |
| 所属人数（2024年度） | 7名（登記簿上の理事） | 活動地域 | 沖縄県 |
| 活動参加者の主な属性 | 理事にはいわゆるストレートのメンバーを含む。 ピンクドットの参加者は、全体の約8割が性的マイノリティ当事者。 | | |

- ・ 当団体は、性的マイノリティ当事者のサポートというよりは、性的マイノリティ当事者や関係者が参加することで、「すべての人が、自分らしく生きやすい社会を」という思いを共有して理解者を増やそうとしている。年間を通して継続的に活動しているわけではなく、年1回、ピンクドット沖縄というイベントを開催している。ピンクドットというイベント自体は2009年にシンガポールで始まったものである。
- ・ 最近ではこうした活動が認知されるようになり、企業から声が掛かることもある。担当者が協賛企業を訪問し、LGBTに関する講習やワークショップを行い、理解の普及に向けて活動している。
- ・ 那覇市や沖縄県と、条例制定のための意見交換会も実施している。
- ・ 団体の登記簿上は理事が7名おり、運営メンバーとして、その年のイベントのテーマや開催趣旨等を決めている。運営メンバーにはいわゆるストレートもいる。
- ・ イベントの参加者はほとんどが性的マイノリティ当事者である。2024年は12月8日に開催し、全体で約2,000人の参加者がいた。このうち約8割が性的マイノリティ当事者、残りの約2割が活動の理解者や協賛企業である。県外や海外からの参加者もいる。活動目的の一つに「すべての人が、自分らしく生きやすい社会を」と掲げており、LGBTに限らず広く捉えており、数人程度ではあるが、障害をお持ちの方にもイベントに参加していただいた。これらの方が性的マイノリティ当事者であるかどうかまでは把握していないが、思いを持って参加されているかもしれない。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 性的マイノリティ当事者が回答に困る設問としては、将来的なライフプランを聴取するものが挙げられる。性的マイノリティ当事者にとっては、自分も結婚を考えてよいのかという発想であるため、いきなり将来のライフプランについて聞かれると困惑するだろう。たとえ、結婚や子育てなどの願望が心の奥底にあったとしても、そもそも諦めている人もいる。相談窓口があることすら十分に周知されていないため、将来どのようなことをしたいかを突然聞

かれると、「自分が間違っているのだ」というマイナスな感情からスタートしてしまう。

- ・ また、恋愛に関することや、相手がいることを前提とした質問についても、当事者が回答に困ると考えられる。恋愛感情をそもそも持っていない人や、恋愛を諦めている人も多い。多くの人が無意識のうちに異性愛を前提として話してしまうことがよくあると考えられるが、当事者は傷つく。例えば、女性に対して「彼氏」がいるかと聞くのではなく、なるべく「パートナー」の方がいるかといった表現を意識して使ってほしい。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 過去のトラウマ体験など、辛かったことがあるかをわざわざ聞く必要はない。ただし、トラウマ経験をはじめ、当事者の困り事を調査する必要もある。世の中で起きてしまっているマイナスのことに對して、処罰を与えたり何かを禁止したりすることによって解決できるのは国や行政だけだと当団体としては考えている。今後実施する調査の目的が理解の普及ではなく、条例制定や法整備に向けたものであれば、過去に困ったことについても聴取してよいのではないかと考える。そのための調査であることが事前に分かっているならば、自分から率先して話してくれる人もいるかもしれない。
- ・ なお、理解を広げるといふ建付けではパフォーマンスのように受け取られる可能性もあり、なかなか調査に協力してもらえないのではないかと。パートナーシップ宣誓制度も普及してきたが、同性婚を求める性的マイノリティ当事者に対して「法律婚ではなくパートナーシップで十分なのではないか」という考え方が社会で広まっており、性的マイノリティ当事者にとってマイナスな影響も出始めている。
- ・ パートナーとの性行為のようなリアルな話は聴取しない方がよいが、調査によっては聴取する必要がある場合もあるだろう。その際、質問の目的がきちんと伝わり、回答できる人は回答するが、回答したくなければしなくてもよい、という形であれば問題ない。違和感を抱き、自分に嘘をつきながら行為をしていたという性的マイノリティ当事者の方が多いが、それは苦い思い出ではなく、自分について気づくきっかけになったという場合が多い。そのため、突然質問するのではなく、性行為に関する質問が含まれることが事前に分かっているならば許容できる。
- ・ ホモやレズといった表現は使用してはならない。特に、レズは依然として使用されることが多い。話し言葉でも注意してほしい。
- ・ （ヒアリング調査については）慎重に探りながら調査されるとかえって傷つくため、あまり気にせずに関わってほしい。特に行政が団体に対して調査をする場合、調査の際にあまりかしこまる必要はない。性的マイノリティ当事者にとっては、行政が取組を進めていることが分かるだけでもありがたいと感じるため、明らかに無礼な質問でなければ気にする必要はない。
- ・ 対面で話を聞くのであれば、相手の性自認を先に確認した上で進めた方がよい。対面で話を聞く場合で、相手がトランスジェンダーである場合は、その方の過去の性別や過去の名前を不意に出してしまう瞬間がある。これはモラルやマナーの観点では問題があるものの、悪いことをしているわけではないため、非常に申し訳なさそうに謝罪すると、かえって負担になってしまう。

- ・ 対面ヒアリングにおいて最初に性自認を確認することについて、団体によっても見解が異なるかもしれないが、基本的には相手の性自認に合わせて質問すべきだと考える。例えば見た目から男性であると決めつけるのではなく、自己紹介の際に相手の性自認をまずは確認し、性自認が女性であれば、女性として質問するのがよい。同性愛や異性愛は体の性ではなく性自認に基づいて判断するものだとすると、例えばレズビアンのように見えるカップルのうち、一方の性自認が男性であれば、本人たちは異性愛カップルとして付き合っていることになる。
- ・ こうした状況を踏まえずに間違った質問をしたとしても、相手は気にしないかもしれないが、性自認をまず把握してからそれ以降の質問で聞き方を工夫できれば、性的マイノリティに関する分野のことをよく理解して調査に挑んでいることが相手にも伝わり、協力的になってもらえる可能性がある。なお、当団体では、紙媒体ではなく直接対面で話す際には、「自分はストレートなのですが」等と自分の性的指向をまずは開示するようにしている。
- ・ スクリーニング調査でどこまで聴取するかにもよるが、性自認に関する情報は事前にある程度持っておいて悪くない。

③ その他留意すべきこと

- ・ 調査結果の公開前には、事前に調査対象者への確認があるとよい。
- ・ 当団体はイベントを実施する側であるため、カミングアウトをしていない人との関わりは少なく、性的マイノリティ当事者であることや名前を公開している、あるいは公開しても構わないという人との関わりが多い。ただ、そうでない人にとっても、調査の趣旨を事前に説明し、同意を得た上で調査に参加してもらうのであれば、それほど不安に感じるような質問はないと考える。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 何か悪いことを聞くわけではないため、「B. 二段階の設問を設ける方法」のように異性愛者かどうかによって設問を二段階に分ける必要はなく、「A. 直接的に尋ねる方法」のように直接的に聞けばよいと考える。特に、性的マイノリティ当事者を対象に調査するのであれば、わざわざ限定せずに「A. 直接的に尋ねる方法」の方法で尋ねればよい。ただし、性的マイノリティ当事者以外も対象とする調査であることを重視するのであれば、「B. 二段階の設問を設ける方法」のように最初に同性愛か異性愛かで切り分けるということでも良い。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」の選択肢については、かなり詳細に記載されているという印象である。選択肢5で「決めたくない・決めていない」が設けられていることに驚いた。性の在り方を決めていない前提で聴取する選択肢が多い中、このような選択肢があることでクィアの方も回答することができる。
- ・ 改まって「同性愛」や「性的マイノリティ」といった表現をされると、急に重く感じられてしまう。そのような表現に対して違和感を抱く人や、自分たちが悪い立場にいるのではないかと捉える人もいるとのことである。性的マイノリティ当事者からすると、自分たちの性の在り方が少数派であると分かっているが、「性的マイノリティ」の括りの中に入っているつもりはない。「性的マイノリティだと思っていますか」とあえて改まる必要はなく、スクリ

ーニング調査の際には「これはLGBTQに関する調査です。あなたは当事者ですか」というくらいラフに聴取するのがよいのではないかと。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 団体内でも意見が割れたが、相手がトランスジェンダーの方だと分かった状態で質問する場合など、誰を調査対象とするかによっても変わるだろう。相手がどのような性の在り方であるか分からない場合は、「A. 3ステップ方式」しかないだろう。
- ・ 一方、トランスジェンダーだと分かっている方について聞くのであれば、「B. 2ステップ方式」か「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」の方法がよい。トランスジェンダーを対象とする場合、「A. 3ステップ方式」の2段階目で、今性自認に違和感があるかどうかを直接聞く必要性がない。
- ・ また、何をもちいて違和感というのかも難しい。例えば、自分はゲイであると認識していたとしても、性自認に違和感があるかといえば、あるかもしれないという人もいるだろう。戸籍性は男性で性自認は女性といった形で0か100かで聴取すると、間の40や50を否定することになってしまう。当団体は、間の20や40などあってもよいという考えで活動しており、男性が好きか、女性が好きかという考え方は普段からしていない。なぜ男性か女性かで聞く必要があるのか疑問に感じるが、調査で必要なのであれば仕方ない。
- ・ 「A. 3ステップ方式」の2段階目の時点を1段階目（出生時）ではない状態とし、出生時の性別と同じだとはっきりとは言えない場合に選択肢2や3を選択できるようにすると、その時どきで揺れ動くバイセクシャルの方なども入ってくるだろう。対象者が一気に増えても問題ないのであれば、過去も含めて性別違和を感じたことがあるかと幅広く聞くことで、「まああるかもしれないな」という人も入ってくるだろう。そのような人は「B. 2ステップ方式」の2ステップ方式では答えられないと思われる。また、分からないこと自体も違和感であるため、「わからない」という選択肢も設けるとよいだろう。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

- ・ 当団体では、調査は実施したことがない。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ 当事者の困難な実態を把握する場合、アンケート調査だけでなくヒアリング調査も実施し、性的マイノリティ当事者と直接話した方がよい。ただ、調査協力者を集めるのは非常に難しいため、性的マイノリティ当事者とつながりたいのであれば、国から直接アプローチするのではなく、関連団体を通して紹介してもらうのがよいだろう。それでも数としてはあまり多くは集まらないと思われる。
- ・ 性的マイノリティは当事者同士のコミュニティが強いため、カミングアウトをして活動している方やインフルエンサーの方を軸にアプローチし、団体や個人につながることも考えられる。あるいは、「このような方を探しており、協力してほしい」という内容をSNSで発信することも一つの手段として考えられる。関連する活動をしている方が多く協賛してくれると、その方々を起点にまたネットワークが広がるだろう。

- ・ 性的マイノリティ当事者の困難を把握することに焦点を絞ると、相談窓口を担っている場所に対し、普段どのような相談がきているか、どのような問い合わせが多くくるかを直接聞くことが早いだろう。例えば、東京都では東京いのちの電話が相談対応を行っているため、差別を受けた経験や心の病を持っている方等の話が集まっているだろう。ただし、相談したり窓口に来たりする当事者は非常に少ないため、相談窓口を通して把握できるのは全事例の1割程度に過ぎないという感覚であり、実際にはその10倍以上の性的マイノリティ当事者がいると思われる。
- ・ 高齢の方は特に、カミングアウトできないまま今に至るといふ方も多いと考えられるが、介護を受ける年齢になってきており、介護施設の被介護者の中にも性的マイノリティ当事者がいらっしゃることも考えられる。ただでさえ生きづらい社会の中で性的マイノリティに関する困難も重なると、さらに重い課題を抱えている可能性が高いだろう。このように、性的マイノリティに関する問題に加えて介護や障害などにも目を向けると、対象者はさらに増えるだろう。なお、同じ沖縄県内には高齢の性的マイノリティ当事者を支援する団体があり、国としてもそのような団体とうまく連携してほしいと思う。普段触れている困難は表面上でしかなく、さらに深い、見えない困難や問題もあると考えられる。
- ・ 想定される調査項目については、「性的マイノリティ当事者への差別を無くしましょう」という話なのか、「性的マイノリティ当事者の生活水準を上げましょう」という話なのかによって全く異なる。調査のゴール設定が変わると調査対象も変わってくる。
- ・ 昨今は性的マイノリティ当事者についてことさらに取り上げられ、性的マイノリティ当事者が権利を振りかざしているという見え方になってしまっている。性的マイノリティ非当事者にも目を向け、国として間違った方向に向かわないように留意してほしい。
- ・ 企業はレインボー宣言やフレンドリー宣言などを行うこともあるが、現状は罰則がないため取組を実施できていない場合が多く、性的マイノリティ当事者としてもまだ理解が得られると思えずにカミングアウトできていない状況もある。しかし、しっかりと取り組んでいる企業や団体に対しては、ビジネス上もメリットがあるという仕組みを作る必要がある。当団体は沖縄県とともに、認定を受けた企業が助成や加点を受けられるように、認定制度の整備を検討している。例えば、トイレの改修工事に際して行政から半額程度助成してもらえといった仕組みができれば、トイレや更衣室の整備にまで踏み込めるようになり、ゆくゆくは社会全体も変わっていくだろう。
- ・ 罰則のあるルールがなければ、事件が起きても法整備がないため裁くことができないという事態が起きてしまう。社会の要請がなければ法律も変わっていかないため、まずは自分たちの周りや普段の生活から変えていく必要がある。行政にも動いてほしいと考えており、例えば那覇市に苦情を出せば那覇市から指導が入るなど、市内に籍を置いている会社については行政が主導して行くことができる。LGBTフレンドリーな行動をしなければ企業にとってリスクがあることが基本的な仕組みとして整備されるとよい。
- ・ また、学校や教育分野において、文部科学省の学習指導要領が変わらなければ、性の在り方について学校教育で教えることができない。現に悩んでいる子どもが目の前にいるにもかかわらず、那覇市や沖縄県だけでは変えることができないため、国の学習指導要領改訂を望む。

- ・ 長い時間をかけて取り組んでいくものであると認識している。当団体が那覇市や沖縄県とともに条例を策定するのにも3年程度かかっているため、国ではさらに時間が掛かるであろうし、5年後、10年後と社会がさらに変化する中での難しさもあるだろう。
- ・ 自治体が調査を行い、自治体内の性的マイノリティ当事者の困り事を定量的に把握していく必要性は大きい。行政が取り組んでいることを見せることが大事である。2024年12月に開催した当団体のイベントでは、行政担当者に初めて登壇いただいたが、行政の取組が性的マイノリティ当事者にまで届いていないことが実感された。例えば、パートナーシップ宣誓制度を導入している自治体は全国的に増えてきているが、実際にパートナーシップの認定を受けて生活している性的マイノリティ当事者の方がどのくらいいるかは公表されていない。そのため、当団体のイベントにおいて行政担当者に登壇いただいた意味は大きかった。もっと大々的に調査を行い、国や自治体はこんなことをしようとしている、ということが伝われば社会が変わっていくだろう。
- ・ 法律が変わるのは時間が掛かると承知しているが、国が毎年同じ質問を繰り返して定点観測を行い、変化が可視化されれば、「国がこのような取組をしているため、みなさんも協力をお願いします」と団体としても発信できるようになると考えられる。今回のヒアリングでは謝礼もあるが、普段から無償で活動しており、当団体としてもできることは何でも力になりたい。かしこまらずに、「少し困っているためこのような人とつなげてほしい」といった形で相談をしてもらいたい。

以上

(14) 特定非営利活動法人レインボーコミュニティ coLLabo

| | |
|------|---------------------|
| 実施日時 | 1月9日(木) 17:00~18:30 |
|------|---------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|---|------|---------|
| 活動目的・活動内容 | レズビアンやセクシュアルマイノリティ女性が自信を持ち、アイデンティティを隠すことなく生きていくことのできる社会を目的としている。当事者同士のピアサポート、相談対応、啓発活動、調査、ネットワーク構築等の活動を行っている。 | | |
| 所属人数(2024年度) | 13名(正会員・役員) | 活動地域 | 都内近郊が中心 |
| 活動参加者の主な属性 | レズビアンやバイセクシュアル女性が多いが、性自認が揺れている人、クエスチョニング、Xジェンダー、性自認は女性で男性に見える服装を好む人、性別移行前のトランスジェンダー男性など様々な属性が参加している。 | | |

- ・ 当事者同士のピアサポート、当事者からの相談対応、講演等の啓発活動等を行っている。当事者ニーズの把握を目的とした調査を行うこともあり、結果を基にネットワーク構築などを行っている。例えば、医師に対してセクシュアルマイノリティ女性のニーズに合った診療をしてもらえるよう啓発活動を行うこともある。社会を変えるためにどのような社会資源が必要かを考え、また実際に作っていくことが活動の柱になっている。
- ・ 以前はアイデンティティを隠さなければいけないという閉塞感に関する支援が大きかったが、時代が変わっており、現在は、社会において認知される中でどのように自尊心を持つかというフェーズの支援に変わってきている。
- ・ 「LGBT」という言葉は知られているが当事者からロールモデルがないという声があった。そこで、多様な女性たちのリアルなライフストーリーを発信するみらいふ Web を立ち上げ、様々なセクシュアルマイノリティ女性の姿をホームページで公開している。
- ・ 所属人数は、正会員と役員を併せて13名である。賛助会員や一時的に関わる人など、活動に参加する人数はさらに多い。
- ・ 活動地域は都内近郊が主だが、厳密に絞ってはいない。オンラインの活動では全国が対象である。講演で神奈川県や千葉県に行くこともあり、各地のプライドパレードに参加するために出張も行う。
- ・ スタッフにはレズビアンやバイセクシュアル女性を自認する者が多い。そのほか、性自認が揺れている人やジェンダー・セクシュアルアイデンティティを決めていない・探索中であるクエスチョニングやXジェンダー、割り当てられた性別は女性で性自認も女性だが男性に見えるファッションを好む人、性別移行前のトランスジェンダー男性など様々な属性が参加している。また、中国から来た人とも連携するなど多様性は高まっている。
- ・ 相談員は、全員が臨床心理士・公認心理師・社会福祉士・精神保健福祉士等の資格を取得している。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 当事者を対象にした調査は、支援団体や研究者が実施した、限られたものしか思いつかない。調査の数が少ないため、当事者としては、せつかく声を聞き、活かしてくれる機会があるのであれば、協力したいという思いである。そのような構造にも問題があるかもしれないが、それほど当事者の存在が無いことにされてきたということである。
- ・ 心理的負担も違和感も数多く感じたことがあるが、余りに多くて覚えていない。気にしてられないほど、大変ストレスフルである。マジョリティとの違いを自分が劣等であるかのように感じてしまいやすい。男女二元論や異性愛中心主義的な考え方に基づく設問、伝統的・保守的な家父長制の名残がある男女役割分業が語られている設問では、違和感を大きく感じている。
- ・ 性別欄を「男性・女性・その他」としているものは、「性別には男性・女性以外のものがあるらしい」と聞いて乱暴に「その他」を設けたという印象を受け、当事者に関して誤った認識がされていると感じる。せめて「回答しない」があると良いという人もいる。自分に当てはまる選択肢が無いことが、一番違和感や心理的負担があり、回答にも困る。アセクシュアルやアロマンティックの方の存在が前提にされていない調査も多い。
- ・ 「子どもが欲しいですか」と聞かれたことがあるが、子どもが欲しくても、男女のカップルのような出産はできないため、違和感を覚えた。聞いた人には悪意が無かったかもしれないが、このようなマイクロアグレッションで困ったことがある。
- ・ LGBT という言葉は認知されてきたが、トランス女性やゲイ男性がイメージされやすく、一部の属性のみを念頭に置いて話されることがあると感じる。働き方に関する調査でも、男性が念頭に置かれ、独身女性がどのように働いてキャリアを築いていくかという視点が抜けていると感じたことがある。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 問う意義が分からない設問や、プライベートに立ち入るような設問に回答する際は負担を感じるが、同じ人でも、コンプレックスやトラウマの存在、問われる時期によっても、負担の感じ方が異なる。例えば、自身の経験で言うと、収入がピークだった時は収入について問われても負担を感じなかったが、半分程度になった現在では、回答にためらいを持ち、このデータをどう使うのだらうと考えてしまった。
- ・ 理解増進法の建付けにも懸念がある。今後、理解のためという趣旨のもとに調査が行われたとして、その調査の中でプライベートについて回答するのは抵抗がある。何のために個人的な意識や態度を表現しなければいけないのか考えられる。求めているのは困難への手当てや施策であり、興味本位と感じられる質問や、施策に結びつけることを考えずに聞いていると感じる調査は、回答損のように感じる。
- ・ 理解増進法の施行前から、「LGBTQ についてどのようなイメージを持っているか」という調査があった。「女性のような男性を見て不快に思いますか」「同性間の恋愛についておかしいと思いますか」など、不快やおかしいことを前提とした設問であり、差別が内包されている。これでは、回答者は「性的マイノリティ非当事者は不快に感じてよいものなのだ」と思って

しまい、当事者は心理的負担を感じる。どうしても聞かなければいけないのであれば、「異性間の恋愛は不快に感じる」なども加え、バランスのとれた調査項目であるとよい。

- ・ ネガティブな設問について、全てのセクシュアリティを同列に設問に入れるか、せめて「戸惑うか」という表現であれば理解できる人もいるかもしれない。異性愛者でシスジェンダーの人が戸惑うことは、受け止めとしてあり得ることを前提に、それであればどうしたらよいのか、回答者も考えさせられるような設問にしてほしい。
- ・ SOGI が異なっても対等であるという前提の設問であることが期待される。以前、民族的なマイノリティの方から、「配慮」や「支援」という言葉について、「自分たちは支援されないといけない存在なのか」と指摘されたことがある。場面によって異なる言葉やスタンスで問いかけられないかと思う。
- ・ 調査結果の活用方法が分からないと、何のための設問なのか疑問を感じる。回答することで、自分たちの困難が解消しそうと感じられるよう、希望が持てるような聞き方をすれば、心理的負担も少なくなるだろう。
- ・ 異性愛者でシスジェンダーの人に聞く場合とそうでない場合では適切な聞き方（アンケートの設問の作り方等）が異なる。不特定多数に聞く際は難しいが、最低限、様々な人がいることを想定してほしい。また、思い込みを取り払ってほしい。調査対象者として「LGBT」を念頭に置くのではなく、「異性愛者でシスジェンダーではない方」と捉えて設問を作ったほうが、幅広い声が得られるだろう。

③ その他留意すべきこと

- ・ 当事者だからと言って全ての当事者の実態を分かっているわけではない。当団体としても、身近な当事者の声から広く声を聞き、活動を重ねてきている。
- ・ 報告書がどういう目的で何のためのものなのか、伝わるような調査であってほしい。例えば、埼玉県「多様性を尊重する共生社会づくりに関する調査」報告書では、性的マイノリティ当事者と非当事者に分けて延々と比較している。その比較には何の意味があるのか、数字の違いが何を意味するのかなどを回答者に還元してほしい。理解を増進したいならば大事なことである。
- ・ 若年層や 40 代で、身近な人にはカミングアウトしているという人が増えてきた。一方で、職場には言えない人が多い。職場では我慢すればよいと言うが、本当は自分らしく、自分の生き方を会社に伝えて働きたいという気持ちも持っている。調査をどのように役立てるか明確にして、問題があるところにアプローチしてほしい。
- ・ 自身はカミングアウトしてしばらく経つため、回答した情報の取扱いについて大きな不安を感じることは無いが、中には不安に思う人はいるだろう。誰にもカミングアウトせず、異性と結婚して子どもをもうけ、同性愛者として生きる人生は考えていないが、調査への回答では自分の気持ちに正直にありたいという人もいる。また、経済的理由で男性と結婚している、40～50 代のレズビアン女性も地方部には多い。そのような人々も安心して正直に答えてもらえるような表現があるとよい。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 当団体ではこれまで、性的指向とジェンダーアイデンティティを分けて把握したことが無かったが、性的指向の把握は意外と難しいと感じる。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」について、「性愛感情」は恋愛感情と性的な惹かれをまとめた表現だと思うが、人によっては意味が分からないだろう。
- ・ 性的な惹かれと恋愛感情は全く異なるものである。例えば、「A. 直接的に尋ねる方法」では、性的には女性に惹かれるが恋愛対象は男性という人や、恋愛的にはレズビアンだが性的にはバイセクシュアルという人などが、答えづらいだろう。アセクシュアルやアロマンティックの方もそれぞれいる。MSMのようにゲイとは認識していない人や、結婚している人などはどのように回答するのか。尋ねる側の期待と本人の認識が多様になりそうである。
- ・ 当団体の関わるセクシュアルマイノリティ女性では、近年パンセクシュアルと自認する人が増えている。パンセクシュアルの人の中には、調査でバイセクシュアルと回答する人もいれば、バイセクシュアルとは異なると捉えている人もおり、一様ではない。アロマンティックとアセクシュアルも異なるため、「A. 直接的に尋ねる方法」の「アセクシュアル・無性愛者」だけでは答えにくい人がいるだろう。
- ・ 「答えたくない」という選択肢は必要だと思うが、基礎的な属性を表す設問に答えないことで、その他の設問への回答もはじかれてしまうのは残念であり、悩ましい。
- ・ 比較的良いと思ったのは「B. 二段階の設問を設ける方法」である。無性愛、アセクシュアルの選択肢が無いという問題はありますが、シスジェンダー・ヘテロセクシュアルであるかどうか先に尋ねたほうが答えやすいだろう。
- ・ また、「B. 二段階の設問を設ける方法」は、恋愛感情と性的な惹かれを併記している点が「性愛感情」と書くよりも分かりやすく良い。ただし、100%同性愛でなく70%同性愛という人の中には、ゲイやレズビアンと思うケースやバイセクシュアルと自認するケースがあり、客観的に捉えようがない世界である。同性愛と両性愛を分けて分析しなければいけないのはどのような場面なのだろうと思う。また、パンセクシュアルとバイセクシュアルが同じ状況にあるととらえてよいのかという問題は、「A. 直接的に尋ねる方法」と同様に生じる。
- ・ 「C. 恋愛対象・性的な惹かれの対象を尋ねる方法」の選択肢にある異性・同性は、戸籍性がジェンダーアイデンティティのどちらを指すのか。トランスジェンダーの方などの回答が不可視化されてしまうのではないかという問題のほか、回答者の認識が様々になってしまう懸念があり難しいと感じる。なお同性愛は、以前は same sexと言われていたが、いつしか same gender と呼ばれるようになっている。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 「A. 3ステップ方式」は自分の性自認についての自由記載欄があり、多様な在り様を書くことができることが良い。また、2ステップ目で出生時に割り当てられた性別と現在の性別について、「同性」「異性」という言葉を使わずに尋ねているため、もっとも良い聞き方だと思う。当団体の調査でも、同様の設問を設けている。ただし、問54の「今のご自身の性別を、出生時の性別と同じだととらえていますか」という設問文は、同じであることが前提だと伝

わってしまう。また、「今の認識」という表現は、性自認が流動的な人を想定しているのだと思うが、回答者は難しいと感じるだろう。

- ・ 「B. 2ステップ方式」は幅広い在り様が考えられた選択肢の設定ではあるが、選択肢として単純化されていると、そこに当てはまらない人の疎外感が大きくなってしまうため、自由記載欄を設けた方が回答者に負荷がかかりにくいだろう。問1の選択肢に「その他（回答しない等）」とあるが、「その他」と「回答しない」では意味が異なる。また、問2の設問文には違和感が無いが、選択肢の「中間」「両方」といった表現について、Xジェンダーやノンバイナリーの当事者がどのように感じるか気になる。設問から、それぞれの当事者の人数を把握しようという意図が見えるが、複雑な集計になりそうである。
- ・ 「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」は、(3)に「その他」があるため答えやすいと思うが、(2)の「あなたご自身が性的マイノリティの当事者だと思いますか」という設問について、自分を当事者だと考えていなくとも、シスジェンダー以外の性別を認識している人もいるため、難しい。「B. 2ステップ方式」より丁寧であると感じるが、「性的マイノリティ」という言葉に不快感を持つ人が無回答になってしまうことや、(3)はレズビアンやトランスジェンダー女性などの存在が無視されてしまうことが懸念される。
- ・ 令和元年度「職場におけるダイバーシティ推進事業」（厚生労働省）のアンケート調査結果を見た際、FtXの方の年収が低いことや、MtFの方の最終学歴が低いというデータが印象に残った。このような属性別の困難を可視化することが理想的だと思う。
- ・ 自由記載欄における多様な回答が、集計において恣意的にまとめられることへの心配はある。例えば、バイセクシュアルとパンセクシュアルは異なるという認知が広まってきたが、同じという認識によりまとめて集計されてしまうことに懸念を持っている。
- ・ 当団体では、性と生殖の平等について明らかにするために、性的マイノリティ女性に限らず、出生時の性別が女性である人を中心とした調査を行っている。出生時の性別が女性で、現在も同じ性自認であり、男性と恋愛するという人は、傍から見ると異性愛者だと思うが、それでも自分を表す言葉が分からない、決めていないという人がおり、グラデーションがある。性的少数者が実態としてどれくらいいるのかを把握するための調査か、あるいはある程度いることを前提として困難や生活の様式についての調査を行うのかという点でも、回答をまとめることの意義は異なると思う。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

① 過去に実施された調査の目的と調査手法

- ・ 2012年にレズビアンとセクシュアルマイノリティ女性を対象に、セクシュアリティに向き合い自己受容するプロセスや、ライフイベントについて聞いた「レズビアンライフサポートプロジェクトアンケート」、2017年度にはかかりやすいクリニックを作るための「婦人科アンケート」、2018年度には異性愛女性も含めて比較することを目的に、「婦人科・乳腺科アンケート」を実施した。ただし、いずれも研究としての水準を保っているものではない。

② 調査を実施した際の、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法（設問・選択肢の作り方）と、その方法を選択した理由

- ・ 性的マイノリティ女性を対象とした調査であり、当初の選択肢は「レズビアン」「バイセクシュアル」「FtX」であった。その後「FtM」「MtF」「迷っている」を追加するなど、選択肢を都度工夫し、調査目的にも合わせて変えてきた。
- ・ 現在、「女性の健康と日常生活のアンケート」をオンラインで実施している。性的マイノリティのアイデンティティを持つ人に限定しておらず、3ステップ方式で性自認を聞き、性的指向についてはヘテロセクシュアルと異性愛者に加え、既往研究などでの割合が多い順にアイデンティティを表す言葉をピックアップして選択肢に入れている。
- ・ 調査設計に当たっては現場や研究者にアドバイスをもらい、先行研究もいくつか参照した。今回の「女性の健康と日常生活のアンケート」では、ジェンダーアイデンティティを一つの柱としつつ、アイデンティティの持ち方や、性行動・恋愛感情の経験についても併せて聞いている。レズビアン女性の中でも多様な経験があることを明らかにするほか、女性が好きな女性でもレズビアンと名乗らない人がどのようなアイデンティティを持っているのかを把握したいと考えている。MSM（Men who have sex with men、男性間性交渉者）の方のように行動とアイデンティティが違う人もおり、女性はさらに多様性があるという実感を持っている。このような仮説を検証したいと考えている。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ どの分野においても、当事者の困難等を把握するための調査は足りていないと考える。
- ・ 自身は地方出身だが、地方では生きづらく、自分と同じような人に出会いにくいということで上京してきた。地方の状態を把握できるような調査があると、理解増進につながるのではないか。
- ・ 福祉分野では、家父長制的で、男性と女性を明確に分ける価値観が残っている。性的マイノリティの福祉施設等職員が、福祉分野の価値観がなじまずに離れていくということも聞く。
- ・ こどもを持ちたいという性的マイノリティの方も増えていると聞くと、結婚制度が無い現状でどのようにこどもをもうけるかという点も含め、ニーズが満たされていないと感じる。
- ・ 性的マイノリティには貧困層が多い可能性があり、貧困層の困難も取り上げてほしい。
- ・ 特に性的マイノリティ女性をテーマとした調査を重点的に行ってほしい。性的マイノリティ男性はHIVに関する研究もあって取り上げられてきたという印象があるが、性的マイノリティ女性に関する調査は足りていない。例えば、女性同士という点での経済・貧困の問題を調査してほしい。また、当団体が小さいサンプルサイズでしか調査できていない、婦人科・乳腺科などの医療との連携の問題も取り上げる必要がある。
- ・ 就労に関して、性的マイノリティの独身女性がどのようにキャリアを築くかという点が考慮されていないと感じる。「女性活躍推進」はこどもを持つ女性を対象としており、セクシュアルマイノリティ女性は疎外感を感じやすい。一方で、社会の中ではこどもを持つであろう存在として見られ、違和感がある。
- ・ 精神科領域や、単身女性の高齢者の問題が知られてきており、高齢の視点でも調査されるとよい。また、高齢者の性的マイノリティは、カミングアウトしないことで存在がさらに不可視化されている。

- ・ 究極の目標は、マイノリティとマジョリティが平等であることである。同性婚の裁判で、判決文を見て違和感を覚えた。「同性婚を法律で認めるべきか」、「同性カップルへの法的保障は認められるべきか」といった項目に関する調査結果が示されていたが、「同性婚」と「法的保障」の違いがよく分からずに回答している人も多いだろう。それでも「法的保障が認められるべき」に賛成する割合より「同性婚を法律で認めるべき」に賛成する割合が低かったため、昨年、社会的承認が十分でないという判決が出た。内面化されたホモフォビアなど、様々な先入観がある中で回答している状況であり、困難など無いと思いついでいる人に回答してもらっても、困難が無いことにされてしまう。このように、ニーズを掘り起こしづらい状況であることを踏まえた政策提言に向かう調査であってほしい。
- ・ 同性婚ができないならば、「同性愛のカップルで生きていきたい人」「異性愛のカップルで生きていきたい人」「どちらでもよい人」「カップルで生きていきたいと思わない人」など、他にシンプルに人口を大きく分けられる言葉は無いのかと日々思っている。
- ・ 自身は職場でオープンにしているが、性的マイノリティ当事者であることを伝えたところで「なぜこの人はこのようなことを言うのだろう」と思われ、話が止まってしまう、困難を抱えていることまでは理解してもらえない。一方で、当事者の立場では、自分からは困っていると言出しにくい。助けを求めなければいけない存在だということは、信頼関係が深まらなければ伝えづらい。調査をすることにより、「多様だからそれでいい」で終わらない社会になるとよい。「多様性があるね」だけで終わってしまえば、男女共同参画の分野で「今はもう男女平等だよ」と不平等を不可視化されたときと同じように、もやっと感じる。その「もやっと」を少しでも皆で解消していけるとよい。
- ・ 国が調査を実施すると、自治体はそれに倣っていくため、この調査研究は重要である。コミュニティに潜入するということだけでなく、多様な当事者層の声をこれからも聴き続けていただきたい。性的マイノリティ当事者を調査設計の段階で数名入れていただくような仕組みも検討いただきたい。
- ・ SOGI に関する調査だけでなく、すべての調査で性別の聞き方が3ステップ方式になるとよいが、現状では統一されていない。

以上

(15) 一般社団法人ここいろ hiroshima

| | |
|------|----------------------|
| 実施日時 | 1月10日(金) 13:30~15:00 |
|------|----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|------------------------------|------|---------|
| 活動目的・活動内容 | 居場所づくり/相談事業/講演等啓発活動 | | |
| 所属人数(2024年度) | 共同代表2名、理事 3名 | 活動地域 | 中国・四国地方 |
| 活動参加者の主な属性 | LGBTQ+やLGBTQ+かもしれない子どもとその保護者 | | |

- ・ 当団体は、「10年先を想像でき、希望をもてる社会をつくる」ことをビジョンに掲げ、子どもたちが自分の少し先の未来に希望を持つことができ、子どもたちに関わる大人も子どもたちの成長を安心して見守ることができる社会の実現に向けて活動している。
- ・ 団体を設立した経緯として、当団体の代表が、これまでにLGBTQ+という特性が理由で、安心して自分の話ができなかったことや、自分の未来を想像できるロールモデルがおらず、先の見えない将来に不安を感じたことや経験してきたことが原体験にある。「ありのままの自分で安心していられる居場所」や「自分たちの生きたい未来が想像できるロールモデル」といった過去に自分たちが欲しかったものを作り出そうと決意し、セクシュアリティで悩んでいる子どもの居場所づくりを目的に、2018年に任意団体を設立した。2024年には一般社団法人として法人化している。
- ・ 現在、当団体は主に共同代表の2名で運営しており、他に役員として理事が3名いる。後述の居場所づくりの事業にはボランティアスタッフが10名程度おり、相談事業には相談員が2名いる。
- ・ 当団体の事業として、LGBTQ+やLGBTQ+かもしれない(以下、LGBTQ+という。)子どもやその保護者のための居場所づくりの事業や相談事業を行っている。また、学校での児童生徒・学生向けの講演会や、教育関係者や企業、行政などに向けた研修も行っている。広島県を中心に活動しており、講演等の啓発活動は中国・四国地方まで広く行っている。
- ・ 居場所づくりの事業では、LGBTQ+の子どもやその保護者のためのコミュニティスペースを提供している。例えばLGBTQ+の子どもとその保護者、サポーターが交流する「ここいろ会」を定期開催しており、未就学児から60代までの幅広い年代や立場の方が参加している。サポーターとして元々教職員だった方も参加している。「ここいろ会」では、必ずしも特別な何かをするわけではなく、会話をしたり、食事をしたり、遊んだりするなど、子どもとその保護者と一緒に過ごすことを大切にしている。他にも、中高生が安心して自身の悩み事を話せる場を提供したり、LGBTQ+の子どもを持つ保護者のための交流の場も提供したりしている。LGBTQ+の子どもだけでなく、その保護者も孤立しやすいため、保護者にとっての居場所づくりにも注力している。居場所づくりの事業は広島市で実施しているが、県内の遠方の市町村や、県外の中国・四国地方、関西地方からの参加者もいる。
- ・ 相談事業では、対面による個別相談とLINEを活用したSNS相談を実施している。SNS相談は月に2回実施しており、全国から相談が寄せられている。悩ましい相談などに対しては、複

数人の相談員で対応したり、相談員同士で互いにサポートするなどして、相談員の負担が大きくなるように工夫している。

- ・ 講演等の啓発活動では、行政、企業、学校など様々な団体を対象に、当団体の代表自身のライフストーリーを話したり、性の多様性に関する知識などを伝えたりしている。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 性別を把握する設問において、選択肢に男女しかなく回答に困ったことがある。戸籍上の性別は女性であるため、女性を選択することもあるが、Xジェンダーである自身にとって、女性を選択することは違和感がある。女性ではなく男性を選択するともならないため、男女しか選択肢がないと困る。しかし最近では、そうした男女しか選択肢がない設問は減ってきており、「その他」や「回答しない」などの他の選択肢も増えてきており、状況も変わりつつある。
- ・ 戸籍上の性別や生物学的な性別を聞かれた場合には迷うことなく女性を選択できるが、何も説明がない場合には、何を回答すればよいか困る。もし「その他」が選択肢にあれば、「その他」を選択するだろう。
- ・ 一方で、「その他」にラベリングされることに嫌悪感があるという意見もある。また、「答えたくない」という選択肢についても、回答したくないわけではない場合、その選択肢に当てはまらない。男女以外の選択肢を設けても、それらのラベリングに抵抗を感じ、選択できない場合もある。選択肢を複数設けることや自由記述で補うことなど、対処方法は様々あるだろう。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ トランスジェンダーである自身は、性別適合手術を受ける前までは、性別を把握する設問を回答する際、男性と回答したいが、戸籍上の性別や生物学的な性別が女性であるため、葛藤することが度々あった。性別適合手術を受け、戸籍上の性別が男性となった今では、特に何も考えず男性と回答するようになった。
- ・ アンケート調査で差別的な表現だと感じたことは特にない。

③ その他留意すべきこと

- ・ トランスジェンダーで性別適合手術を受ける前までは、自認する性別と生物学的な性別が一致していなかったため、アンケートを通じて自身の生物学的な性別が他の人に知られてしまう不安を感じていた。
- ・ 性別情報が何に使われるか分からない限り、性自認で回答してよいのか、生物学的な性別で回答すべきなのか、判断できない。自身の気持ちとしては性自認で回答したいと思うが、それで問題ないか不安に思うことがある。例えば、医療機関にかかる際、性別適合手術を受けた今でも自身の身体には女性の身体の一部が残っているため、性別を男性と回答して医療現場に混乱を招いてしまわないか不安に思うことがある。

- ・ アンケートにおいて、男女や性別を問う必要があるのかどうか見定め直すだけでも状況は改善されるだろう。性別の把握が不要であるならば、性別を把握する設問を設けないことで上述のような懸念は起こらず、負担を感じる人も減るだろう。
- ・ 調査趣旨において、調査目的の説明もなく、設問が次々と進んでいくようなアンケート調査は、自身の回答がどのように使われてしまうのか不安を感じる。最低限、調査目的とプライバシー保護等に関する注意事項の2点が記載されているべきである。それらは分けて記載されていると読みやすい。調査趣旨がしっかりと説明されている上で、もし性別等の回答に負担を感じる場合は設問をスキップしてもよいことが示されているとよいだろう。回答者は安心してアンケートの回答に臨むことができるようになる。
- ・ プライバシーの保護について、具体的には回答が共有される範囲、個人情報公開されないことが明示されていれば、より率直にアンケートに回答することができ、アンケートに協力しようと思う人も増えるだろう。
- ・ また、調査趣旨に個人が特定されないようにすると記載があったとしても、回答者の属性情報のかけあわせによって個人が特定されてしまう不安はある。市区町村レベルで回答が集計され公開されてしまうと、回答したLGBTQ+が特定されることは十分に起こりえる。どの属性情報まで公開するのか明示していれば、回答者もイメージしやすくなるだろう。
- ・ 居住する自治体で開催されるイベントには参加せず、他自治体で開催されるイベントには参加する人がいるように、住んでいる地域において自身がLGBTQ+であることを知られないように生活している人がいる。住民が少ない地域や住民と密なつながりのある地域に住んでいる人ほど、匿名であったとしても自身が特定されてしまうことに不安を覚えやすい。
- ・ また、LGBTQ+に関する知識に触れていない子どもや、一人で悩んでいる子どもにとっては、こうした調査自体に不安を覚える可能性があるため留意が必要である。
- ・ 自身の生活や社会がより良くなることがイメージできると前向きにアンケートに回答したいと思うことができる。できる限り丁寧に説明した上で、アンケートに協力できるかどうかの最終判断は回答者に委ねることも大切だろう。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ X ジェンダーである自身は、性自認を男性／女性で捉えておらず、真ん中に位置するような中性で捉えている。一方で、好意を抱く相手は女性であるが、X ジェンダーであるため、異性愛／同性愛のどちらにも当てはまらない。男性も女性も異性だと考えることはできなくはないため、異性愛と回答することもできるが、自身の感覚では異性愛ではなく、「女性愛者」「男性愛者」という言い方があるように、性自認に結び付けられない呼び方の方がしっくりくる。「B. 二段階の設問を設ける方法」であれば、「その他（女性愛者）」と回答するだろう。
- ・ 性自認が男性／女性のどちらかであれば、性的指向は「異性（愛）」「同性（愛）」の言葉で表現できるだろうが、性自認が流動的な場合や中性や無性の場合、性的指向の回答のあり方は多様であることが考えられる。自身は女性愛という表現がよく当てはまるが、それも人によって認識は異なるだろう。「その他」「わからない」「回答しない」を選択肢に設けつつ、記述できる人は自由記述で回答してもらうことが好ましい。

- ・ 「現時点でのお考えで構いません。」「現時点で最も近いものをお選びください。」などの補足説明があるとよい。性自認や性的指向は揺れ動くこともあるため、一つに決定することに心理的負担が生じることがある。また、現在の性的指向と過去の恋愛経験が一致していないこともある。性自認や性的指向を一つに決定しなくてもよい旨が示されていると心理的負担が軽減するだろう。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 例で示された方法に大きな違和感はなく、「A. 3ステップ方式」「B. 2ステップ方式」で回答しにくいとは感じない。「A. 3ステップ方式」は、より丁寧に回答を引き出すようにしていると感じられる。
- ・ 「A. 3ステップ方式」「B. 2ステップ方式」について、出生時の性別や戸籍上の性別を回答することが明記されており、自身の書類等に基づいて容易に回答することができる。その補足説明がない「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」について、同様の説明があれば回答しやすくなるだろう。
- ・ 「B. 2ステップ方式」では、「あなたが出生時に指定された性別（戸籍上の性別）」のように、設問文の冒頭に出生時の性別や戸籍上の性別を回答してほしいことが説明されている。設問文の末尾に括弧書きで説明されている「A. 3ステップ方式」と比較して、「B. 2ステップ方式」は抵抗感が少なく安心して回答できる。「A. 3ステップ方式」についても、設問文の冒頭に補足説明があるとよいだろう。また、「B. 2ステップ方式」の間1のように、出生時の性別についてもその他（回答しない等）が選択肢にあると回答しやすくなるだろう。
- ・ 一方で、選択肢が複数設けられていることに加えて、「A. 3ステップ方式」のように自由に記述できる余地があったほうがよいだろう。「B. 2ステップ方式」は自由記述ができない仕様になっている。
- ・ 「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」について、「あなたはご自身が性的マイノリティ当事者だと思いますか。」という問い方は、LGBTQ+や性的マイノリティの実感がない人や、そうしたカテゴリーにラベリングされること自体に違和感がある人にとってはなじまない問い方だろう。そもそもマイノリティという認識がなければ「いいえ」を回答する。また、同性に関心はあるものの、自身は当事者ではないと思っている人もいる。「あなたはご自身が性的マイノリティ当事者だと思いますか。」という問い方は、アンケートで欲しい回答が得られない可能性がある。
- ・ 自身を振り返ってみても、「あなたはご自身が性的マイノリティ当事者だと思いますか。」と問われた際、以前は回答できなかつたと感じる。当時は性的マイノリティに属している感覚がなく、また、性的マイノリティに属してはならないという感覚も持っていた。自身のセクシュアリティを受け入れている程度とも関係するだろう。
- ・ なお、当団体で関わるこどもの多くは、例で示した設問や選択肢の言葉の意味を理解できるだろうが、分からないこどもも少なからずいるため、補足説明や自由に回答を記述できる余地があるとよい。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

- ・ 当団体では、調査は実施したことがない。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ LGBTQ+の子どもとその保護者、きょうだい、そのほかの家族などを対象に、抱えている困難や身近に相談できる相手がいるかなどが調査されるとよい。これまでLGBTQ+の子どもやその家族にあまり目が向けられていなかったため、実態把握が必要である。ただし、当事者の子どもが自身の家族にカミングアウトしていない場合も多く、その家族と接点を持つことは難しいことが予想される。
- ・ シニア層向けに居場所づくりを行っている団体もある。シニア層は老後における孤独や孤立など、10～20代の若者とは異なる困難を抱えている。シニア層の実態把握のための調査も実施されるとよい。
- ・ 周知啓発を推進していくために、支援者におけるLGBTQ+についての理解や認識の程度を把握する調査が実施されるとよい。特に、医療、福祉、教育、行政に関する分野はLGBTQ+の生活に直結する分野であるため、そうした機関における実態把握（支援者の理解や認識に関する調査）が行われるとよい。分野ごとに理解や認識の程度を把握し、周知が足りていない分野を対象に啓発活動を行うことができればよい。
- ・ また、地方などではLGBTQ+のための医療機関が十分ではなく、当事者とその家族も困難を抱えている状況である。そうした実態も調査によって明らかにされるとよい。

以上

(16) (任意団体) Tokyo Deaf LGBTQ bond

| | |
|------|----------------------|
| 実施日時 | 1月21日(火) 10:00~11:30 |
|------|----------------------|

1) 団体概要

| | | | |
|--------------|--|------|----|
| 活動目的・活動内容 | 講演、手話通訳派遣、手話講習会の実施(性的マイノリティ当事者向け・アライ向け)、「LGBTQと、ろう」のテーマでの当事者相談、ろうLGBTQ当事者の交流会の開催 | | |
| 所属人数(2024年度) | 運営スタッフ6名 | 活動地域 | 東京 |
| 活動参加者の主な属性 | 聴覚障害のある性的マイノリティ当事者(ゲイ、バイセクシュアル、ノンバイナリーなど) | | |

- ・ 2014年に代表1名で活動を開始し、現在は代表を含め運営スタッフ6名で活動している。運営スタッフは、全員ろう者である。
- ・ 手話講習会やクリスマス会などのイベントには、手話学習者も参加するため、きこえる人も参加している。講習会は30名(年間の合計)、夏の納涼会は30名、クリスマス会は70名ほどで実施した。当団体は会員制ではなく、イベントがあるときに自由に参加してもらっている。
- ・ クリスマス会などのイベントの参加者は、ろう者が約半分、手話ができる人もしくは学習中の人約半分という割合である。

2) アンケートやヒアリング調査への回答に係る経験・考え

① アンケートの設問や選択肢への違和感

- ・ 区役所などで申請手続きをする時に、必ず性別を記入する欄があるが、なぜ必要なのか疑問である。また、選挙で投票をする際にも、性別の欄があるが、居住している地域に住民登録されていて、役所は性別を把握しているにもかかわらず、なぜ投票券に書く必要があるのか分からない。就職活動をする際に作成する履歴書においても、男女の記入は不要ではないかと思う。
- ・ 例えば、体力差に関わることを把握する場合には男女の差があると考えられるが、意識や考え方を聞くアンケートにおいて男女の区別が必要なのか疑問である。
- ・ 調査の目的を説明し、その調査において性別情報が必要な理由を示した上で聞くことは差し支えない。

② 回答の心理的負担に関する経験

- ・ 今まで回答してきた性的マイノリティに関するアンケート調査では、調査の趣旨についての説明があり、自分に当てはまる選択肢もあったため、違和感なく答えることができた。一方、私自身は、ろう者であり、性的マイノリティであるというダブルマイノリティであるが、ろう者に対する質問で、「耳が不自由な人」と書かれていることがあり、そういった表現は変えてほしいと思ったことがある。例えば、「きこえない人」と柔らかい表現で言い換えられる。ただし、用語の使い方はアイデンティティに関わるので、当人が使う用語に従う方がよい。

- ・ 全日本ろうあ連盟では、「きこえる人」「きこえない人」という表現を使っている。そういった当事者団体が使っている表現に合わせて、当事者団体の助言を受けたりすることで、適切な表現を用いることができるだろう。「聴覚障害」は医学的な言葉であるので、それよりも当事者が普段使っている言葉を使ってもらいたい。

③ その他留意すべきこと

- ・ アンケート調査では、質問項目が多いと負担が大きい。日本手話を主に使っているろう者の中には、日本語の文章の読み書きが不得意な人もいる。ヒアリング調査で、手話通訳者も同席している場合には負担は軽い。
- ・ 文面でのアンケート調査の方が、耳が聞こえるかどうかに関わらず、同じ文章を確認することができるので答えやすいと思われるかもしれないが、ろう者の中には、自分が思う日本語の解釈が正しいか分からず、答えられない人もいる。自分自身も、設問数が100以上あるようなアンケートを見ると、参ってしまう。100問以上あるような調査の場合には、動画で手話による設問の説明があったり、手話で回答することができたりすると、負担が軽い。
- ・ 言葉の使い方に関することでは、講演などで、手話通訳者に音声で説明をしてもらう時に、用いる表現について、事前に相談している。例えば、セックス・性交渉という意味の手話表現があるが、音声での説明では、性行為と言ってもらうよう予め伝えている。その他の用語についても、直接的な言い方は避けてもらうよう事前に伝えている。音声読み取りを使って話を聞く人もいるので、音声の説明での伝わり方にも配慮する必要がある。
- ・ アンケートの回答を募る際、調査目的や設問の内容について、日本語文だけでなく手話で説明した動画もついていると、理解しやすい。手話以外にも、他の言語を母語とする人もいるだろう。自分が理解しやすい言語で説明してもらうことができると、安心して回答することができる。
- ・ 日本語が得意なろう者は、文字を見た方が分かりやすいという人もいる。手話通訳者と文字起こしの担当がどちらもいて、質問や自分の回答が文字で映し出されているのを見ながら回答できるのが一番やりやすいという人もいる。一方、文字が苦手なろう者には、文字の書き起こしは不要であるという人もいる。
- ・ ヒアリングやインタビューを受ける時に、手話通訳なしで、お互いにPCを持参して、文章でやり取りをしながら、話を聞かれることが多かった。そういった形式よりも、手話通訳者が同席して、手話で説明を受けられる方が、負担が軽く、安心して質問に答えることができる。

3) 性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法について

① 性的指向の把握方法について

- ・ 「B. 二段階の設問を設ける方法」では、最初に「あなたはご自身を、異性愛者だと思いますか」という質問に「はい」「いいえ」で選択し、「いいえ」の場合には、別の設問に進むことができるので、回答者の負担が軽い。設問の文章が長く、選択肢も多い場合には、初めから迷ってしまうので、Bのように枝分かれさせて、順番に聞いていく設問がよいのではないかと。設問文と選択肢の文言についても、気になるところはない。

- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」の例は、選択肢の文言が長いと感じる。ろう者は、長い文章は把握できない場合もあるので、シンプルで短い文章の方がよい。今の文章では、そもそも質問で何を聞こうとしているのか、分からない。「あなたにもっとも近いと思うもの」という聞き方をしているが、「近いと思うもの」という言葉が曖昧で、それを直接的に表現できる手話はないので、理解することが難しい。「あなたの性的指向を教えてください」といった質問文で、ゲイやレズビアンが選択肢になっていれば、回答しやすい。性的指向のことを聞いていると分かる設問文にしてほしい。
- ・ 「A. 直接的に尋ねる方法」の選択肢1は「異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない」とあるが、「等」や「など」という単語が入っていると、それが何を指しているのか分からず、混乱してしまう。選択肢2について、「ゲイ・レズビアン・同性愛者」という部分はよいが、その後ろに、「同性のみに性愛感情を抱く人」という文章もあり、それも読むと何を指しているのか分からなくなってくるので、文章はない方がよい。文章が付け足されているのが、調査対象にストレート／異性愛者も含まれていて用語の説明が必要だからなのであれば、「B. 二段階の設問を設ける方法」を採ると、そういった心配もなくなるだろう。
- ・ ろう者は、文章ではなく、短い単語の方が回答しやすい。「ゲイ・レズビアン・同性愛者」という表現についても、ゲイ・レズビアンと、同性愛者の意味は同じであると思うので、同性愛者という単語も省いてもよいと思う。
- ・ アンケートとして回収しているわけではないが、私自身の講演では、自分のからだ、こころ、服装、好きになる対象のそれぞれについて、男女のものさしの中で、当てはまる位置を参加者各自に書いてもらうことがある。その方法で答えにくい場合は、自分自身のアイデンティティを書いてもらっている。自分の今日の服装は男性寄り、明日は女性寄りというように説明すると参加者が理解しやすくなる。

② ジェンダーアイデンティティの把握方法について

- ・ 3つの中で、「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」が、シンプルな聞き方でよいと感じた。ただし、トランスジェンダーかつゲイの場合に、どう回答するかというと、迷うかもしれない。トランスジェンダーとゲイの両方を選択するか、その他と答えるかもしれない。
- ・ 「A. 3ステップ方式」は、1問目の文章はシンプルだと感じる。3つ設問があるが、1つ1つは複雑な質問ではないので、答えやすい。3つ目の問は、点線の枠の中に配置されているが、設問が3つとも同列に並んでいた方が見やすいのではないか。
- ・ 「C. 当事者かどうか尋ね、認識を尋ねる方法」について、この設問で、トランスジェンダーであると把握した後に、トランスジェンダー男性、トランスジェンダー女性などのうち、いずれに該当するかということも知りたいと思う。トランスジェンダーと回答した後に、次の設問に分岐して、回答できるようになっているとよいのではないか。
- ・ 1つの設問は短くシンプルなものとして、詳細は、設問を分岐させて把握していくのが分かりやすい。

4) 過去に当事者の方への調査を実施された際の調査方法・留意事項について

① 過去に実施された調査の目的と調査手法

- ・ 団体で調査を行った経験はないが、8年前に執筆した修士論文で、ろう者であり性的マイノリティである方を対象として、手話でインタビュー調査を行った。
- ・ インタビューを行ったのは、2015年頃である。カミングアウトしている方を調査の対象とした。ろうのLGBT団体がいくつかあるので、その団体を通じて紹介してもらったり、自身の友人・知人に声をかけたりして、調査対象者に依頼をした。
- ・ 調査では、アイデンティティの形成の経緯について尋ねた。ろう者としてのアイデンティティとLGBTとしてのアイデンティティの2つがあるが、ろう者としてのアイデンティティが先に形成され、その後に、LGBTとしてのアイデンティティが形成されるという順番の人が多く、トランスジェンダーの場合は、自分の体への違和感から始まるので、反対の順番でアイデンティティが形成される人もいるといったことが明らかになった。

② 調査を実施した際の、性的指向及びジェンダーアイデンティティの把握方法（設問・選択肢の作り方）と、その方法を選択した理由

- ・ 調査では、まず、ろう者か、難聴者か、中途失聴かといったことを質問した。そして、LGBTのどれに当てはまるか聞き、回答に応じて、詳細に質問した。FtM、MtF、MtX、FtXの手話表現があるので、例えば、トランスジェンダーの場合は、それらのうちいずれに該当するか聞き、好きになる対象を聞き、手術経験を聞くといった形で、順番に枝分かれして聞いた。

③ 調査の実施・集計・分析に当たって、どのようなことに留意したか。

- ・ 調査を実施する際には、もし回答に難しい質問や答えたくない質問があれば、答えなくてよいということを説明した。固い雰囲気ではなく、気軽なおしゃべりのような雰囲気で進めたことで、相手もリラックスして自然な手話で答えてくれた。

5) 今後の研究等において考えられる調査項目について

- ・ 国や自治体は、障害者手帳の所持者については把握しているが、障害者でかつ、性的マイノリティであるという人がどのくらいいるかについては、把握されていない。ただし、性的マイノリティであることをオープンにしていない人が多く、調査をしたとしても、本当に把握できるのかどうか分からない。そういった調査を実施した方がよいかどうかについては、判断がつかない。
- ・ ろう者であり、かつ性的マイノリティであるということによる困りごととして、例えば手話通訳者の手配に関わることがある。手話通訳を手配する時には、指名をすることができない。私自身はゲイであるが、通院する際に手話通訳を手配すると、女性の手話通訳者が来ることが多く、服を脱いで診察をする際には抵抗感がある。手話通訳者は女性が大半で、男性がとても少ないという現状である。
- ・ 当団体に手話通訳の派遣依頼をしてもらい、コーディネートするということも行っている。手話通訳は、通常は自治体の負担により、自己負担なしで使用することができるが、当団体にコーディネートを依頼するような場合には、当事者が謝金を負担する必要がある。ろう者が抱えている課題としてはそのようなことがある。

以上

内閣府委託事業

性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解浸透度の
把握及び理解増進に係る研究に当たり留意すべき事項等の調査・研究
報告書

令和7年3月

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社